中小河川大束川改修工事
（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

川津元結木遺跡

1992．1

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター

中小河川大束川改修工事
（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

川津元結木（かわつもっといき）遺跡

1992．1

香川県教育委員会
㈶香川県埋蔵文化財調査センター

序　　文

昭和62年11月に設立された財団法人香川県埋蔵文化財調査センターも，設立以来４年を経過いたしました。

この間，香川県教育委員会から委託を受け，四国横断自動車道(高松～善通寺)，国道高松東道路，高松市林町空港跡地整備等に伴う埋蔵文化財調査事業を実施しております。

今回報告します川津元結木遺跡は坂出市川津町に所在し、中小河川大束川改修工事に伴い平成元年８月１日から９月30日の２カ月間発掘調査を実施しました。

調査の結果，弥生時代の竪穴住居跡・溝，古墳時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡，平安時代の掘立柱建物跡・溝等が確認され，弥生時代から中世にかけての複合集落であることが明らかになり，同時に当遺跡からわずか500m の距離にある瀬戸大橋建設に伴い調査した下川津遺跡との関連及び大束川の流路変遷などを解明する糸口になる数々の成果が得られました。

本書が香川県の歴史研究の資料として広く活用され，さらに埋蔵文化財に対する理解と関心が深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から出土品の整理，報告に至るまでの間，多大な御援助と御協力をいただきました香川県土木部河川課，香川県教育委員会及び関係諸機関に深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜わりますようお願い申し上げます。

平成４年１月

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

理事長　松　繁　壽　義

例　　言

1．本報告書は中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書の第１冊で，香川県坂出市川津町元結木6394番地他に所在する川津元結木遺跡（かわつもっといきいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県（土木部河川課）の委託を受けて，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は，試掘調査を昭和63年11月24日に実施し，本調査を平成元年８月１日から９月30日まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

試掘調査　文化行政課安藤清和

本調査　　片桐孝浩・中野昇一・山下平重・寺井香吏・片山恭子

4．調査にあたっては，下記機関の指導や援助を得た。記して謝辞を表したい。

香川県土木部河川課，坂出土木事務所

5．報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の編集・執筆は片桐孝浩が担当した。

6．報告書の作成にあたっては，下記の方々の御教示を得た。記して謝意を表したい。

（順不同，敬称　略）

武庫川女子大学薬学部教授　安田博幸，武庫川女子大学薬学部助手　森眞由美，高槻市埋蔵文化財調査センター　橋本久和

7．本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。

(1)　挿図の縮尺は，掲載の図面内にスケールで示した。

(2)　方位は，国土座標第Ⅳ座標系の北を示す。

(3)　水平基準線の数値は，海抜高を示している。

8．本文中の遺構に関する数値は，破壊を受けたもの，不確実なものについては（　）書きとした。

9．本書に用いている遺構記号は次のとおりである。

ＳＡ…柵列	ＳＢ…掘立柱建物	ＳＤ…溝
ＳＨ…竪穴住居	ＳＫ…土坑	ＳＰ…柱穴

10．本遺跡の報告にあたっては，武庫川女子大学薬学部安田博幸，森眞由美両氏に分析を依頼し，玉稿をいただいた。

目　　次

第１章　調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……2

第２章　遺跡の立地と環境……4
　１．地理的環境……4
　２．歴史的環境……7

第３章　遺構・遺物について……8
　１．弥生時代の遺構・遺物……8
　　(1)　弥生時代前期……8
　　SD12 ……8
　　(2)　弥生時代後期 ……16
　　SH05 ……16
　　SH06 ……18
　　SK04 ……20
　　SD04 ……20
　　SD11 ……36
　２．古墳時代～奈良時代 ……44
　　SH01 ……44
　　SH02 ……44
　　SH03 ……45
　　SH04 ……47
　　SB01 ……48
　　SB02 ……49
　　SB04 ……49
　　SB05 ……50
　　SB06 ……53
　　SB07 ……53
　　SB13 ……53
　　SB14 ……53

SB15 ……53
SK03 ……53
SD03・06……57
SD05 ……58
3．平安時代 ……59
SB03 ……59
SB08 ……60
SB09 ……60
SB10 ……60
SB11 ……60
SB12 ……60
SB16 ……60
SB17 ……65
SB18 ……66
SK01 ……66
SK02 ……67
SD01 ……67
SD02 ……68
SD07 ……68
SD08 ……68
SD09 ……69
SA01 ……76
SA02 ……76
SA03・04……76
柱穴出土遺物 ……76
SD10 ……78
4．まとめ ……111

第4章　自然化学分析 ……117
第5章　考察　―古代から中世にかけての土器様相― ……120
1．はじめに ……120
2．各時期の基準資料の検討 ……120
3．土器編年 ……137

(1) 供膳具について ……137
(2) 煮沸具について ……159
(3) 調理具について ……169
(4) 貯蔵具について ……175
(5) その他 ……176
4．讃岐における回転台土師器について ……180
5．十瓶山周辺窯業の変容について ……181
(1) はじめに ……181
(2) 椀形態の製作技法について ……181
(3) まとめ ……185
6．まとめ ……191

挿　図　目　次

第１図　川津元結木遺跡位置図 …… 4
第２図　周辺地域の遺跡 …… 5
第３図　遺構全体図 …… 9
第４図　SD12土層断面図…… 11
第５図　SD12出土遺物実測図①…… 11
第６図　SD12出土遺物実測図（石製品）②
…… 12
第７図　SD12出土遺物実測図（石製品）③
…… 13
第８図　SD12出土遺物実測図（石製品）④
…… 14
第９図　SD12出土遺物実測図（石製品）⑤
…… 15
第10図　SH05平・断面図 …… 16
第11図　SH05出土遺物実測図 …… 17
第12図　SH06平・断面図 …… 18
第13図　SH06出土遺物実測図 …… 19
第14図　第1調査区SD04遺物出土状況… 21
第15図　SD04土層断面図…… 23
第16図　SD04出土遺物実測図①…… 26
第17図　SD04出土遺物実測図②…… 27
第18図　SD04出土遺物実測図③…… 28
第19図　SD04出土遺物実測図④…… 29
第20図　SD04出土遺物実測図⑤…… 30
第21図　SD04出土遺物実測図⑥…… 31
第22図　SD04出土遺物実測図⑦…… 32
第23図　SD04出土遺物実測図⑧…… 33
第24図　SD04出土遺物実測図⑨…… 34
第25図　SD04出土遺物実測図⑩…… 35
第26図　SD11土層断面図…… 36
第27図　SD11出土遺物実測図①…… 37
第28図　SD11出土遺物実測図②…… 38
第29図　SD11出土遺物実測図③…… 39
第30図　SD11出土遺物実測図④…… 40
第31図　SD11出土遺物実測図⑤…… 41
第32図　SD11出土遺物実測図⑥…… 42
第33図　SD11出土遺物実測図（石製品）⑦
…… 43
第34図　SD11出土遺物実測図（石製品）⑧
…… 40
第35図　SH01平・断面図 …… 44
第36図　SH02平・断面図 …… 45
第37図　SH03平・断面図 …… 46
第38図　SH03出土遺物実測図 …… 46
第39図　SH04平・断面図 …… 47
第40図　SB01平・断面図…… 48
第41図　SB01出土遺物実測図…… 49
第42図　SB02平・断面図…… 49
第43図　SB04出土遺物実測図…… 49
第44図　SB04平・断面図…… 50
第45図　SB05平・断面図…… 50
第46図　SB06平・断面図…… 51
第47図　SB07平・断面図…… 51
第48図　SB13出土遺物実測図…… 53
第49図　SB13平・断面図…… 54
第50図　SB14平・断面図…… 55
第51図　SB15平・断面図…… 55
第52図　SK03平・断面図…… 57
第53図　SK03出土遺物実測図…… 57
第54図　SD03･06 出土遺物実測図…… 58
第55図　SD05土層図…… 58
第56図　SD05出土遺物実測図…… 58

第57図　SB03出土遺物実測図…… 59
第58図　SB03平・断面図 …… 59
第59図　SB10出土遺物実測図…… 60
第60図　SB11出土遺物実測図…… 60
第61図　SB08平・断面図 …… 61
第62図　SB09平・断面図…… 61
第63図　SB10平・断面図…… 61
第64図　SB11平・断面図…… 63
第65図　SB12平・断面図…… 63
第66図　SB16平・断面図…… 65
第67図　SB18平・断面図…… 65
第68図　SB17平・断面図…… 66
第69図　SK01平・断面図…… 67
第70図　SK02出土遺物実測図…… 67
第71図　SD01出土遺物実測図…… 67
第72図　SD01土層図 …… …… 68
第73図　SD07出土遺物実測図…… 68
第74図　SD09土層図…… 71
第75図　SD09出土遺物実測図①…… 73
第76図　SD09出土遺物実測図② ……74
第77図　SD09出土遺物実測図③…… 75
第78図　SA02出土遺物実測図…… 76
第79図　柱穴出土遺物実測図 …… 77
第80図　SD10土層断面図…… 79
第81図　SD10上層出土遺物実測図①…… 81
第82図　SD10上層出土遺物実測図②…… 82
第83図　SD10上層出土遺物実測図③…… 83
第84図　SD10上層出土遺物実測図④…… 84
第85図　SD10上層出土遺物実測図⑤…… 85
第86図　SD10上層出土遺物実測図⑥…… 86
第87図　SD10上層出土遺物実測図⑦…… 87
第88図　SD10上層出土遺物実測図⑧…… 88
第89図　SD10上層出土遺物実測図⑨…… 89
第90図　SD10上層出土遺物実測図⑩…… 90
第91図　SD10上層出土遺物実測図⑪…… 91
第92図　SD10上層出土遺物実測図⑫…… 92
第93図　SD10上層出土遺物実測図⑬…… 93
第94図　SD10上層出土遺物実測図⑭…… 94
第95図　SD10上層出土遺物実測図⑮…… 95
第96図　SD10第1溝第1砂層出土遺物
実測図①…… 97
第97図　SD10第1溝第1砂層出土遺物
実測図②…… 98
第98図　SD10第1溝第1砂層出土遺物
実測図③…… 99
第99図　SD10第1溝第1砂層・第1砂層
と第2砂層の間・第1溝第2砂層
出土遺物実測図 ……100
第100図 SD10第2溝第1層出土遺物
実測図 …… 101
第101図 SD10第2溝第2層出土遺物
実測図 …… 102
第102図 SD10第2溝第3層出土遺物
実測図 …… 104
第103図 SD10第2溝第4層出土遺物
実測図 …… 105
第104図 SD10第2溝第5層（砂層）
出土遺物実測図……106
第105図 SD10最下層出土遺物実測図 … 108
第106図 SD10出土遺物実測図
（石製品）①…… 109
第107図 SD10出土遺物実測図
（石製品）②…… 110
第108図 川津元結木遺跡遺構変遷図①… 113
第109図 川津元結木遺跡遺構変遷図②… 115
第110図 遺跡位置図…… 121

第111図 下川津遺跡 SE Ⅲ03・郡家原遺跡 SR05Ⅳ層下層・Ⅴ層出土遺物 実測図 …… 123
第112図 下川津遺跡 SE Ⅲ04出土遺物実測図 124
第113図 郡家原遺跡 SR05Ⅳ層上層・矢ノ塚遺跡包含層・石田遺跡 SD61・南山浦古墳群第9号墳玄室内出土遺物実測図…… 125
第114図 石田遺跡 SK11出土遺物実測図 126
第115図 讃岐国分寺跡 SK25・26出土遺物実測図…… 127
第116図 矢ノ塚遺跡包含層出土遺物 実測図…… 128
第117図 下川津遺跡 SD Ⅲ03出土遺物 実測図①…… 129
第118図 下川津遺跡 SD Ⅲ03出土遺物 実測図②…… 130
第119図 下川津遺跡 SD Ⅲ05出土遺物 実測図…… 131
第120図 南山浦古墳群第11号墳・下川津遺跡 SD Ⅲ75出土遺物実測図 … 132
第121図 南山浦古墳群第9号墳・下川津遺跡 SBⅢ05出土遺物実測図……133
第122図 下川津遺跡 SD Ⅲ71出土遺物 実測図…… 135
第123図 延命遺跡 SD47・SK18出土遺物 実測図…… 136
第124図 すべっと2号窯跡出土遺物 実測図…… 138
第125図 瓦質土器出土遺跡…… 139
第126図 供膳具 土師器・坏・小皿・皿 編年（試案） …… 143
第127図 土師器・小皿・坏法量分布図① 145
第128図 土師器・小皿・坏法量分布図② 147
第129図 多々良込田遺跡出土越州窯系青磁器実測図 …… 150
第130図 供膳具 土師器椀・須恵器椀（瓦器土器）編年（試案）… 151
第131図 供膳具 黒色土器椀 編年（試案） …… 153
第132図 煮沸具 土師質土鍋 編年（試案）①…… 161
第133図 煮沸具 土師質土鍋 編年（試案）②…… 163
第134図 煮沸具 土師質土釜 編年（試案）①…… 165
第135図 煮沸具 土師質土釜 編年（試案）②…… 167
第136図 調理具 鉢編年（試案） …… 171
第137図 供膳具 その他 土師器・須恵器 編年（試案） …… 173
第138図 讃岐国府跡出土遺物実測図…… 176
第139図 香川県出土の越州窯系青磁椀 実測図…… 176
第140図 越州窯系青磁器出土遺跡…… 177
第141図 天霧城跡出土陶器実測図…… 177
第142図 緑釉陶器実測図…… 179
第143図 土師器坏・椀，黒色土器椀，瓦質土器椀実測図…… 182
第144図 土器成形推定模式図…… 184
第145図 大宰府条坊跡第88次 SE040（井戸跡）出土資料 …… 187
第146図 十瓶山周辺窯の変容…… 188
第147図 9～16世紀の器種変遷図…… 189

表　目　次

第１表　ジフェニルカルバジドによる
　　呈色スポットのＲｆ値と同色 …118
第２表　ジチゾンによる呈色スポット
　　のＲｆ値と色調 …119
第３表　各期遺跡一覧……122
第４表　各時期の各器種比率 ……157
第５表　輸入陶磁器変遷表 ……178
第６表　遺物観察表 ……197
第７表　遺構一覧 ……228

図　版　目　次

図版１　(1)第１調査区発掘前風景
　　(2)第２調査区発掘前風景
図版２　(1)調査区から北方遠景
　　(2)ＳＤ12土層断面（Ｊ－Ｊ′）
図版３　(1)第１調査区遺構検出状況
　　(2)ＳＤ04遺物出土状況
図版４　(1)ＳＤ04遺物出土状況
　　(2)ＳＤ04遺物出土状況
図版５　(1)ＳＤ04遺物出土状況
　　(2)ＳＤ04土層断面（Ｂ－Ｂ′）
図版６　(1)第２調査区遺構検出状況(南より)
　　(2)ＳＤ04土層断面（Ｃ－Ｃ′）
図版７　(1)ＳＤ04遺物出土状況
　　(2)ＳＤ04遺物出土状況
図版８　(1)ＳＤ04遺物出土状況
　　(2)ＳＤ04遺物出土状況
図版９　(1)ＳＤ04遺物出土状況
　　(2)ＳＤ11土層断面（Ｋ－Ｋ′）
図版10　(1)ＳＨ06検出状況（東より）
　　(2)ＳＨ06遺物出土状況
図版11　(1)第２調査区遺構検出状況(南より)
　　(2)第２調査区遺構検出状況(南より)
図版12　(1)ＳＢ01柱穴断面土層
　　(2)ＳＢ04検出状況（東より）
図版13　(1)ＳＨ01、ＳＢ06・07・08検出状況
　　（南より）
　　(2)ＳＢ11・13検出状況（南より）
図版14　(1)ＳＨ03・04検出状況（南より）
　　(2)ＳＤ05遺物出土状況
図版15　(1)第３調査区遺構検出状況
　　（北西より）
　　(2)ＳＤ10土層断面（Ｊ－Ｊ′）
図版16　(1)ＳＤ10遺物出土状況
　　(2)ＳＤ10遺物出土状況
図版17　(1)ＳＤ10遺物出土状況
　　(2)ＳＤ10遺構検出状況（南より）
図版18　(1)ＳＤ09土層断面（Ｈ－Ｈ′）
　　(2)柱穴遺物出土状況
図版19　(1)柱穴断面
　　(2)柱穴遺物出土状況
図版20　(1)発掘調査風景
　　(2)発掘調査風景
図版21　(1)ＳＤ12出土遺物
　　(2)ＳＨ05出土遺物

(3)ＳＨ06出土遺物①
図版22　(1)ＳＨ06出土遺物②
(2)ＳＤ04（第１調査区）出土遺物①
図版23　ＳＤ04（第１調査区）出土遺物②
図版24　(1)ＳＤ04（第１調査区）出土遺物③
(2)ＳＤ04（第２調査区）出土遺物①
図版25　ＳＤ04（第２調査区）出土遺物②
図版26　ＳＤ04（第２調査区）出土遺物③
図版27　ＳＤ04（第２調査区）出土遺物④
図版28　(1)ＳＤ04（第１調査区）出土遺物
(2)ＳＤ04（第２調査区）出土遺物①
図版29　(1)ＳＤ04（第２調査区）出土遺物②
(2)ＳＤ04（第１調査区）出土遺物①
図版30　(1)ＳＤ04（第１調査区）出土遺物②
(2)ＳＤ04（第２調査区）出土遺物
図版31　ＳＤ11出土遺物①
図版32　ＳＤ11出土遺物②
図版33　ＳＤ11出土遺物③
図版34　(1)ＳＤ11出土遺物④
(2)ＳＤ05出土遺物
(3)ＳＤ09出土遺物
図版35　(1)柱穴出土遺物
(2)ＳＤ10上層出土遺物①
図版36　ＳＤ10上層出土遺物②
図版37　ＳＤ10上層出土遺物③
図版38　ＳＤ10上層出土遺物④
図版39　ＳＤ10上層出土遺物⑤
図版40　ＳＤ10上層出土遺物⑥
図版41　ＳＤ10第１溝第１砂層出土遺物①
図版42　(1)ＳＤ10第１溝第１砂層出土遺物②
(2)ＳＤ10第２溝出土遺物①
図版43　ＳＤ10第２溝出土遺物②
図版44　ＳＤ10第２溝出土遺物③
図版45　ＳＤ10第２溝出土遺物④
図版46　ＳＤ10第２溝出土遺物⑤
図版47　ＳＤ10最下層出土遺物①
図版48　(1)ＳＤ10最下層出土遺物②
(2)ＳＤ10上層出土遺物
(3)ＳＤ12出土遺物①
図版49　ＳＤ12出土遺物②
図版50　(1)ＳＤ11出土遺物
(2)ＳＤ10出土遺物

付　　図

付図１　川津元結木遺跡遺構配置図

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

川津元結木遺跡の調査は，平成元年８月１日から９月30日の間，財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が実施した。

本節ではこの調査に至る経緯の概略をのべる。

昭和63年４月に，香川県教育委員会事務局文化行政課（以下「文化行政課」という。）が，関係各課に土木工事計画についての照会を行った。

これを受けて香川県土木部河川課（以下「河川課」という）から，「中小河川大束川改修工事」を実施する計画である旨の回答がなされた。

文化行政課では同年６月に河川課と協議を行い，改修工事対象地について同年８月に分布調査を実施した。この成果に基づき，埋蔵文化財包蔵地の可能性が高い部分について試掘調査を実施する必要がある旨河川課にたいして通知した。

文化行政課では，同年11月同工事対象地のうち津ノ郷橋～弘光橋間について試掘調査を実施した。この結果，対象地のうち1,200㎡については遺構が検出されたため，工事に先行して発掘調査が必要である旨指導した。

このような経緯から平成元年１月以降，河川課と文化行政課で工事発注時期との関係で調査について協議が行われ，同時に文化行政課とセンターの間で調査体制等について協議が実施された。

この結果，以下の内容で合意した。

調査は平成元年度に実施すること。

調査はセンターが担当すること。

これに伴う委託契約は香川県知事とセンター理事長の間で締結すること。

これとは別に香川県教育委員会を含めた三者で調査に伴う協定書を締結し，文化行政課の指導的役割を明確にすること。

平成３年度以降に整理報告事業も調査と同様の委託をすること。

この合意を受けて，平成元年７月26日付けで三者による「中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財に関する協定書」を締結し，同年７月31日付けで香川県とセンターの間で「埋蔵文化財調査委託契約書」を締結した。

以上の経緯で調査が実施された。

第2節　調査の経過

川津元結木遺跡は坂出市川津町元結木6394番地他に所在する。

発掘調査は平成元年8月1日に開始され，平成元年9月30日に終了した。

調査の方法としては一般県道富熊宇多津線の道路基準点から任意の点を決め，その点を起点に東西南北方向のグリッドを設定したものである。

発掘調査区は現在の地割りにより，北から第1調査区，第2調査区，第3調査区に分け，第1調査区から調査を開始した。

川津元結木遺跡の発掘調査を調査日誌抄を基に概略すると，以下の様になる。

発掘調査は平成元年8月1日に第1調査区の表土掘削を開始した。表土掘削の結果，耕作土直下から多数の遺構が検出された。それらの遺構には数時期の切り合いが確認された。次に第2調査区の表土掘削を実施した。第1調査区では流路を南北に取る溝が検出され，溝埋土より多数の弥生土器が出土した。溝埋土より出土した遺物の平面実測に時間を割かれる。

8月中旬から第2調査区に作業の主体が移る。第2調査区では第1調査区から延びる溝と竪穴住居跡・掘立柱建物跡など多数の遺構が検出された。ここでも数時期の遺構の切り合いが確認されたことや，第1調査区から続く溝より多数の遺物が出土したため，遅々として調査が進まなかった。

9月に入ると雨の日が多く，調査に支障をきたした。次に第3調査区の表土掘削を開始した。その結果流路を東西に取る大きい溝が検出された。この溝より中世の遺物が多数出土した。意外に溝は深く，土層ごとに遺物を取り上げるのに苦労する。

9月末を以て調査は終了する。

整理作業は平成3年4月1日より開始され，平成3年7月31日に終了した。

調査・整理の体制は次の通りである。

平成元年度

文化行政課

総括	課長	太田彰一
	課長補佐	高木　尚
	副主幹	野網朝二郎
総務	係長	宮内憲生
	主事	横田秀幸
		水本久美子
埋蔵文化財	係長	大山真充

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	十川　泉
	次長	安藤道雄
総務	係長（事務）	加藤正司
	主査（土木）	山地　修
	主事	黒田晃郎
調査	係長	広瀬常雄
	技師	中野昇一

	技師	岩橋　孝
		國木健司
		片桐孝浩
		山下平重
	調査技術員	片山恭子
		寺井香吏

平成３年度

文化行政課

総括	課長	中村　仁
	主幹	菅原良弘
	課長補佐	小原克巳
総務	係長	宮内憲生
	主事	櫻木新士
		石川恵三子
埋蔵文化財	係長	藤好史郎
	主任技師	岩橋　孝
		北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	松本豊胤
	次長	安藤道雄
総務	係長（事務）	土井茂樹
	係長（土木）	今田　修
	主任主事	黒田晃郎
整理	係長	広瀬常雄
	主任技師	片桐孝浩

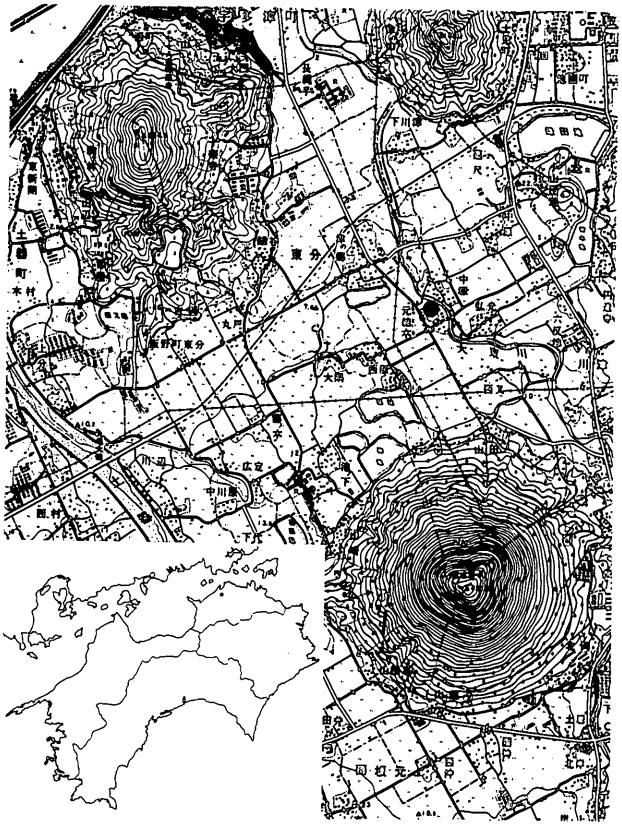
整理に携わった整理補助員，整理作業員は次の通りである。

戸川昌代，塩崎訓子，小畑三千代，青木民江，中野優美，藤堂収子

第2章　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

香川県は四国北東部にあり，面積が全国で最小の県である。北は備讃瀬戸を挟んで岡山県と相対し，南は阿讃山脈で徳島県と隔絶している。河川は地勢上からその流路が短く，しかも急勾配である。そのため常には水の流れがあまりないが，ひとたび洪水が起こると流れが速くなり，荒れる。そのため現在でも現地表面に旧流路（洪水河川）が確認できる水田地割りが見られる。

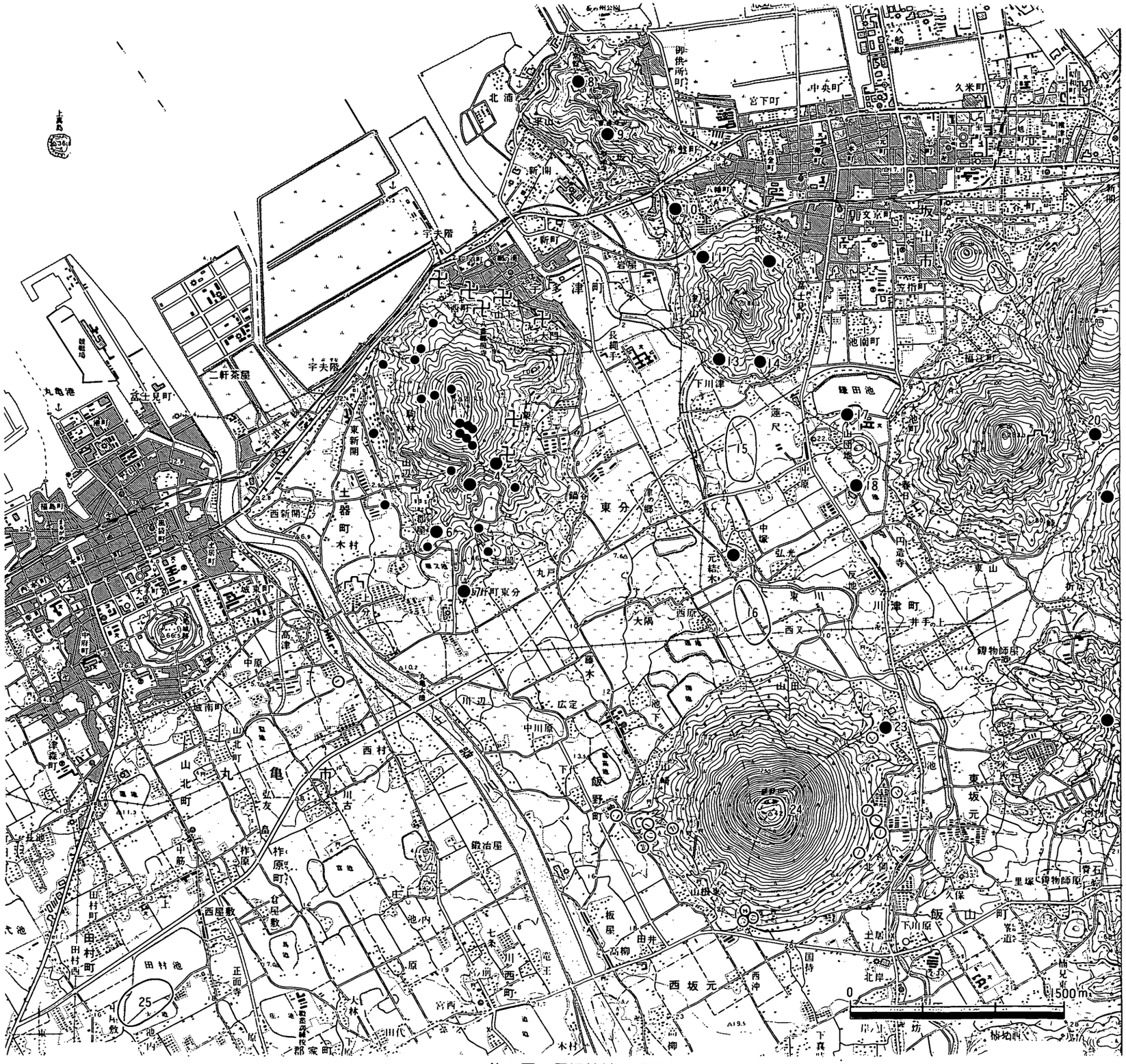


第1図　川津元結木遺跡位置図（1：50,000）

土地面積に占める平野の割合の高い香川県には，西から三豊平野・丸亀平野・高松平野・志度平野などがある。このなかの丸亀平野には現在西から弘田川，金倉川，土器川，大束川の4河川があり，善通寺付近と坂出付近は弘田川，金倉川，大束川の沖積作用によって形成された沖積平野であることが判っている。しかし丸亀付近は平野の東・西部と異なり，緩扇状地形を呈した洪積台地が大半を占めている。その洪積台地上およびそれぞれの沖積平野には上記各河川の旧河道の痕跡が現地表面においても容易に観察される。

川津元結木遺跡は大束川によって形成された沖積平野部分にあり，現在の大束川の西岸際に位置する。南に飯野山，東は常山・金山・城山，北に角山・聖通寺山などがあり，西は丸亀平野部へと開けている。

川津元結木遺跡に近い下川津遺跡では，発掘調査により，旧大束川の流路が微高地を挟むように数条確認されている。この地が不安定であったことをよく物語っている。このような状況は徐々に変化していったようで，古代には当遺跡が津として機能していたことも推定される。


1．川津元結木遺跡
2．青ノ山山頂遺跡
3．青ノ山古墳群
4．青ノ山墓地公園古墳
5．青ノ山窯址群
6．竜塚古墳
7．吉岡神社古墳
8．聖通寺山古墳
9．聖通寺城跡
10．田尾茶臼山古墳
11．南田尾古墳
12．潮見場古墳
13．岡宮古墳
14．下川津１号墳
15．下川津遺跡
16．西又遺跡
17．小山古墳
18．蓮尺茶臼山古墳
19．笠山遺跡
20．金山古墳
21．長者原古墳
22．向山古墳
23．三ノ池古墳
24．飯野山山頂遺跡
25．田村遺跡
○　古墳
0
500m

第２図　周辺地域の遺跡

2．歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代の遺構は石器の素材となるサヌカイトの産地である国分台・城山・金山が近くにあることもあり，備讃瀬戸の島嶼部や城山，国分台周辺に多く確認されている。

縄文時代

縄文時代の遺構としては櫃石島ガンド遺跡・下川津遺跡で突帯文系の土器が出土している程度で，確実な遺構は検出されていない。

弥生時代

弥生時代前期には下川津遺跡で多数の遺物が出土している。前期の遺構は上面不定形の竪穴住居跡が検出されてはいるが，なお不明な部分が多い。しかし大束川流域には西又遺跡，川津下樋遺跡などの集落および生産域（水田跡）としての遺構が検出されているので弥生時代前期から集落が形成されていたことは確実に窺える。弥生時代中期になると青ノ山，飯野山などの比高が高い場所に散布地が見られる。平野部ではあまり遺構が確認されていないことから居住域の変化が窺える。弥生時代後期になると爆発的に竪穴住居が増え，集落が形成されるようである。坂出付近では下川津遺跡周辺と飯野山北山麓周辺に単位集落があるのではないかと推定されている。

このように坂出付近においては弥生時代前期より大規模な集落が形成されており，下樋遺跡で井堰・水田跡が確認されているように，前期の頃から高度な技術による開発が行われていたことが裏づけられている。

古墳時代

古墳時代前期には爺ケ松古墳，ハカリゴーロ古墳などの前期古墳が見られる。これらの前期古墳は弥生時代終末期（庄内併行期）から集落を形成した集団の首長の古墳であると思われる。古墳時代中期の古墳はあまり確認されていない。古墳時代後期になると青ノ山・飯野山・城山周辺に多数の群集墳が出現するようである。

古代から中世

古代において下川津遺跡は貢納生産物の一時的な集積地と考えており，「津」としての性格が強い遺跡と推定している。また，中世には，川津元結木遺跡の近くに港としての「宇多津」もあることから大束川流域は交通の要所で，古代から中世においては讃岐国の窓口の一つであった可能性が考えられる。

また，この平野には現在でも確認できる方画地割が残っており，条里制が施行されていたことが窺わせる。

第3章　遺構・遺物について

川津元結木遺跡で検出された遺構は，竪穴住居5，掘立柱建物18棟，土坑3基，溝12条，柵列4である(第3図)。これらの遺構は検出面が耕作土直下ということもあり，残りの悪いものがかなり見られる。特に7世紀前後の竪穴住居はほとんど埋土を残しておらず，壁溝や主柱穴によって辛うじて復元できるものがある。しかし，溝からはかなりの削平にもかかわらず多数の遺物が出土している。

検出された遺構は，弥生時代から中世頃のものである。

以下，各時期ごとに遺構・遺物について説明する。

1．弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は全調査区で検出されている。検出された遺構は弥生時代前期が溝1条，弥生時代後期後半が竪穴住居2・溝2条である。

弥生時代前期の溝は弥生時代後期の溝と12世紀の溝に切られており，検出面積は狭いがかなりの遺物が出土している。この時期の遺構としては 100mほど南の地点で西又遺跡が確認されており，当遺跡との関係が注目される。

弥生時代後期には南北に流路を取る溝とその両側で竪穴住居2が検出されている。この溝より多数の土器が出土している。その中には脚付小型丸底壺が多数出土していることから祭祀性の強い遺構であることが予想される。

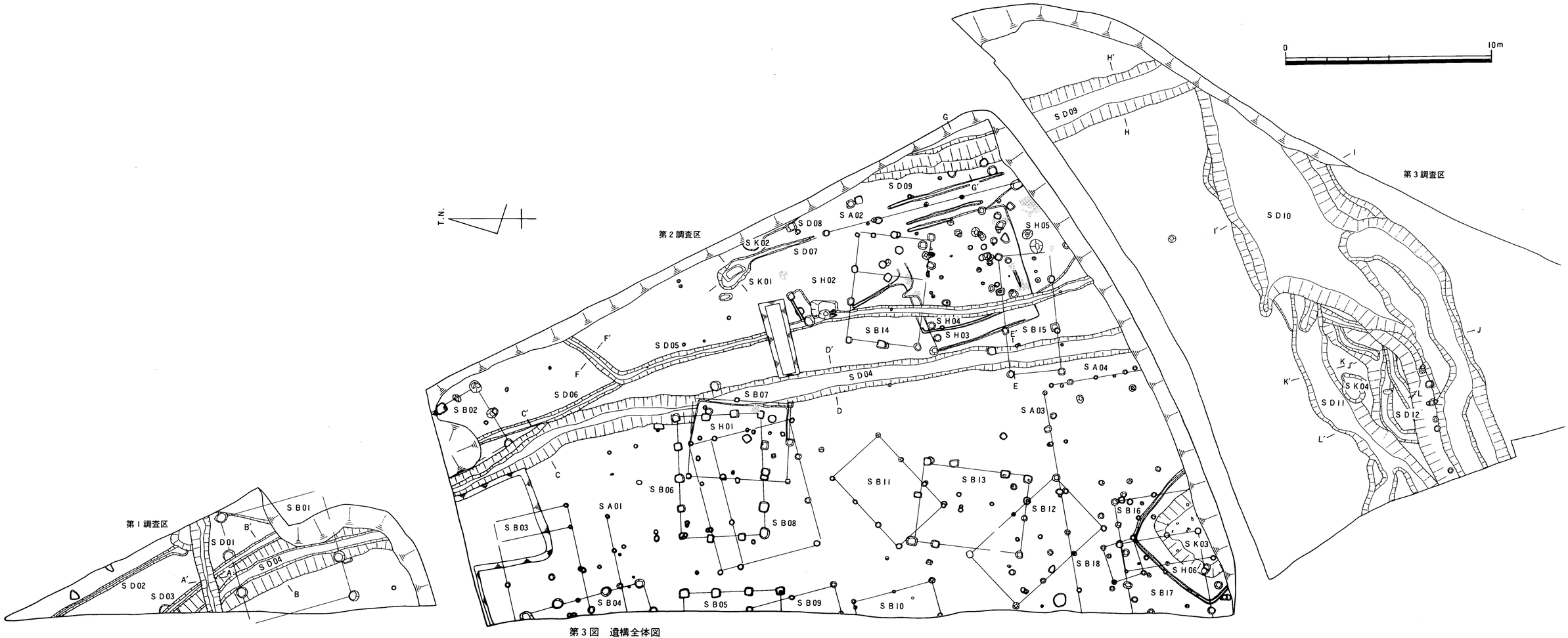
(1)弥生時代前期

ＳＤ12（第4～9図）

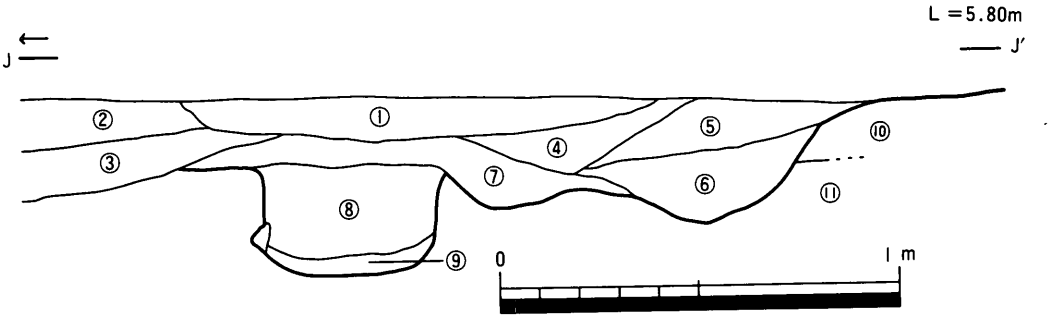
弥生時代前期の遺構は第3調査区でのみ検出された。検出された遺構は溝が1条で12世紀頃の溝と弥生時代後期の溝に切られている。現存規模は天幅0.96m，深さ0.44mで，下層はＵ字状を呈したしっかりした溝である。この溝からは検出範囲が少ない割りにもかかわらず多数の遺物が出土している。特に石製品が多いことが注目される。

土層断面（第4図）からおおよそ2時期に分かれるものと思われる。Ｊ－Ｊ′土層断面では上層が④～⑦で，下層は⑧・⑨である。Ｌ－Ｌ′土層断面では上層が②～⑤で，下層は⑥～⑬である。遺物はほとんどが上層より出土している。

1～5はSD12より出土した土器である（第5図)。1は壺で頸部から口縁部にかけて段を持ちながら外方に小さく屈曲するものである。2～4は如意状口縁の甕である。やや膨らみ気味の体部から，口縁部が外方に屈曲するものである。5は底部である。全て胎土には2㎜程度の砂粒を

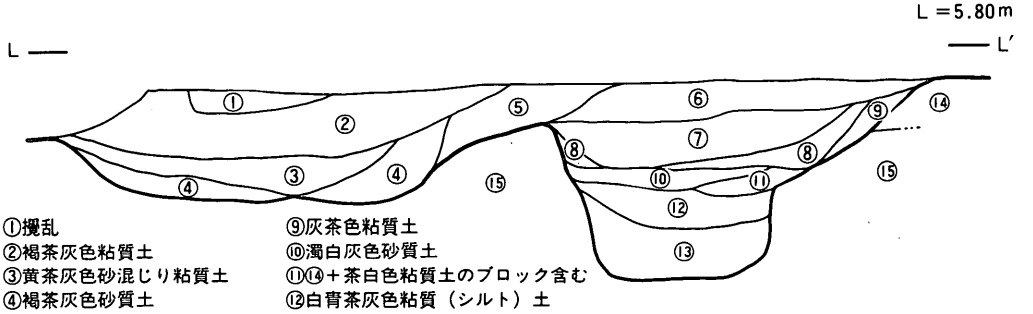

0
10m
T.N.
第1調査区
第2調査区
第3調査区
SB01
SD01
SD02
SD03
SD04
A
A'
B
B'
SD09
H'
H
I
I'
SD10
J
K
K'
SK04
SD11
SD12
L
L'
G
G'
SD09
SA02
SD08
SK02
SD07
SK01
SH02
SH05
SH04
SH03
SB14
SB15
F
F'
SD05
D'
E
E'
SA04
SD04
SD06
SB07
SB02
C'
D
SA03
SH01
C
SB06
SB11
SB13
SA01
SB12
SB16
SB03
SB08
SK03
SB18
SH06
SB04
SB05
SB09
SB10
SB17

第3図　遺構全体図



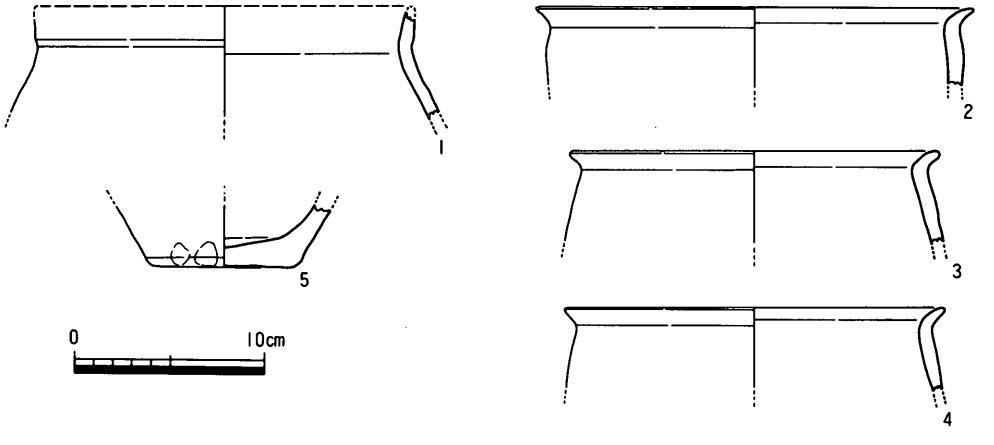
①濁茶灰色粘質土（こげ茶褐色粒を含む）
②暗茶灰色粘質土
③淡灰茶色粘質土
④濁青茶灰色砂混じり粘質土
⑤黄こげ茶白粘質土
⑥青茶灰色粘質土
} SD04

⑦暗茶白色砂混じり粘質土
⑧茶灰色粘質土
⑨濁茶白色粘質土
⑩明茶黄色粘質土
⑪明茶黄色粘質土（こげ茶褐色粒を含む）
} 地山

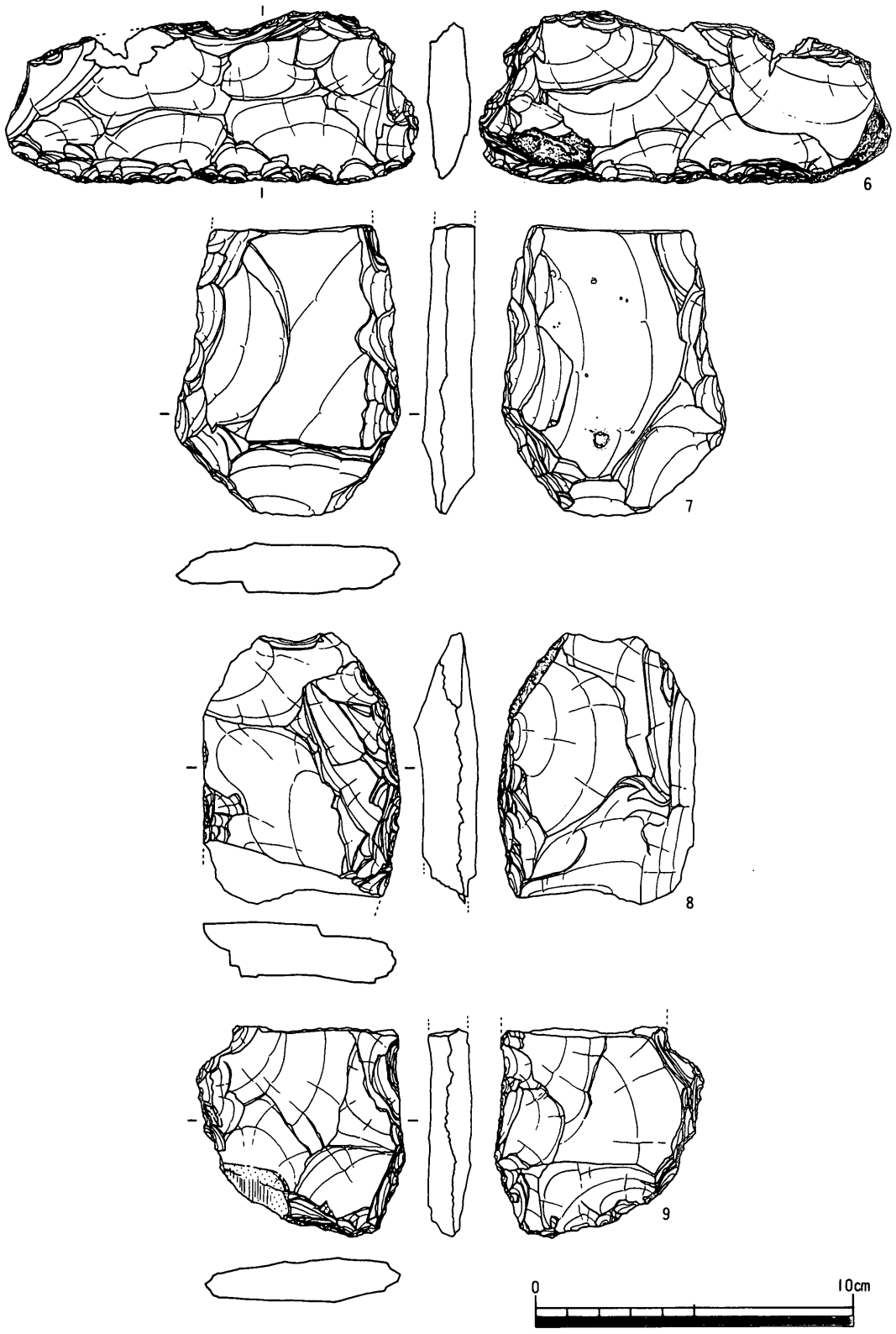


①攪乱
②褐茶灰色粘質土
③黄茶灰色砂混じり粘質土
④褐茶灰色砂質土
⑤淡茶灰色粘質土
⑥灰茶黄色粘質土
⑦濁茶灰色粘質土
⑧茶灰色粘質土
⑨灰茶色粘質土
⑩濁白灰色砂質土
⑪⑭＋茶白色粘質土のブロック含む
⑫白青茶灰色粘質（シルト）土
⑬青茶灰色砂混じり粘質（シルト）土
⑭黄茶色粘質土
⑮明黄色粘質土
} 地山

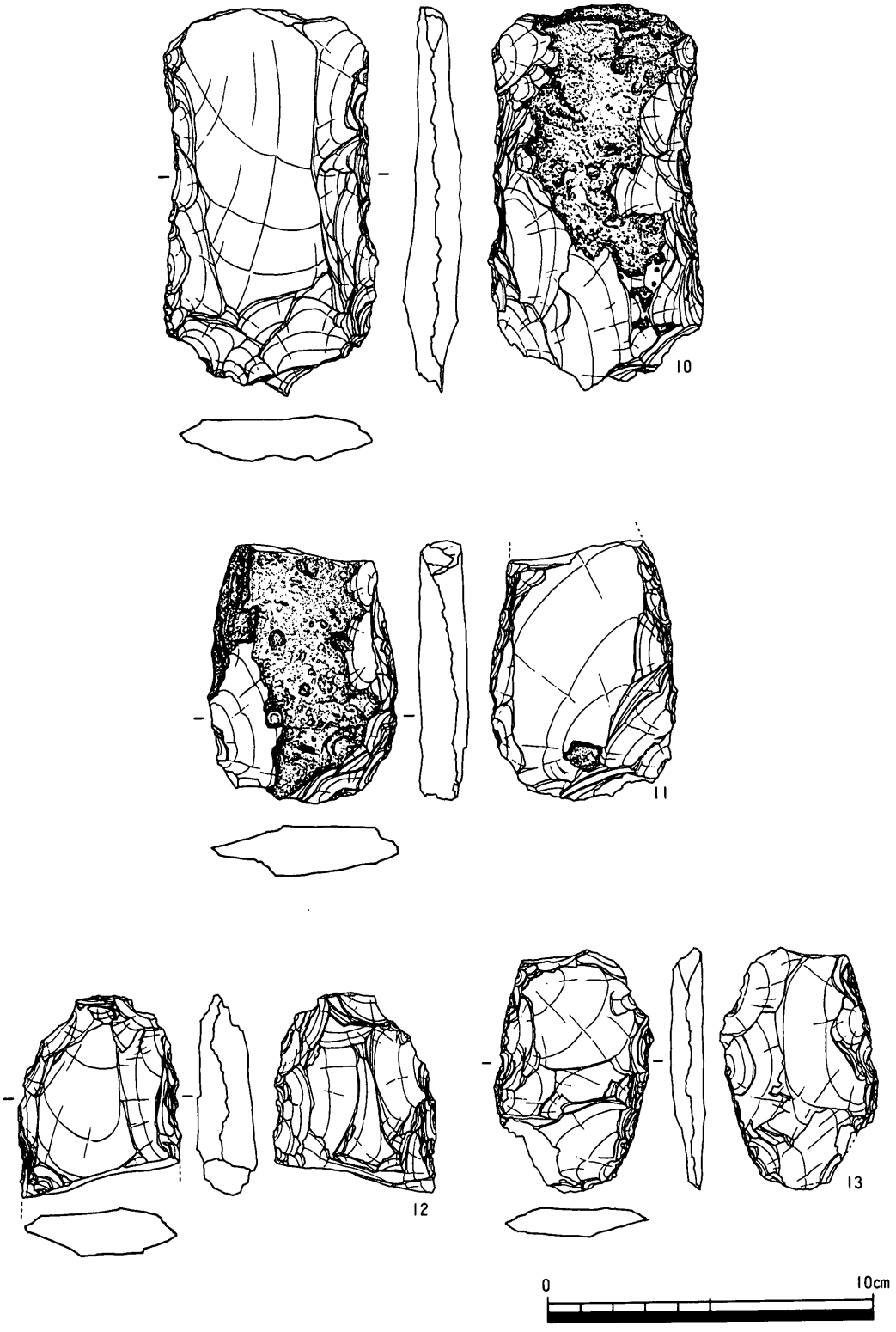
第４図　ＳＤ12土層断面図



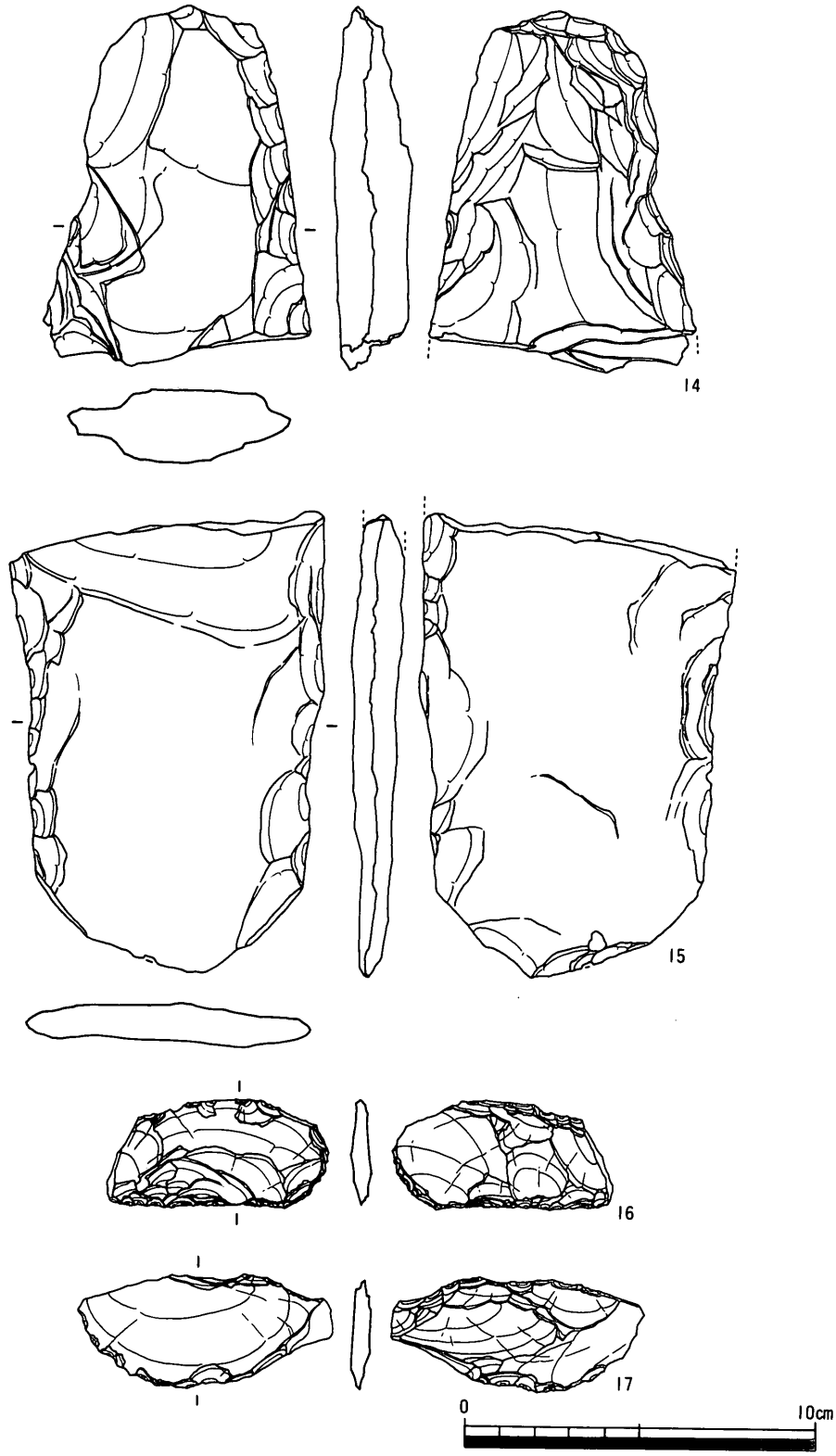
第５図　ＳＤ12出土遺物実測図①



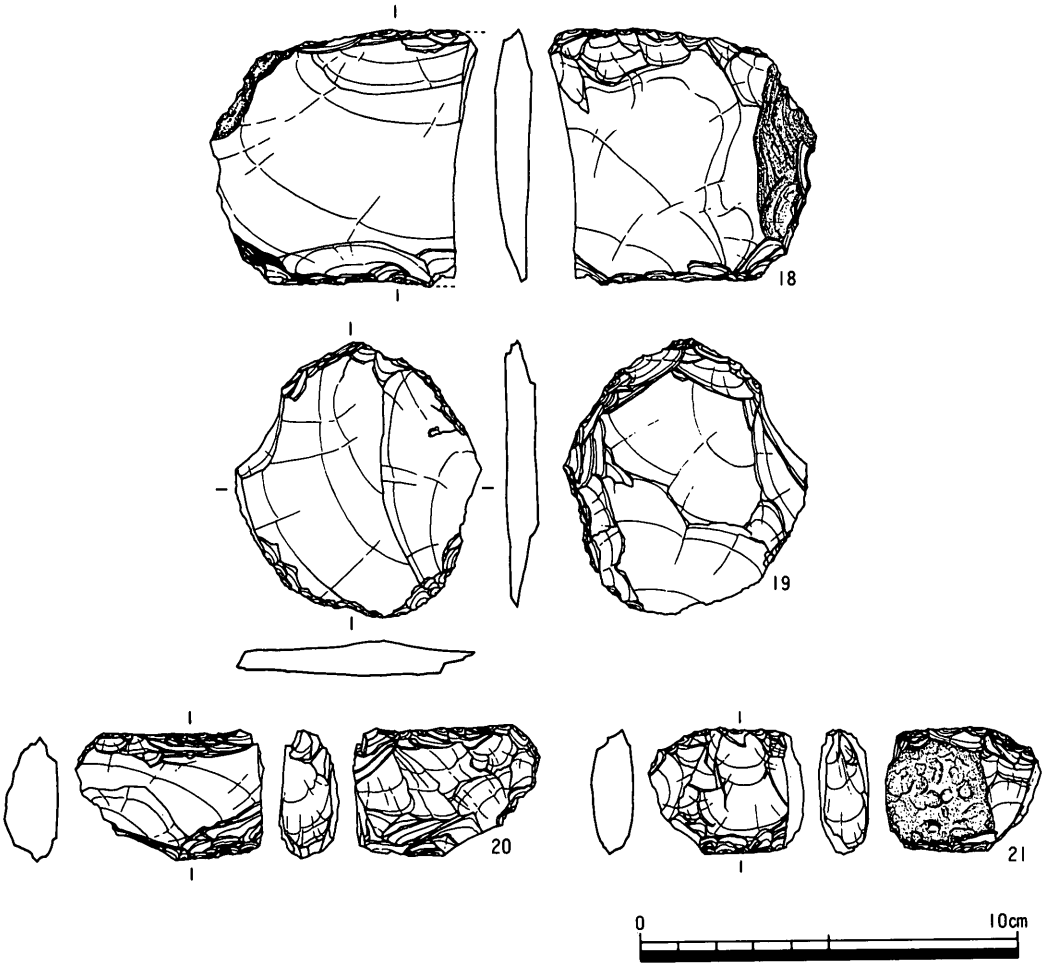
第6図　ＳＤ12出土遺物実測図（石製品）②



第７図　ＳＤ12出土遺物実測図（石製品）③



第8図　ＳＤ12出土遺物実測図（石製品）④



第9図　ＳＤ12出土遺物実測図（石製品）⑤

多量に含んでいる。

6～21は石製品である（第6～9図）。

6はサヌカイト製の打製石庖丁である。側辺に抉り状のくぼみを残すが明瞭ではない。刃部は両縁とも鈍い。7～15は打製石斧である。7～13がサヌカイト製で，14・15が安山岩製である。9の打製石斧の刃部左側には擦痕が認められる。安山岩製の打製石斧は全体に磨滅が著しい。16～19はスクレイパーである。17は基部を作っており，切りだしナイフ状を呈したスクレイパーである。19は周囲に刃部を持つラウンドスクレイパーである。20・21は楔状石器素材である。

出土石製品に打製石斧がかなり多いことが注目される。

出土遺物より弥生時代前期中段階の遺構と思われる。

(2)弥生時代後期

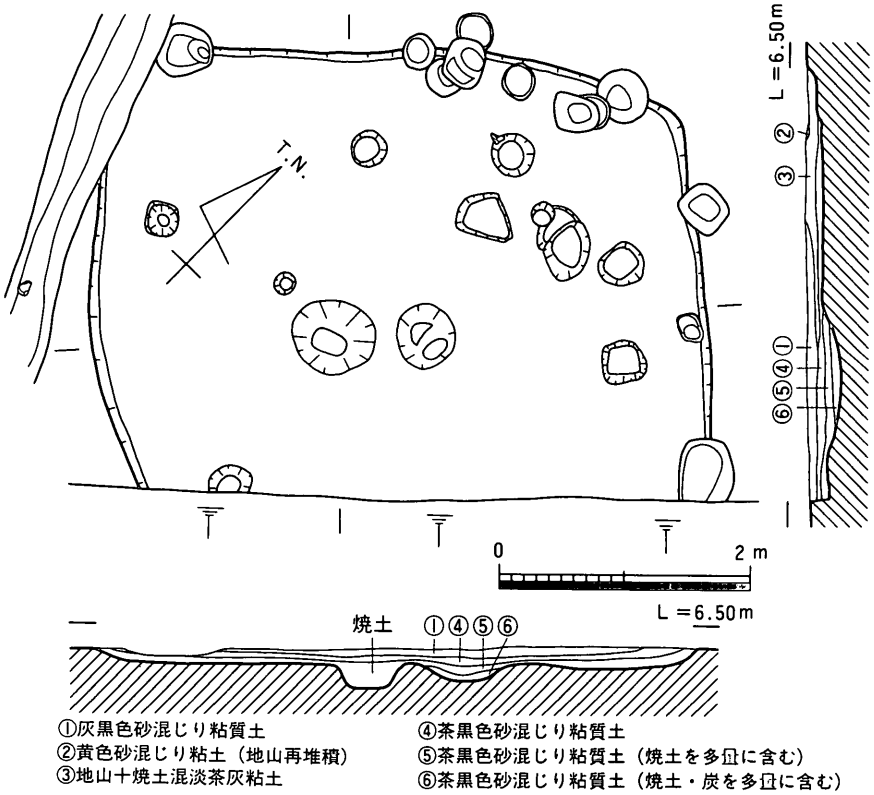
弥生時代後期の遺構は第１～３調査区で検出されている。遺構としては竪穴住居２，溝が２条，土坑１である。出土遺物より溝には若干の時期差がある。まずSD04が機能し，その廃絶後にSD11とSH05･06が機能していたものと思われる。溝からは多数の遺物が出土しており，特に廃絶時の祭祀に使用されたと思われる脚付きの小型丸底壺が出土しているのが特徴である。

SH05（第10・11図）

SH05は第２調査区南半で南東部を水路で壊されている状況で検出された。この竪穴住居はSH03・04に切られており，検出状況では歪な形態を呈しているがほぼ隅丸方形のものと思われる。中央に炭化物を含むファイヤーピット状のくぼみが確認されている。規模は東西4.9m，南北3.6mである。検出遺構面から床面まで0.13mを計る。主軸は，真北から約45°西偏している。

竪穴住居埋土から多数の遺物が出土している（第11図）。

22～30は甕である。頸部は「く」の字に屈曲し，口縁部に向って直線的に延びるものである。頸部屈曲部内面には明瞭な稜を持つものと持たないものがある。体部外面には細かい刷毛目が，内面には頸部屈曲部までヘラ削りが施されている。25～30は底部がしっかりした平底を呈する。



第10図　ＳＨ05平・断面図

30は小さい平底を残しているが底部から体部にかけてが内彎気味に外上方に延びるもので，やや丸底化傾向が見られる。

31は鉢である。体部がやや内彎気味に外上方に延びるもので，口縁端部はそのまま平らな面を残し終わらせている。

32～38はいわゆる下川津B類土器[註1]である。

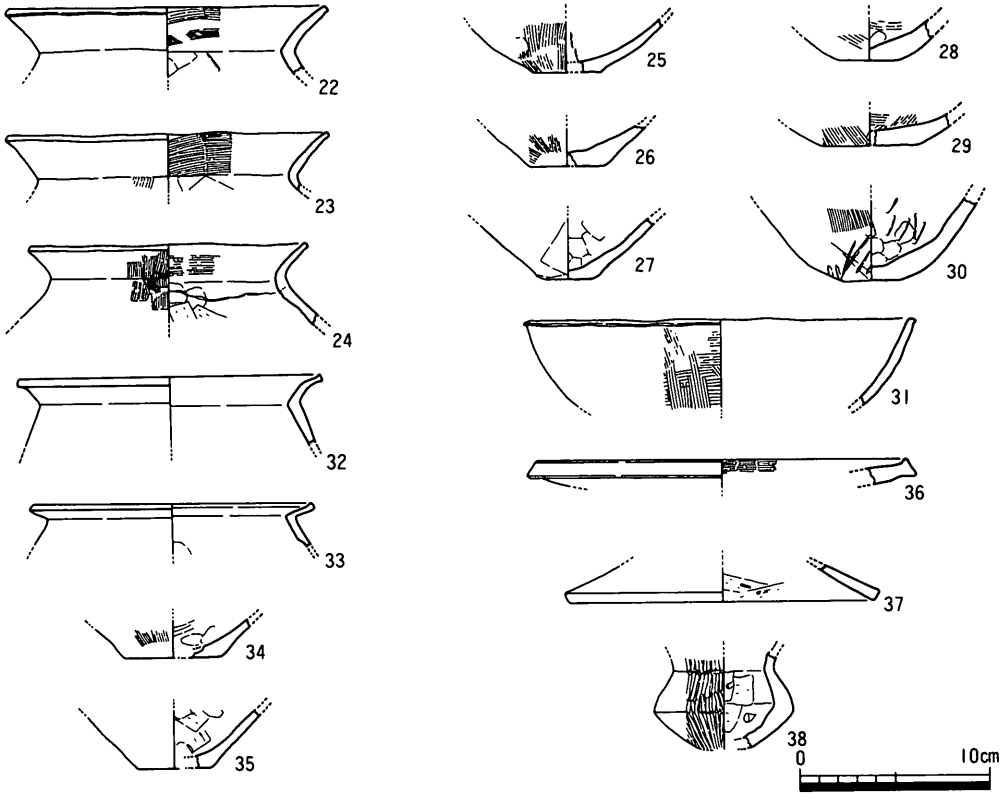
32～35は甕である。32の形態は典型的なB類甕ではなく，在地甕の形態を呈しており，胎土に角閃石・金雲母を小量含むものである。33～35は典型的なB類甕である。体部内面下半には指頭痕が見られる。

36は壺である。口縁部が水平気味に開くもので，口縁端部は小さく上下に拡張している。

37は脚付き小型丸底壺の脚部と思われる。脚部内面にはヘラ削りが施されている。

38は小型丸底壺と思われる。体部が算盤状を呈しており，底部は平底になるようである。体部外面にはヘラ磨きが，内面にはヘラ削りが施されている。

時期は弥生時代後期後半頃である。



第11図　ＳＨ05出土遺物実測図

SH06（第12・13図）

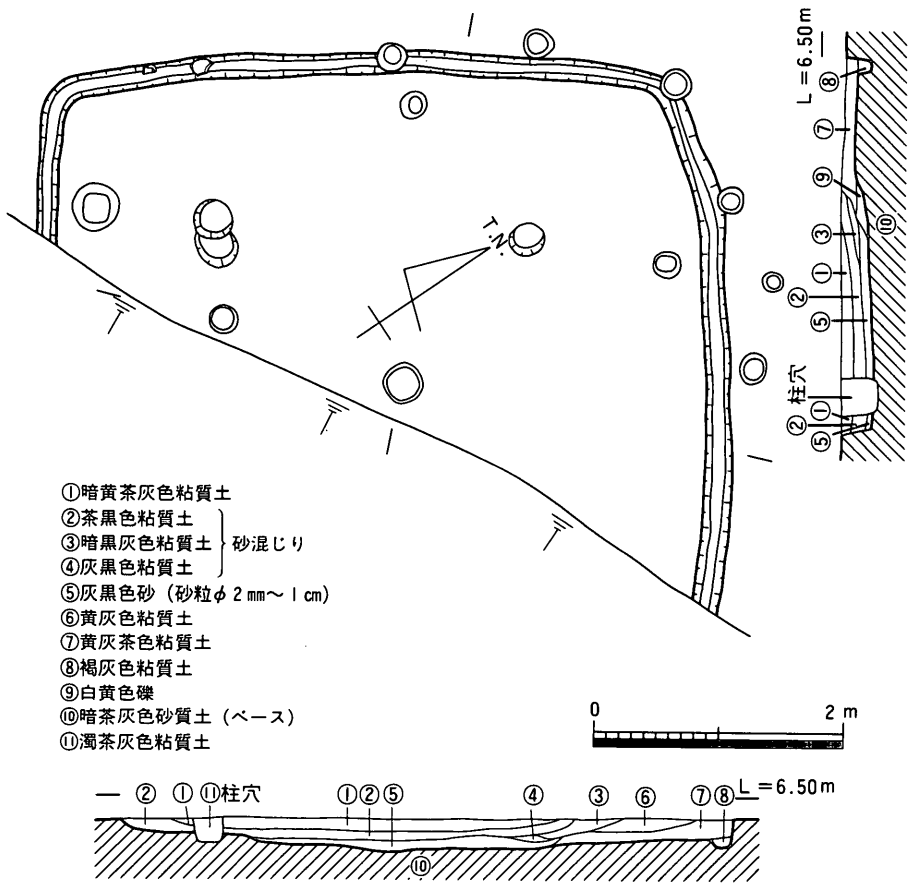
SH06は第２調査区南半で南東部を水路で壊されている状況で検出された。平面形態は東西(2.9)m，南北5.5mのほぼ方形を呈する竪穴住居と思われ，周囲に壁溝を有している。検出遺構面から床面までは0.2mを計る。主軸は，真北より約56°西偏している。主柱穴はおそらく４個あったものと考えられる。

この竪穴住居の上部からは古墳時代後期の土坑が検出された。おそらく竪穴住居の廃絶後くぼみができていて，古墳時代になって完全に埋まったものと考えられる。

竪穴住居埋土から多数の遺物が出土している（第13図）。

39～45は甕である。頸部は「く」の字に外方に屈曲するもので，口縁部は短く直線的に延びる。体部形態は最大径がほぼ中位にあるものと思われる。体部外面は叩きののち細かい刷毛目が，内面にはヘラ削りがほぼ上位まで施されている。

46・47は鉢である。46は体部が内彎しながら口縁部に延びるもので，47は口縁部で外方に短く



第12図　ＳＨ06平・断面図

屈曲する。

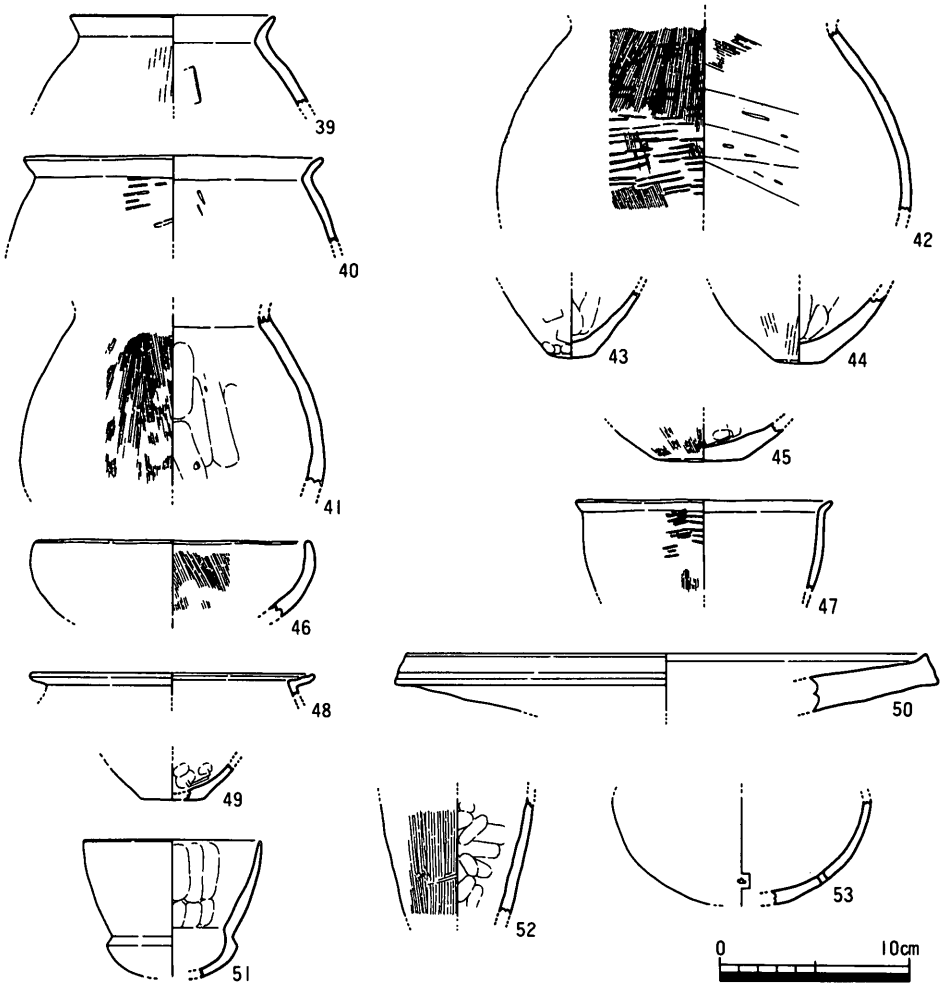
48～51・53はＢ類土器である。52はＢ類土器を模倣した在地の長頸壺である。

48・49は甕である。口縁部は短く外方に屈曲するもので，頸部内面には明瞭な稜を残す。底部はしっかりした平底を残す。底部内面には指頭痕が見られる。

50は壺である。口縁部は水平気味に開くもので口縁端部は上下に小さく拡張されている。

51は小型丸底壺である。体部は算盤状を呈しており，肩部は短く屈曲し，やや内彎しながら口縁部が延びるものである。52・53は長頸壺である。52は胎土に角閃石・金雲母を含まない在地の長頸壺である。53は長頸壺の体部下半部と思われる。底部近くに穿孔が認められる。

時期は弥生時代後期後半頃である。



第13図　ＳＨ06出土遺物実測図

SK04（第3図）

SK04は第3調査区北半で検出された土坑である。平面形態は不定形を呈している。この土坑はSD11を切っており，土坑埋土より弥生土器・サヌカイトが出土している。

時期は弥生時代後期後半頃のものと思われる。

SD04（第14～25図）

SD04は第1調査区と第2調査区にまたがって検出された。流路はやや弧をえがきながらほぼ南北にとっている。SD04は居住域を画する溝と思われていたが，溝の左右でほぼ同時期であろうと思われる竪穴住居が検出されたことから，排水溝の可能性が考えられる。SD11はSD12に切られており，どういう性格のものかは不明である。

SD04・11からは多量の遺物が出土している（第16～25図，第27～34図）。

SD04出土遺物については，各器種ごとに第1調査区と第2調査区に分けて掲載し，また，角閃石及び金雲母を含む仮称下川津B類土器はまとめて掲載した。

54～88は第1調査区SD04出土の甕である。

甕にはやや大型のもの(54)が若干見られるが，大半は口径12～17cmで，器高20cm前後のものが多いようである。口縁部は「く」の字に外反し，そのまま真直ぐ延びるものとやや外反するものがある。前者は口縁端部外面に面を残すものとそのまま細く終わらすものがある。後者は下方に小さくつまみ出すものと上方に小さくつまみ出すものがある。頸部の屈曲部内面にはかなり強い稜を持っているものが多い。底部は平底を残すものが多く，若干丸底のものがある。しかし，68～88の底部には鉢の底部も含まれる可能性があることを指摘しておきたい。

調整は体部外面は叩きののち刷毛目を施すものが主体を占めている。体部外面は頸部屈曲部まで下方からのヘラ削りが施されるものと体部中位までヘラ削りを施し，上方を指頭痕あるいは刷毛目を施すものがある。

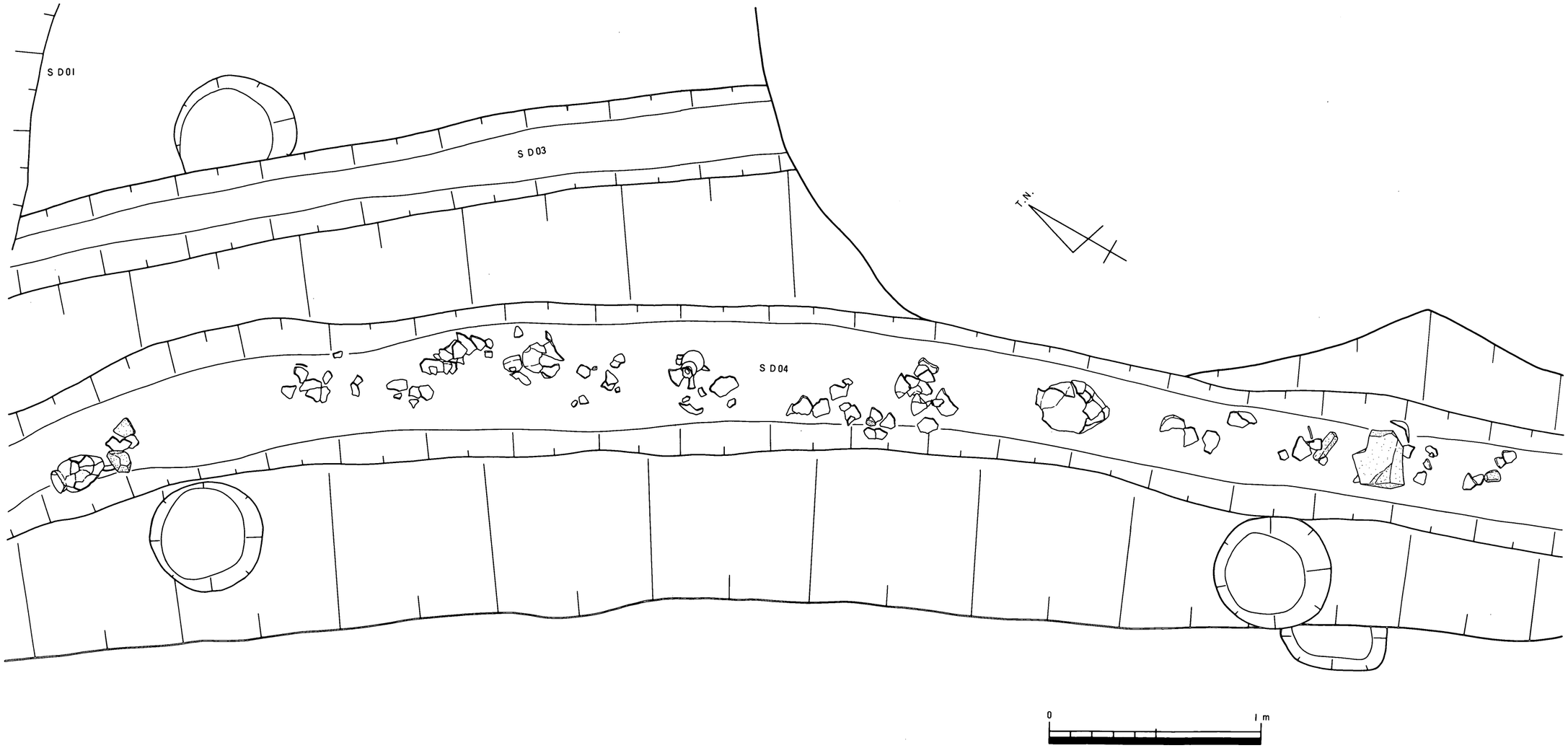
89～129は第2調査区SD04から出土の甕である。形態的にも調整的にもほぼ第1調査区出土の甕と同様な傾向を呈している。108のように小型の鉢と思われるようなものもみられる。

調整はほぼ第1調査区出土の甕と同様である。

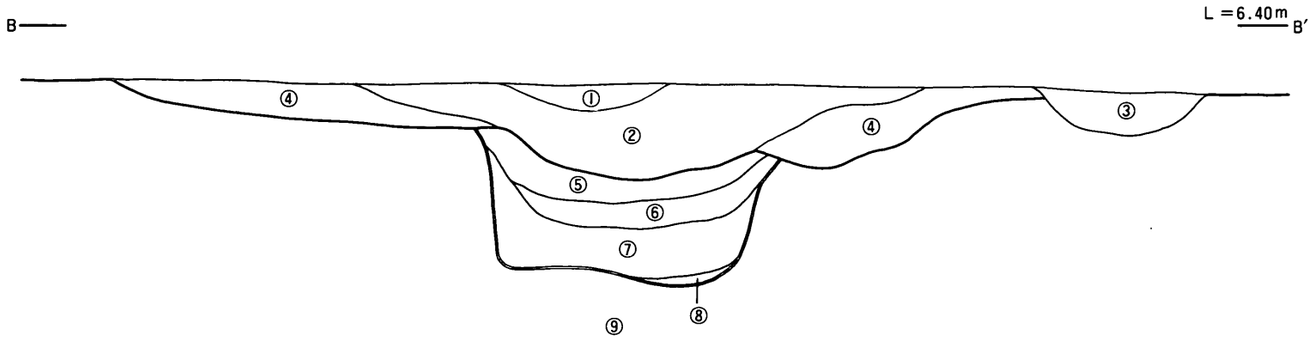
130～136は第1調査区出土の壺である。

130～133は直立気味にのびる頸部から口縁部が水平に広がるものである。口縁端部は上方に小さくつまみあげているものがある。また口縁端部外面に2条の沈線を持つものもみられる。134は口縁部が短く外方に広がるものである。底部はしっかりした平底をしている。

137～156は第2調査区SD04出土の壺である。頸部の形態は143のように外方に延びるものがある。また，口縁部は端部上端を三角形状につまみ上げたものも小量みられる。体部内外面の調整は第1調査区出土の壺と同様である。149は朝顔状に開く頸部を持ち，口縁部は上下に拡張するものである。口縁端部外面には凹線状の指なでが施されている。150は口縁部がほぼ直立気味に延び

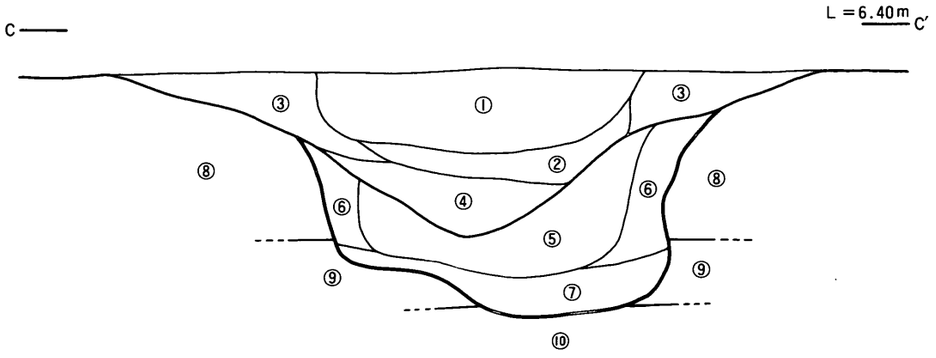


第14図　第Ⅰ調査区ＳＤ04遺物出土状況

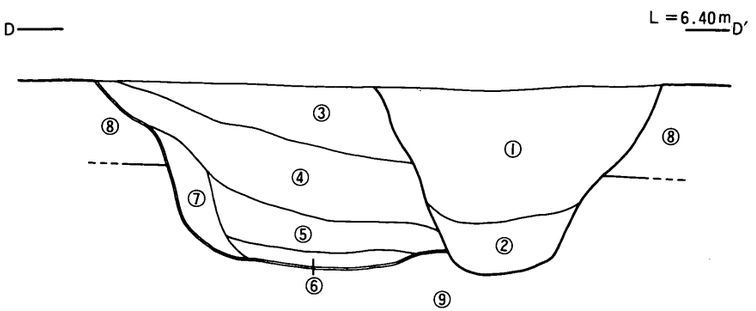


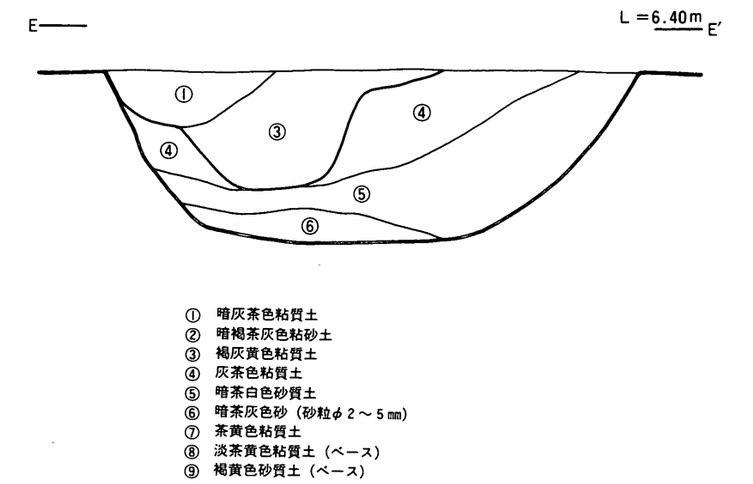
① 茶黒色粘質土
② 黒茶灰色粘質土
③ ④＋淡茶黄色粘質土の混じった土
④ 濁茶灰色粘質土
⑤ 灰黒色粘質土
⑥ 暗茶灰色粘質土
⑦ 濁茶灰色粘質土（こげ茶褐色粒を多量に含む）
⑧ 暗灰色砂（砂粒φ2～3㎜前後）
⑨ 淡茶黄色粘質土（ベース）

①，②，④ 6世紀末の溝
⑤～⑧ 弥生後期後半の溝

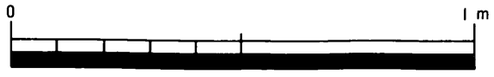


① 暗黄灰色粘質土（こげ茶褐色粒を含む）
② 暗こげ茶灰色粘質土（こげ茶褐色粒を少量含む）
③ 黄灰色粘質土
④ 暗黒茶灰色粘質土
⑤ こげ茶灰色粘質土（こげ茶褐色粒を含む）
⑥ 暗灰黄色粘質土（こげ茶褐色粒を含む）
⑦ 暗こげ茶灰色砂質土
⑧ 明黄色粘質土
⑨ 明灰茶色粘質土
⑩ 明茶灰色粘質土（砂粒を少量含む）





① 暗灰茶色粘質土
② 暗褐茶灰色粘砂土
③ 褐灰黄色粘質土
④ 灰茶色粘質土
⑤ 暗茶白色砂質土
⑥ 暗茶灰色砂（砂粒φ2～5㎜）
⑦ 茶黄色粘質土
⑧ 淡茶黄色粘質土（ベース）
⑨ 褐黄色砂質土（ベース）



第15図　ＳＤ04土層断面図

る2重口縁を呈している。いわゆる西瀬戸内系の壺と思われる。152～154は体部が球形状のものである。155は壺の体部に線刻を施したものである。

157～186は鉢である。

157～166は第1調査区SD04から出土したものである。鉢には大型のものと小型のものがみられる。 159は小さい脚付きの鉢である。体部は内彎しながら上方に延び，頸部は「く」の字状に短く外反する。体部外面下半には指頭痕が，内面には板なでが施されている。

底部は丸底気味のもあるが小さい平底を残している。

167～186は第二調査区SD04から出土したものである。

底部が丸底状になっているものもみられ，そのほとんどの体部が球形を呈している。

187･188は高坏である。187は脚部が大きく開くものである。脚部の穿孔は2個セットで3方向にあけられている。

189～191はミニチュア土器である。

189は甕である。底部は尖底気味で体部は内彎している。190･191は壺である。 191は倒卵形の体部から，「く」の字状に屈曲した頸部を持ち，口縁部は外上方に直線的に長く延びる。

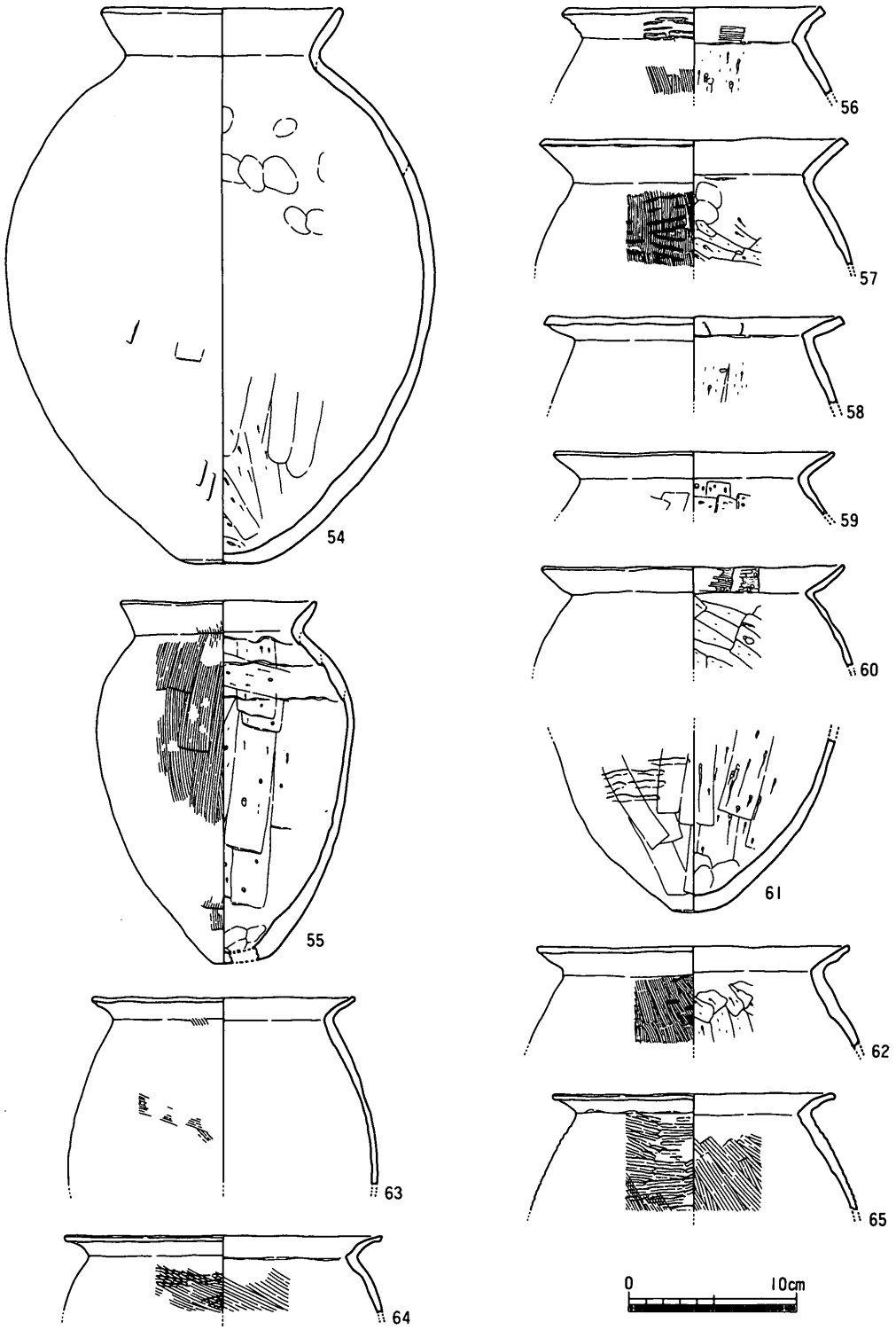
192は製塩土器である。体部から口縁部にかけてやや内傾するもので，外面には荒い叩きが施されている。

193～221は，胎土に角閃石・金雲母を含むいわゆる下川津B類土器である。193～210が第1調査区から，211～221が第2調査区からの出土である。

193～196，207は壺である。頸部は朝顔状に外反するもので口縁端部は上方につまみ上げるものと上下につまみ出すものがある。口縁端部外面には凹線状の指なでがみられる。 207は壺の肩部と思われる。頸部と体部の境に刺突文がみられる。

198～205は甕である。甕には2種類ある。まず第1に，頸部が「く」の字状に短く屈曲し，口縁端部は上方に小さくつまみ上げる。底部はしっかりした平底を残し，体部外面下半にはヘラ磨きが，上半には細かい刷毛を，体部内面下半には指頭痕が，上半にはヘラ削りが施され，器厚がかなり薄いもの。これが下川津B類の甕である。第2に，頸部は「く」の字状に屈曲し，体部は卵形を呈する。底部は小さい平底を残すものや，丸底化の見える平底を残すものがある。体部外面には，叩きを明瞭に残すものと，刷毛目を施すものがある。体部内面には下半に指頭痕が，上半には指なでが施されている。このタイプはB類以外の甕の一般的な特徴のものである。

206は長頸壺である。体部は倒卵形で，頸部は小さく絞まっている。体部外面には縦方向の細かい刷毛目が施され，内面は横方向のヘラ削りが施されている。211・212は鉢である。体部がやや内彎し，口縁部は上方に延びる。体部外面には細かい刷毛目かヘラ削りが施され，内面には細かい刷毛目が施されている。208～210は脚付き小型丸底壺である。頸部に小さい屈曲部を持ち，内彎しながら上方に延びる口縁部を持つ。脚部は大きく広がるもので，外面に刷毛目かヘラ磨きが

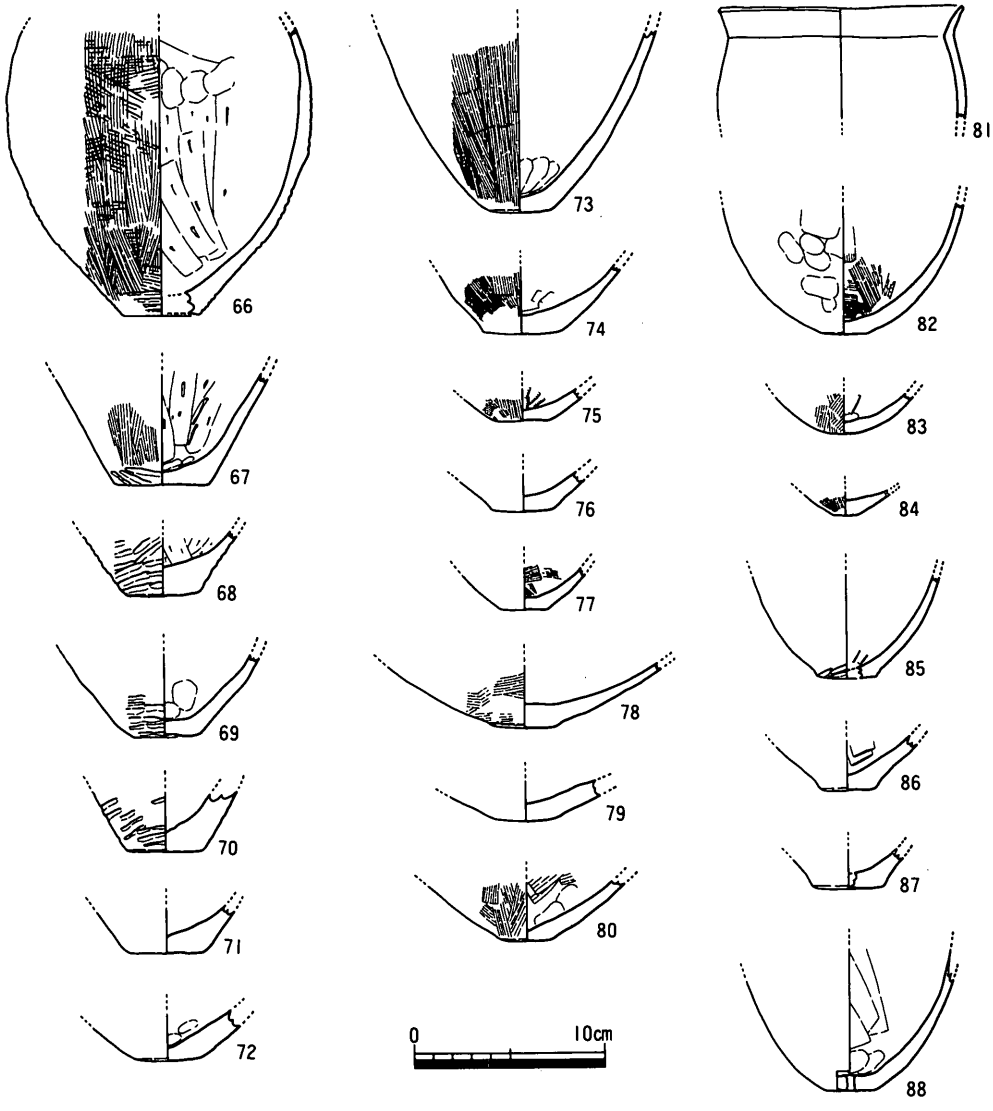


第16図　ＳＤ04出土遺物実測図①

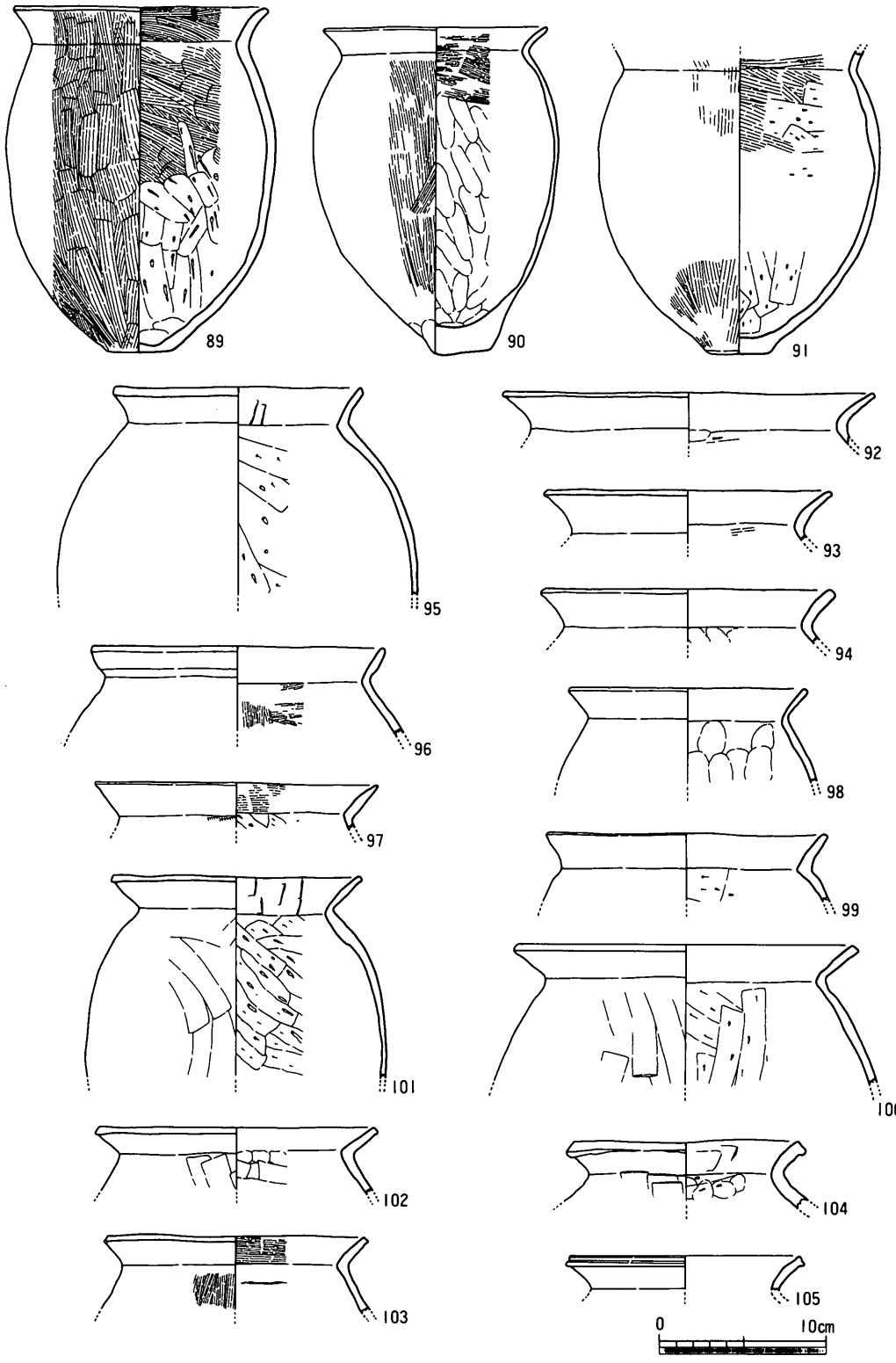
施され，内面にはヘラ削りが施されている。

213･216は壺である。216は底部に平底を残し，体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面には下半にヘラ磨きが，上半に細かい刷毛目が施されている。体部内面には縦方向のヘラ削りが施されている。

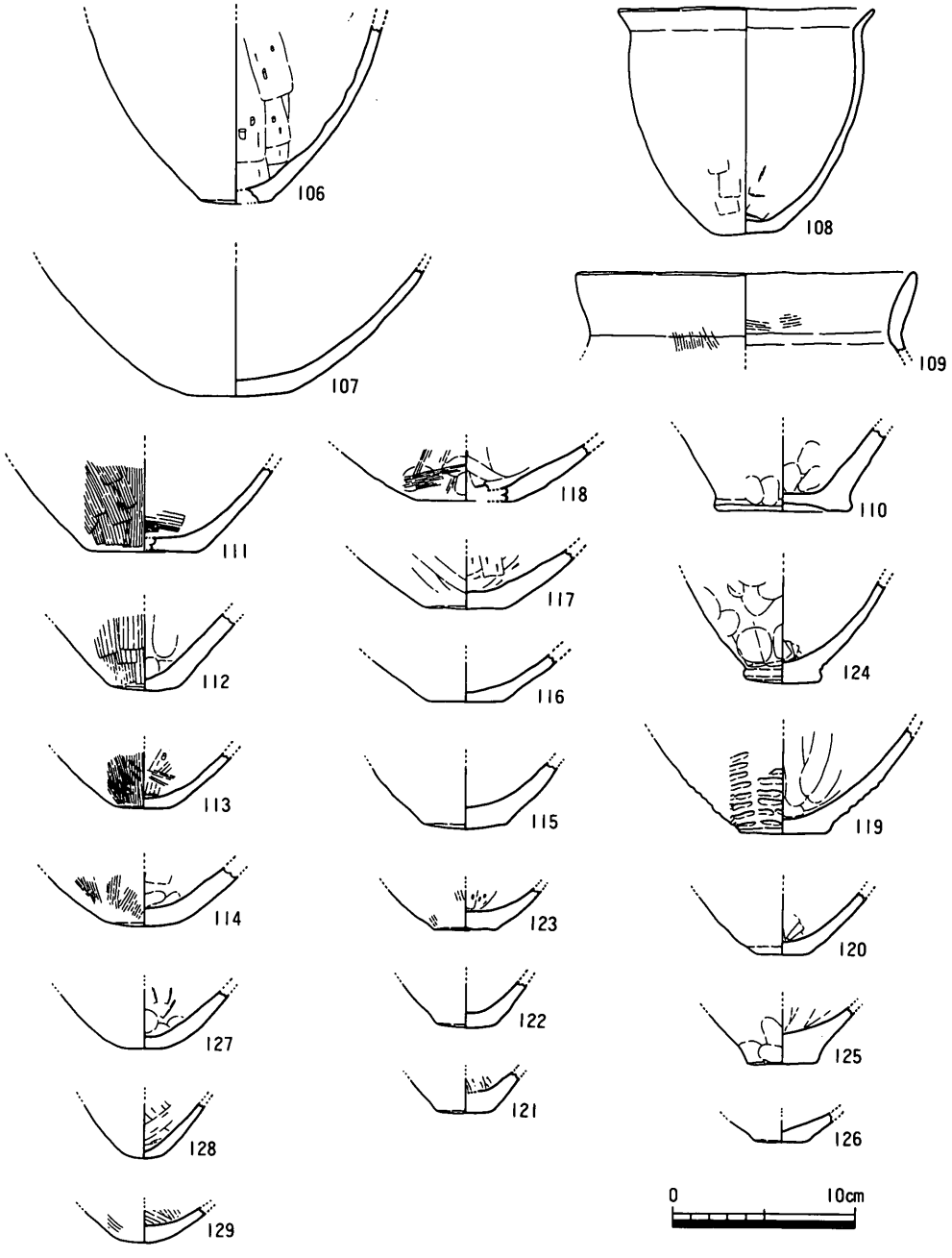
214・215・217は甕である。215・217は同一個体と考えられるものである。底部はしっかりした平底で，体部はやや内彎気味に外上方に延びる。頸部は「く」の字状にきつく屈曲する。体部外面には縦方向のヘラ磨きが，内面にはヘラ削りが中位上半まで施され，最下段と最上段に指頭痕がみられる。



第17図　ＳＤ04出土遺物実測図②



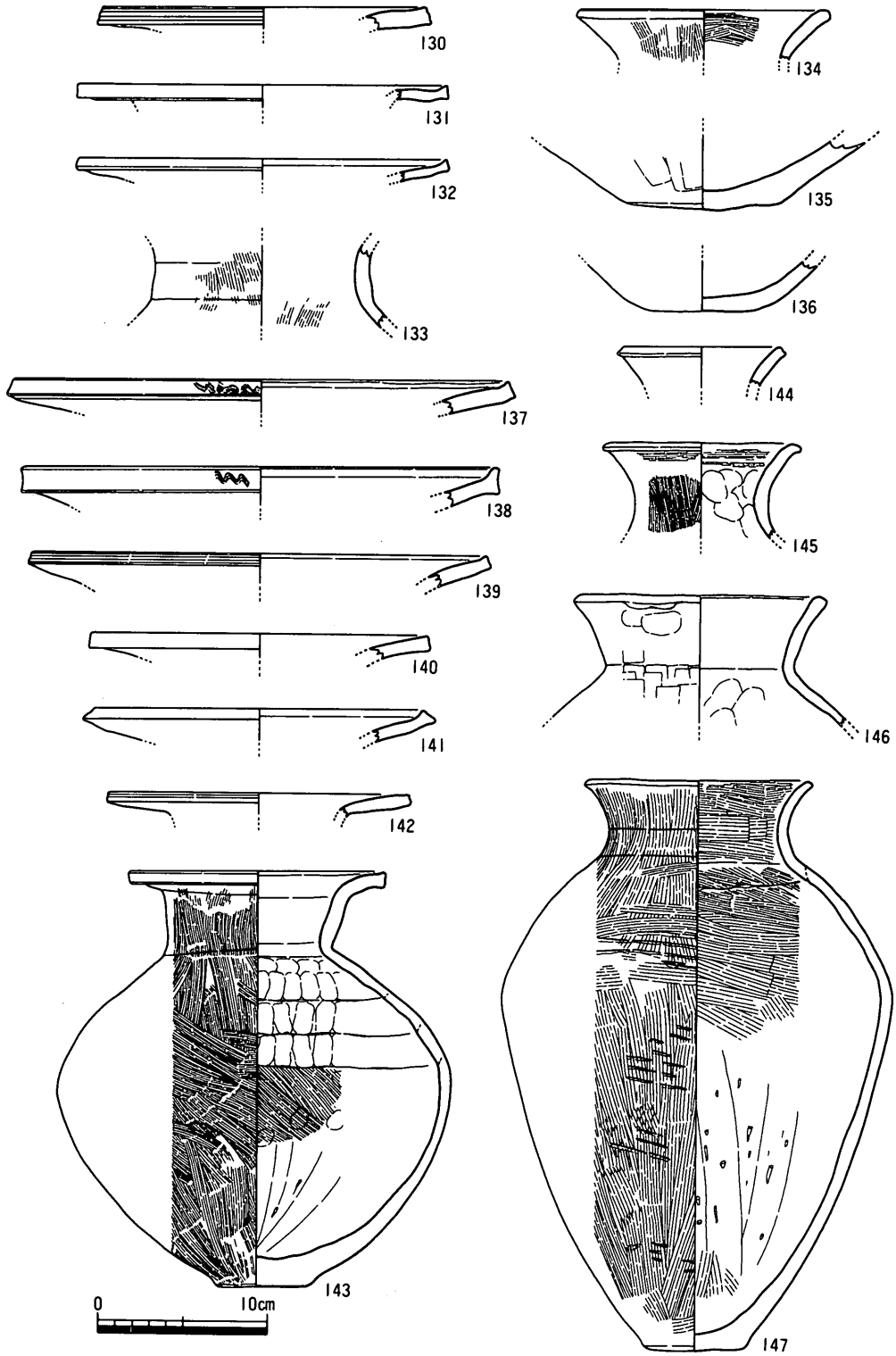
第18図　ＳＤ04出土遺物実測図③



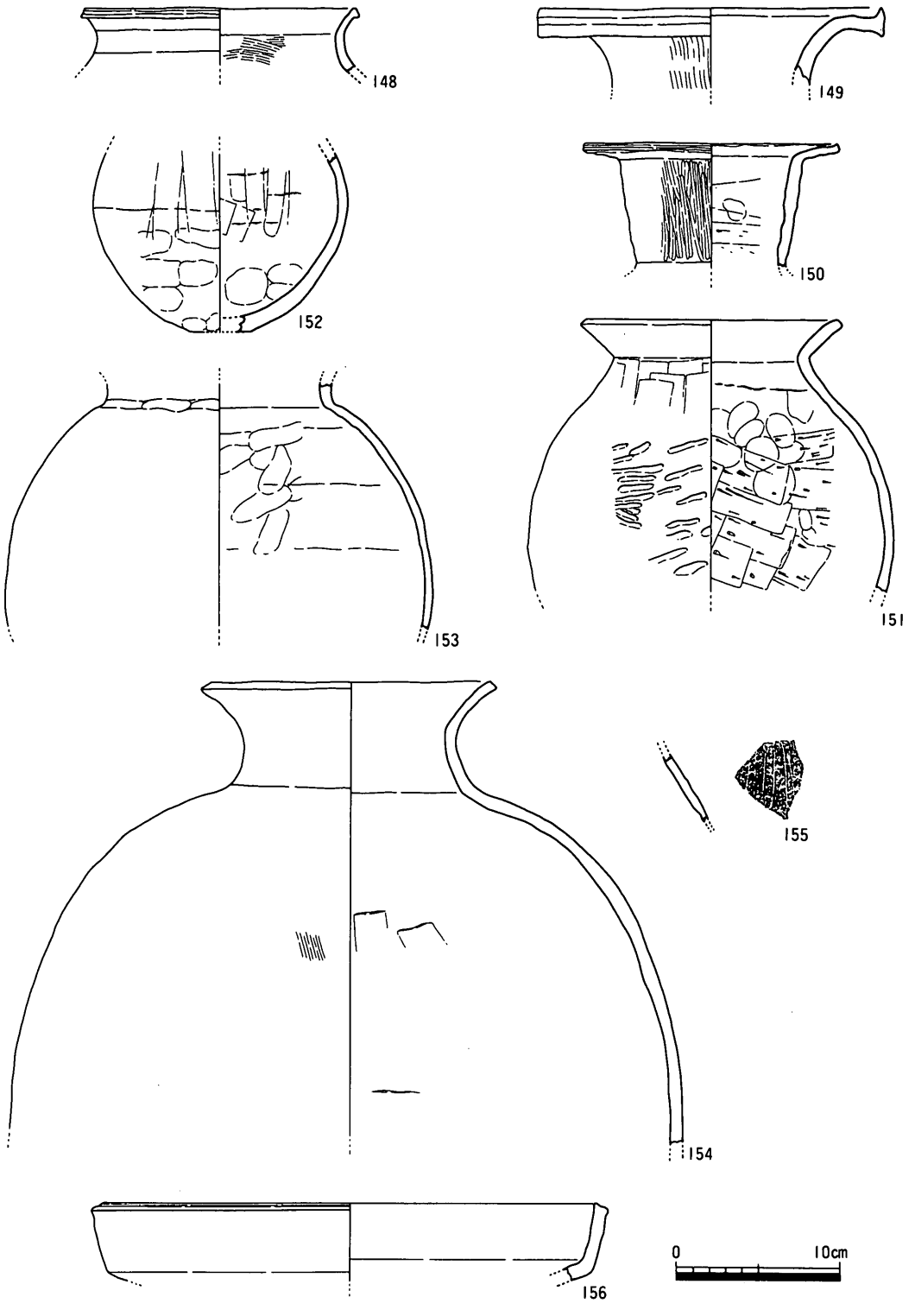
第19図　ＳＤ04出土遺物実測図④

218・219は高坏である。口縁部内面に凹線状の指なでが３条施されている。坏部下半外面にはヘラ削りが認められる。

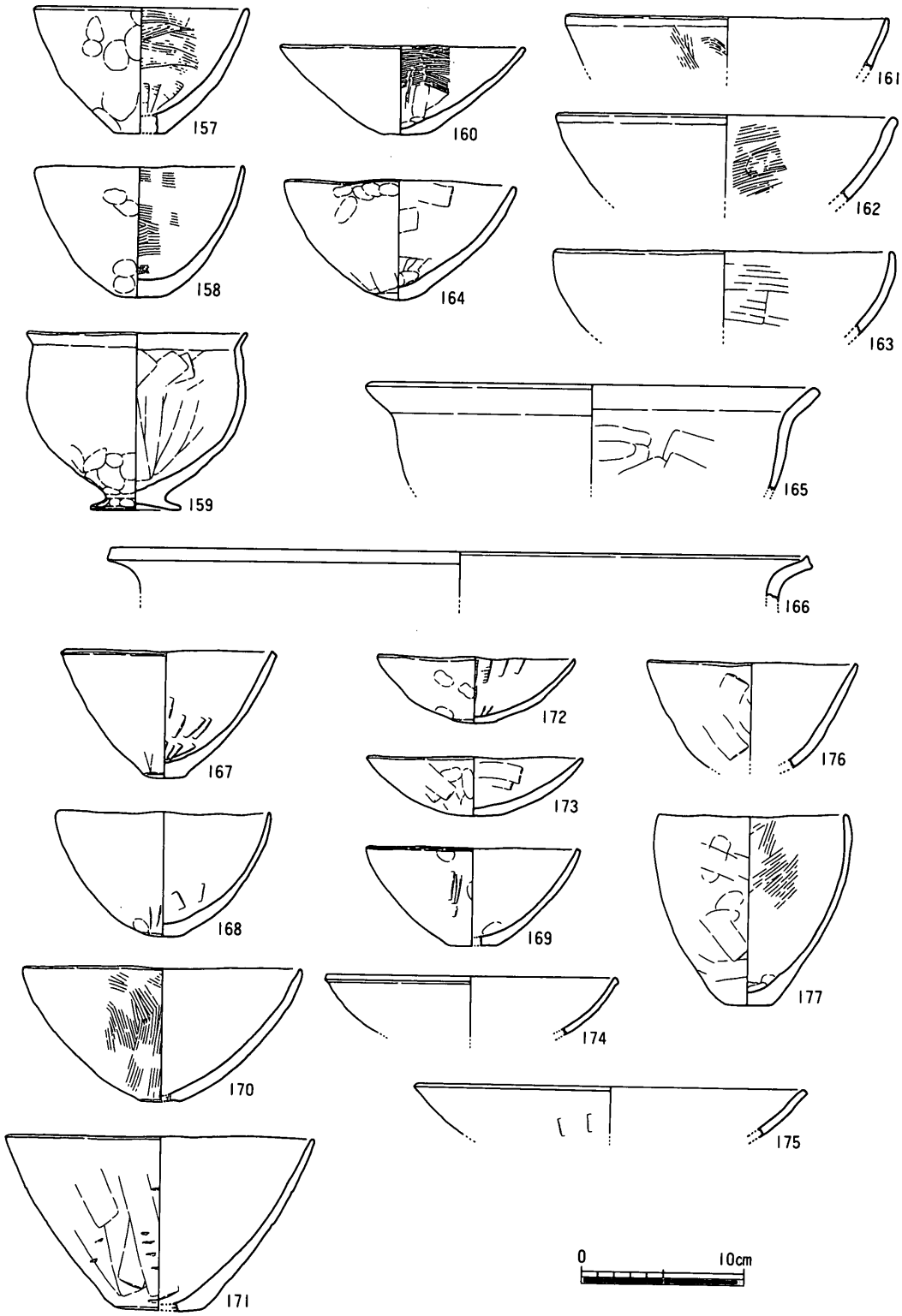
220・221は小型丸底壺である。220は小型丸底壺Ａである。体部は算盤玉状を呈し，頸部から直線的に外上方に延びる口縁部を持つものである。体部外面には縦方向のヘラ磨きが施されている。221は脚付き小型丸底壺である。



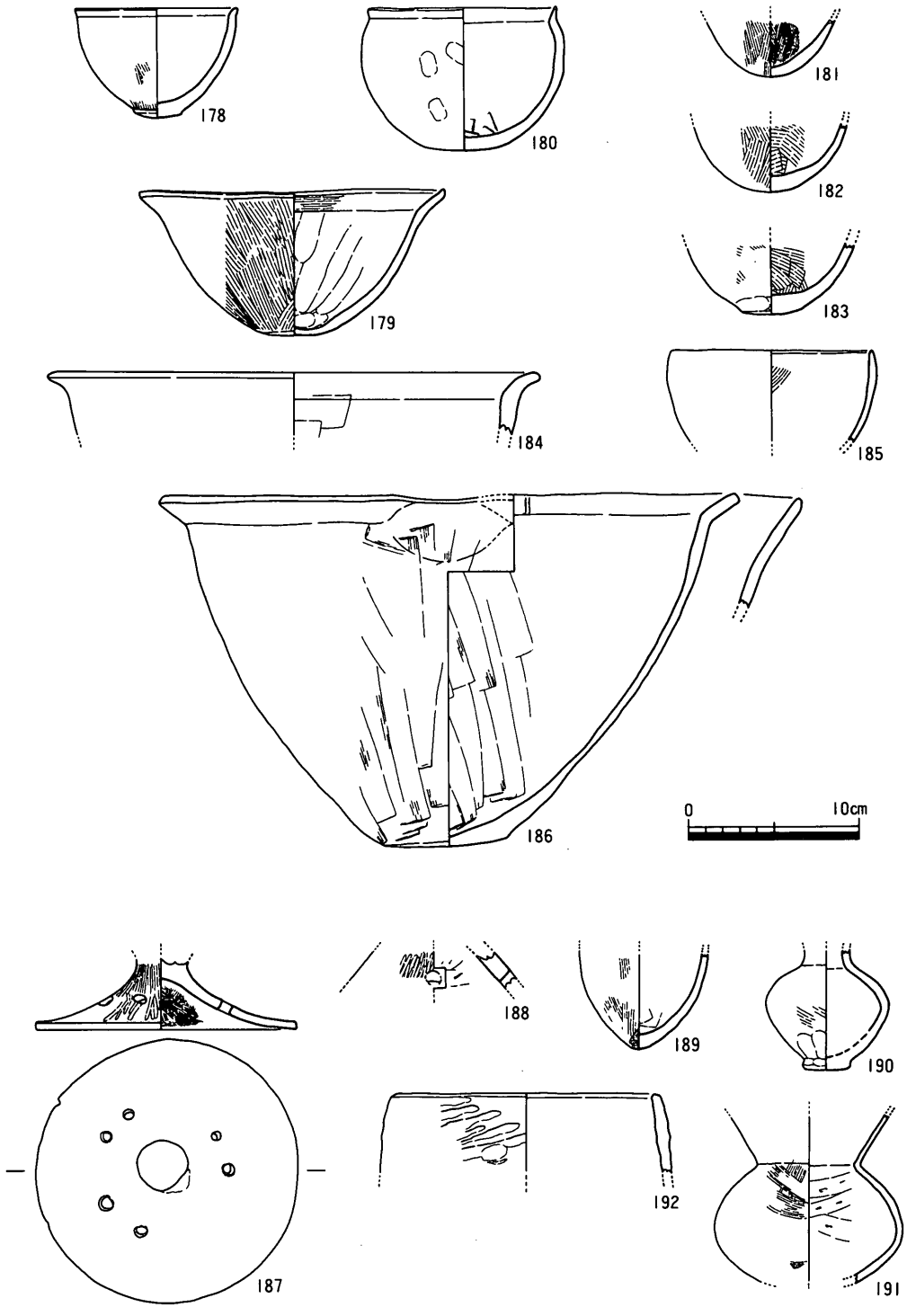
第20図　ＳＤ04出土遺物実測図⑤



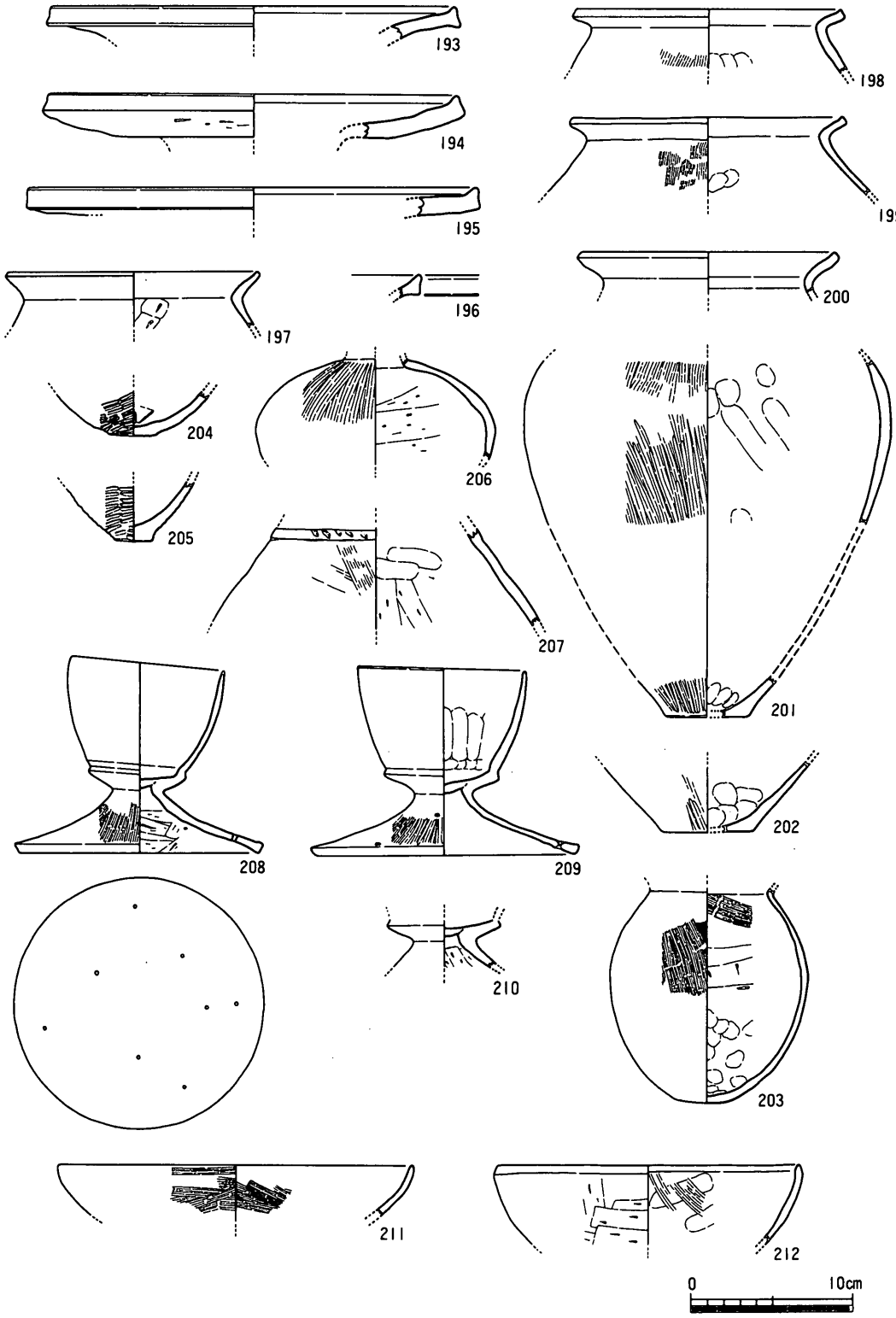
第21図　ＳＤ04出土遺物実測図⑥



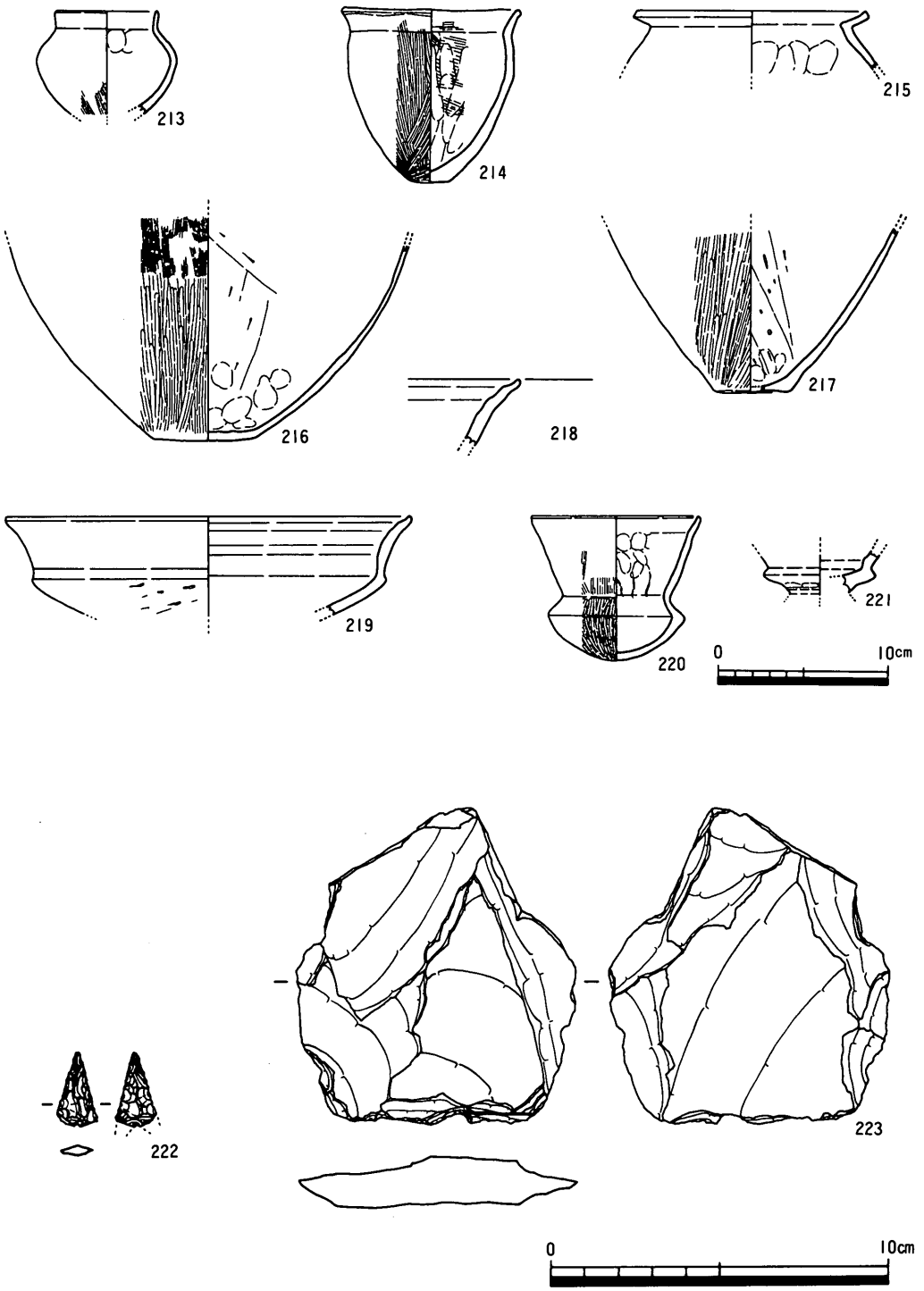
第22図　ＳＤ04出土遺物実測図⑦



第23図　ＳＤ04出土遺物実測図⑧



第24図　ＳＤ04出土遺物実測図⑨



第25図　ＳＤ04出土遺物実測図⑩

222・223は石製品である。222はサヌカイト製の石鏃である。223は安山岩製の打製石斧である。中央部両側面に抉り状のくぼみが認められる。

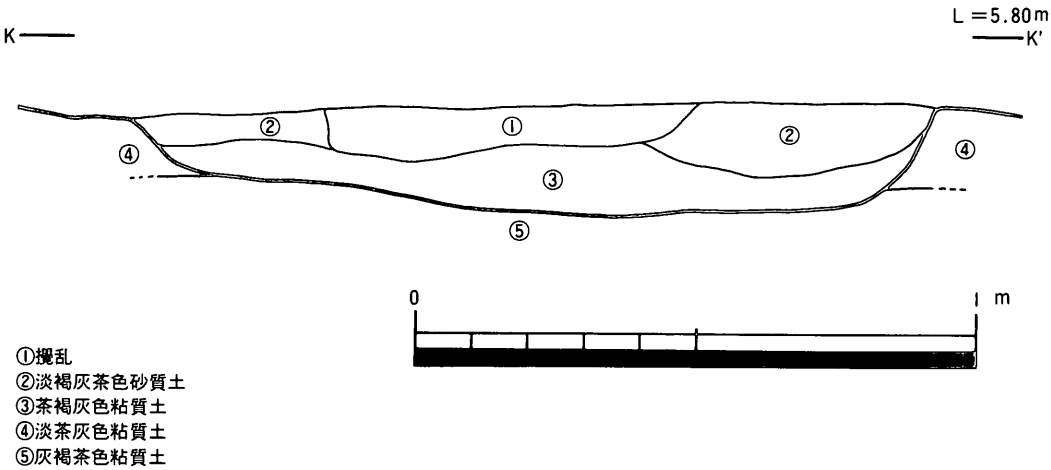
SD11

224～264は甕である。頸部は「く」の字状に外方に屈曲し，直線的に延びるもの，外反させるものなどがある。口縁端部はほとんどのものがそのまま終わらせている。232は口縁端部上端を小さくつまみ上げ，外面に沈線状のものを施す。また，口縁端部下半をつまみ出すものもある。頸部屈曲部内面はほとんどのものが明瞭な稜をもっている。体部は最大径が中央部よりやや上方に位置するものもあるが，ほとんどは最大径を中央部に持つ。底部は小さくなっているもののしっかりした平底を残している。しかし，底部から体部の立ち上がりは内彎気味に立ち上がるもので，丸底化の傾向としてとらえられる。

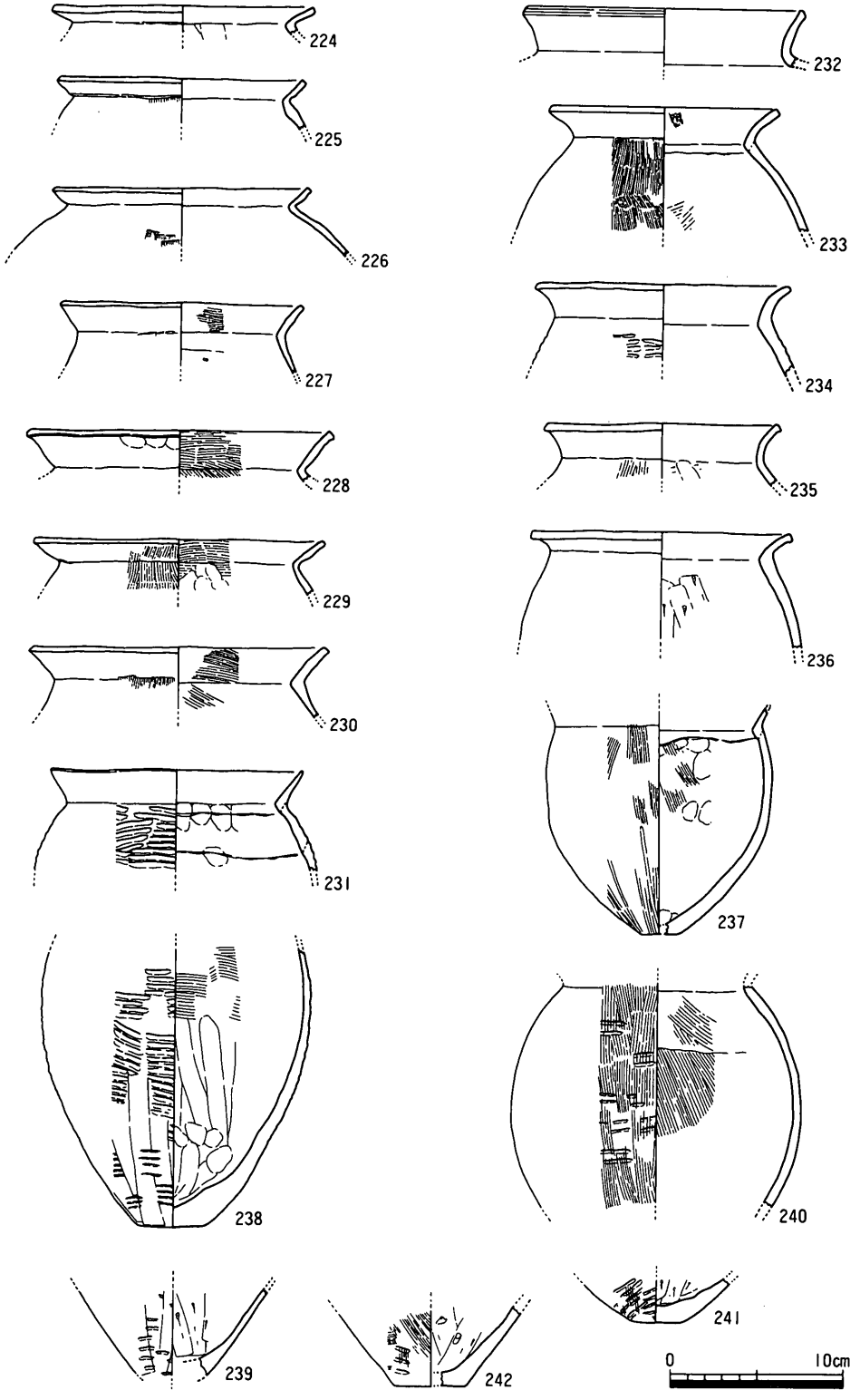
器面調整は体部外面が叩きののち刷毛目を施すもの，刷毛目だけのもの，叩きがしっかり残るものなどがある。体部内面は下方から上方への刷毛目を施すもの，ヘラ削りを施すものなどがある。ヘラ削りは頸部屈曲部まで施されている。

265・266は製塩土器の底部である。脚部外面に顕著な指頭痕がみられる。

267～285は壺である。267～275は頸部が朝顔状に開くもので，口縁端部は下方につまみ出すもの，上方につまみ出すもの，上下に拡張するものなどがある。口縁端部を上下に拡張した外面には半裁竹管文や鋸歯文が施されている。276・277は口縁部が上方に延びる2重口縁壺である。口縁部外面には鋸歯文が施されている。278～280は頸部が直線的に上方に延び，ほぼ水平に外方に延びるものである。281・282は壺の底部である。281は平底を持つが，282は丸底気味である。283～285は広口壺である。底部には焼成後外面より穿孔の痕がみられる。



第26図　ＳＤ11土層断面図



第27図　ＳＤ11出土遺物実測図①

286～301は鉢である。

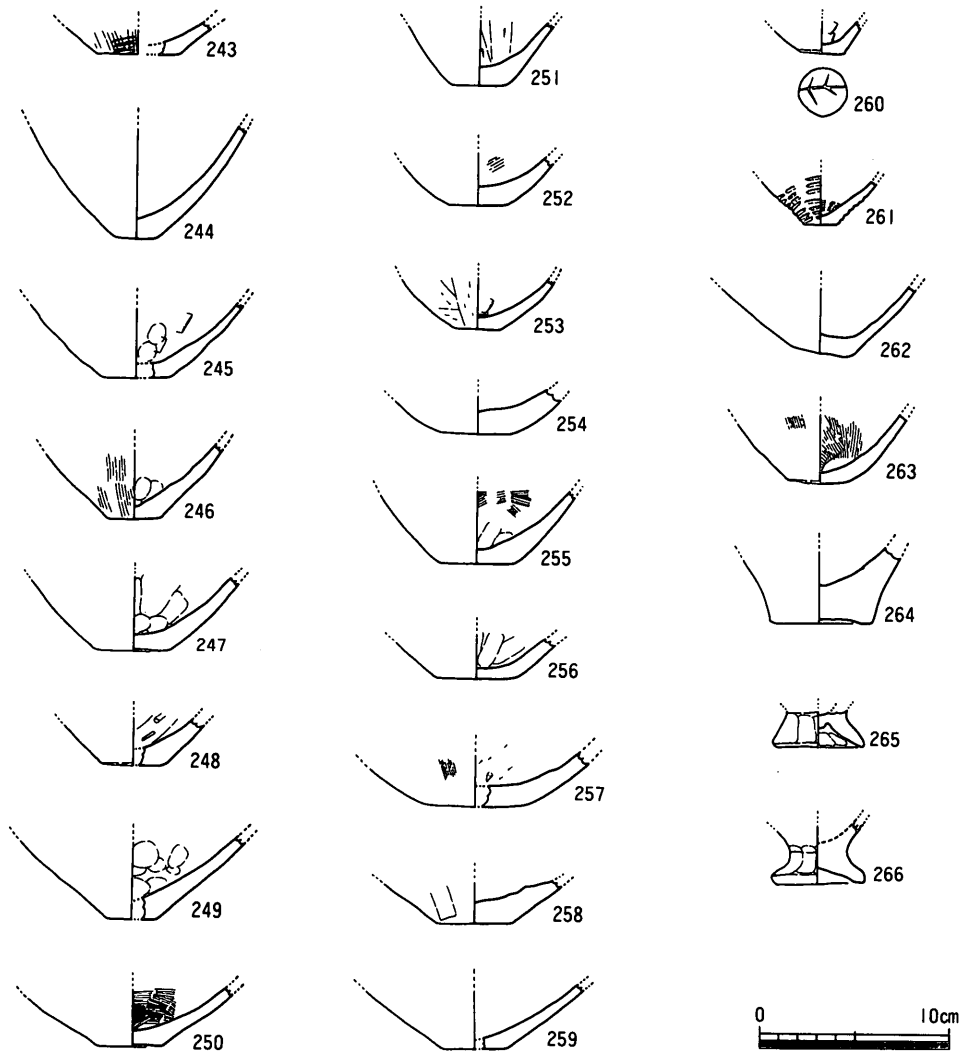
体部は内彎気味に外上方に延びるもので，底部は平底を残すものと尖底気味あるいは丸底気味のものがほぼ同等量あるようである。また，突出気味の平底を残すものもある。301は底部を不定方向のヘラ削りによって丸底化させている。

302～327はＢ類土器である。

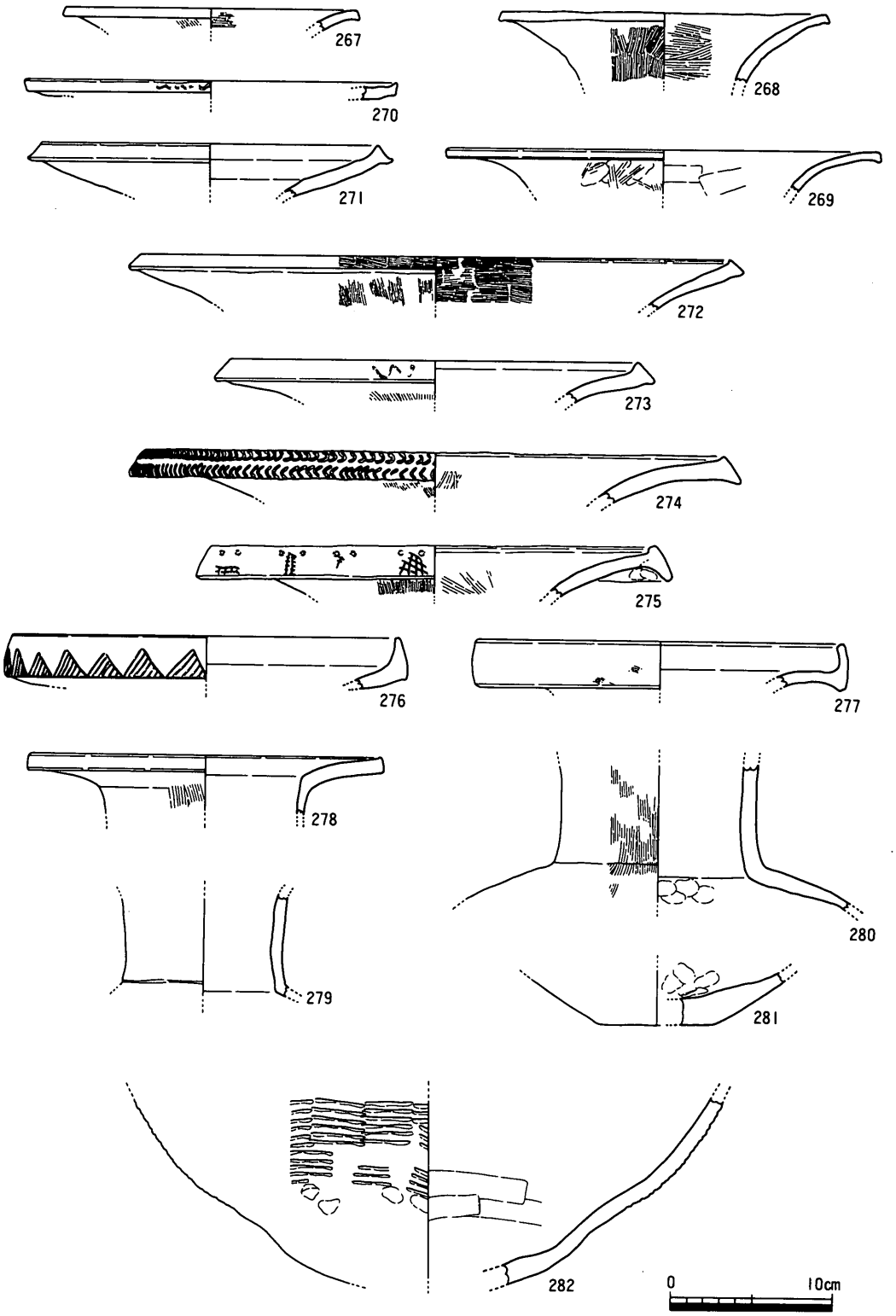
302～309は甕である。302～305はいわゆるＢ類甕にあたるものと思われるが，306～309は角閃石および金雲母を含むものの器形が若干違う。

310は壺の底部である。若干ではあるが平底を残している。

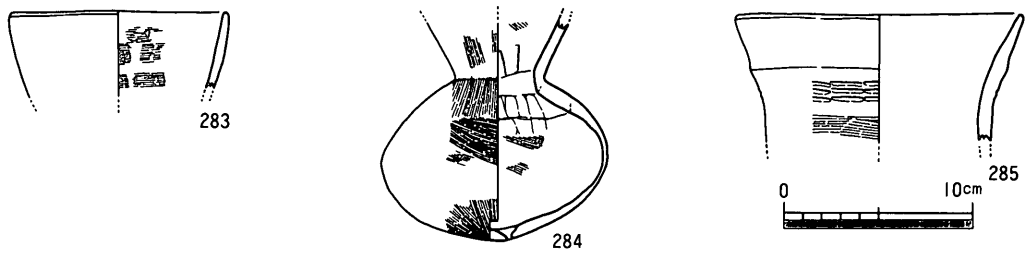
311～313は長頸壺である。体部は算盤玉状を呈し，頸部から内彎しながら口縁部に至るもので



第28図　ＳＤ11出土遺物実測図②



第29図　ＳＤ11出土遺物実測図③



第30図　ＳＤ11出土遺物実測図④

ある。体部内面は下半に指頭痕が顕著にみられ，上半には横方向のヘラ削りがみられる。頸部内面には指頭痕が顕著に認められる。

314･315は小型丸底壺である。314は体部が算盤玉状を呈し，肩部もしっかり残っているが，315は体部が形骸化しており，肩部もほとんど残っていない。体部は前者が直線的であるのに対し，後者は内彎気味である。

316～324は脚付き小型丸底壺である。321･322は胎土に角閃石と金雲母を含まないものである。325･326は鉢である。326は高坏の脚部がないものである。底部外面にはヘラ削りが施され，内面見込み部には４分割ヘラ磨きが施されている。

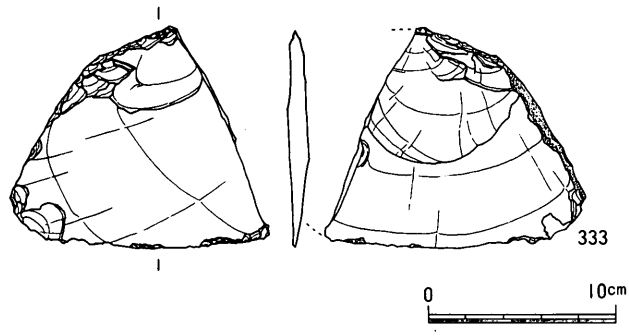
327は高坏である。口縁部内面には凹線状の指なでが３条施されている。

328～333は石製品である。

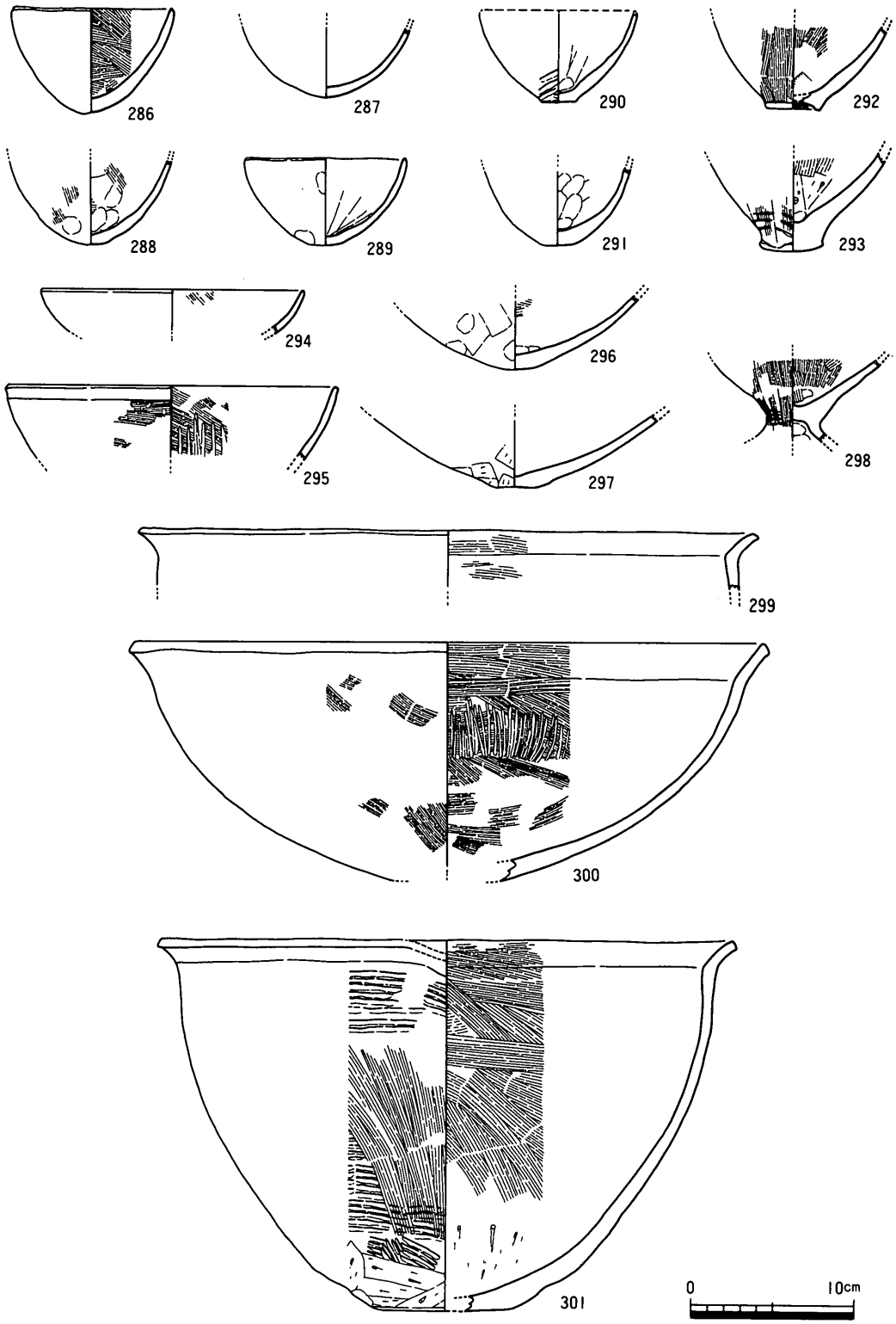
328は石鏃である。縁辺部だけに細かい調整が施されている。

329～331はサヌカイト製の打製石斧である。 329の打製石斧はエッジに若干の敲打痕があり，折れたものを再利用したものと思われる。330は頭部および左側面に磨滅が認められる。331は刃部先端部に擦痕が認められる。

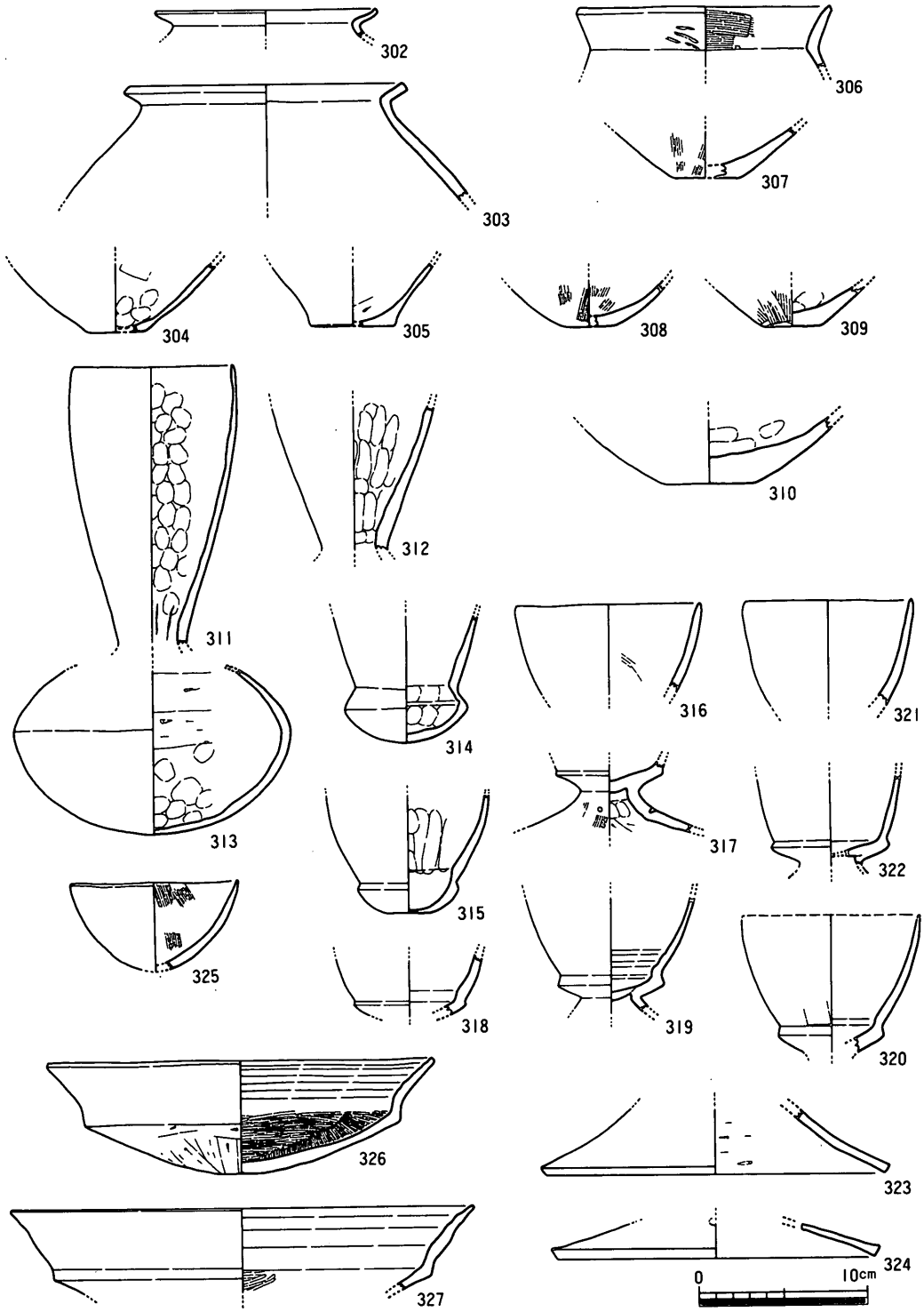
332･333はスクレイパーである。332は安山岩製のラウンドスクレイパーである。全体に風化が著しい。



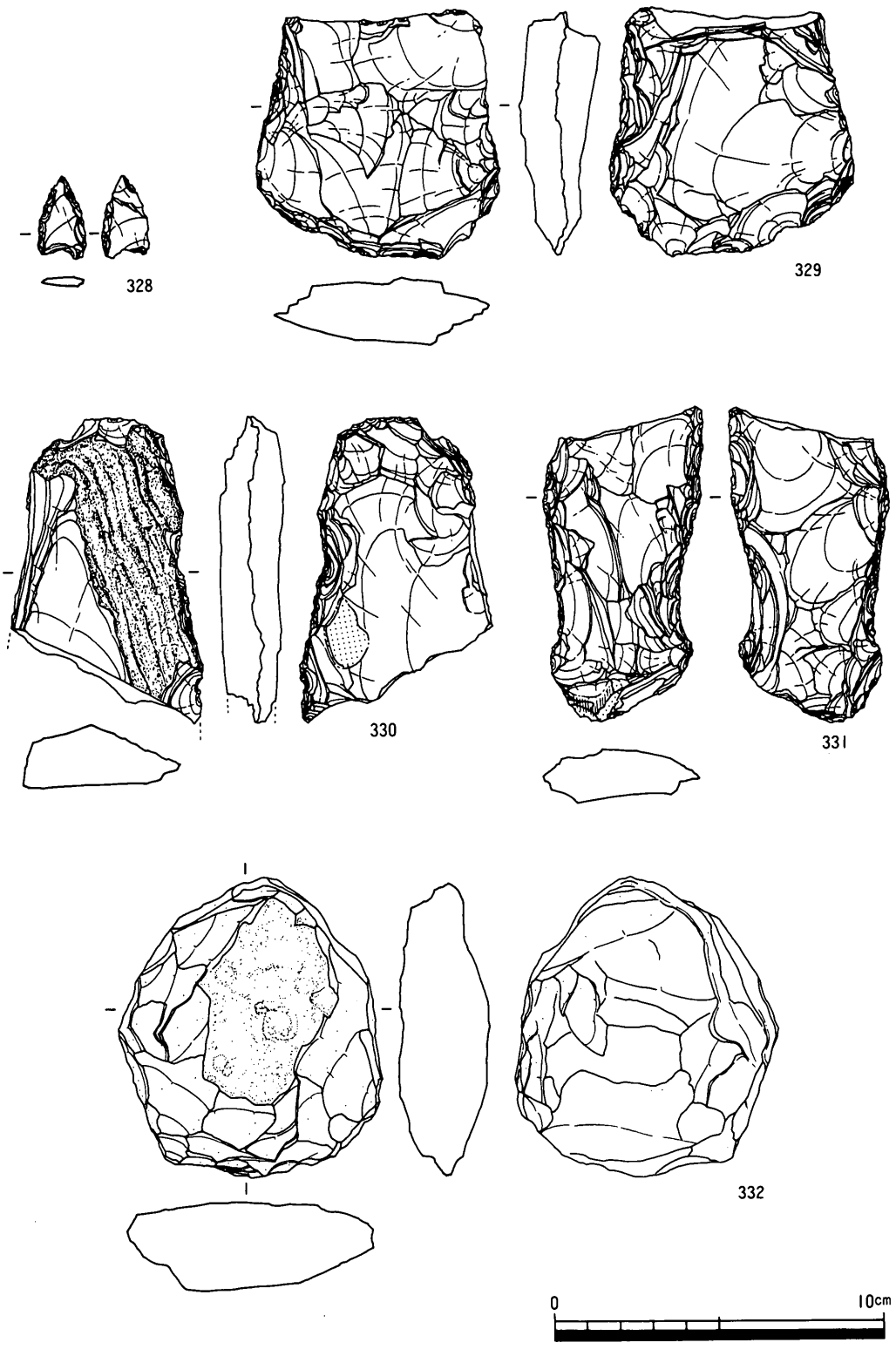
第34図　ＳＤ11出土遺物実測図（石製品）⑧



第31図　ＳＤ11出土遺物実測図⑤



第32図　ＳＤ11出土遺物実測図⑥



第33図　ＳＤ11出土遺物実測図（石製品）⑦

2．古墳時代～奈良時代

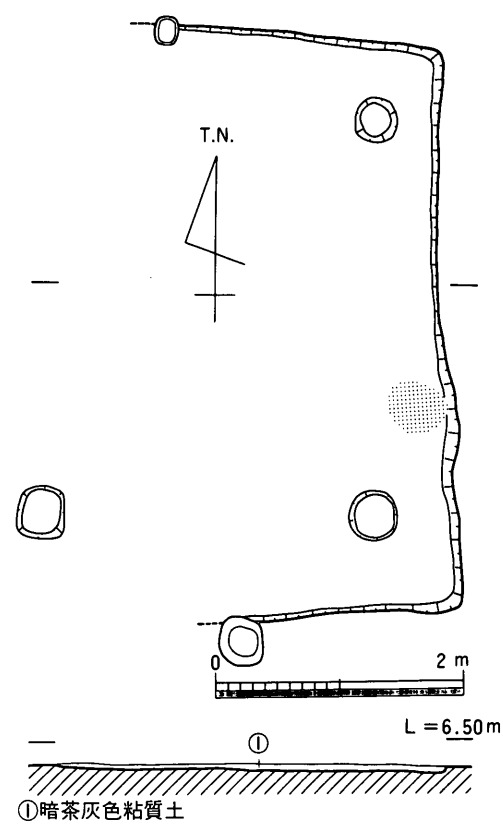
この時期と思われる遺構は竪穴住居 SH01～04と掘立柱建物 SB01・02・04～07・13～15が出土している。これらの遺構からはほとんど遺物が出土しておらず，時期決定は難しいがSH03から若干ではあるが時期決定の可能な遺物が出土しているのでその遺物を基準にした前後関係を最後に述べたい。

SH01（第35図）

SH01は第2調査区中央部でかなり削平を受けて検出された。平面形態は東西(1.96)m，南北4.60mのほぼ方形を呈する竪穴住居である。検出遺構面から床面までは，0.06mを計る。壁溝は確認されなかった。東壁際中央部に焼土の堆積が確認されたがそれが竈であったかどうかは不明である。主軸は約3°西偏しており，ほぼ真北に主軸を持つものである。形態は方形を呈しており，主柱穴は北西の柱穴が確認されていないがおそらく4穴あったものと思われる。

このSH01はSB06を切っており，SB07に切られている。

竪穴住居埋土からはほとんど遺物が出土していないため時期は不明である。



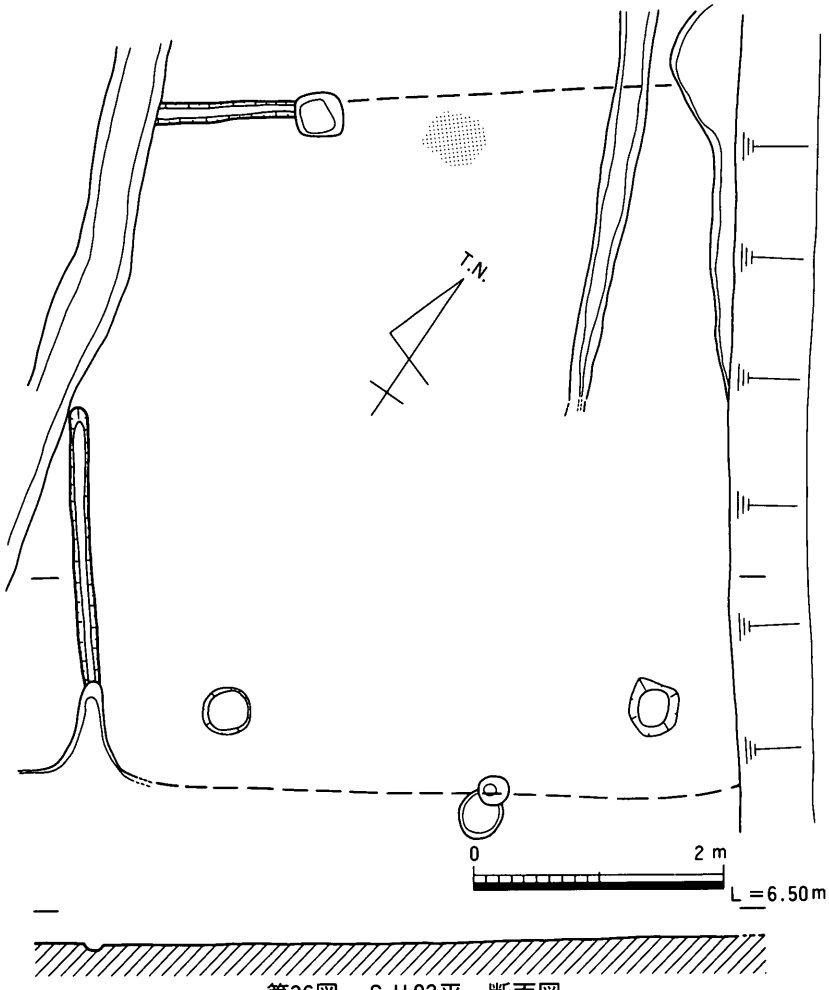
第35図　ＳＨ01平・断面図

SH02（第36図）

SH02は第2調査区東南部でほとんど削平を受けた状態で検出された。壁溝がわずかに残っており，それから推定復元した規模は東西(5.10)m，南北(5.40)mのほぼ方形を呈する竪穴住居と思われる。主柱穴は南半部の2穴が確認された。主軸は，真北より約35°西偏している。北壁際中央部に焼土がわずかに確認されたがそれが竈であったかどうかは不明である。

このSH02はSH04に切られている。

削平のため，竪穴住居から遺物は出土しなかった。



第36図　ＳＨ02平・断面図

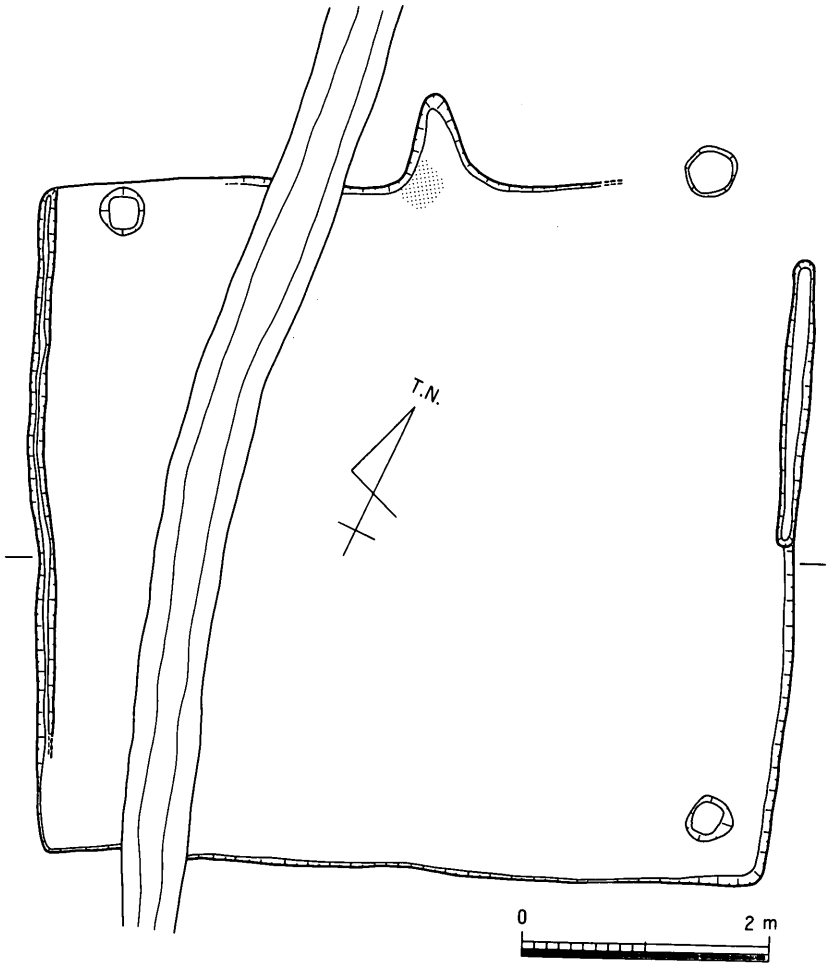
SH03（第37・38図）

SH03は第２調査区南東部でかなり削平を受けた状態で検出された。平面形態は東西5.80m，南北6.00mのほぼ方形を呈しており，北壁中央部に突出した造り付けの竈を持つ竪穴住居である。検出遺構面から床面までは0.04mを計る。焼土は造り付けの竈付近でわずかに確認された。西壁と東壁際にわずかに壁溝が確認された。南西隅の主柱穴は溝によって削平され検出されなかったが，その他の３穴は検出された。主軸は，真北から約23°西偏している。SH03はSH04を切っており，SB15，SD05に切られている。

竪穴住居からはわずかに遺物が出土している（第38図）。

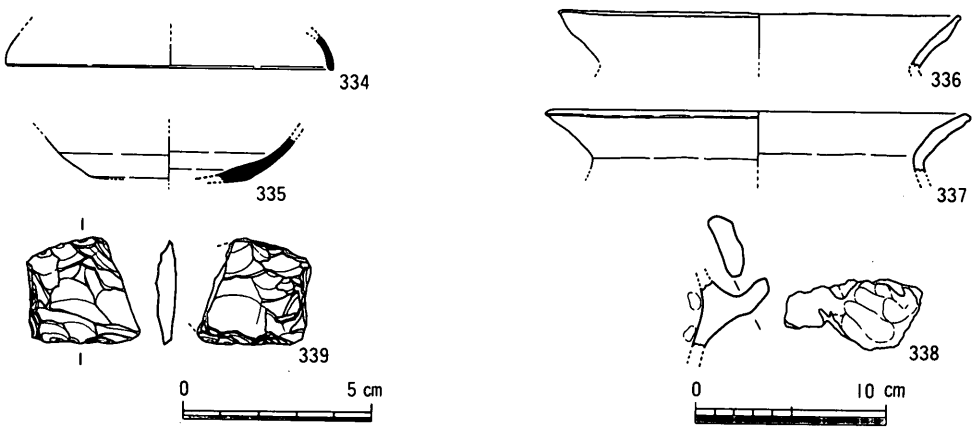
334・335は須恵器である。334は坏蓋で天井部と体部の境に明瞭な稜を持たないものである。335は高坏の坏部である。

336～338は土師器の甕である。頸部が「く」の字に屈曲し，ほぼ直線的に外方に延びるものである。338は把手付の甕であろうか。　時期は６世紀末頃と思われる。



①茶灰黒色粘質土　③暗茶灰色粘質土
②暗黄茶灰色粘質土　④暗黄茶色砂層（しっかりしまっている。砂粒φ2㎜～1㎝まで）

第37図　S H03平・断面図



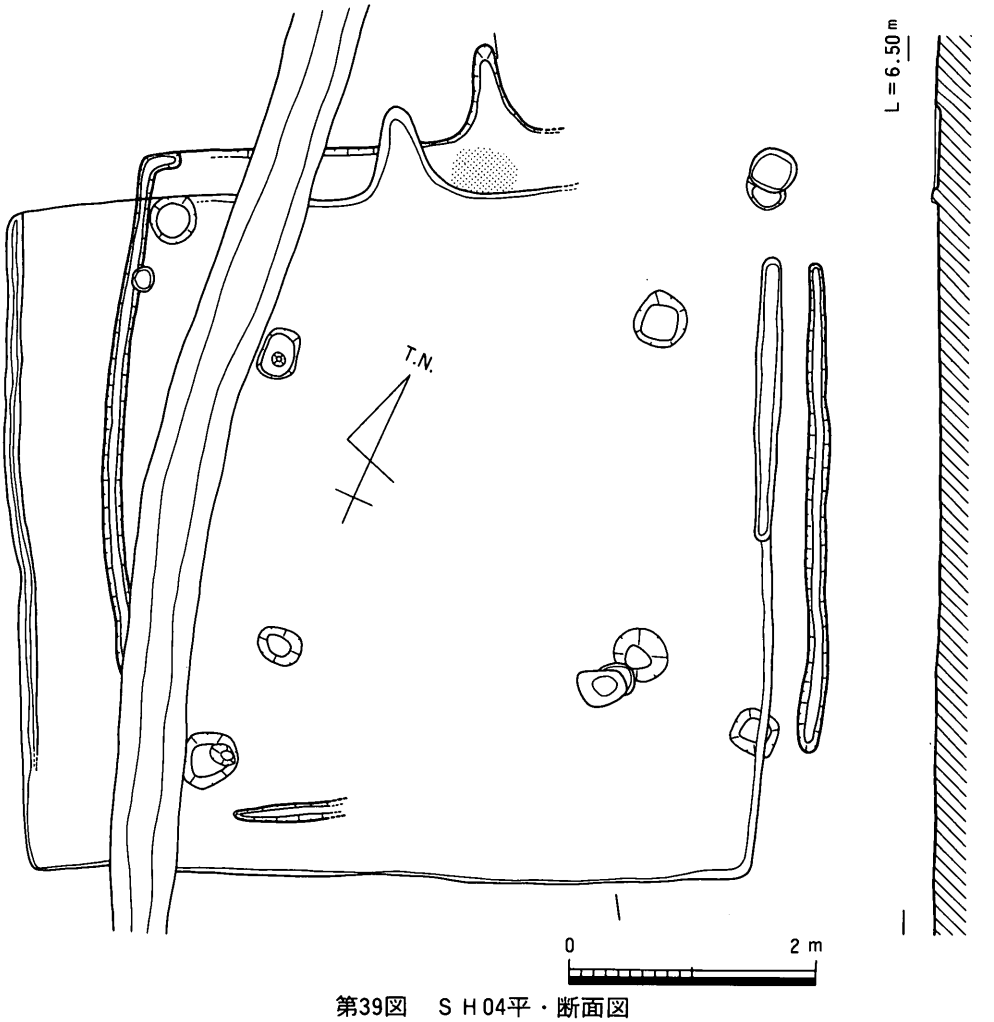
第38図　S H03出土遺物実測図

SH04（第39図）

SH04は第２調査区南東部でSH03とほぼ同じ位置で検出された。平面形態は東西5.70m，南北5.24mのやや横長い方形を呈しており，北壁中央部に突出した造り付けの竈を持つ竪穴住居である。検出遺構面から床面までは0.05mを計る。焼土は造り付けの竈付近でわずかに確認された。壁溝は西壁と東壁際でわずかに確認された。主柱穴は四隅近くに４穴検出されたが，内側でも４穴検出されたので計８穴あったものと思われる。主軸は，真北から約22°西偏している。SH03とはほぼ同形態を呈しており，また同位置にあることから，わずかの時期にSH04からSH03に建て替えがあったものと考えられる。

SH04はSH03，SB14・15，SD05に切られている。

竪穴住居からはわずかに土師器が出土しているだけである。

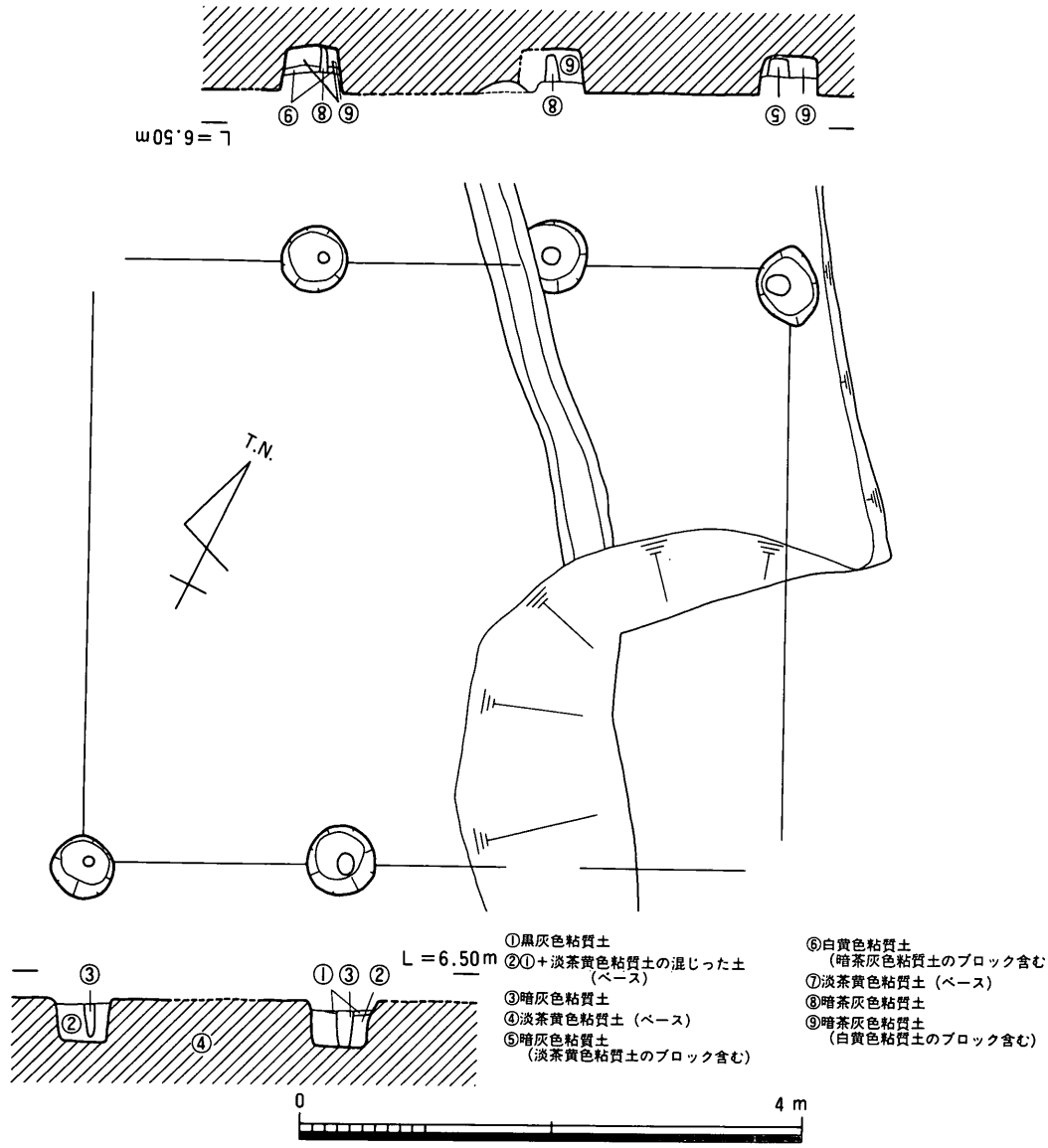


第39図　ＳＨ04平・断面図

SB01（第40・41図）

SB01は第１調査区で検出された梁間(２)間×桁行(３)間（4.76m×5.57m）の掘立柱建物である。柱穴はやや大型の円形を呈するもので平均径0.53mを計り，柱間は梁間で平均長(2.38m)，桁行で平均長(1.86m)を計る。主軸は真北より約26°西偏している。この掘立柱建物を構成する柱穴はSD04を切っており，SD03に切られている。狭い調査区で検出されたため調査区外にまだ延びる可能性があり，全容は不明である。

掘立柱建物を構成する柱穴より遺物が出土している（第41図）。



第40図　ＳＢ01平・断面図

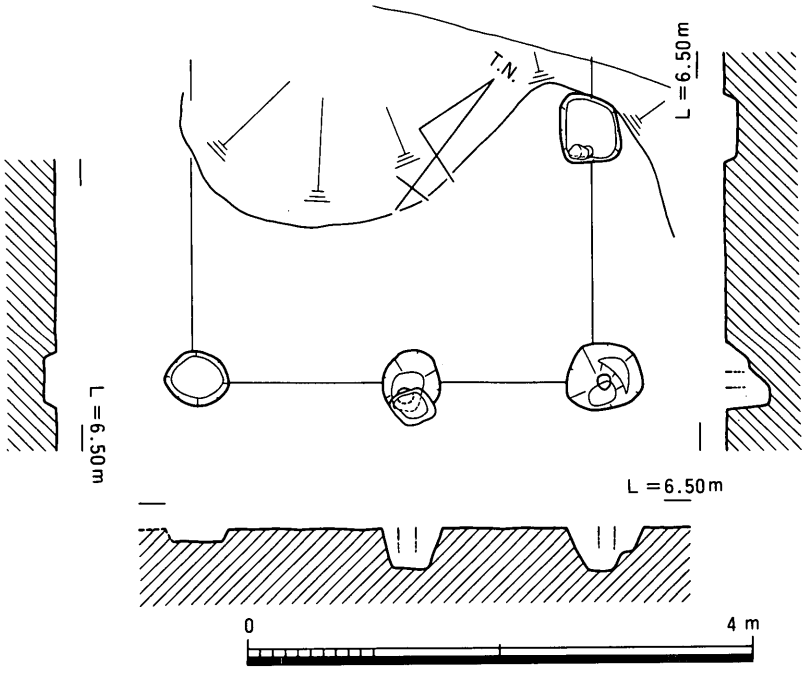
340は須恵器の坏蓋である。内面の返りが大きいもので，受け部先端より下方にでている。

第41図　ＳＢ01出土遺物実測図

この掘立柱建物の時期はSD04が弥生時代後期後半で，SD03が７世紀前半ということから，その間の時期に比定できるということが判る。また，柱穴より７世紀前半の須恵器坏蓋が出土していることから，SD03より古い７世紀前後のものと考えられる。

SB02（第42図）

SB02は第２調査区北東隅で検出された梁間２間×桁行(２)間（3.18ｍ×2.28m）の掘立柱建物である。柱穴はやや大型の円形を呈するもので平均径0.52ｍを計り，柱間は梁間で平均長1.59m，桁行で(1.98m)を計る。主軸は真北より約37°西偏している。北半分は調査区外に延びており，全容は不明である。



第42図　ＳＢ02平・断面図

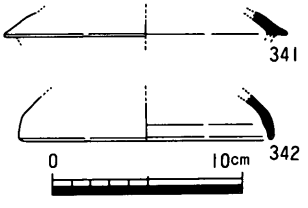
SB04（第43・44図）

SB04は第２調査区北西隅で検出された梁間(１)間×桁行(３)間（1.48m×5.84m）の掘立柱建物である。柱穴はやや大型の円形を呈するもので平均幅0.44ｍを計り，柱間は梁間で1.48m，桁行で平均長(1.95)ｍを計る。主軸は真北より約23°西偏している。西半分が調査区外に延びており，全容は不明である。

柱穴より遺物が出土している。

341・342は須恵器の坏蓋である。341は内面に返りが付くものである。342は内面に返りがなく，わずかな段が付くものである。

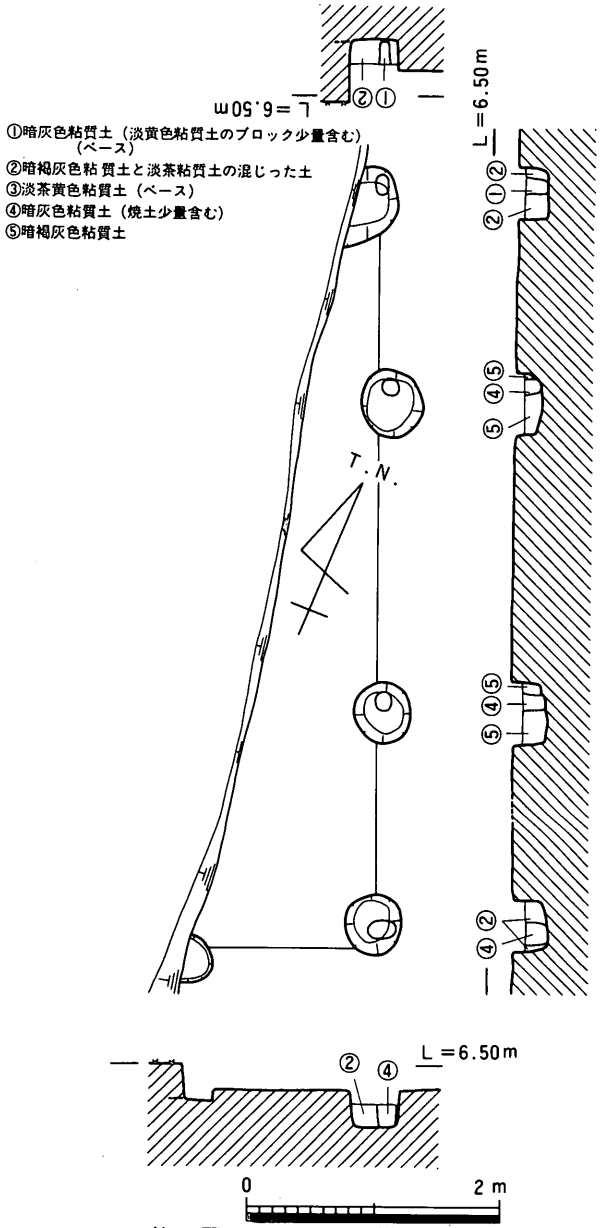
時期は柱穴出土遺物より，７世紀前後の時期と考えられる。



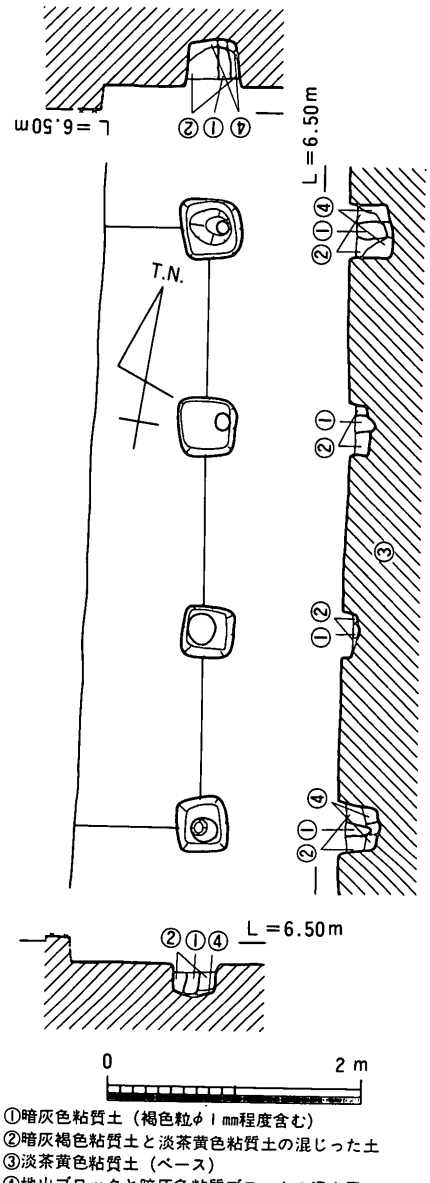
第43図　ＳＢ04出土遺物実測図

SB05（第45図）

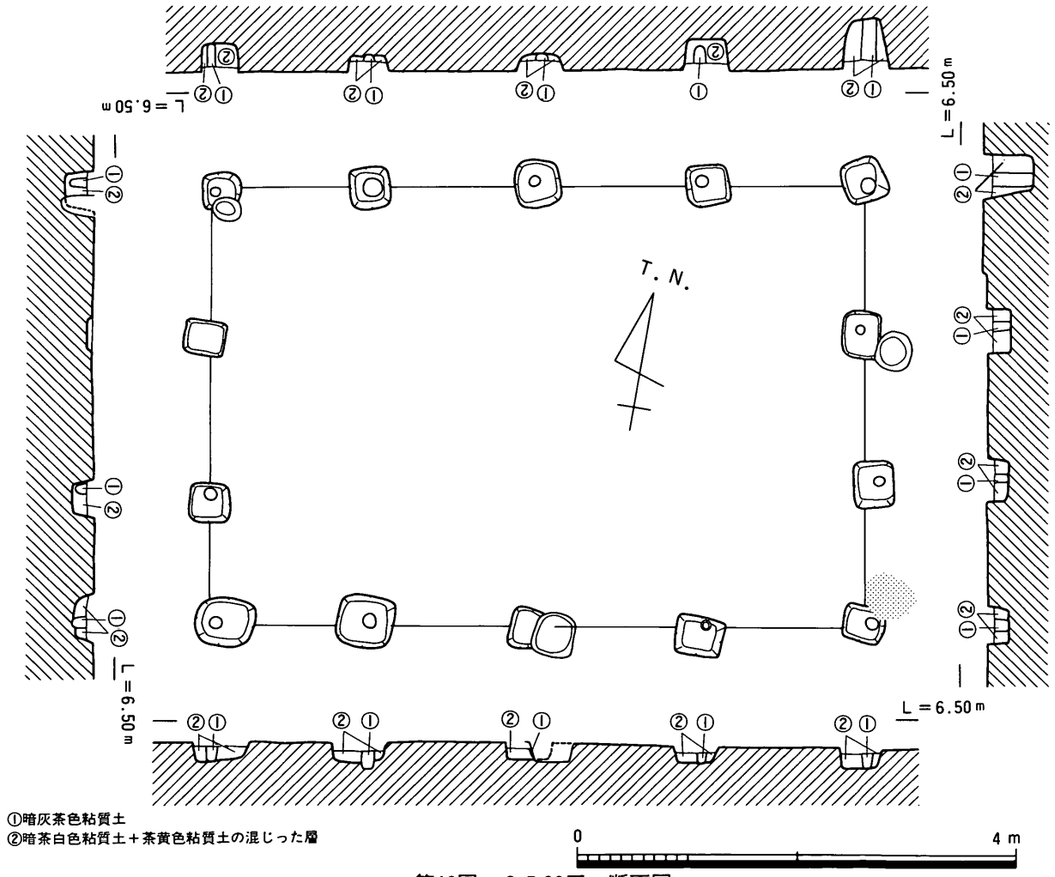
SB05は第２調査区中央部西半で検出された梁間３間×桁行（１）間（4.68m×1.00m）の掘立柱建物である。柱穴はやや大型の隅丸方形を呈するもので平均幅0.43mを計り，柱間は梁間で平均長1.56m，桁行で(0.96m)を計る。主軸は真北より約９°西偏している。西半分が調査区外に延びており，全容は不明である。



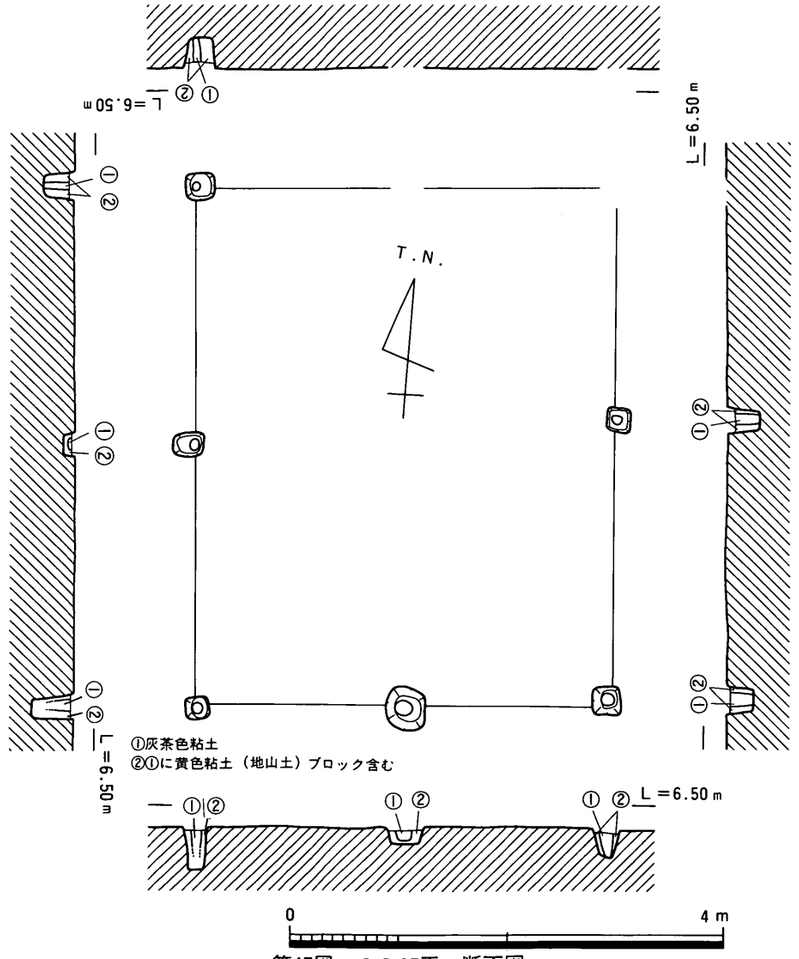
第44図　ＳＢ04平・断面図



第45図　ＳＢ05平・断面図



第46図　ＳＢ06平・断面図



第47図　ＳＢ07平・断面図

SB06（第46図）

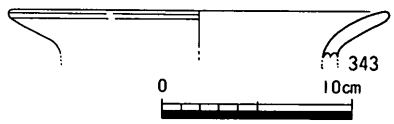
SB06は第2調査区のほぼ中央部で検出された梁間3間×桁行4間（4.04m×5.94m）の掘立柱建物である。柱穴はやや大型の隅丸方形を呈するもので平均幅0.41mを計り，柱間は梁間で平均長1.35m，桁行で平均長1.49mを計る。主軸は真北より約9°西偏している。掘立柱建物を構成する柱穴はSH01の主柱穴によって切られているので，時期はSH01より古いことが判る。

SB07（第47図）

SB07は第2調査区のほぼ中央部で検出された梁間2間×桁行2間（3.84m×4.80m）の掘立柱建物である。柱穴は小型の隅丸方形を呈するもので平均幅0.30mを計り，柱間は梁間で平均長1.92m，桁行で平均長2.40mを計る。主軸は真北より約4°西偏している。

SB13（第48・49図）

SB13は第2調査区南西部で検出された梁間2間×桁行3間（3.86m×5.08m）の掘立柱建物である。柱穴はやや大型の隅丸方形を呈するもので平均幅0.35mを計り，柱間は梁間で平均長1.93m，桁行で平均長1.69mを計る。この掘立柱建物は桁行に柱間長が違うという特徴がある。主軸は真北より約1°西偏している。柱穴には柱痕が残っているものがある。削平により残りが悪い。



第48図　SB13出土遺物実測図

柱穴埋土より土師器の甕が出土している（第48図）。

SB14（第50図）

SB14は第2調査区南東部で検出された梁間2間×桁行3間（3.50m×5.28m）の掘立柱建物である。柱穴はやや大型の隅丸方形を呈するもので平均幅0.29mを計り，柱間は梁間で平均長1.75m，桁行で平均長1.76mを計る。この掘立柱建物には棟持ち柱が認められる。主軸は真北より約3°西偏している。

SB15（第51図）

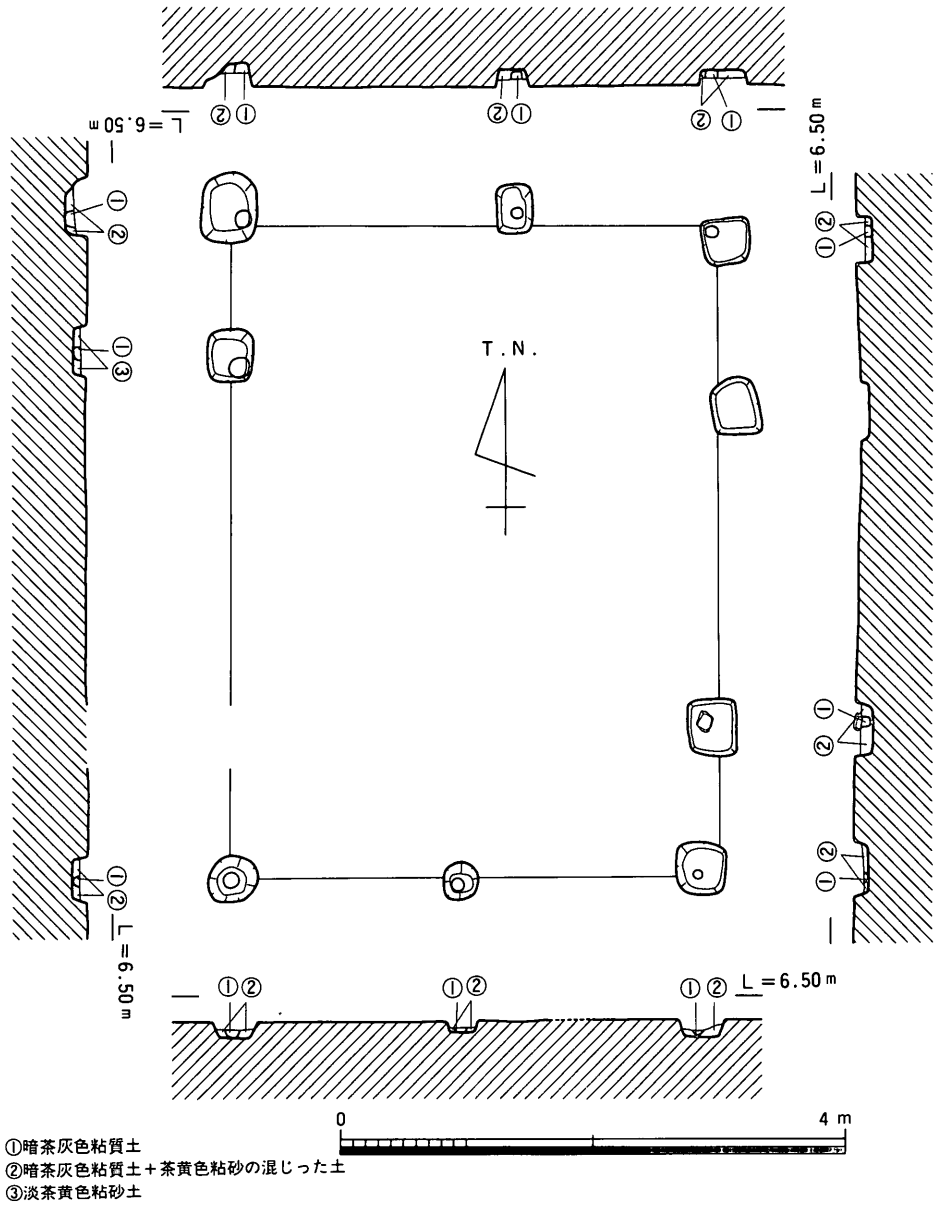
SB15は第2調査区南東部で検出された梁間1間×桁行3間（2.46m×5.82m）の掘立柱建物である。柱穴はやや大型の隅丸方形を呈するもので平均幅0.36mを計り，柱間は梁間で2.46m，桁行で平均長1.94mを計る。主軸は真北より約13°西偏している。

SK03（第52・53図）

SK03は第2調査区南西隅で，ちょうど竪穴住居SH06と同位置で検出された土坑である。

平面形態は隅丸方形状を呈しており，上端幅4.06m，深さ0.30mを計る。この土坑はレンズ状に土砂が堆積していることから，おそらく竪穴住居が廃絶して中央が窪んだ状態に埋まった後，この土坑が完全に埋まったものと思われる。

344～347は須恵器である。344～346は坏蓋で，天井部と体部の境に稜を持たないものである。口縁端部は丸くおさめ，内面にはやわらかい段を持つものもある。347は平瓶か直口壺の口縁で

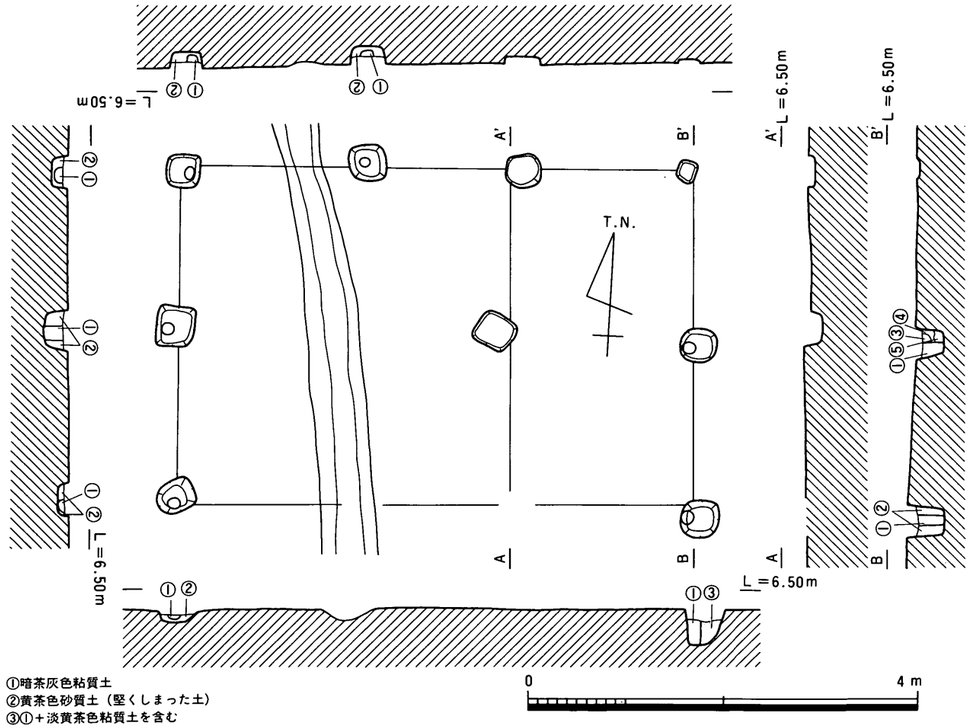


第49図　ＳＢ13平・断面図

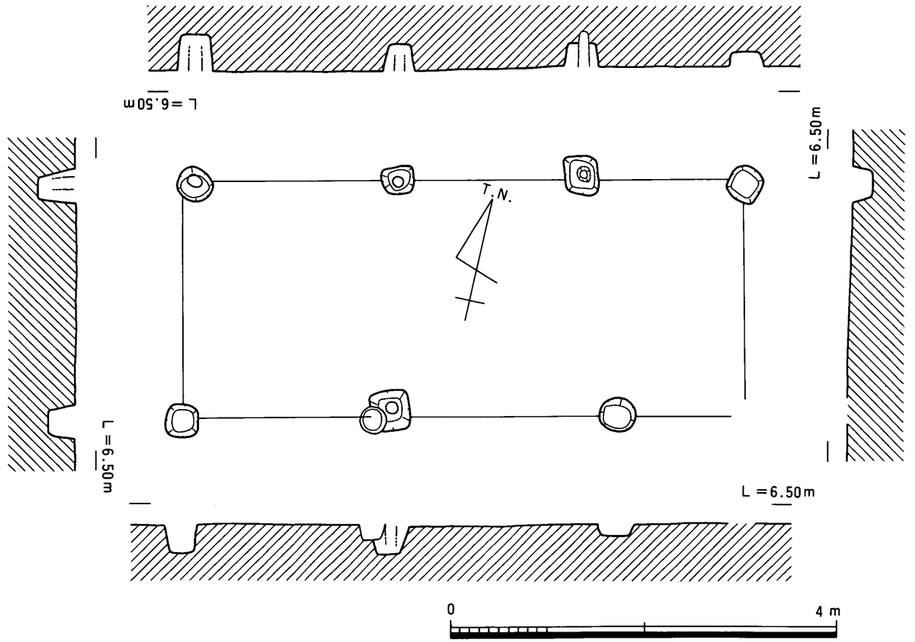
あろうか。

348は土師器の甕である。頸部が「く」の字に外反するもので，口縁部内外面に刷毛目を施している。

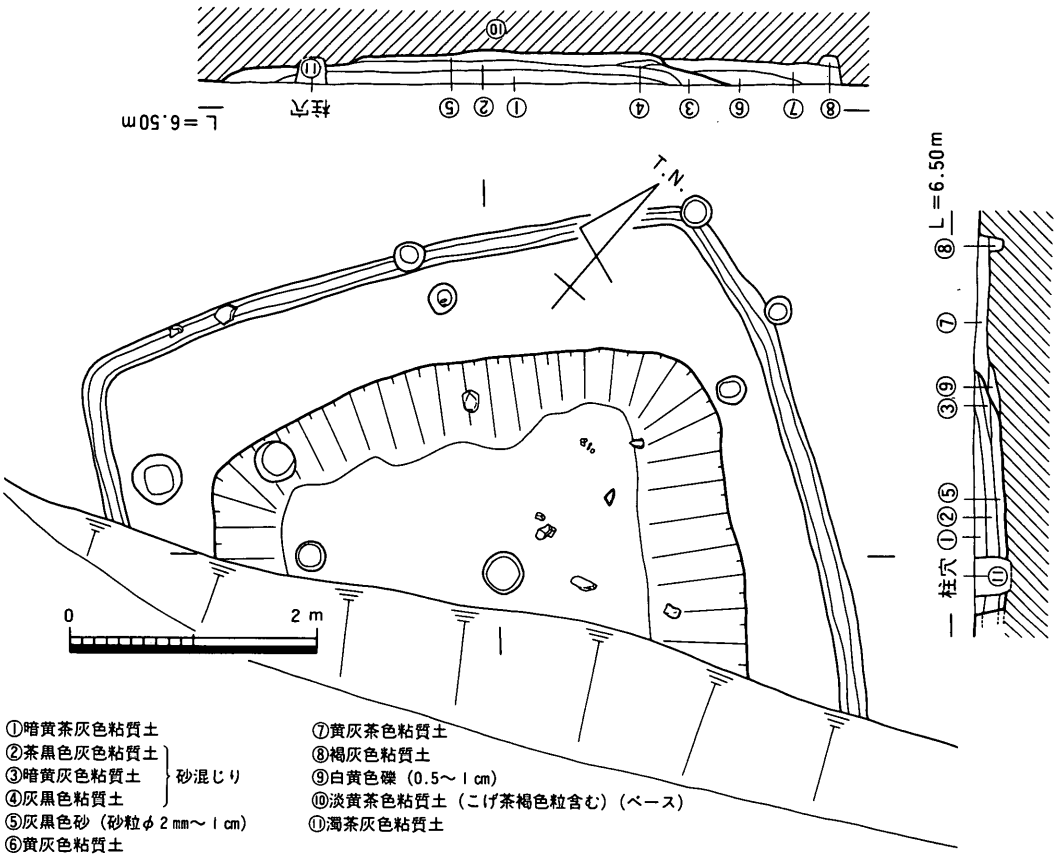
時期は６世紀頃末頃のものと思われる。この出土遺物の時期より，この土坑の埋没年代はほぼ６世紀末頃と考えられる。



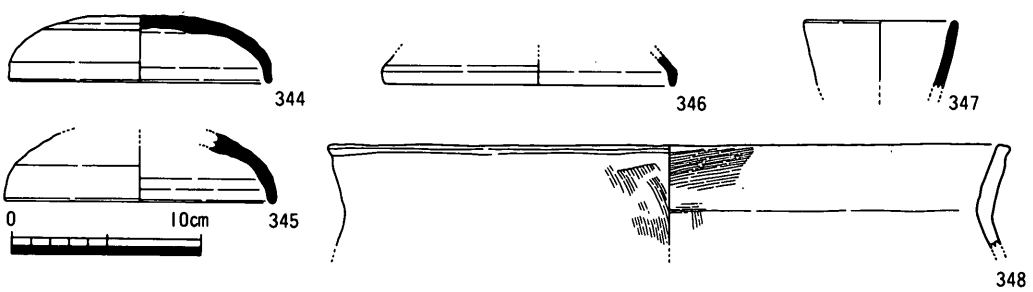
第50図　ＳＢ14平・断面図



第51図　ＳＢ15平・断面図



第52図　ＳＫ03平・断面図



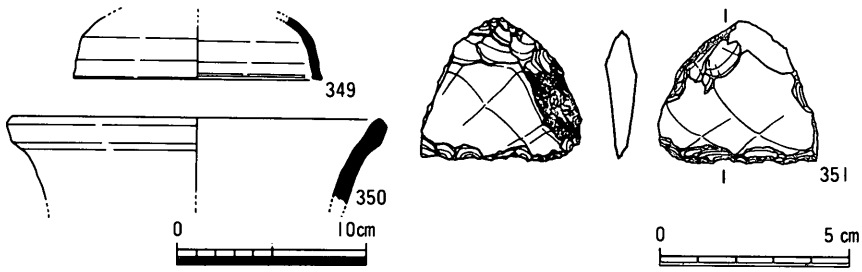
第53図　ＳＫ03出土遺物実測図

SD03・06（第54図）

SD03は第１調査区で検出された。規模は上端幅0.36m，深さ0.09mを計る。流路をほぼ南北にとる。この溝は第２調査区で検出されたSD06と同一の溝の可能性が考えられる。

溝埋土より須恵器などが出土している（第54図）。

349は坏蓋である。口縁部がやや左右に小さくつまみ出すもののそのまま終わらせているので短頸壺の蓋の可能性が考えられる。 350は壺である。頸部が外反し，口縁部を外面にやや肥厚させている。　溝の時期は７世紀頃の溝であろうか。



第54図　ＳＤ03・06出土遺物実測図

SD05（第55・56図）

SD05は第２調査区東半で検出された溝である。流路をほぼ南北にとるこの溝は北東部で東方向に折れ曲がる。規模は上端幅0.53m，深さ0.12mを計る。

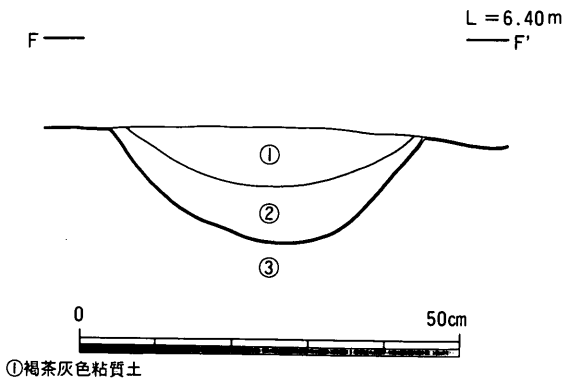
この溝は第２調査区南半でSH02～04を切っている。

溝埋土より土師器が出土している(第56図)。

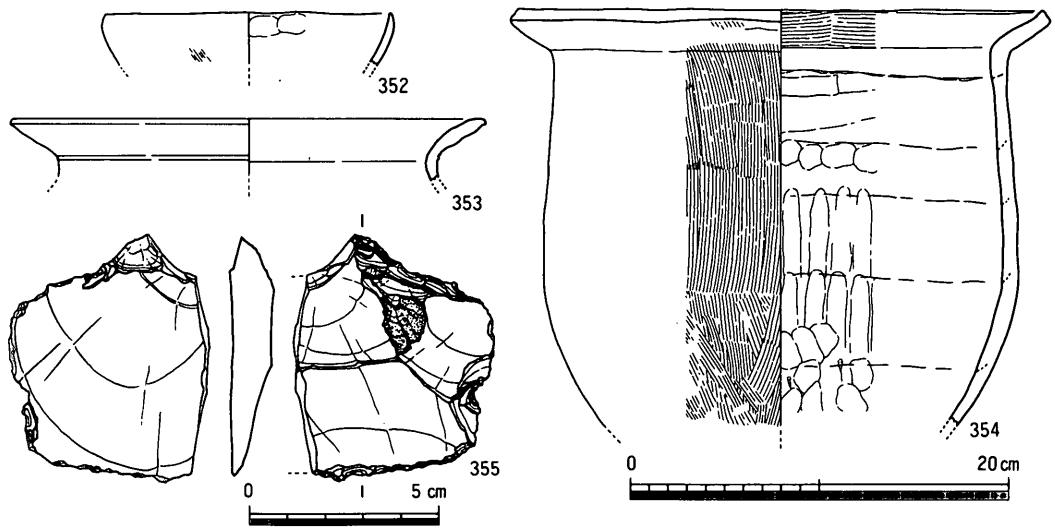
352は弥生土器の鉢である。

353・354は土師器の甕である。 353は頸部が「く」の字に屈曲し，口縁部をつまみ出しながら終わらせるものである。 354は胴部がやや長い甕である。体部外面には縦方向の刷毛目が，内面には指なでが顕著に施されている。

時期は７・８世紀頃のものか。



第55図　ＳＤ05土層図



第56図　ＳＤ05出土遺物実測図

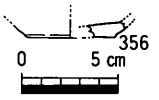
3．平安時代

平安時代の遺構は第2調査区で検出されている。遺構としては掘立柱建物を主として土坑2・溝5・柵列4が確認されている。特に掘立柱建物SB16・17は柵列SA03・04に区画されている。この遺構群の検出状況から，集落の東端が検出されたものと思われる。また，この集落はちょうどSD01・09・10に囲まれており，東西方向に流路を持つSD01とSD10の距離は約54.5mと一坪(106～109m)の約半分であることから，この当時の一集落の範囲を復元する良好な資料となるものである。

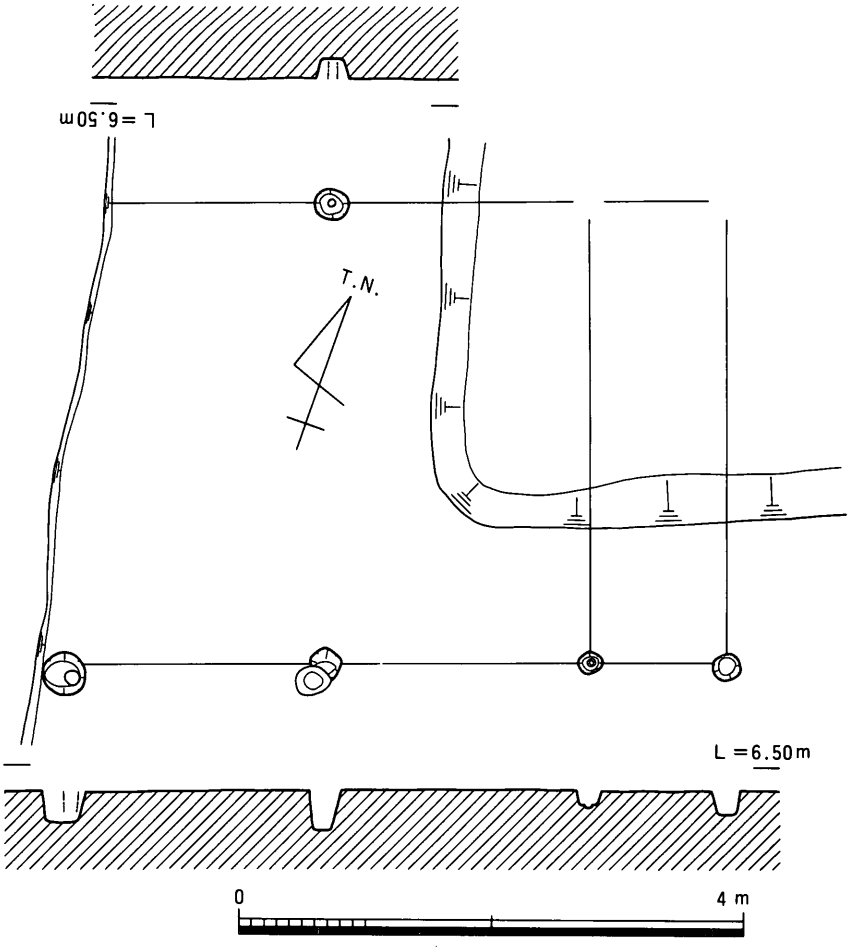
SB03（第57・58図）

SB03は第2調査区北西隅で検出された梁間(1)間×桁行(2)間（3.62m×4.24m）で東側に庇を持つ掘立柱建物である。柱穴は小型の円形を呈するもので平均径0.25mを計り，柱間は，梁間は計測できず，桁行で平均長(1.04m)を計る。主軸は真北より約20°西偏している。北西隅が撹乱され，西側が調査区外に延びているために全容は不明である。

柱穴より土師器の小皿が出土している。



第57図　ＳＢ03出土遺物実測図



第58図　ＳＢ03平・断面図

SB08（第61図）

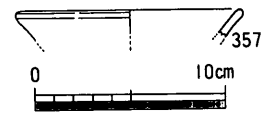
SB08の第２調査区ほぼ中央部で検出された梁間２間×桁行３間（3.86m×6.28m）で北側に庇を持つ掘立柱建物である。柱穴は小型の円形を呈するもので平均径0.22mを計り，柱間は梁間で平均長1.93m，桁行で平均長2.09mを計る。主軸は真北より約22°西偏している。西半分が調査区外に延びており，全容は不明である。

SB09（第62図）

SB09は第２調査区中央部西半で検出された梁間（２）間×桁行（１）間（4.20m×1.46m）の掘立柱建物である。柱穴は小型の円形を呈するもので平均径0.26mを計り，柱間は梁間で平均長(2.10m)，桁行で(1.46m)を計る。主軸は真北より約24°西偏している。西半分が調査区外に延びており，全容は不明である。

SB10（第59・63図）

SB10は第２調査区中央部西半で検出された梁間（２）間×桁行（１）間（3.90m×1.78m）の掘立柱建物である。柱穴は小型の円形を呈するもので平均径0.22mを計り，柱間は梁間で平均長(1.95m)，桁行で(1.78m)を計る。主軸は真北より約23°西偏している。西半分が調査区外に延びており，全容は不明である。

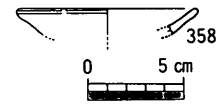


第59図　ＳＢ10出土遺物実測図

柱穴埋土より土師器の坏が出土している（第59図）。

SB11（第60・64図）

SB11は第２調査区ほぼ中央部で検出された梁間１間×桁行３間（3.00m×4.64m）の掘立柱建物である。柱穴は小型の円形を呈するもので平均径0.25mを計り，柱間は梁間で3.00m，桁行で平均長1.55mを計る。主軸は真北より約38°東偏している。



第60図　ＳＢ11出土遺物実測図

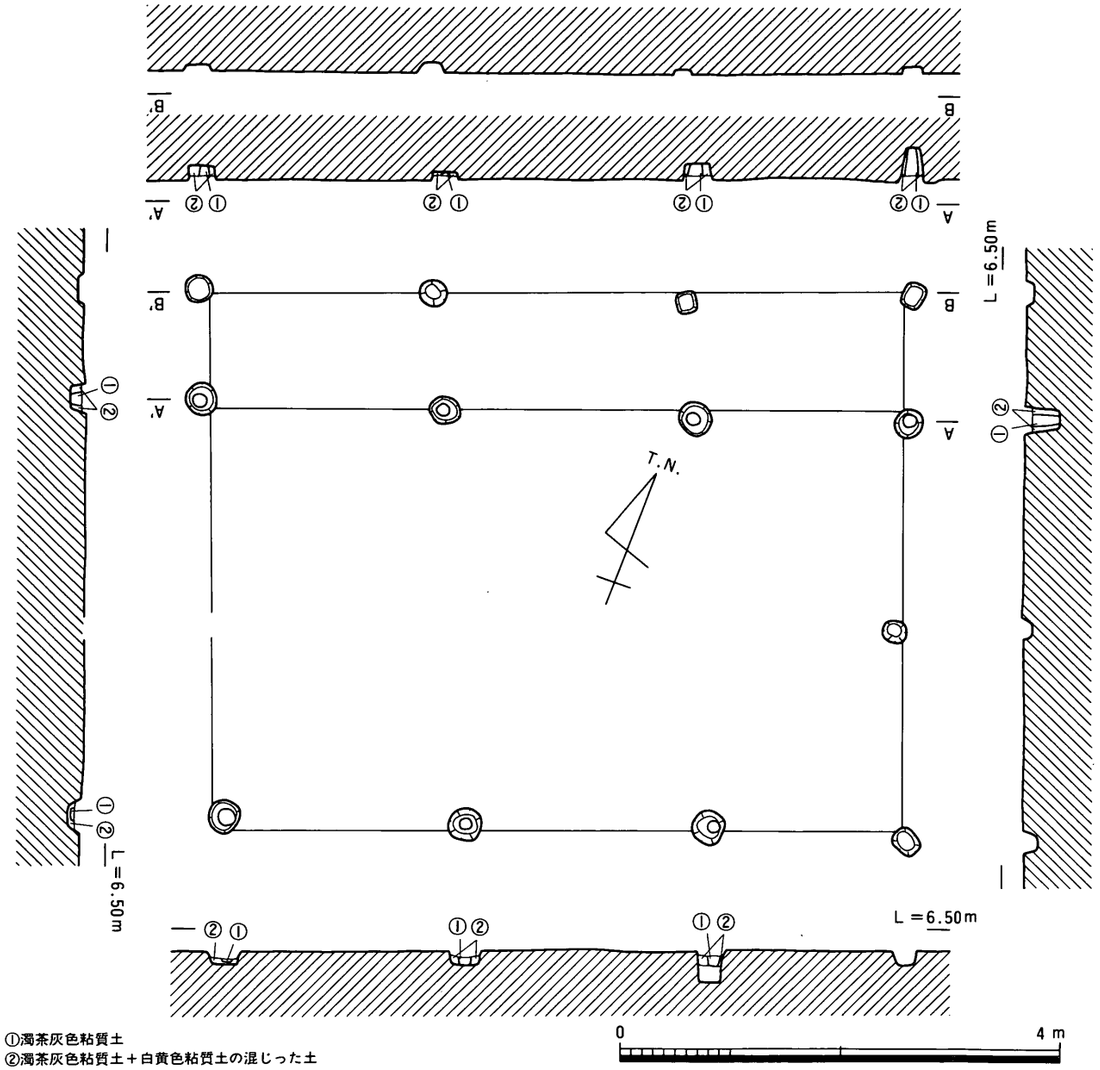
柱穴埋土より土師器の小皿が出土している（第60図）。

SB12（第65図）

SB12は第２調査区南西部で検出された梁間１間×桁行３間（3.38m×5.68m）の掘立柱建物である。柱穴は小型の円形を呈するもので平均径0.30mを計り，柱間は梁間で3.38m，桁行で平均長1.89mを計る。主軸は真北より約41°東偏している。

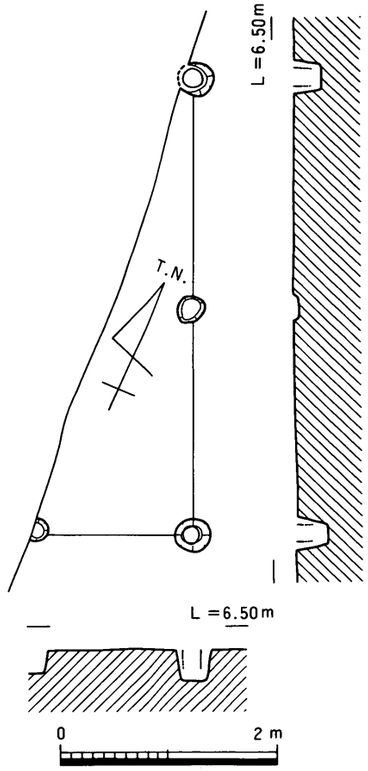
SB16（第66図）

SB16は第２調査区南西部で検出された梁間（１）間×桁行（２）間（3.46m×4.54m）の掘立柱建物である。柱穴は小型の円形を呈するもので平均径0.24mを計り，柱間は，梁間は計測できず，桁行は平均長(2.17m)を計る。主軸は真北より約16°西偏している。南半分が調査区外に延びており，全容は不明である。

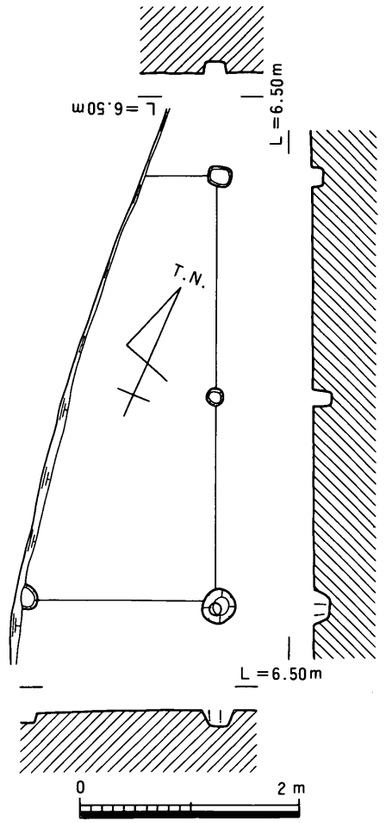


①濁茶灰色粘質土
②濁茶灰色粘質土＋白黄色粘質土の混じった土

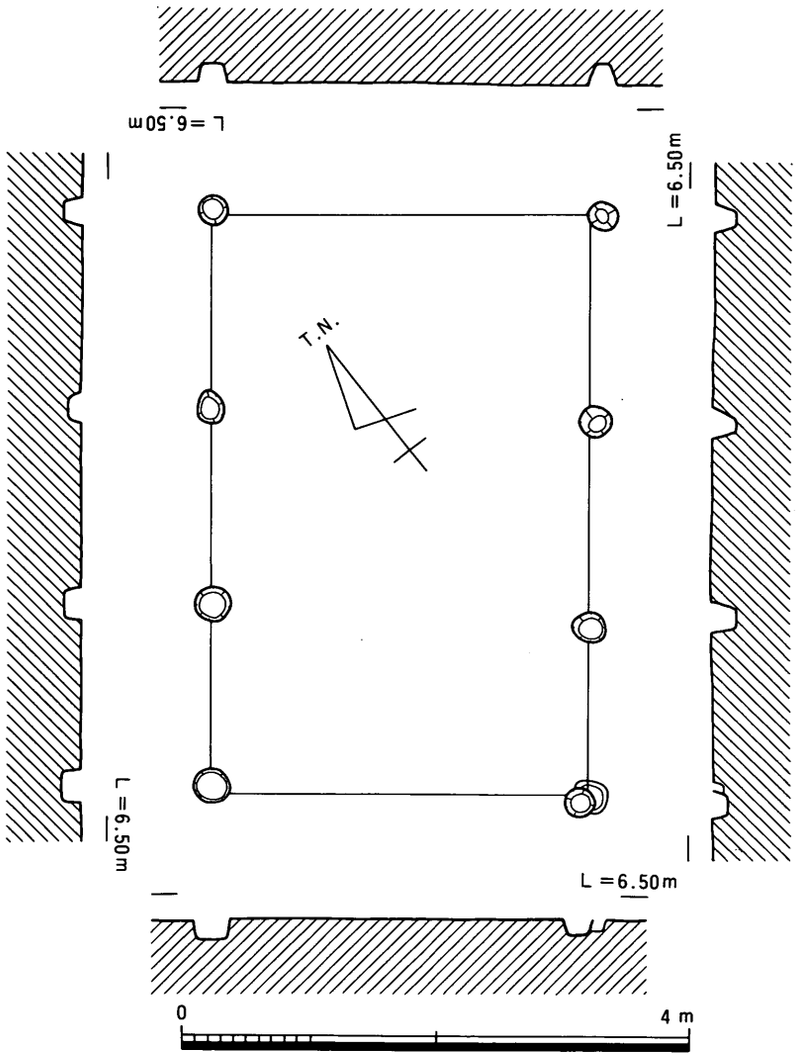
第61図　ＳＢ08平・断面図



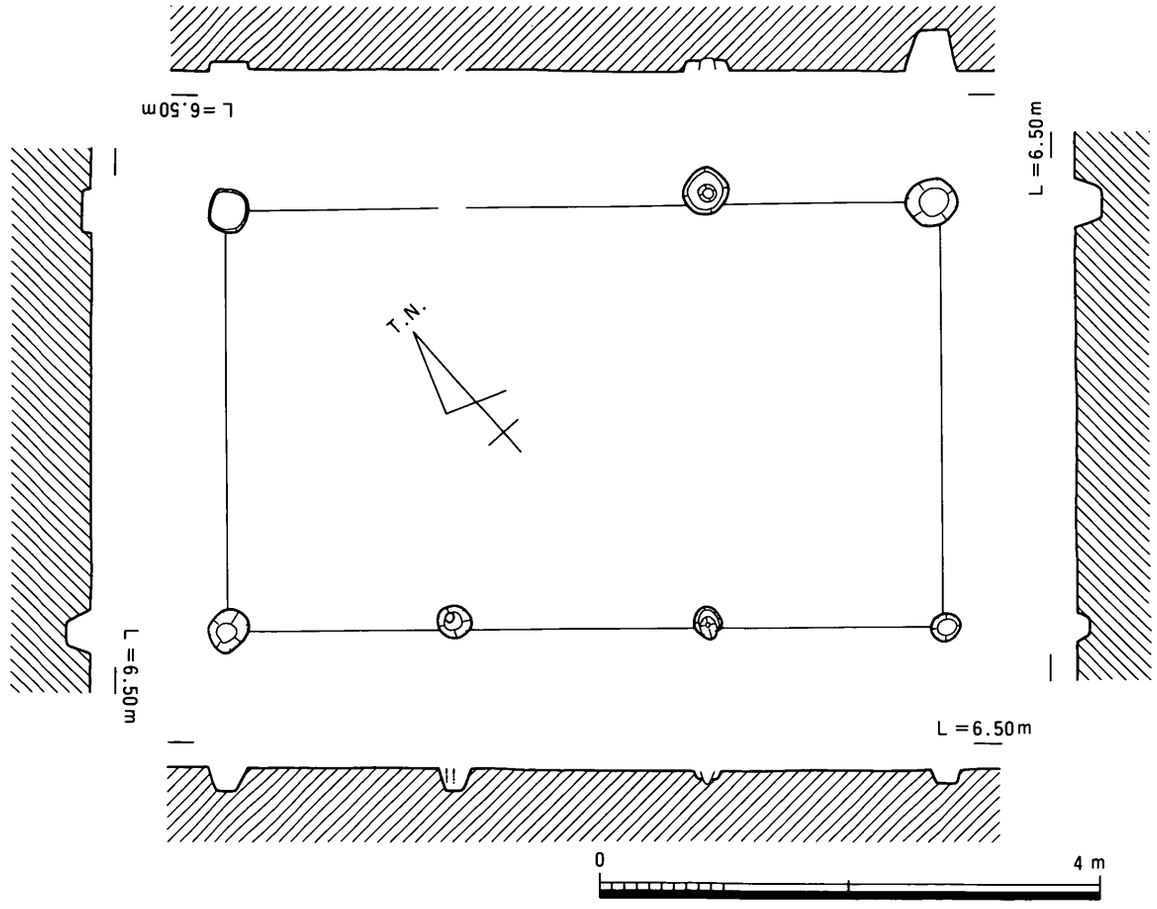
第62図　ＳＢ09平・断面図



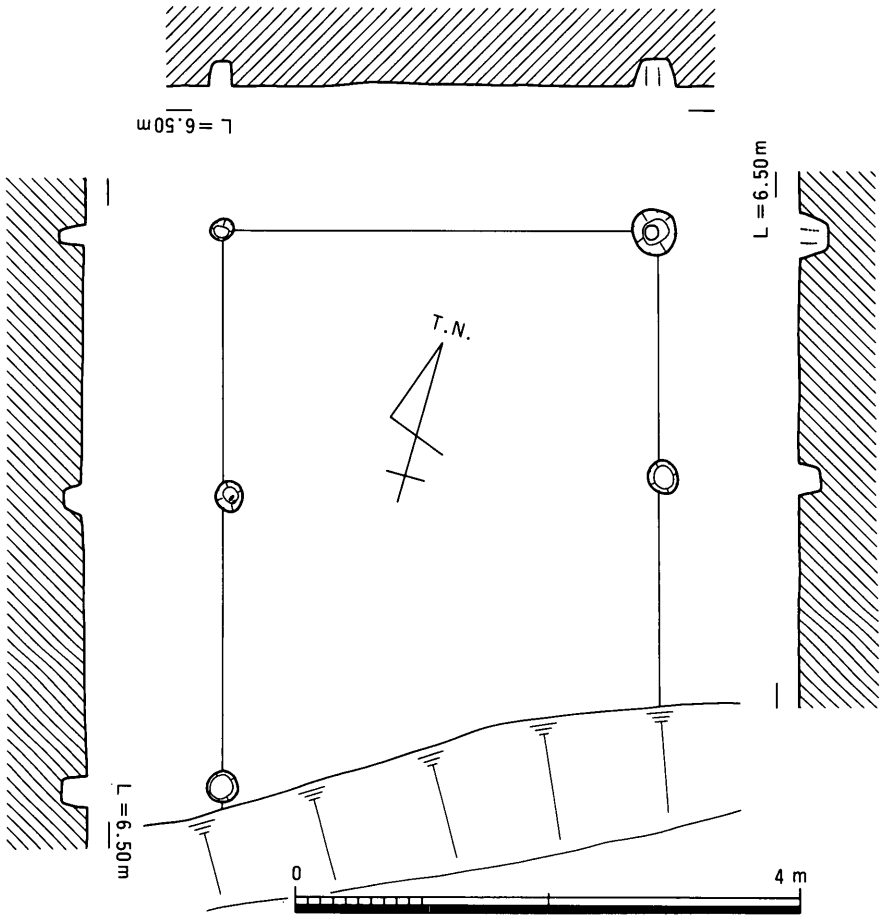
第63図　ＳＢ10平・断面図



第64図　ＳＢ11平・断面図



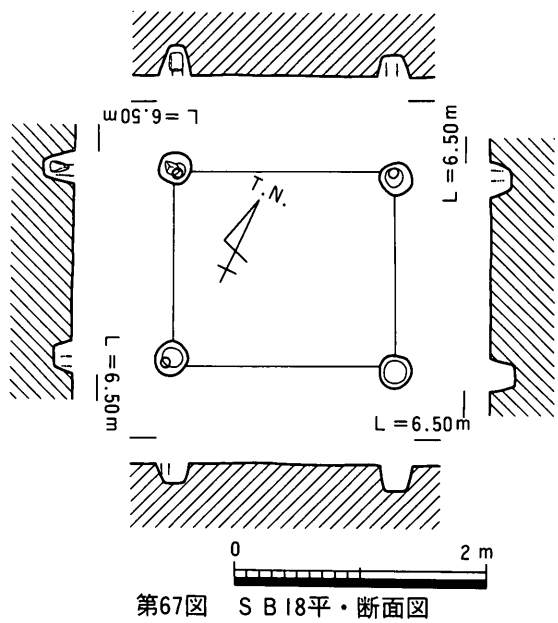
第65図　ＳＢ12平・断面図



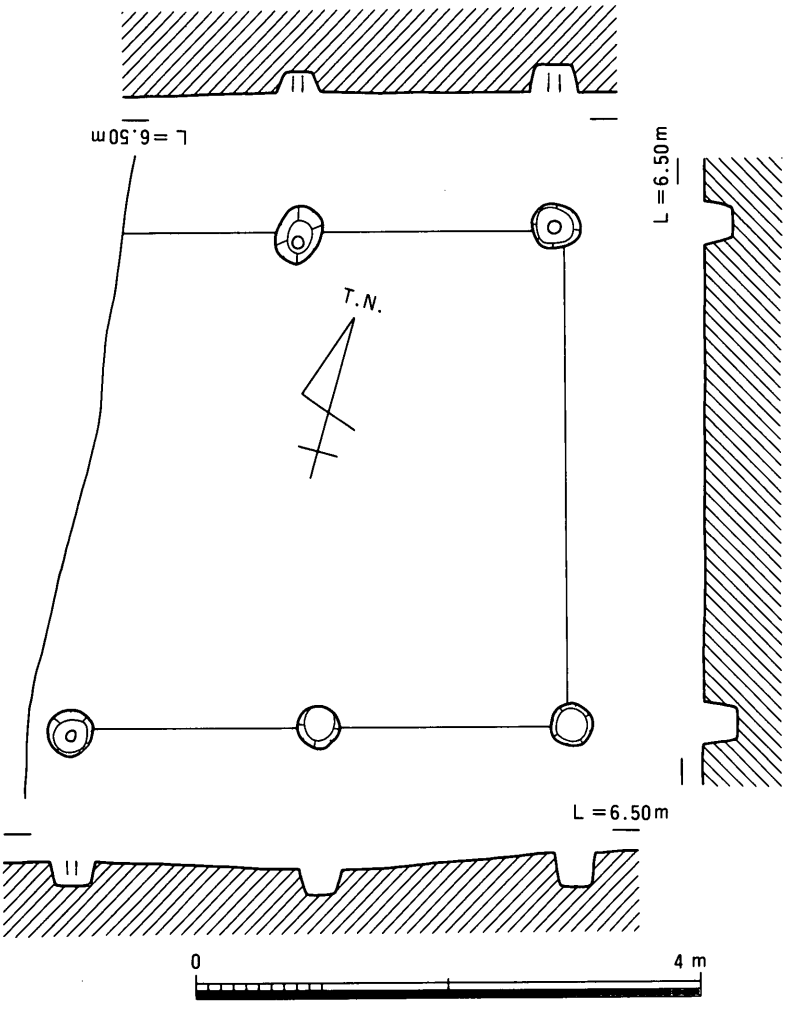
第66図　ＳＢ16平・断面図

SB17（第68図）

SB17は第２調査区南西部で検出された梁間（１）間×桁行（３）間（3.86m×4.26m）の掘立柱建物である。柱穴は小型の円形を呈するもので平均径0.35mを計り，柱間は，梁間は計測できず，桁行は平均長（1.98m）を計る。主軸は真北より約16°西偏している。南半分が調査区外に延びており，全容は不明である。



第67図　ＳＢ18平・断面図



第68図　ＳＢ17平・断面図

SB18（第67図）

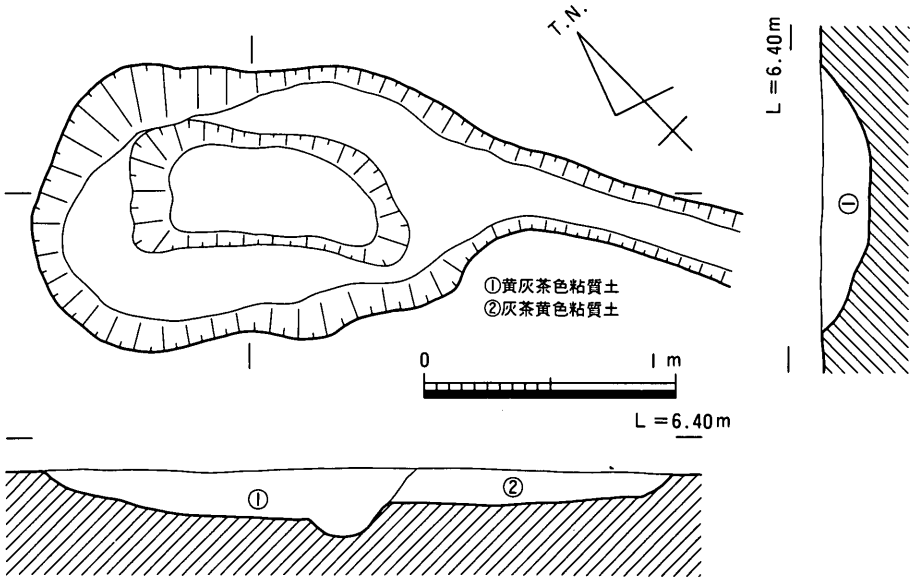
SB18は第２調査区南西部で検出された梁間１間×桁行１間（1.53m×1.76m）の掘立柱建物である。柱穴は小型の円形を呈するもので平均径0.24mを計り，柱間は梁間で1.53m，桁行で1.76mを計る。主軸は真北より約26°西偏している。小型の建物である。

SK01（第69図）

SK01は第２調査区中央部東端で，ちょうどSK02と並ぶように検出された土坑である。平面形態は楕円形を呈しており，長さ1.75m，幅1.05mで，深さは0.27mを計る。この土坑はSD07に繋がっており，同時期に機能していたものと思われる。

埋土はレンズ状に堆積しておりその中から土師器・須恵器などが出土している。

時期は12世紀頃と思われる。



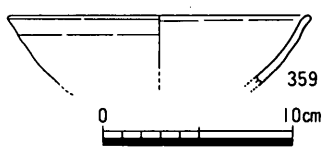
第69図　ＳＫ01平・断面図

SK02（第70図）

SK02は第２調査区中央部東端で検出された土坑で，ちょうど東半分が現在の水路に切られており全容は不明である。平面形態は楕円形を呈しており，長さ1.26m，幅0.46mで，深さは東半分が切られているため不明である。

土坑埋土より土師器の椀が出土している（第70図）。

時期は12世紀頃のものと思われる。

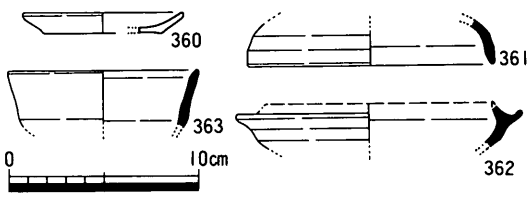


第70図　ＳＫ02出土遺物実測図

SD01（第71・72図）

SD01は第１調査区で検出された溝である。規模は上端幅0.85m，深さ0.31mを計る。東西の条里地割に合うものである。

溝埋土より須恵器・土師器などが出土している（第72図）。



第71図　ＳＤ01出土遺物実測図

360は土師器の小皿である。

361～363は須恵器である。 361は坏蓋で，体部と天井部の境に稜を持たないものである。口縁部内面にも明瞭な段を有さない。 362は坏身と思われる。受け部と立ち上がり部がかなり形骸化している。 363は高坏の坏部である。

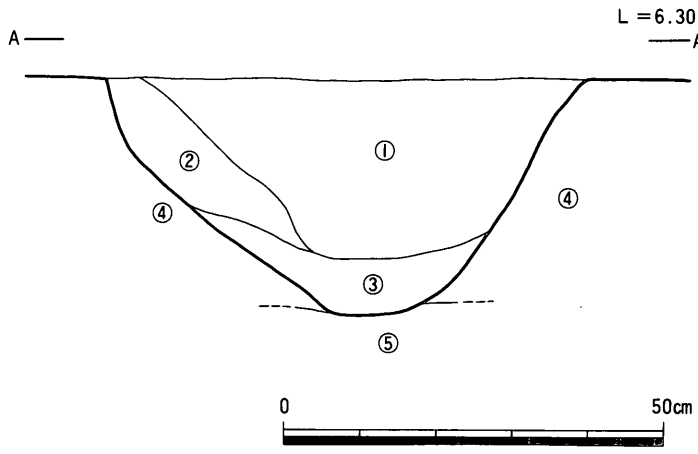
時期は７世紀前後の須恵器や12世紀頃の土師器が出土しているので，ここでは 7～12世紀の間

機能していたものと考えておく。

SD02（第３図）

SD02は第１調査区で検出された溝である。規模は上端幅0.25m，深さ0.13mを計る。流路をほぼ南北にとるものである。

溝埋土より出土した遺物が小片のため時期は不明である。



①淡茶灰色粘質土（こげ茶褐色粘質土のブロックを少量含む）
②灰色粘質土（暗茶灰色粘質土のブロックを含む）
③暗茶灰色粘質土（φ１mm以下の砂粒を少量含む）
④明茶黄色粘質土（ベース）
⑤明灰黄色粘質土（　〃　）

第72図　ＳＤ01土層図

SD07（第73図）

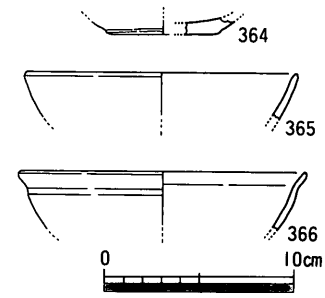
SD07は第２調査区南東部で検出された溝である。この溝はSK01と繋がっており，流路はほぼ南北である。規模は上端幅0.22m，深さ0.05mを計る。

溝埋土より土師器が出土している（第73図）。

364は土師器の小皿である。

365・366は土師器の椀である。 366は口縁部を外方に屈曲させるものである。

時期は12世紀頃のものか。



第73図　ＳＤ07出土遺物実測図

SD08（第３図）

SD08は第２調査区南東部で検出された。規模はほとんどが調査区外なので不明である。流路は東西の条里地割に合う。この溝はSK02と繋がっており，流路はほぼ南北である。SD07と並走する溝である。

SD09（第74～77図）

SD09は第2調査区南東部で検出された溝である。

この溝は規模の大きい溝で，第3調査区に延びており，南北の条里に合うものである。規模は第3調査区で削平を受けているものの上端幅2.21m，深さ1.05mを計る。

溝埋土より多数の遺物が出土している。しかし，遺物は土層ごとに取り上げたものの2区と3区でかなりの高低差があるのでそれぞれの調査区で各層ごとに報告したい。

まず，第2調査区のSD09より出土した遺物は大別して，上・中・下層から出土している。

上層から出土した遺物は367～378である。

367は土師器の小皿である。

368～371は円盤状高台を持つもので坏か椀と思われる。

372～374は土師器の椀である。底部はしっかりとした高台を持つ。

375・376は黒色土器A類椀である。口縁部内外面にはヘラ磨きが密に施されている。

377は口縁部外面に鍔の付く土師器の土釜である。鍔端部下半及び口縁部外面を指なでることによって端部をシャープにしている。

378は蛸壺である。

中層からは379～384が出土している。

379は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。

380は円盤状高台を持つ坏か椀と思われる。底部はヘラ切りされている。

381は土師器の椀である。底部にしっかりした細い高台が付くもので，体部は薄く作られている。

382は須恵器の椀である。体部内外面には回転による指なでが顕著に認められる。底部はおそらく円盤状高台になるものと思われる。

383は土師質の土鍋である。

384は土師質の土釜である。

下層からは385～388が出土している。

385は土師器の椀である。

386は黒色土器A類椀である。やや高台径が広く，しっかりした高台が付くもので体部は内彎しながら外上方に延びる。体部内外面にヘラ磨きが認められる。

387は黒色土器B類椀である。

388は土師質の土釜である。

次に第3調査区で検出されたSD08より出土した遺物も大別して，上・中・下層より出土している。

上層からは389～405が出土している。

389～391は土師器の坏である。底部はヘラ切りされている。

392・393は円盤状高台を持つ坏か椀である。

394～398は土師器の椀である。底部にはしっかりした高台を持つ。体部内面にはヘラ磨きが施されている。

399は畿内産の瓦器である。底部に三角形状の高台を持ち，体部は内彎しながら外上方に延びる。体部外面下半には指頭痕が顕著に施されている。

400～402は土師質の土鍋である。体部外面に縦方向の刷毛目が施されている。

403・404は平瓦である。 403は外面に粗い叩きを持ち，内面には布目を残す。焼成は軟質である。 404は外面をなで調整し，内面に布目を残すもので，焼成は硬質である。

405は須恵器の甕の体部である。外面に格子叩きが施され，内面はなで調整されている。

中層からは406～418が出土している。

406は土師器の小皿である。

407・408は土師器の坏である。底部はヘラ切りされている。

409・410は土師器の円盤状高台を持つ坏である。 410はほぼ水平に開く口縁部を持つものである。

411～413は土師器の椀である。411・412は口縁部が端反状を呈しており，体部も薄く作られていることから白磁Ⅴ類椀の模倣と思われる。

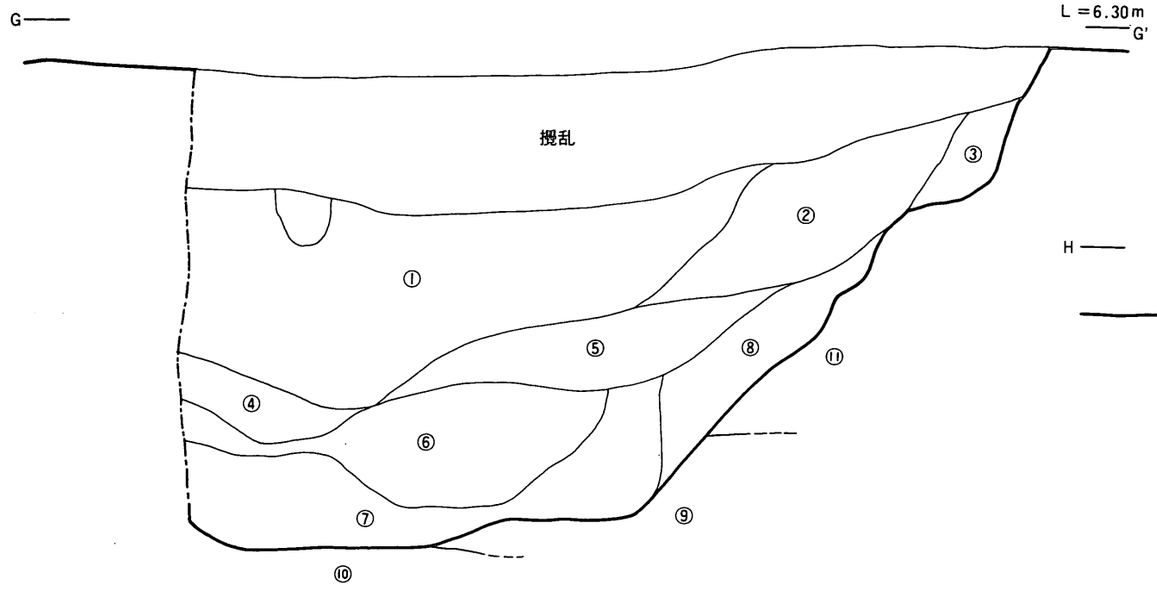
414～417は黒色土器Ａ類椀である。内外面にヘラ磨きが施されている。

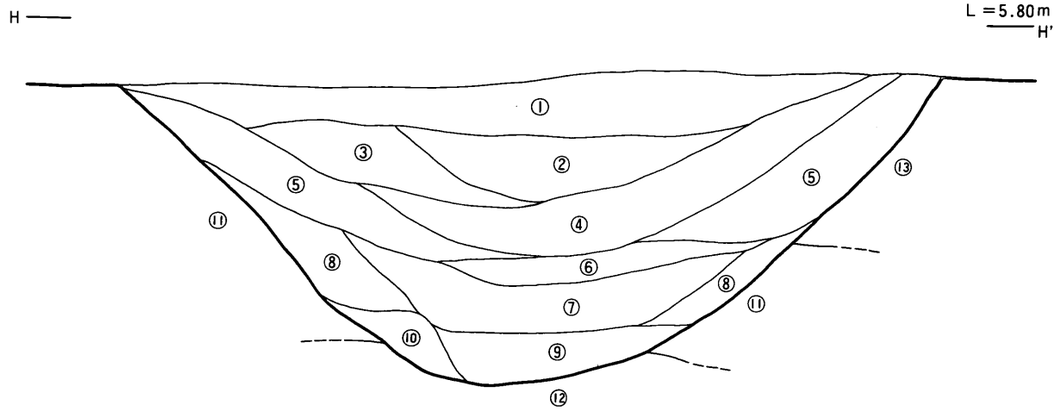
418は黒色土器Ｂ類椀である。口縁部端部内面に沈線が施されている。体部内外面にはヘラ磨きが密に施されている。

下層からは419・420が出土している。

419は土師器の円盤状高台を持つ椀である。底部はヘラ切りされている。

420は黒色土器Ａ類椀である。底部にしっかりした高台を持ち，体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方に屈曲し，内面には沈線が施されている。体部内外面にはヘラ磨きが認められる。

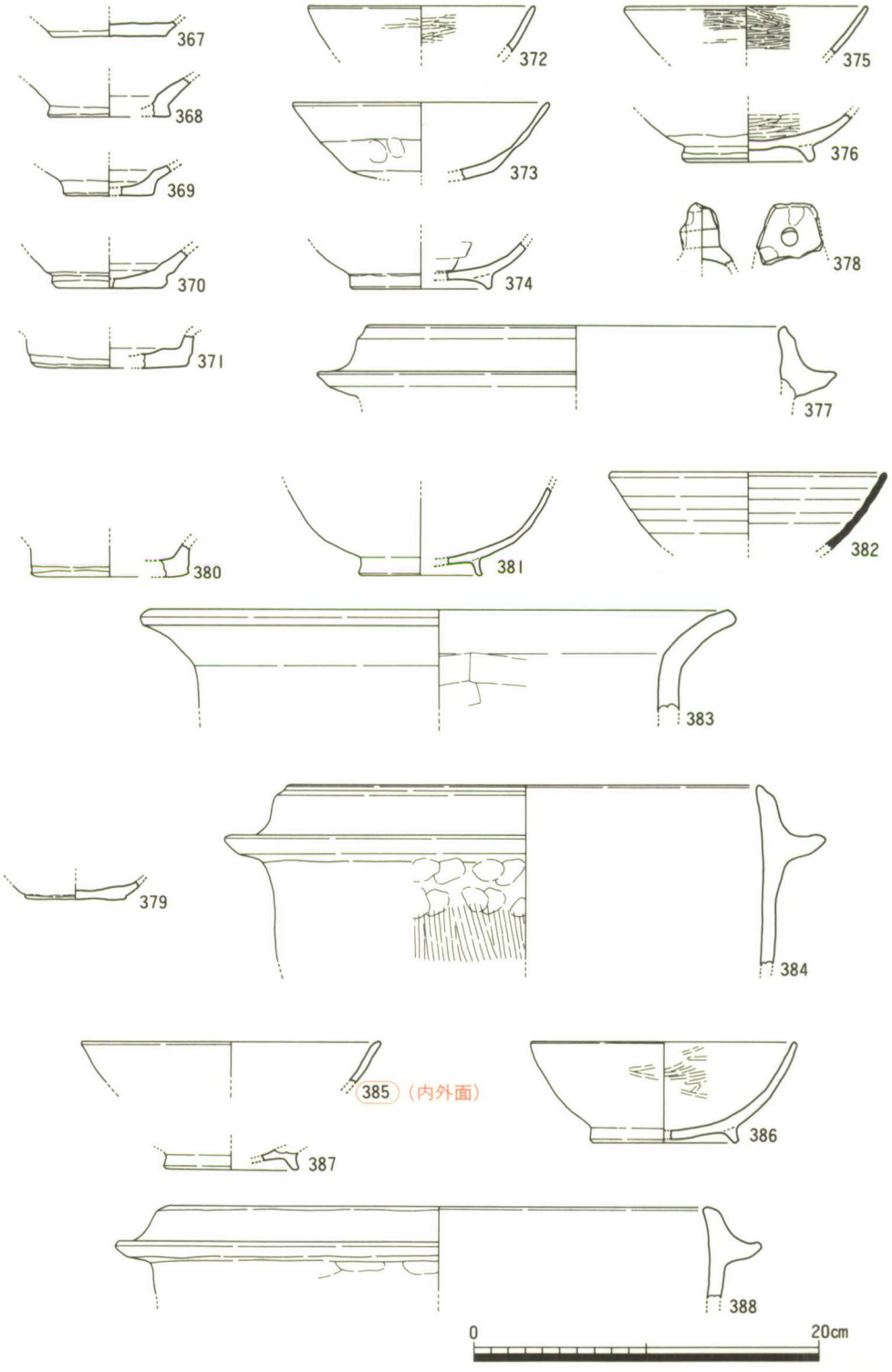




①こげ茶灰色砂混じり粘質土
②灰こげ茶色砂混じり粘質土
③灰こげ茶色粘質土
④⑤＋淡黄茶色粘質のブロックを含む
⑤灰こげ茶色砂質土
⑥暗灰こげ茶色砂質土
⑦暗青灰こげ茶色砂
⑧灰こげ茶褐色粘質土
⑨黄茶色砂
⑩青こげ茶灰色砂
⑪淡黄茶色砂混じり粘質土

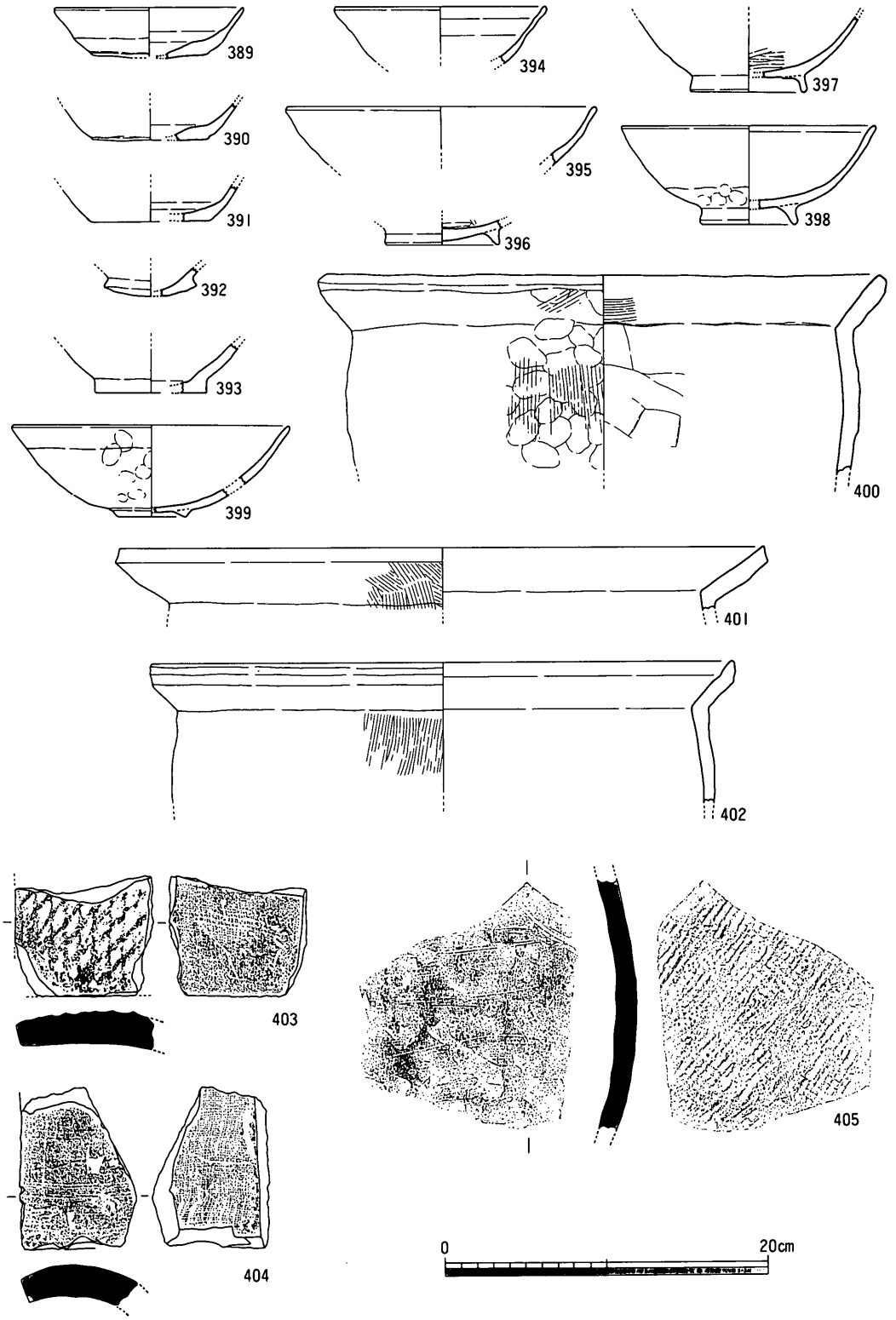
①攪乱
②暗茶色砂混じり粘質土
③灰茶色砂混じり粘質土
④黄灰茶色砂混じり粘質土
⑤淡黄茶色砂混じり粘質土
⑥⑤に黄茶色粘質土のブロックを含む
⑦褐灰色砂混じり粘質土
⑧茶灰色砂質土
⑨灰色砂混じり粘質土
⑩褐灰色砂質土
⑪灰茶色砂礫（φ0.2～1cm程度、かたくしまっている）（ベース）
⑫青褐灰色砂質土（ベース）
⑬明茶黄色粘質土（ベース）

第74図　ＳＤ09土層図

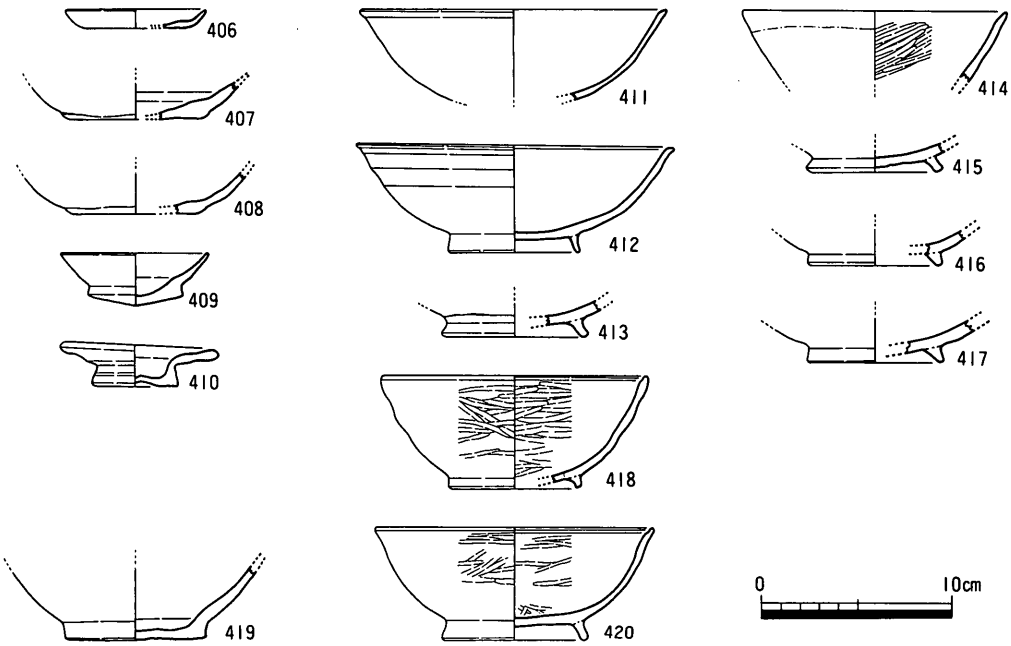


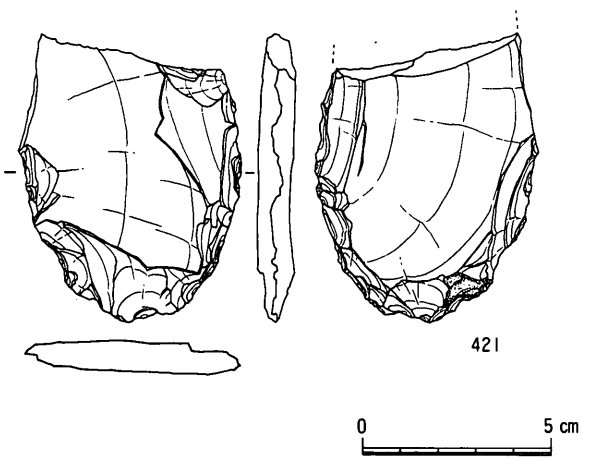
○印は赤色顔料が塗布された土器

第75図　ＳＤ09出土遺物実測図①



第76図　ＳＤ09出土遺物実測図②





第77図　ＳＤ09出土遺物実測図③

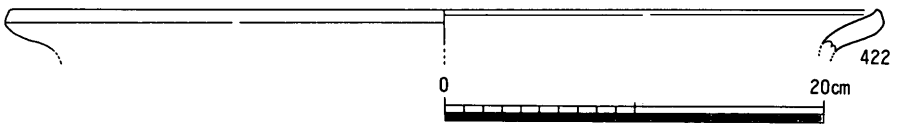
SA01（第３図）

SA01は第２調査区北半で検出された柵列である。ちょうどSB03の南側で検出されており，SB03を画する柵かと考えられる。柵列の柱穴間は約1.76mを計る。

SA02（第78図）

SA02は第２調査区南東隅で検出された柵列である。SD07･08とほぼ並走するもので同時期に機能していたものと考えられる。柵列の柱穴間は約2.29mを計る。

柱穴埋土より土師質の土鍋が出土している（第78図）。



第78図　ＳＡ02出土遺物実測図

SA03・04（第３図）

SA03･04は第２調査区南西隅で検出された柵列である。これら柵列は，検出された方向は違うもののSB16･17を画するように検出され，ほぼ同時期に機能していたものと考えられる。柵列の柱穴間は約1.6mを計る。

柱穴出土遺物（第79図）

423～ 433は柱穴出土遺物である。

423はSP01出土の黒色土器Ａ類椀である。

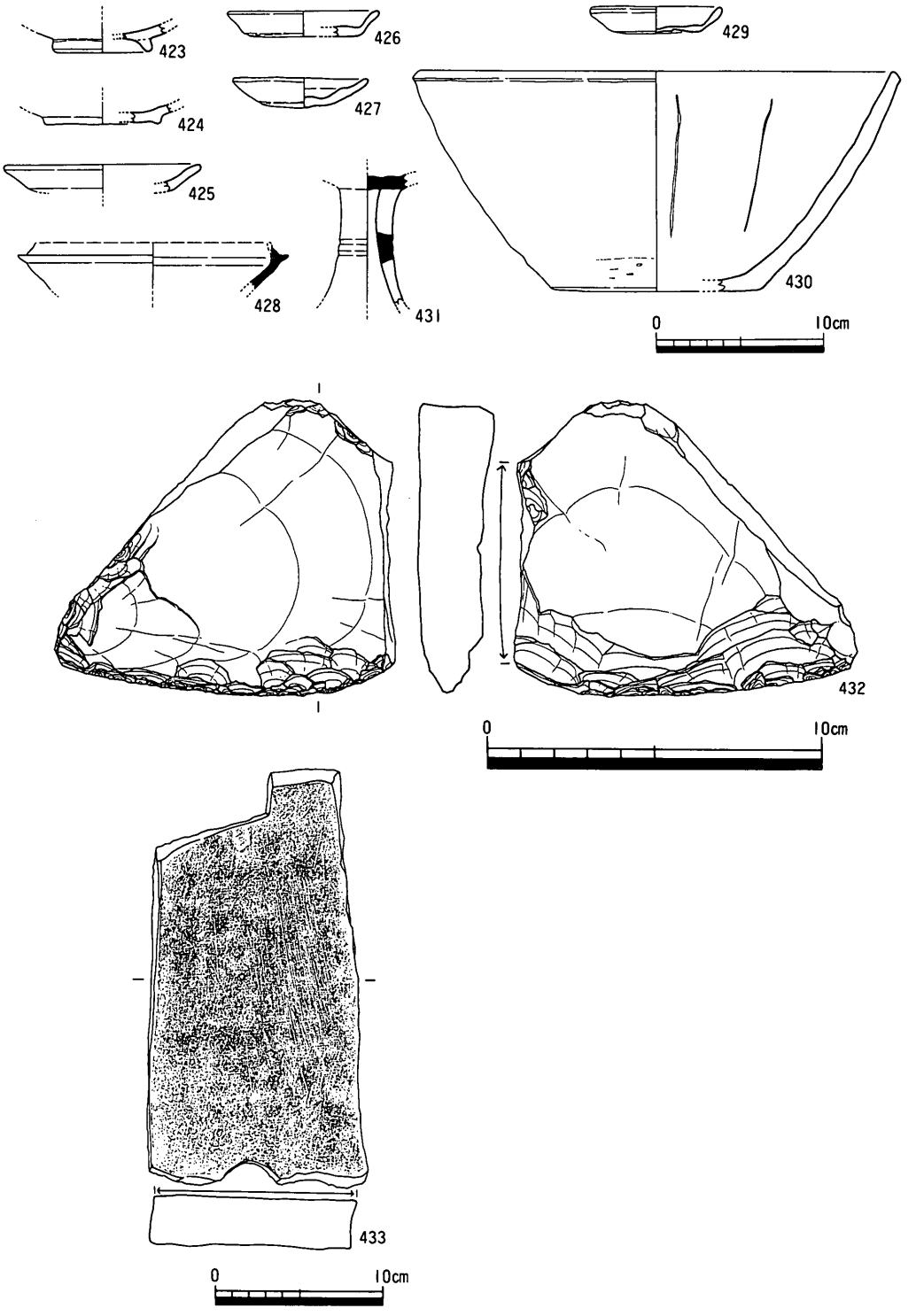
424･ 425はSP02出土の遺物である。 424は円盤状高台を呈する土師器の坏あるいは椀である。底部の調整は不明。 425は土師器の坏である。

426･ 427はSP03出土の土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。

428はSP04出土の須恵器の坏身である。７世紀初頃のものと思われる。

429･ 430はSP05出土の遺物である。428は土師器の小皿で底部はヘラ切りされている。430は瓦質の摺り鉢である。体部内面に１本単位の条溝が間隔をあけて施されている。

431はSP06出土の須恵器高坏である。長脚２段透かしの脚と思われる。６世紀末頃のものか。



第79図　柱穴出土遺物実測図

SD10（第３・80図）

SD10は第３調査区で検出された溝である。東西の条里地割に合う。この溝は上端幅約4.56m，深さ約0.71mと規模の大きいもので，調査区内では2.16mしか検出できなかったが埋土より多数の遺物が出土している。土層より，この溝は大別して３時期（最下層，第１溝，第２溝）に埋没したものと思われる。また，この溝の北側肩部には護岸施設を想定させるように柱穴が並んで検出されている。

出土遺物は包含層（上層，第１溝第１砂層，第１溝第２砂層と第１溝第１砂層の間の層，第１溝第２砂層，第２溝，最下層）ごとにまとめて述べることにする。

SD10上層（第81～95図）

434～ 720はSD10第１溝の上層から出土したものである（第81～95図）。

434～462は土師器の小皿である。底部はすべてヘラ切りである。体部は直線的に外上方に延びるものと，やや内彎するものがある。

463～492は土師器の坏である。底部はすべてヘラ切りである。底部と体部の境に明瞭な稜を持つものと持たないものがある。体部はやや内彎するものと直線的に外上方に延びるものがあり，口縁部もそのまま丸く終わらせるものと外方に屈曲させるものがある。

493～561は土師器椀である。底部にはしっかりした高台を持ち，体部は内彎気味に外上方に延び，口縁部はそのまま丸く終わらせるものとやや外方に屈曲させるものがある。体部内外面にはヘラ磨きが施されている。また体部外面下半に指頭痕が見られるものもある。517・518は体部内面に板なでが認められる。

562～598は黒色土器Ａ類椀である。

599・600は畿内産の瓦器椀である。 599は体部が内彎気味に外上方に延びるもので，内外面に細かいヘラ磨きが認められる。 600は底部にしっかりした高台が付く。

601～626は須恵器である。

601は坏蓋である。

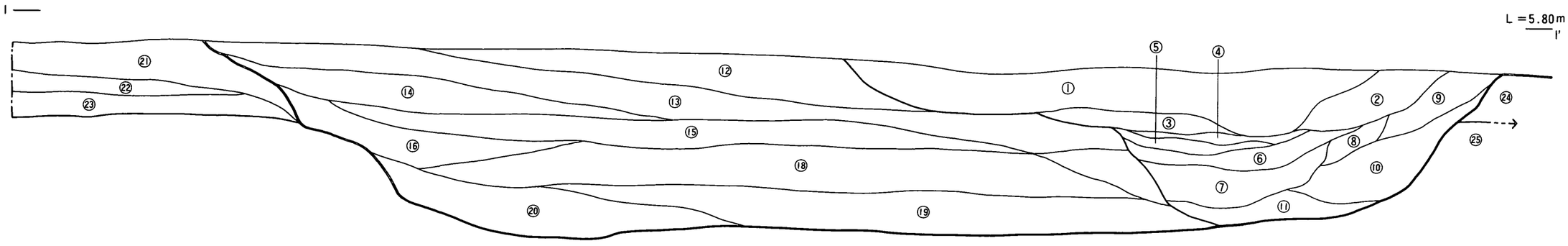
602は坏の底部である。

603は高坏の脚部である。脚部には透かしが施されている。

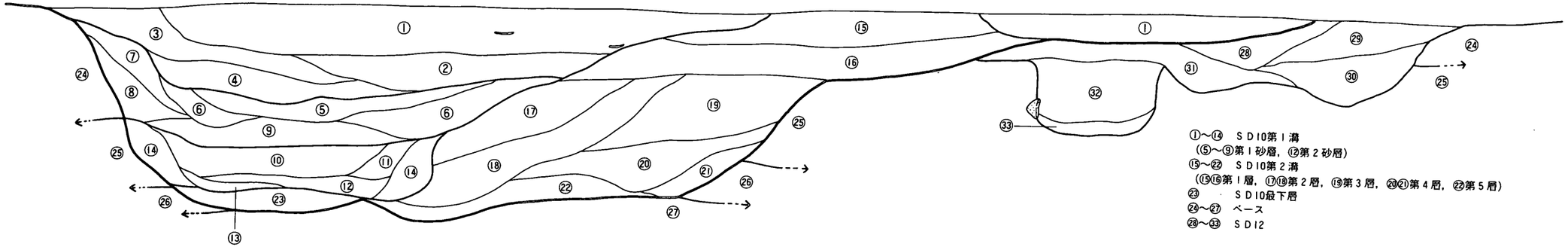
604～606は壺である。604･605は焼成がいいもので，606はやや悪くいわゆる瓦質焼成のものである。605の底部にはゲタ痕が認められる。

607～619は甕である。焼成は611・612がいわゆる瓦質焼成のもので，その他はすべて焼成の良いものである。頸部は直線的に外上方に延び，口縁端部は下方につまみ出している。瓦質焼成の612は口縁端部をそのまま終わらせている。体部外面には格子叩きと平行叩きが見られ，内面はすべて指なでが施されている。格子叩きには３㎜角の方形のものと３×２㎜の長方形のものがある。

620～626はこね鉢である。620は焼成が良いもので，その他には瓦質焼成もの（621･622）とや



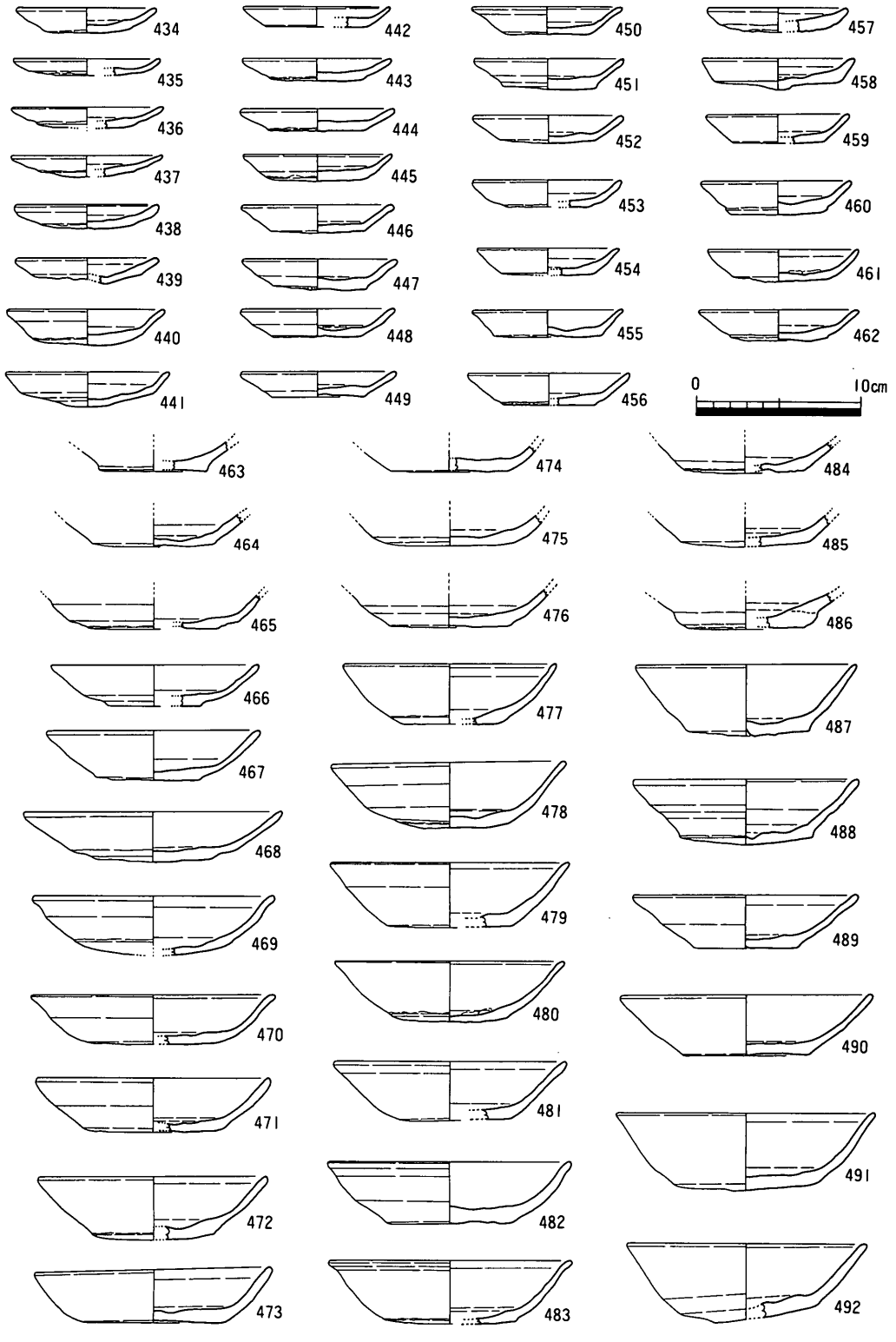
① 暗灰色粘質土
② 茶灰色砂混じり粘質土（茶色粒を含む）
③ 淡茶灰色粘質土
④ 淡黄白色粘質土
⑤ 暗茶灰色砂混じり粘質土
⑥ 暗灰色砂質土
⑦ 濁灰白色砂質土
⑧ 灰色砂混じり粘質土（茶色粒を含む）
⑨ 灰茶色砂混じり粘質土（茶色粒を含む）
⑩ 茶灰色粘質土（茶色粒を含む）
⑪ 灰色砂
⑫ 淡茶灰色粘質土
⑬ 濁灰茶白色粘質土
⑭ 濁茶灰色粘質土
⑮ 茶灰色シルト
⑯ 暗灰茶色粘質土
⑰ ⑮と同じ
⑱ ⑯とほとんど同じ
⑲ 暗白灰茶色粘質土（⑯とほぼ同じ）
⑳ 暗灰茶色砂混じり粘質土
㉑ 濁白黄色粘質土
㉒ 青褐灰色粘質土
㉓ 茶灰色砂礫（φ0.2～1㎜程度）
㉔ 明茶黄色粘質土
㉕ 灰茶色砂礫（砂φ0.2～1㎜、礫φ1～5㎜程度）
①～⑪ ＳＤ10第1溝
⑫～⑳ ＳＤ10第2溝
㉑～㉓ ＳＤ11
㉔・㉕ ベース



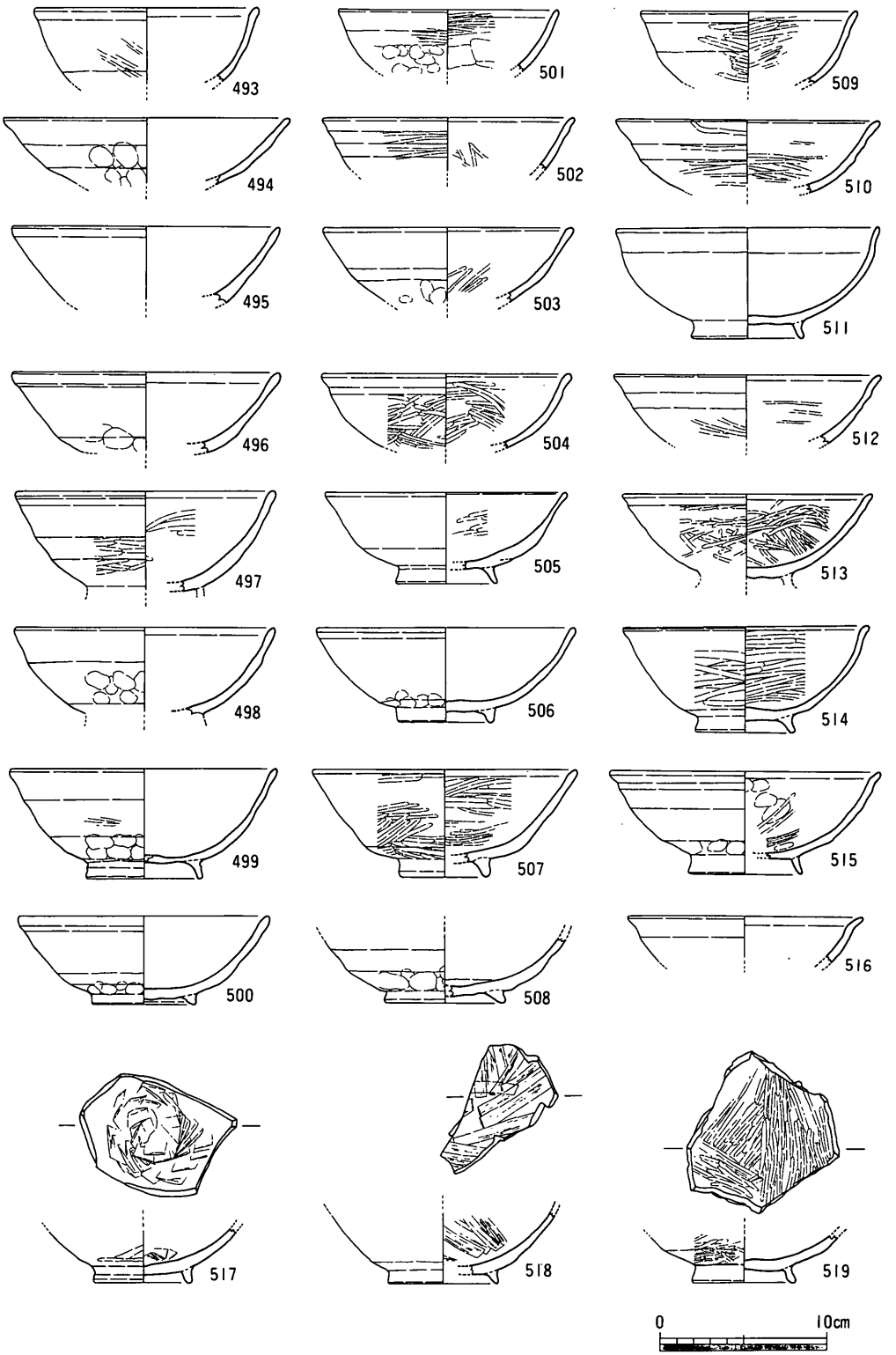
①～⑭ ＳＤ10第1溝
（⑤～⑨第1砂層，⑫第2砂層）
⑮～㉒ ＳＤ10第2溝
（⑮⑯第1層，⑰⑱第2層，⑲第3層，⑳㉑第4層，㉒第5層）
㉓ ＳＤ10最下層
㉔～㉗ ベース
㉘～㉝ ＳＤ12

① 濁茶灰色粘質土（こげ茶褐色粒を含む）
② 淡茶灰色粘質土（⑧より茶色粒が強い）
③ 淡茶灰黄色粘質土
④ 茶灰色粘質土
⑤ 灰白色砂土
⑥ 灰色砂質土
⑦ 濁茶白色粘質土
⑧ 淡茶灰色粘質土
⑨ 濁茶白灰色シルト（砂混じり粘質土）
⑩ 灰色砂質土（茶色粒を多量に含む）
⑪ 茶灰色砂質土
⑫ 灰色砂
⑬ 灰色シルト（粘砂）
⑭ ⑪より砂っぽい
⑮ 暗茶灰色粘質土
⑯ 淡灰茶色粘質土
⑰ 褐灰茶色粘質土
⑱ 暗褐灰茶色粘質土
⑲ 濁白茶色粘質土
⑳ 灰茶褐色粘質土
㉑ 灰茶褐色砂質土
㉒ 茶灰色砂
㉓ 濁茶白色砂礫
㉔ 明茶黄色粘質土
㉕ 明茶黄色粘質土（こげ茶褐色粒を含む）
㉖ 茶灰色砂質土
㉗ 灰茶色砂礫

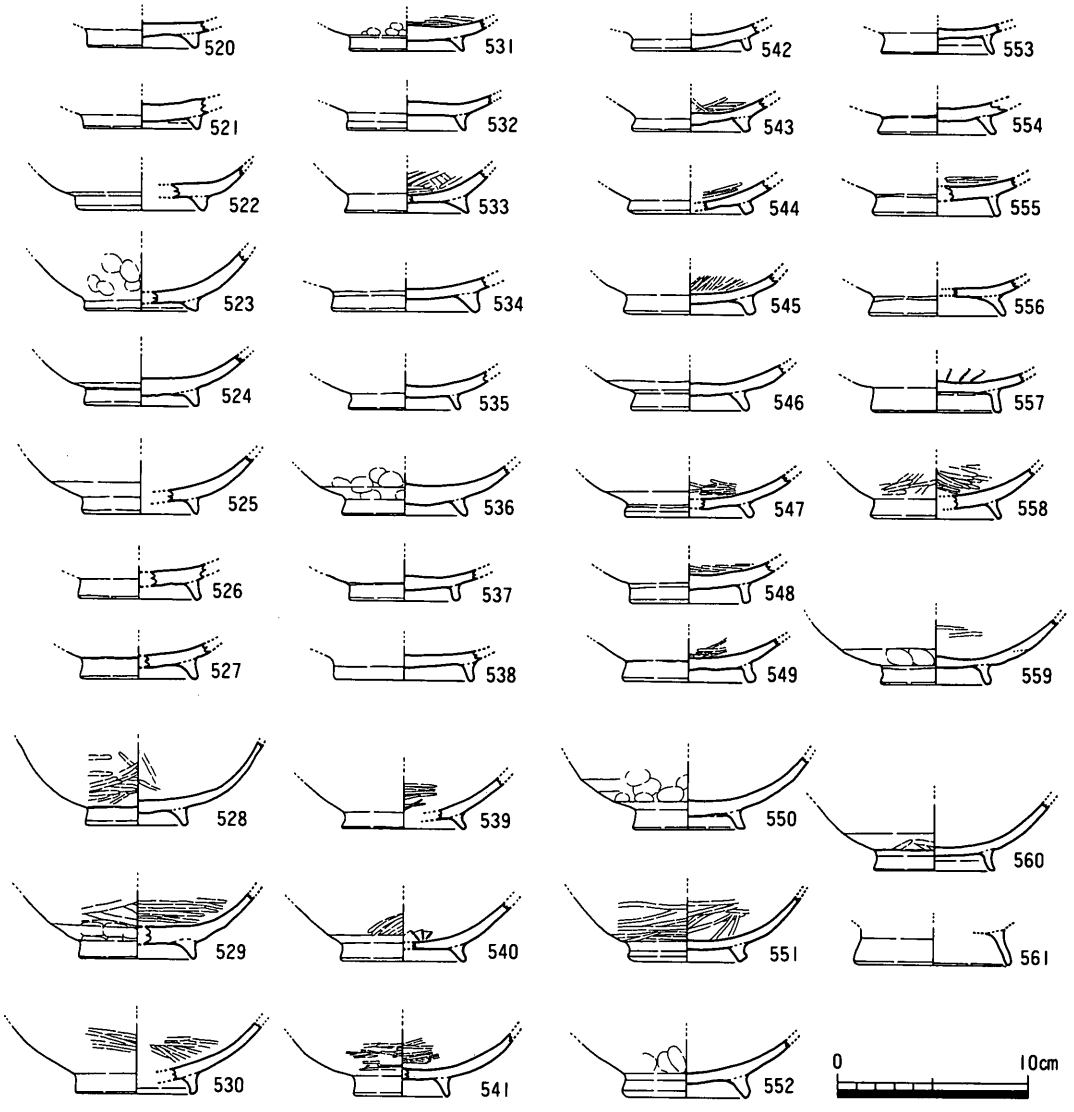
第80図　ＳＤ10土層断面図



第81図　ＳＤ10上層出土遺物実測図①



第82図　ＳＤ10上層出土遺物実測図②

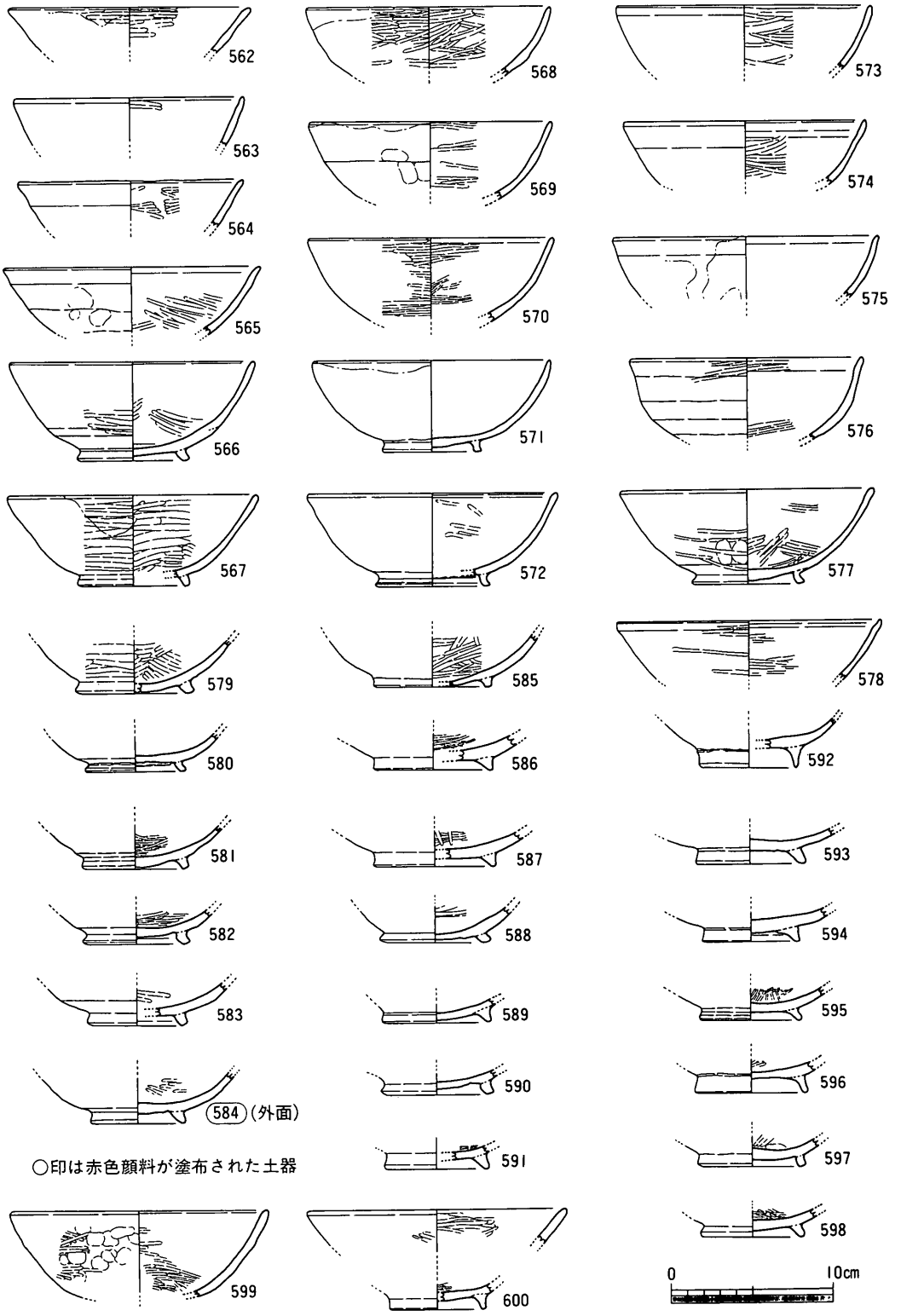


第83図　ＳＤ10上層出土遺物実測図③

や焼成の悪いものがある。620は内彎する体部を持ち，口縁端部は外方に短く屈曲する。621はやや内彎する体部からそのまま口縁端部にするものである。622・623・625は内彎する体部から口縁部で外方に屈曲させ，上方に短くつまみ出すものである。その屈曲部は稜を明瞭に持つものと持たないものがある。底部は指なで調整されている。

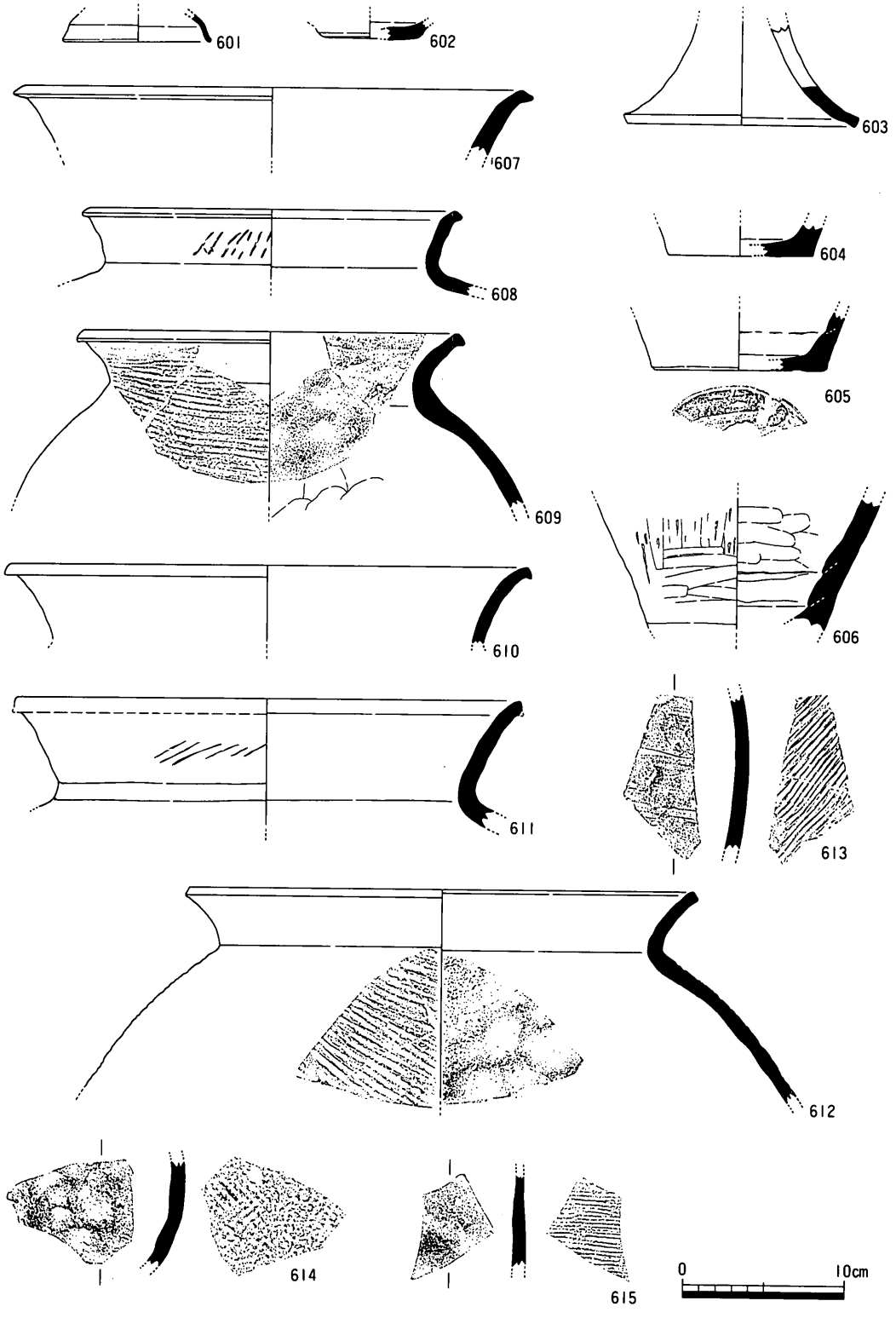
627～638は土師質の土釜である。体部はすべて胴長のものである。鍔はほぼ水平に付けられ，上半分をつまみ出している。口縁部は短いものとやや長いものがあり，体部からそのまま終わらせるものと内方をつまみ出すものがある。体部外面には縦方向の刷毛目が施されている。

639～673は土師質の土鍋である。639は体部がほぼ球形を呈するもので，640～667は体部が胴長

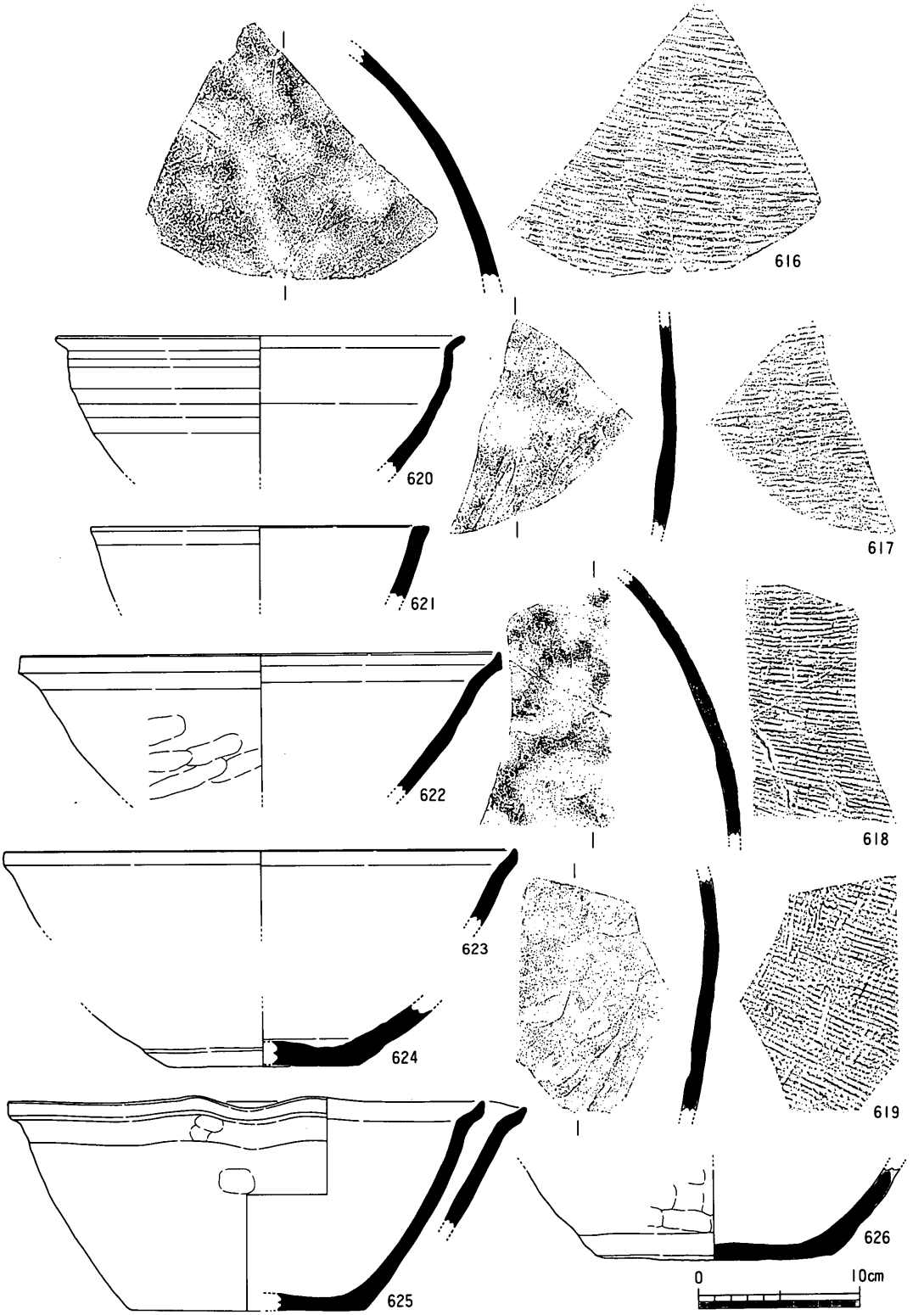


○印は赤色顔料が塗布された土器

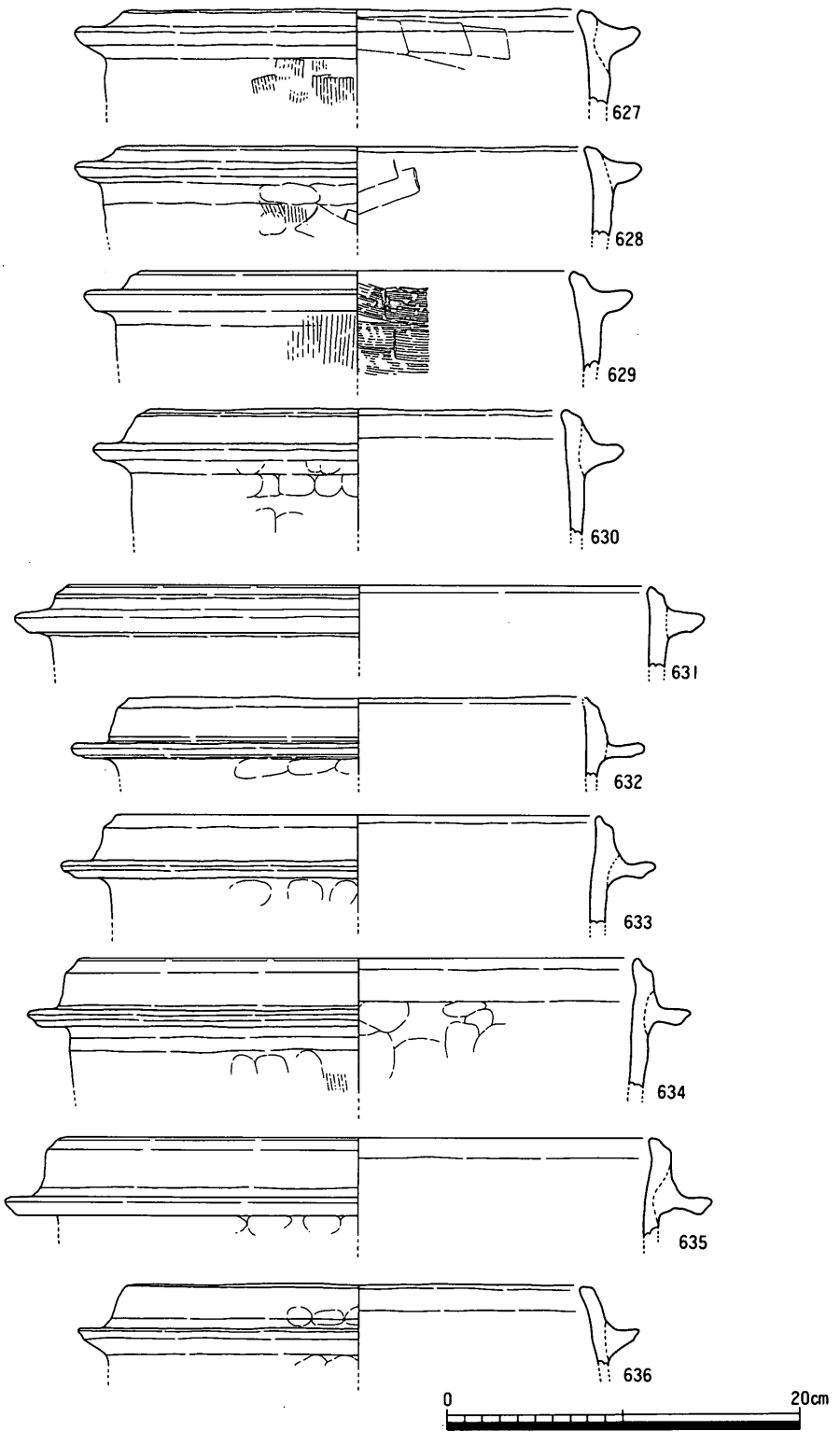
第84図　ＳＤ10上層出土遺物実測図④



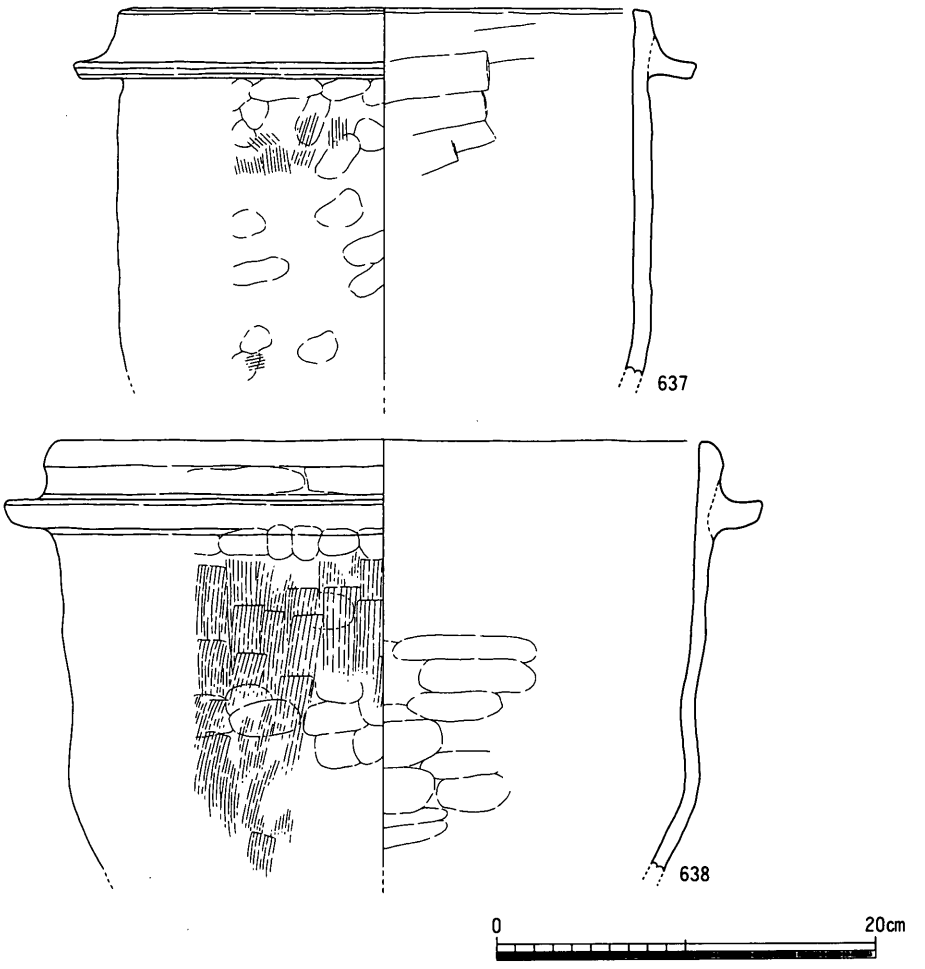
第85図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑤



第86図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑥



第87図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑦



第88図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑧

を呈するものである。668～673は体部がやや浅い。体部はやや内彎するものや直線的なものがあり，口縁端部は頸部からそのまま終わらせるものと，丸く終わらせるもの，上方に少しつまみ出すように終わらせるものがある。体部外面には縦方向の刷毛目が施されている。

674は土師質の壺であろうか。内彎する体部から径を減じながら口縁部に至るものである。

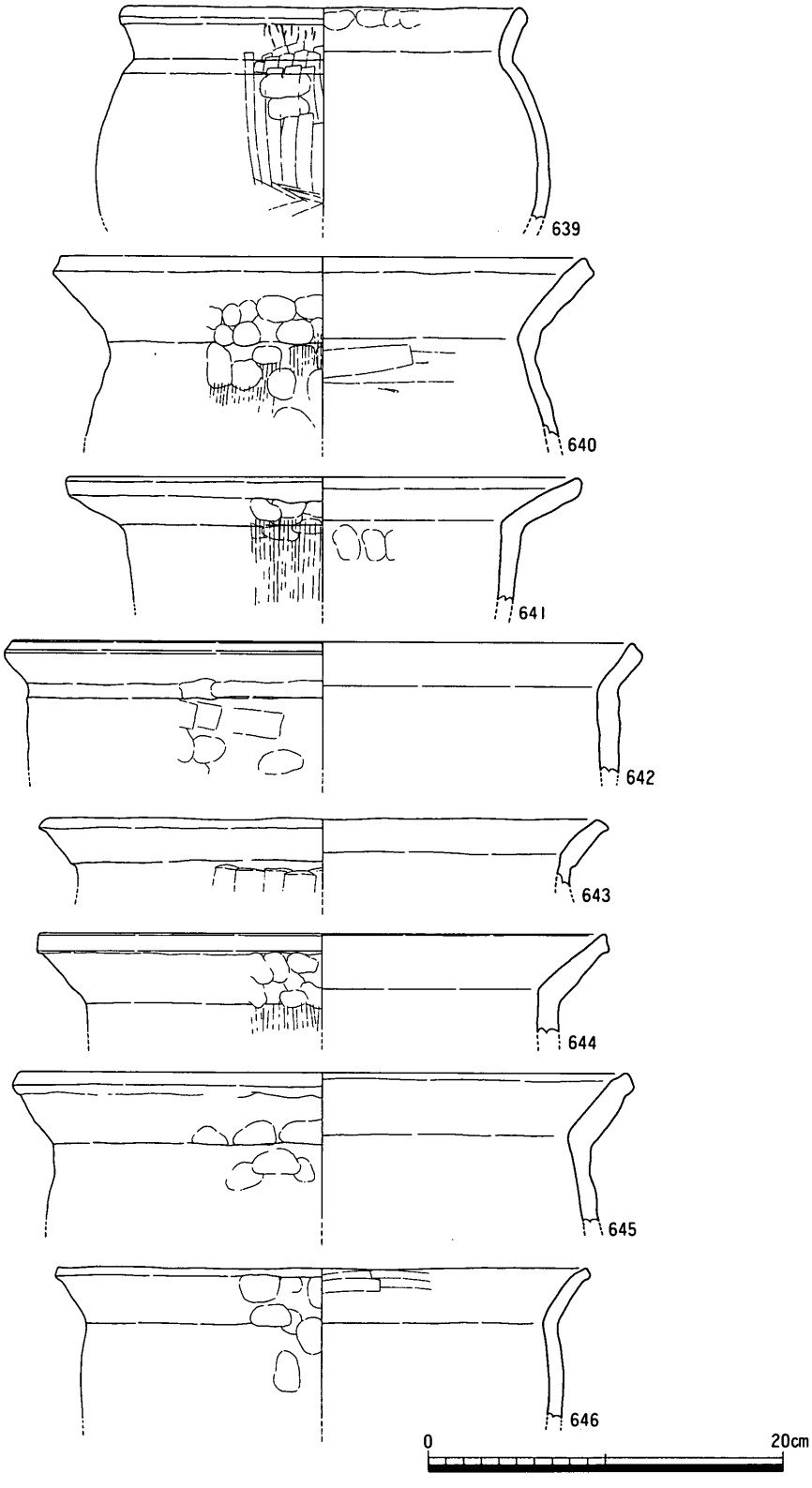
体部外面には刷毛目及び指頭痕が顕著に施されている。

675～678は土師質の竈である。675・676は炊き口部上半である。677は底部である。678は炊き口部右側底部である。

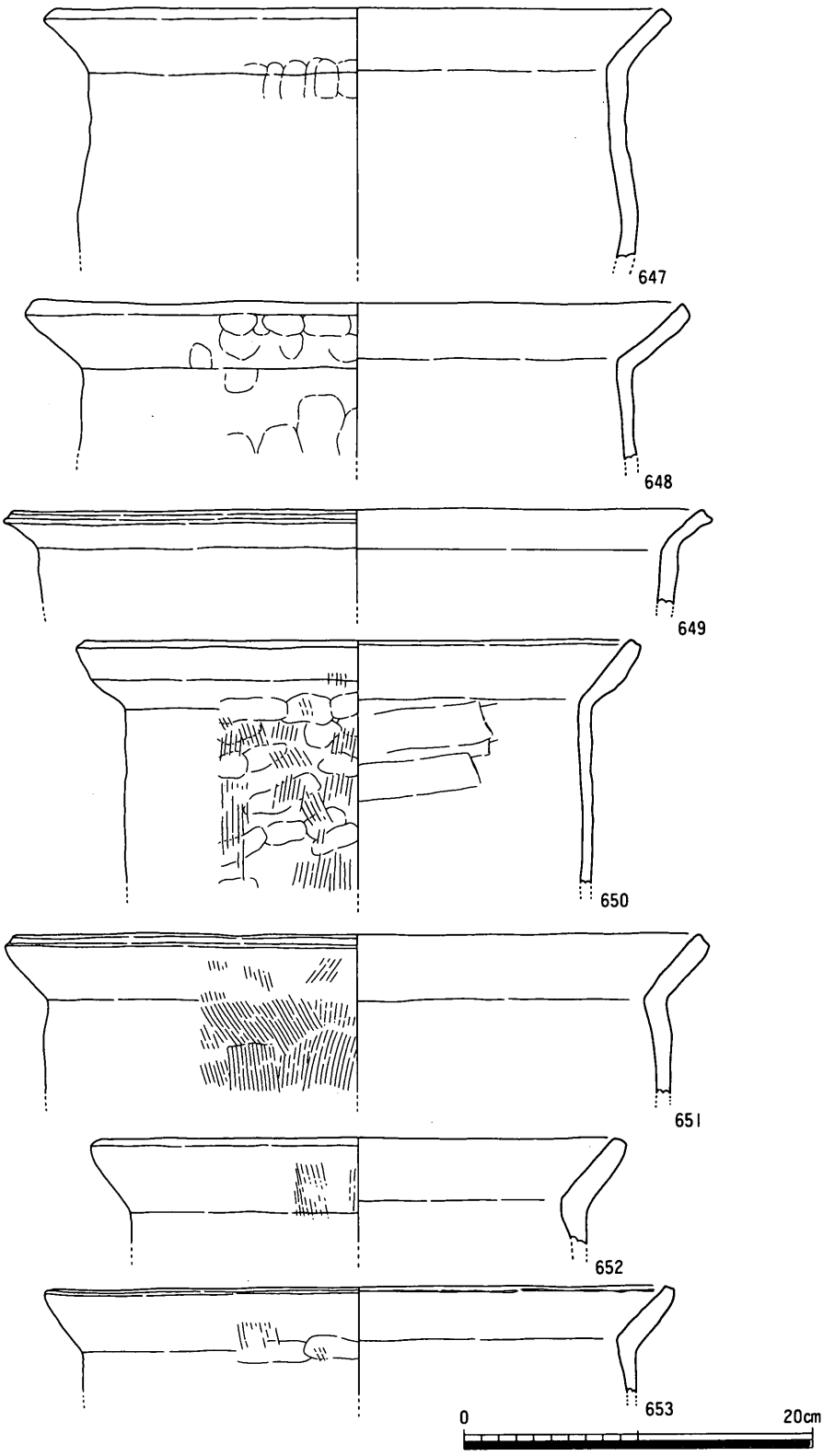
679～705は底部が円盤状を呈するものである。680は小型の坏である。697･698は円盤状高台の小皿か。700～705はやや大型のものである。

706～714は底部に高台の付いた小皿・坏である。

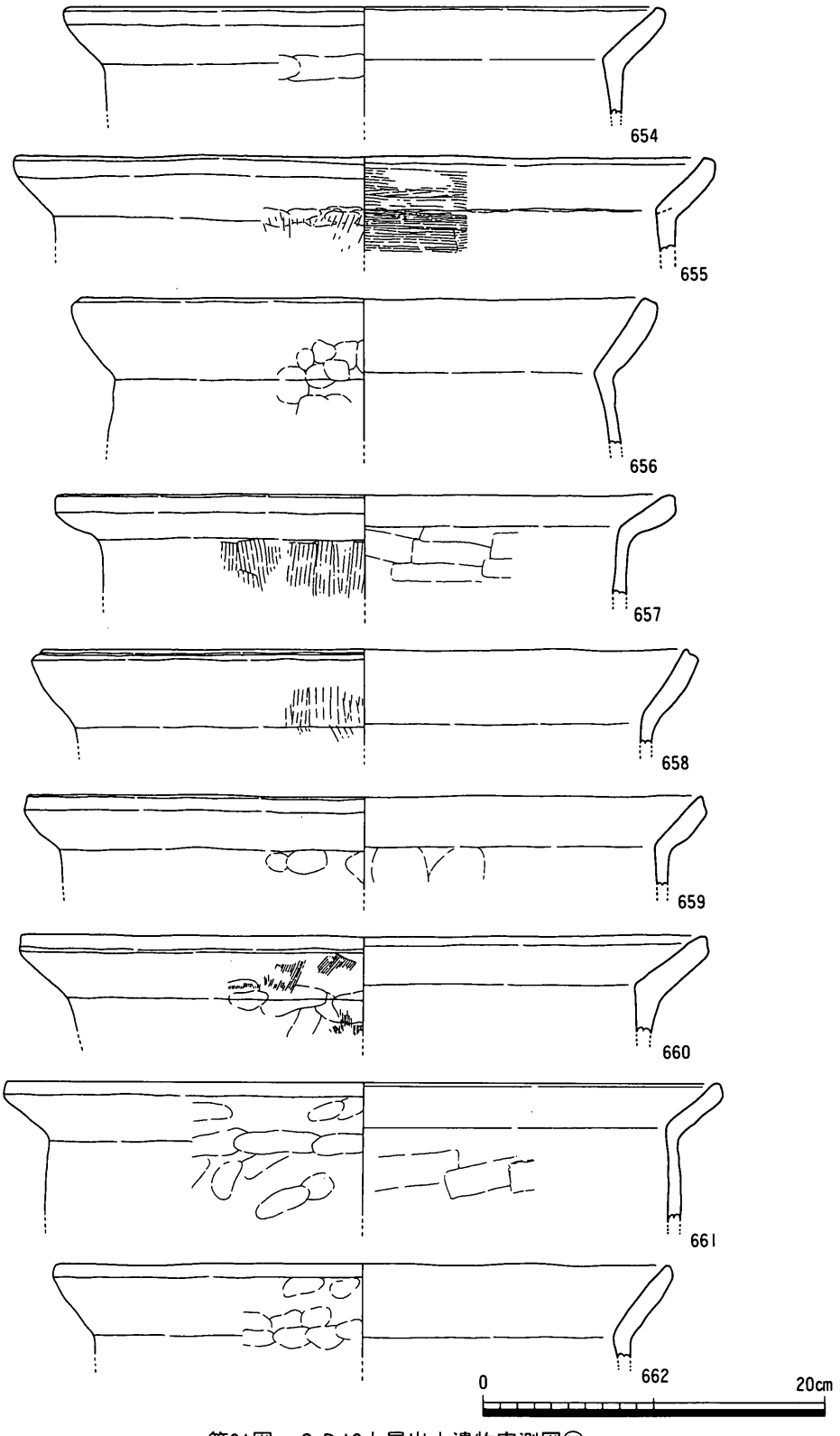
715は京都系の「て」の字口縁の小皿である。底部外面に指頭痕が認められる。



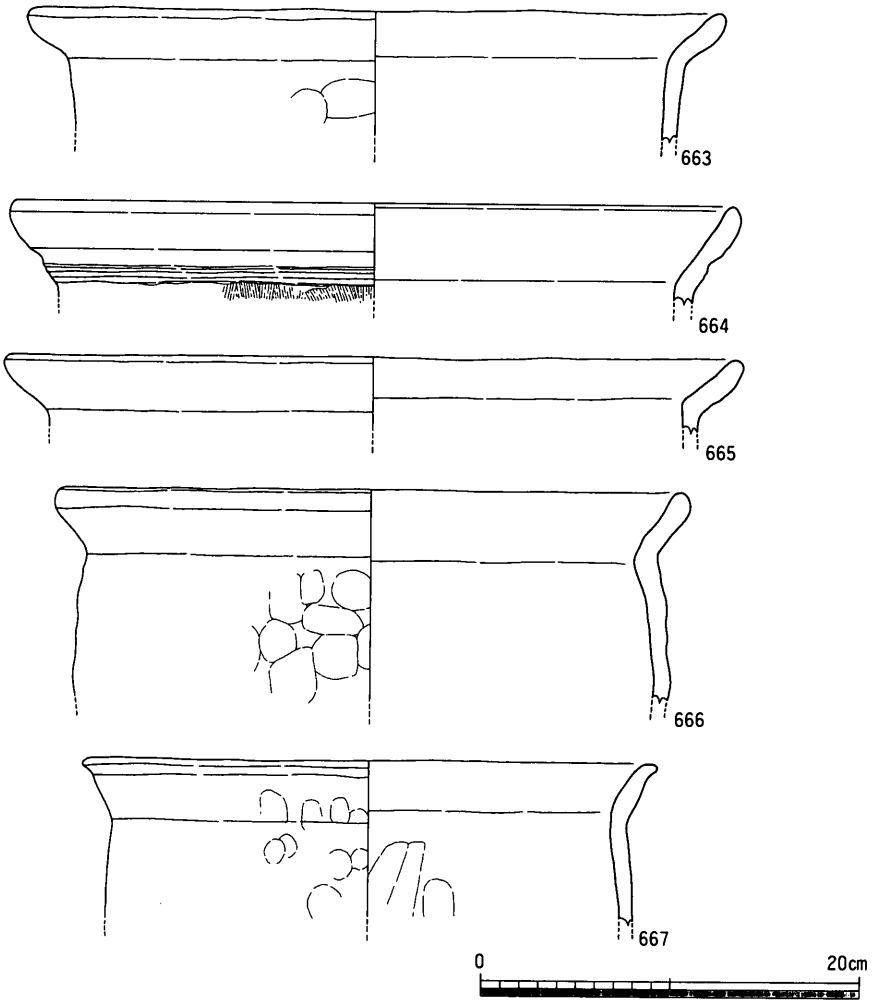
第89図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑨



第90図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑩



第91図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑪



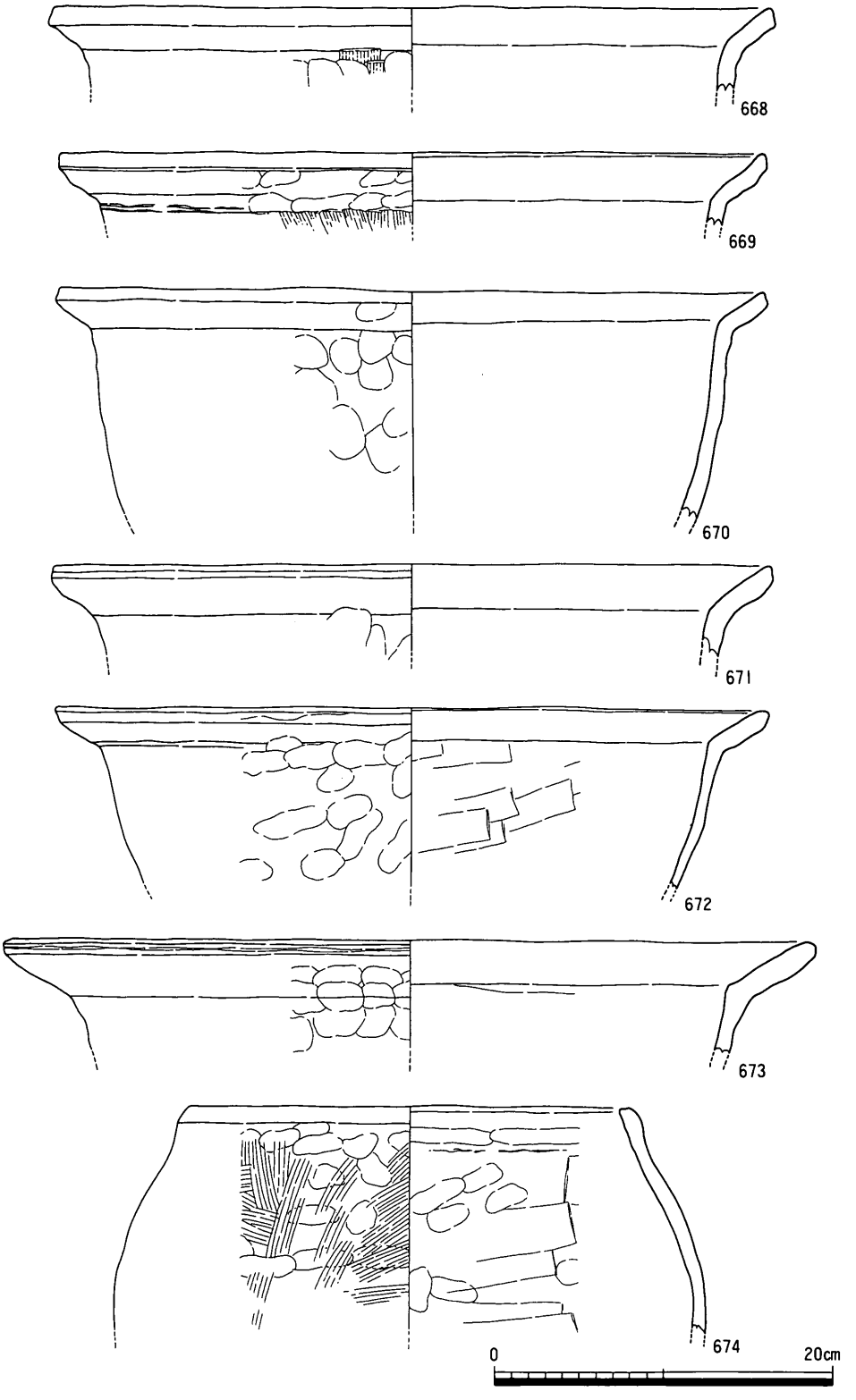
第92図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑫

716は備前焼の壺であろうか。十瓶周辺窯で焼かれたものではないものと思われる。

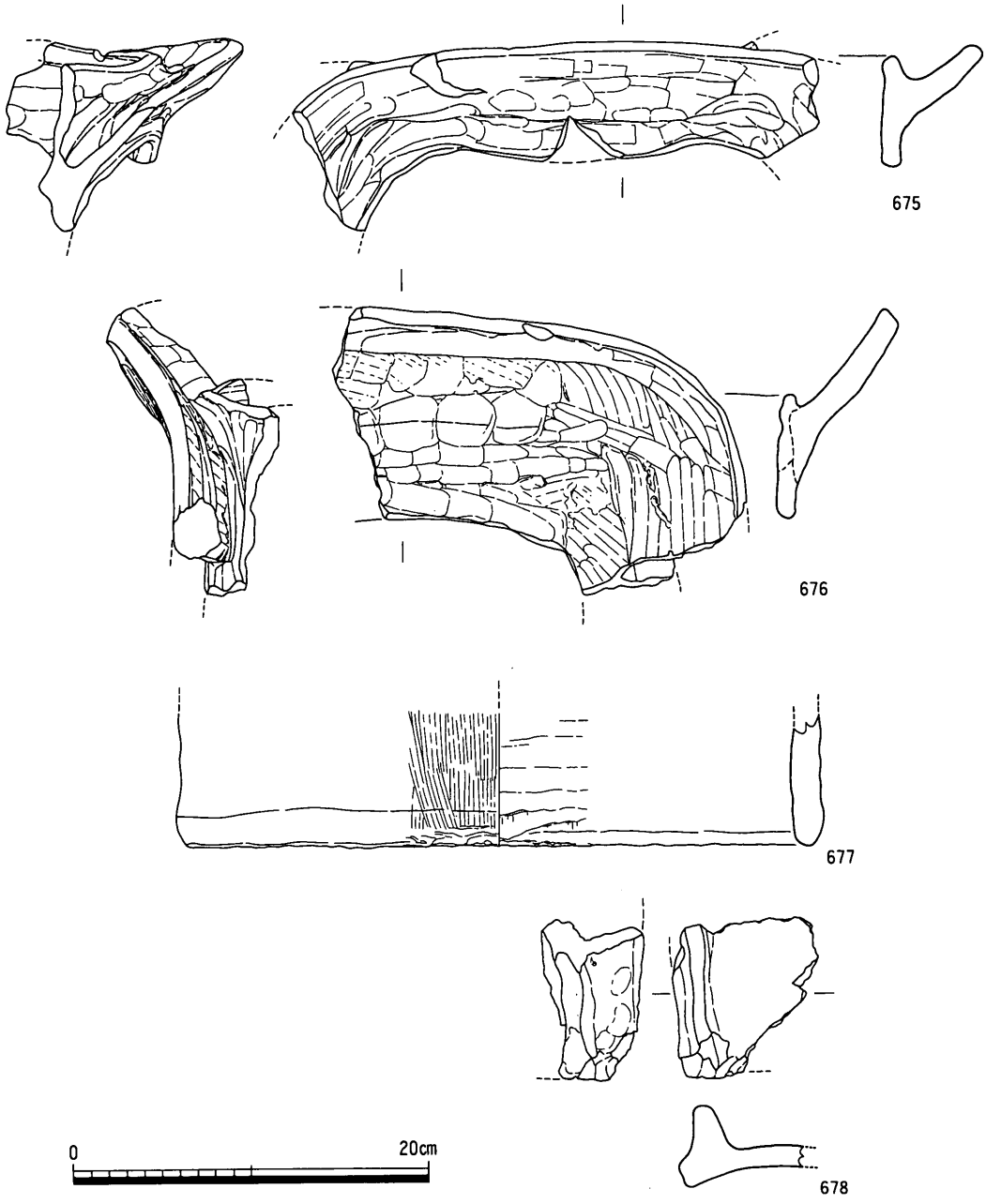
717は瓦か。外面に粗い叩きが認められ，内面には布目の痕跡が認められる。

718は手ずくねの小壺である。

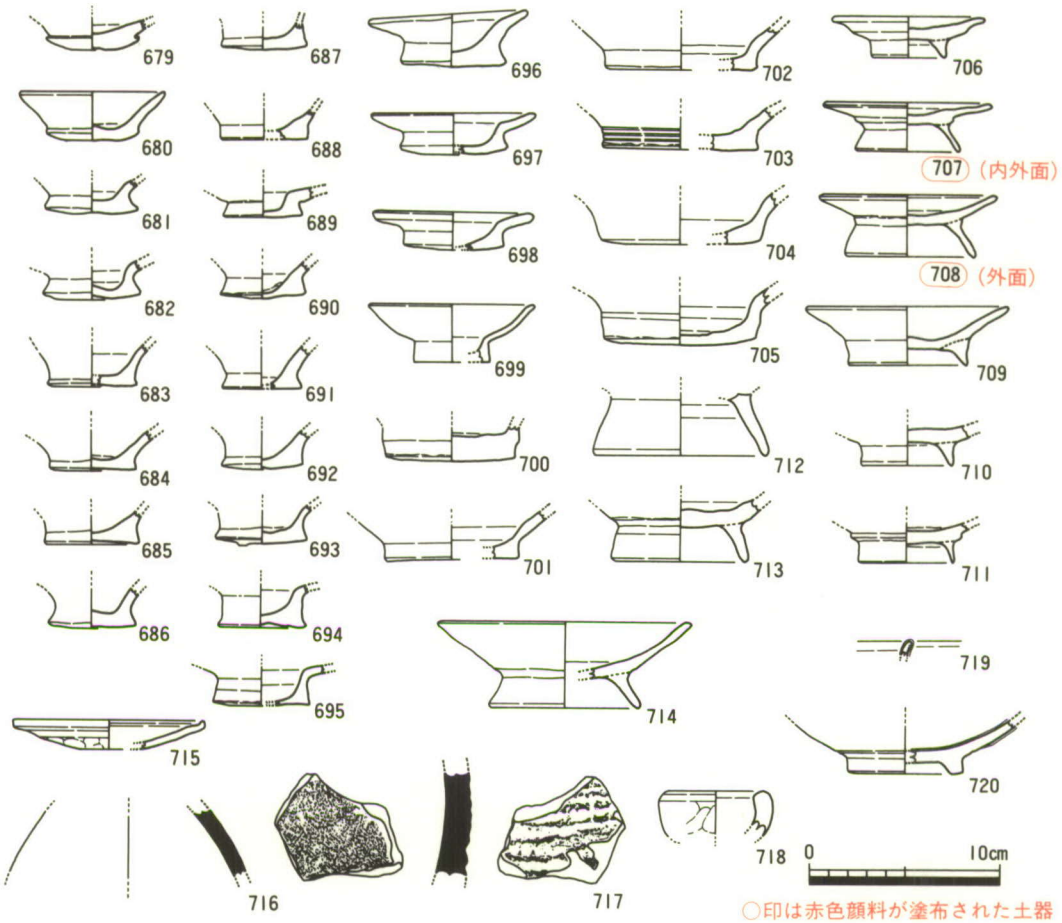
719･720は輸入磁器である。719は口縁端部を玉縁状にするもので，白磁椀Ⅳ類である。 720は高台を方形に削りだしているもので，釉は高台部以外にかけられている。白磁椀Ⅳ類である。



第93図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑬



第94図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑭



第95図　ＳＤ10上層出土遺物実測図⑮

SD10第1溝第1砂層（第80・96～98図）

721～770は第1溝第1砂層より出土したものである（第96図～98図）。

721～728は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされており，体部は外上方に短く延びる。729～732は土師器の坏である。底部はヘラ切りされており，体部は内彎気味に外上方に延びる。

733は円盤状高台の坏か椀である。底部はヘラ切りされている。

734は脚付きの坏である。高台はやや高めで，坏部の器高はやや低い。

735～742は黒色土器椀である。735～741は黒色土器A類椀で，742だけがB類椀である。底部にしっかりした高台が付き，体部は内彎気味に外上方に延び，口縁端部は丸くおさめている。体部内面のヘラ磨き調整は4～6の分割磨きが認められる。体部外面はやや太めのヘラ磨きが施されている。742は底部に小さい高台が付くもので，内面にはヘラ磨きが施されている。

743～749は土師器椀である。底部にしっかりした高台が付き，体部は内彎気味に外上方に延び，口縁端部は外方に小さく屈曲させている。体部内外面にヘラ磨きが密に施されている。

750～756は須恵器である。

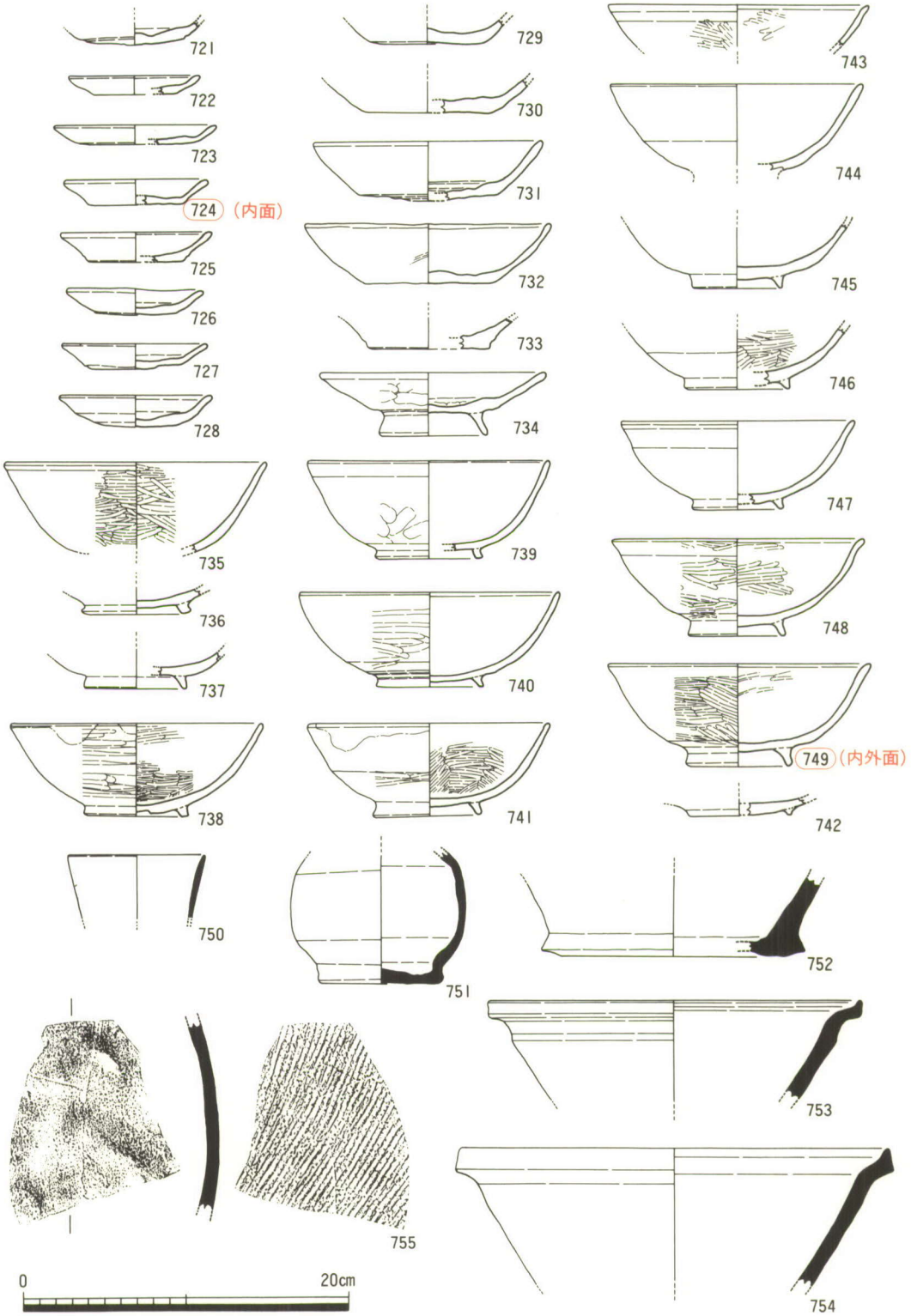
750～752は壺である。750は直口壺であろうか。751は底部が円盤状を呈しており，体部が内彎気味に延びる壺である。底部はヘラ切りされている。752は壺の底部と思われる。

753・754は鉢である。口縁部で外方に屈曲し，端部を上方につまみ上げるものである。焼成が他の須恵器と違い，やや軟質に仕上げられている。754はいわゆる瓦質土器である。

755・756は甕である。頸部で「く」の字に屈曲し，やや外反しながら外上方に延び，口縁端部は下方に鋭くつまみ出している。体部外面には格子叩きが，内面には指なでが認められる。

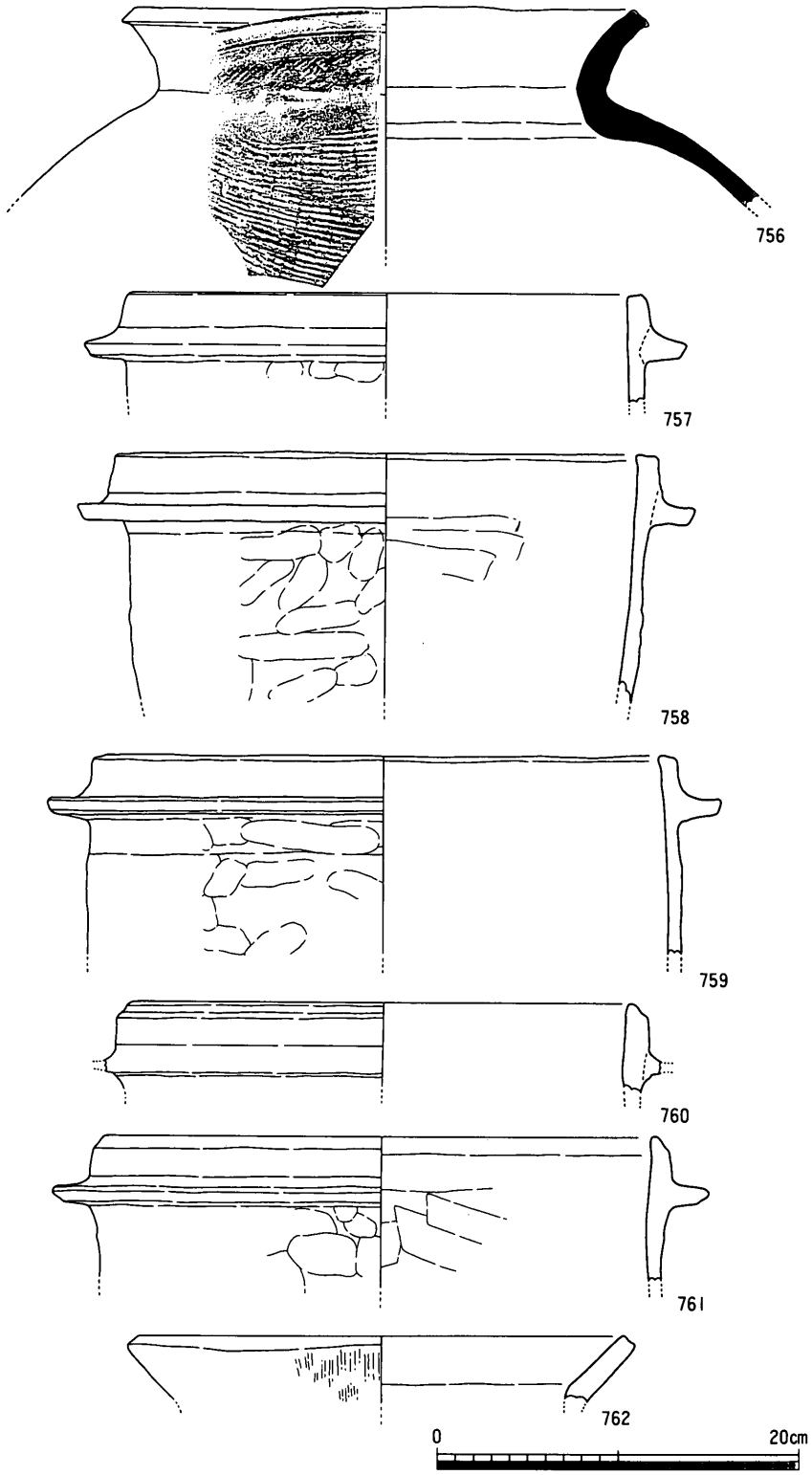
757～761は土師質の土釜である。外面口縁部付近に鍔が付き，口縁部が短く延びる。口縁端部は平らな面を持つものと，内方を丸くつまみ出すものがある。体部は長胴を呈する。761はつまみ出した口縁端部を内方に小さく屈曲させるものである。

762～770は土師質の土鍋である。頸部が「く」の字に外方に屈曲し，短く延びるものとやや長く延びるものがある。口縁端部は丸くおさめるものと平らな面を持つものがある。体部外面には縦方向の刷毛目が施されている。体部は長胴を呈している。

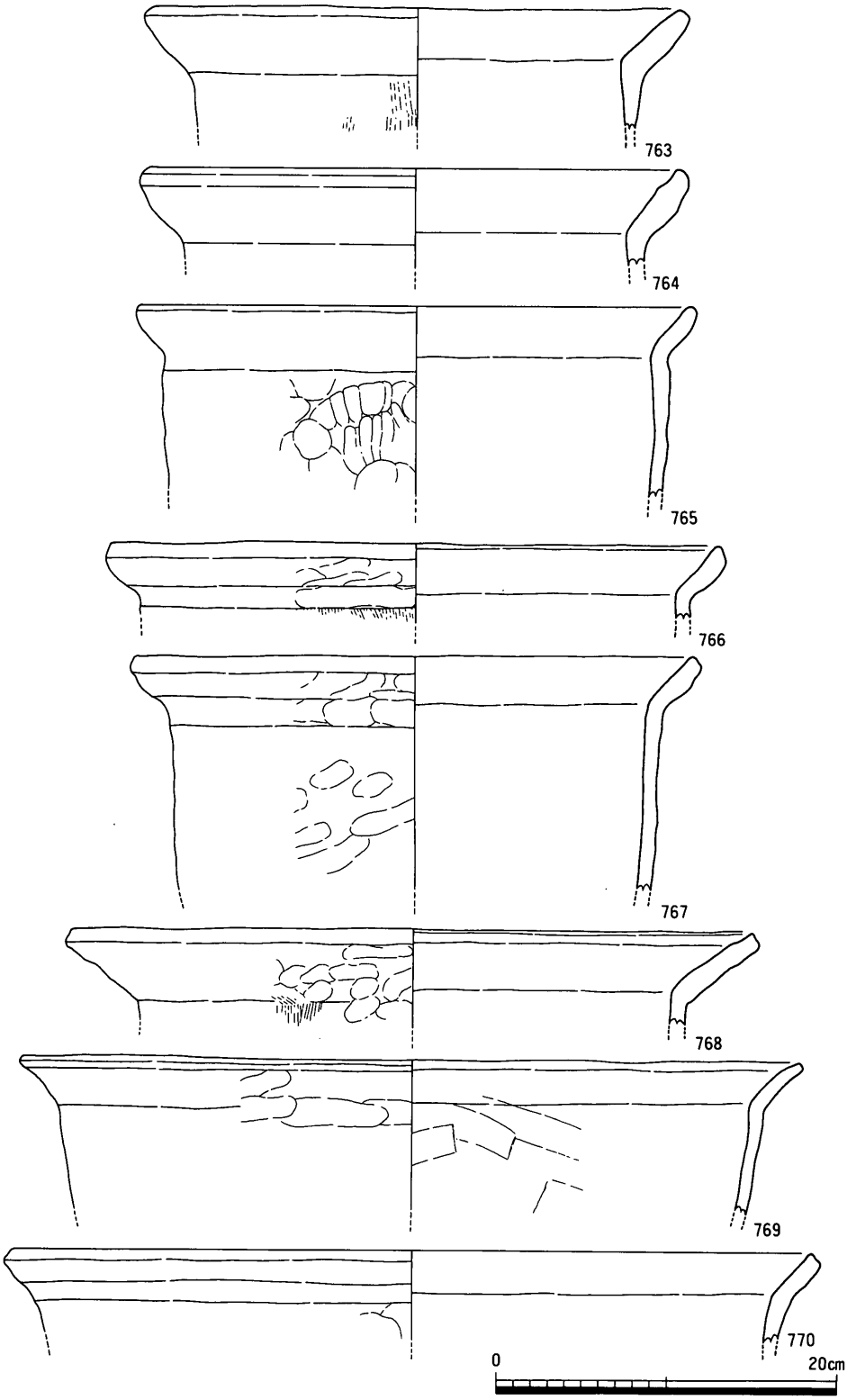


○印は赤色顔料が塗布された土器

第96図　ＳＤ10第１溝第１砂層出土遺物実測図①



第97図　ＳＤ10第Ｉ溝第Ｉ砂層出土遺物実測図②



第98図　ＳＤ10第Ⅰ溝第Ⅰ砂層出土遺物実測図③

SD10　第1砂層と第2砂層の間の層（第80・99図）

774～779は第1溝第2砂層と第1溝第1砂層の間の層から出土したものである（第99図）。

774は土師器の小皿である。

775は土師器の坏である。

776は土師質の蛸壺かと思われる。体部は丸味を持ち，頸部は「く」の字に外方に屈曲し，口縁部はやや内彎気味に丸くおさめている。体部内外面には指なでが顕著に認められる。真蛸壺か。

778は土師質の土鍋である。

779は土師質の土釜である。鍔の下部と口縁端部の外面には段が認められる。

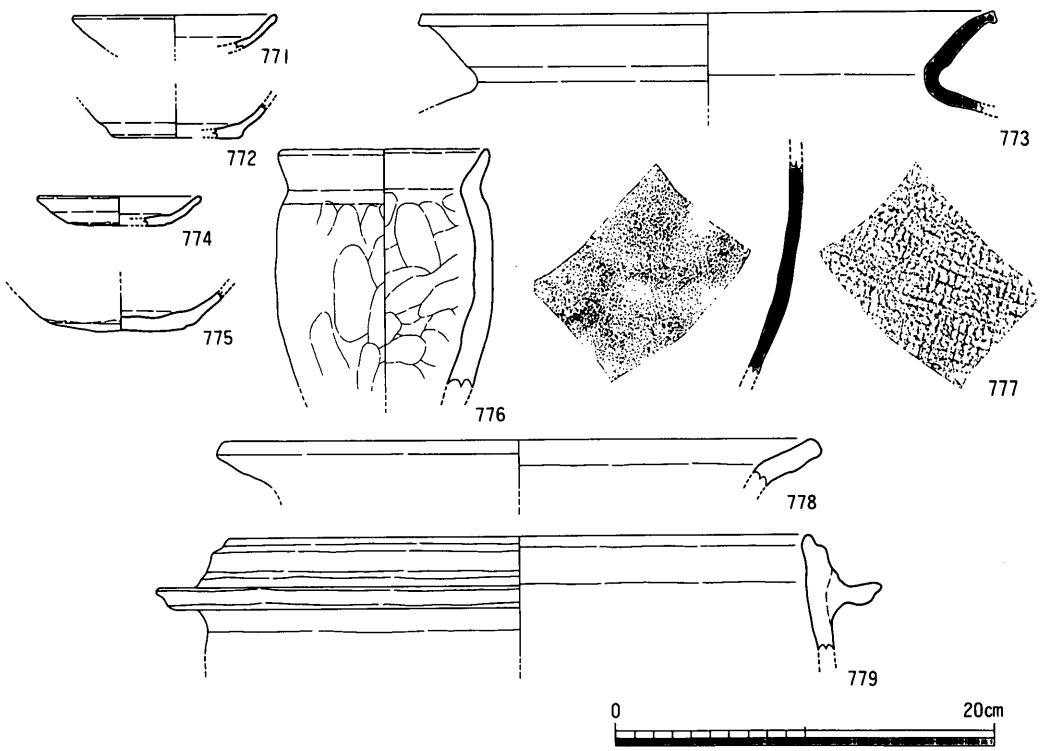
SD10　第1溝第2砂層（第80・99図）

771～773は第1溝第2砂層出土遺物である（第99図）。

771は土師器の小皿である。器高がもう少し深くなれば坏の可能性も考えられる。

772は坏である。底部はヘラ切りされている。

773は甕である。頸部が「く」の字に屈曲し，やや外反しながら口縁部へと延びるもので，口縁端部は下方に三角形状につまみ出している。



第99図　ＳＤ10第１溝第１砂層・第１砂層と第２砂層の間・第１溝第２砂層出土遺物実測図

SD10第2溝（第80・100～104図）

780～792は第2溝第1層から出土した遺物である（第100図）。

780は京都系の「て」の字状口縁の小皿である。底部外面に指頭痕が見られる。

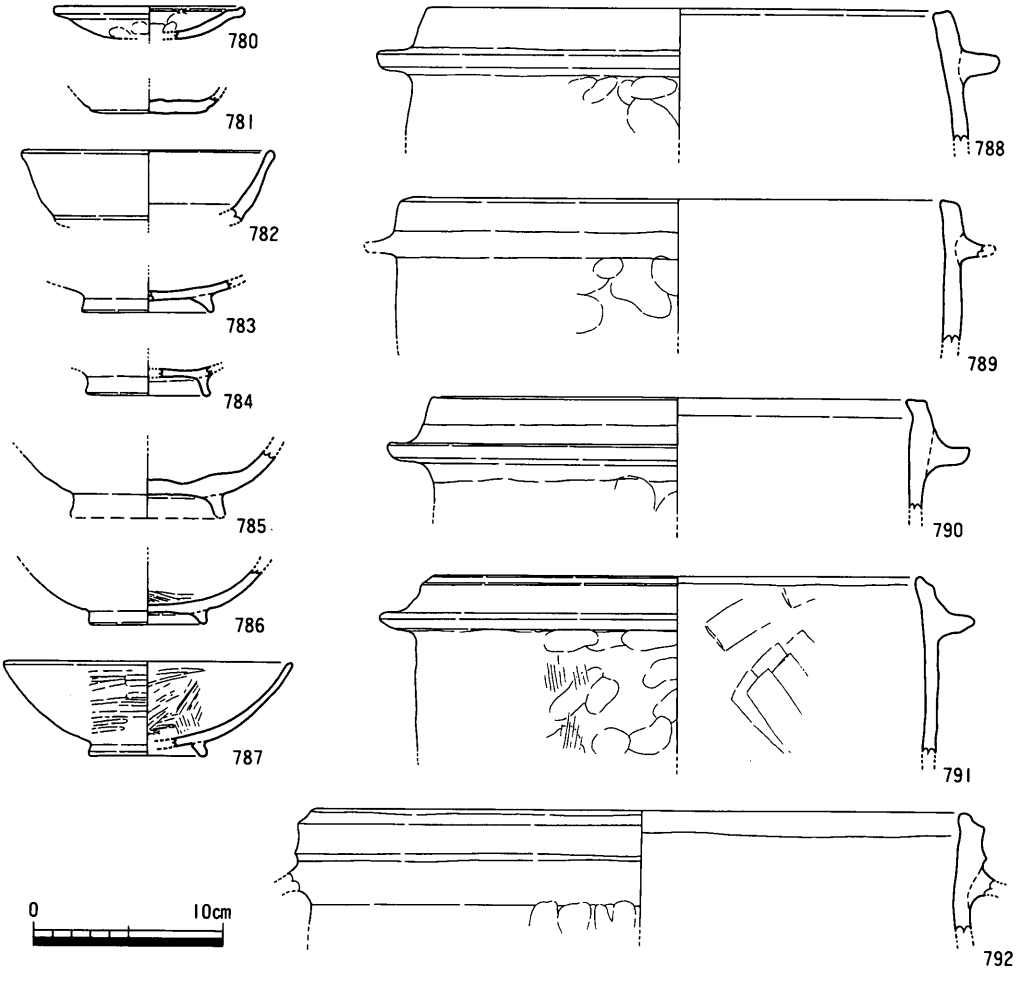
781・782は土師器坏である。底部はヘラ切りされている。

783～785は土師器椀である。底部にはしっかりした高台が付くものである。

786･787は黒色土器A類椀である。787の底部には外方に踏張ったしっかりした高台が付き，体部は内彎気味に外上方に延びる。体部内外面にはやや太めのヘラ磨きが施されている。788～792は土師質の土釜である。しっかりした鍔が付くもので，鍔からの立ち上がりがやや長く，口縁部はそのまま終わらせるものと内方につまみ出すものが見られる。

793～817は第2溝第2層より出土した遺物である。

793～796は土師器の小皿である。底部はすべてヘラ切りされている。



第100図　ＳＤ10第2溝第1層出土遺物実測図

797・798は土師器の坏である。797は口径がやや小さいものである。底部と体部の境に明瞭な稜を持ち，体部は直線的に外上方に延び，口縁部が外反する。

799は底部が円盤状高台を呈した小型の坏である。底部はヘラ切りされている。

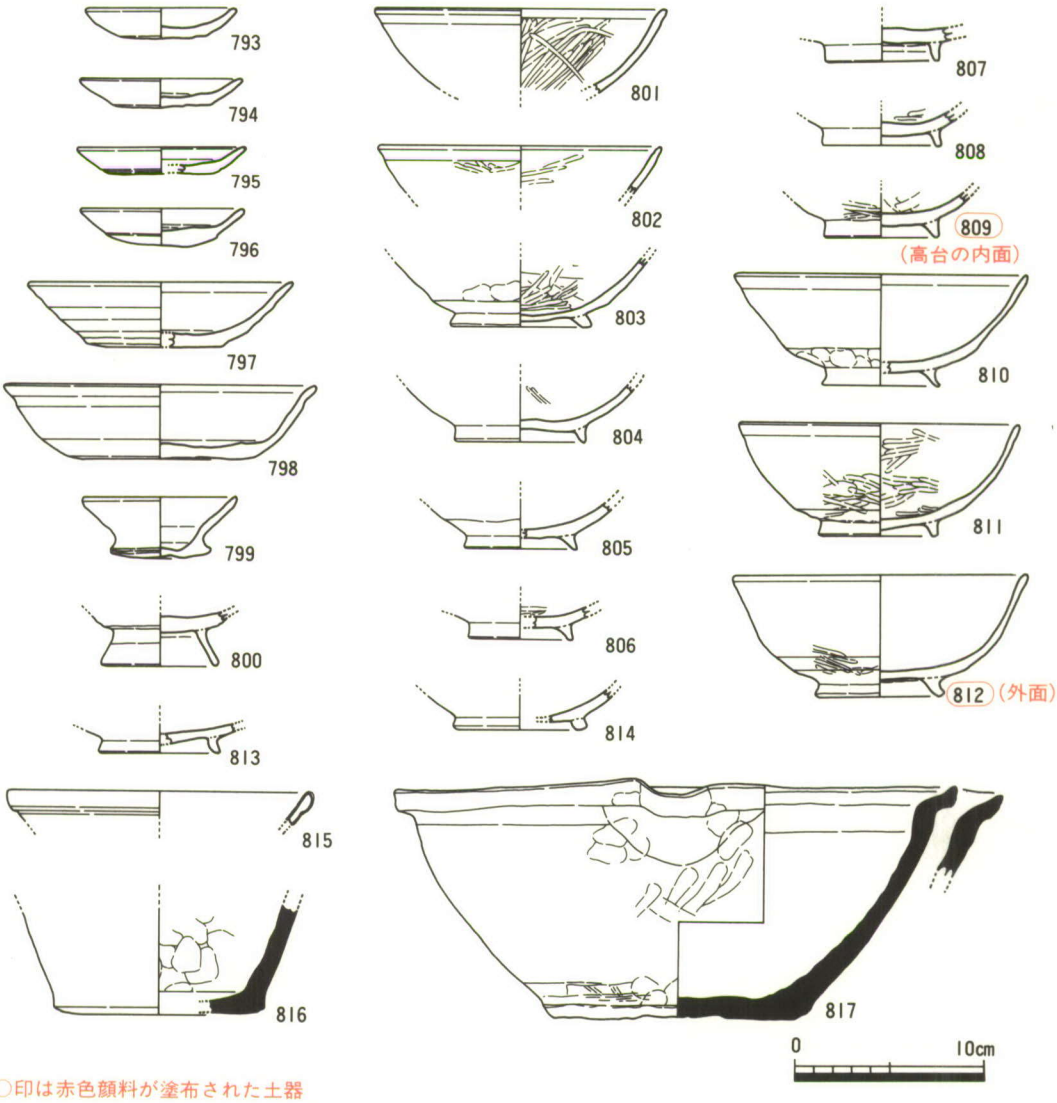
800は高台が高い土師器の坏か小皿である。

801～812は土師器の椀である。底部にはしっかりした高台が付く。体部内外面にはヘラ磨きが顕著に施されている。また，体部外面下半には指頭痕が見られるものもある。

813・814は黒色土器A類椀である。

815は輸入磁器である。口縁部外面を玉縁状にする白磁椀Ⅳ類かと思われる。

816・817は須恵器である。816は壺の底部である。体部内面に指頭痕が顕著に施されている。817



○印は赤色顔料が塗布された土器

第101図　ＳＤ10第２溝第２層出土遺物実測図

は片口のこね鉢である。やや軟質に焼成されている。体部はやや内彎し，口縁部は外方に屈曲させ，上方につまみ上げている。

818～841は第2溝第3層から出土した遺物である（第102図）。

818～820は土師器の小皿である。

821～824は土師器の坏である。

825は底部が円盤状を呈した土師器の坏である。

826～830は土師器の椀である。830は底部にしっかりした高台が付き，体部は内彎しながら外上方に延び，口縁部を外方に折り曲げる。体部内外面にはヘラ磨きが顕著に認められる。

831・832は黒色土器A類椀である。

833は黒色土器B類椀である。体部内面には細いヘラ磨きが認められる。

834～837は須恵器である。835・836は甕で体部外面には格子叩きが，内面は指なでが施されている。837は壺の底部である。

838は土師質の土釜である。

839～841は土師質の土鍋である。839は頸部の屈曲部に明瞭な稜を持たない。

842～859は第2溝第4層から出土した遺物である。

842～846は土師器の小皿である（第103図）。

847・848は土師器の坏である。

849は底部が円盤状高台を呈した土師器の坏である。

850～853は土師器椀である。852・853は体部外面に指頭痕が，内面に板なでが顕著に認められる。854は畿内産の瓦器椀である。体部外面はやや粗く，内面には密にヘラ磨きが施されている。855は須恵器の甕である。体部外面には格子叩きが，内面は指なでが施されている。

856は土師質の土釜である。

857～859は土師質の土鍋である。857は体部がやや傾斜する。

860～868は第2溝第5層（砂層）から出土した遺物である（第104図）。

860は土師器の小皿である。

861～863は土師器の坏である。861は器高がやや低く，口径もやや小さい。

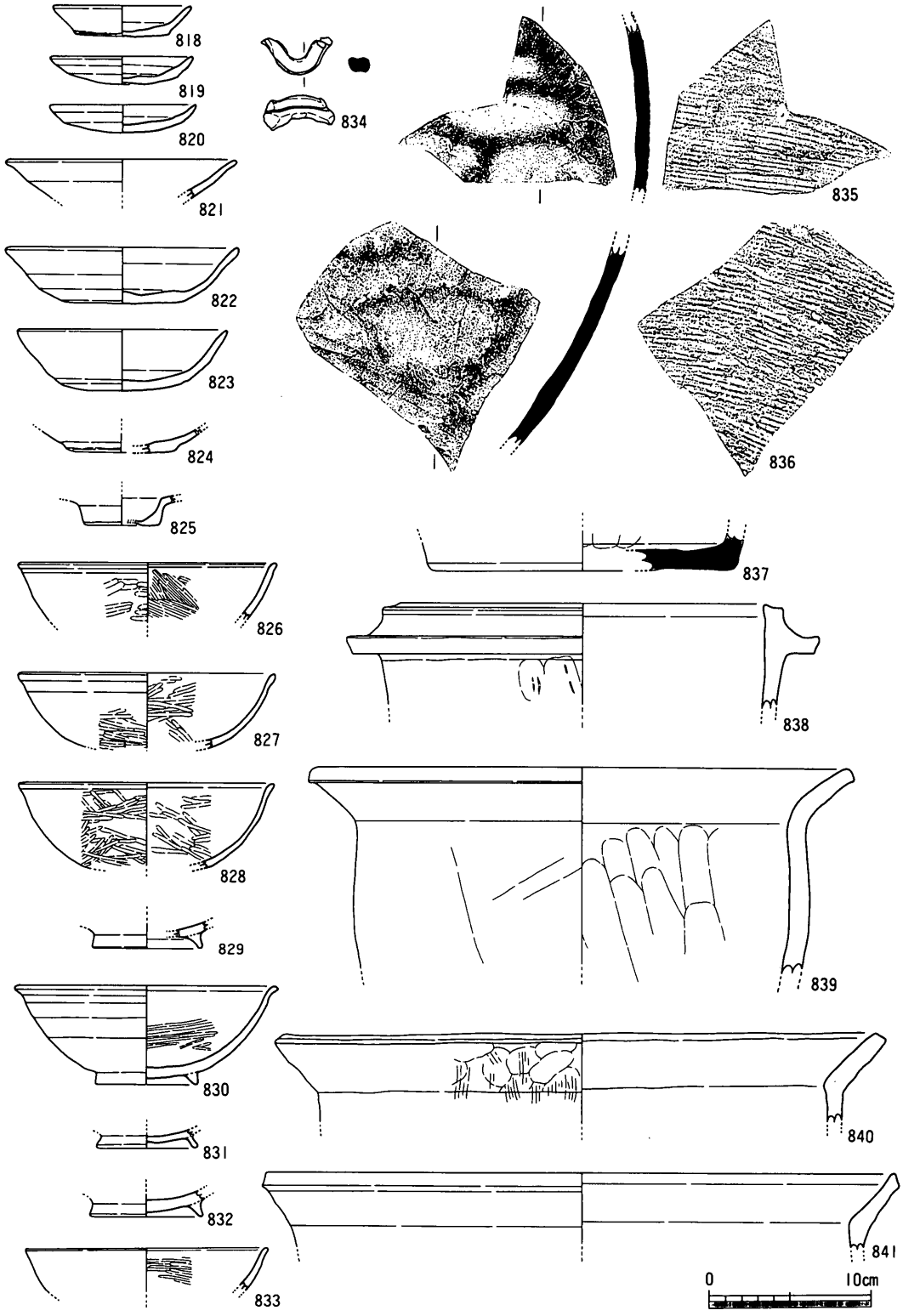
864は土師器椀である。体部内外面にやや太めのヘラ磨きが施されている。

865は黒色土器A類椀である。

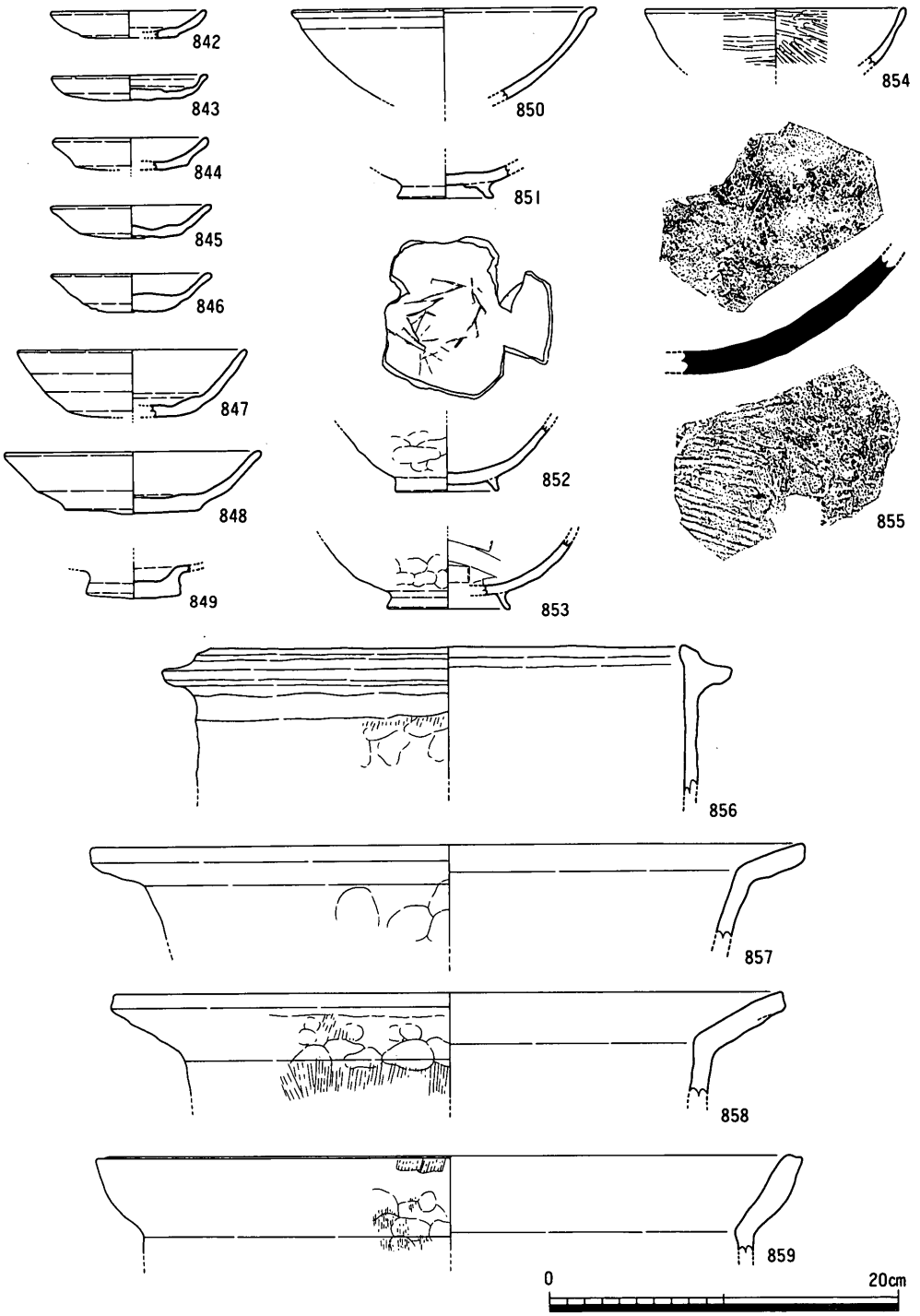
866は須恵器の甕である。体部外面には格子目叩きが，内面には指なでが施されている。

867は土師質の蛸壺である。口縁が外方に短く屈曲するもので，体部はやや彎曲し，底部は尖底を呈している。体部内外面には板なでと指なでが顕著に認められる。

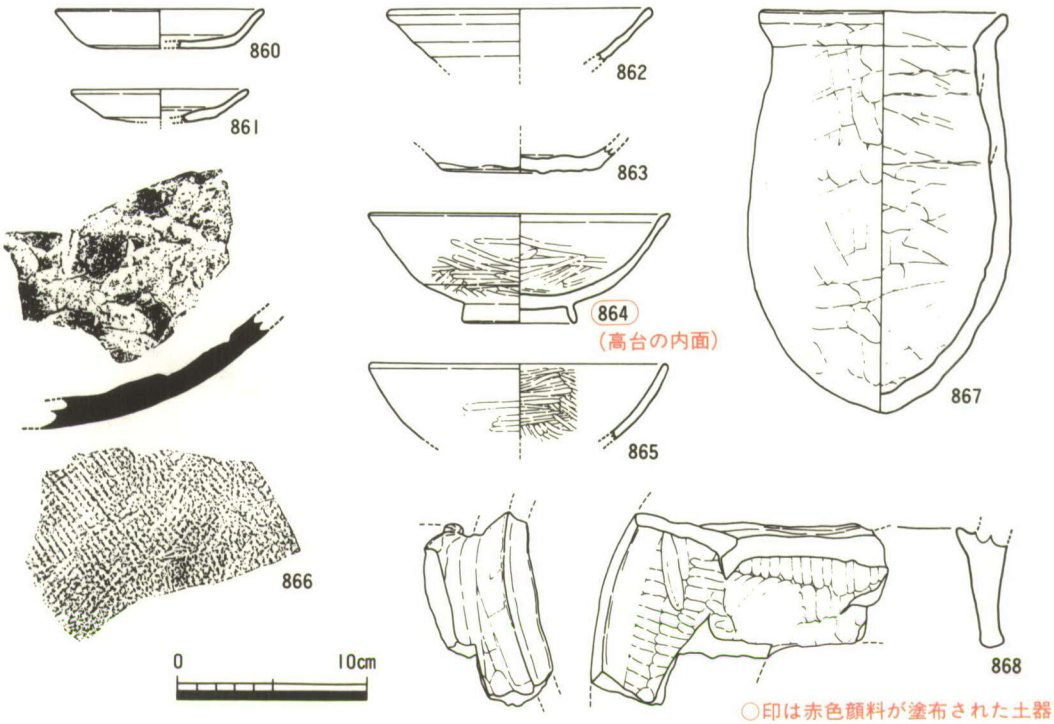
868は土師質の竈である。



第102図　ＳＤ10第２溝第３層出土遺物実測図



第103図　ＳＤ10第２溝第４層出土遺物実測図



第104図　ＳＤ10第２溝第５層（砂層）出土遺物実測図

SD10最下層（第80・105図）

869～872は坏である。869はやや小型のもので，その他のものは口径が約11.0cmのものである。底部と体部の境にははっきりした稜を持たない。

873～875は円盤状高台をもつ坏・椀である。873は底径がやや小振なので円盤状高台の小皿の可能性も考えられる。875は器高が低いので，円盤状高台坏である。

876・877は土師器の椀である。876は底部にしっかりした高台を持ち，腰の張った内彎する体部から口縁部へと延びる。口縁端部外面には横なでが施されている。877は緻密な胎土を持ち，色調も少し橙色がかってはいるが白色の上質のものである。

878～881は黒色土器である。すべて内面だけに炭素を吸着させたA類である。

882は畿内産の瓦器である。口縁部外面に横なでが，内面に沈線が施されている。広義の和泉産のものであろうか。

883は須恵器の椀である。底部はヘラ切りされ，体部はやや内彎気味に外上方に延び，口縁端部は丸く終わらせる。十瓶山周辺窯のものと思われる。

884～890は外面口縁部付近に鍔の付いた土師質の土釜である。鍔の上部で外方に屈曲するものとそのまま平らな面を残しながら終わらせるものと，口縁端部を内方に短く屈曲させるものがある。胴部はやや長めの長胴型を呈するものと思われる。体部外面には縦方向の刷毛目が見られる。891・892は土師質の土鍋である。頸部を外方に「く」の字に屈曲させる，胴部は長胴型を呈するものである。

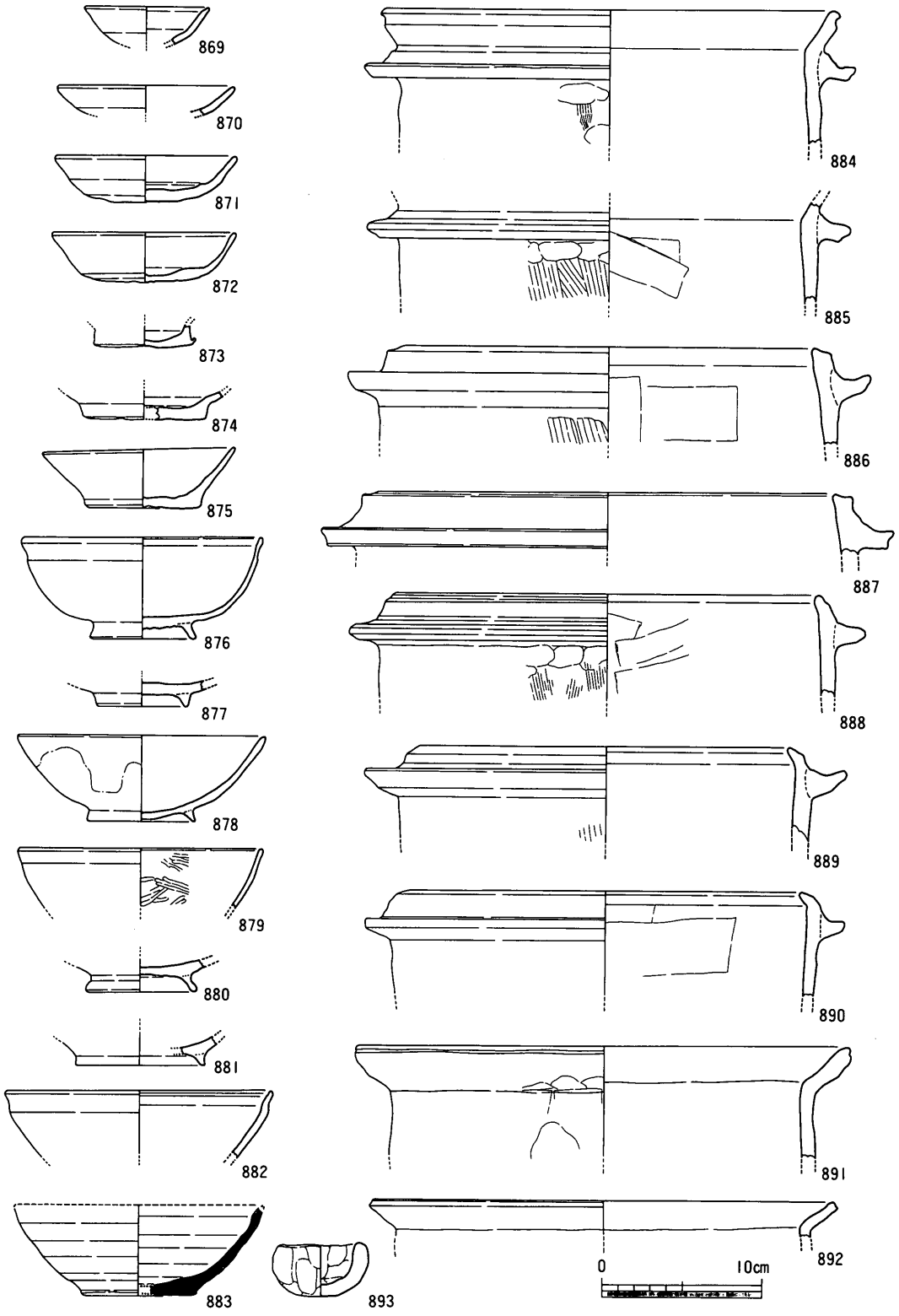
893は弥生時代の小壺と思われる。

SD10出土石製品（第106・107図）

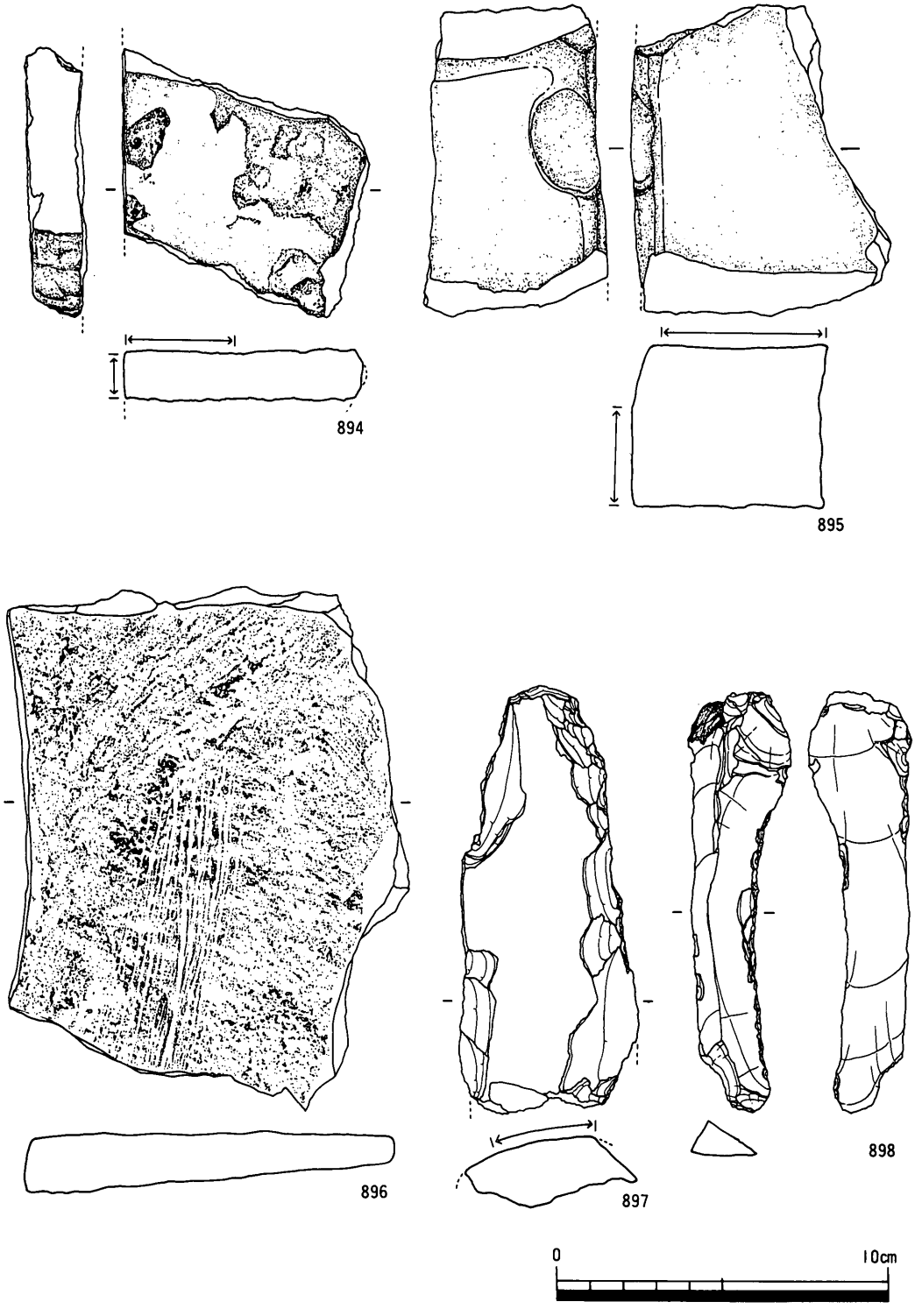
894～901はSD10出土の石製品である。

894は砂岩製の砥石である。2辺は欠損しているが，その他の2辺には磨痕が認められる。895は砂岩製の磨石である。896は安山岩製の砥石である。ほぼ中央部に線刻状の溝が見られることから，おそらく先端の尖ったものを磨いたものと思われる。897は緑泥片岩製の磨製石斧である。先端部が欠損している。898はサヌカイト製のスクレイパーである。形態は鎌状を呈しており，刃部は内彎する側に作られている。縦長剥片を素材とした鎌状のスクレイパーである。899はサヌカイト製のナイフ形石器である。900はサヌカイト製の大型剥片である。上部と下部に小型の剥片をとった痕跡が認められることから小型製品の剥片を取る母岩の可能性が考えられる。901はサヌカイト製のスクレイパーである。

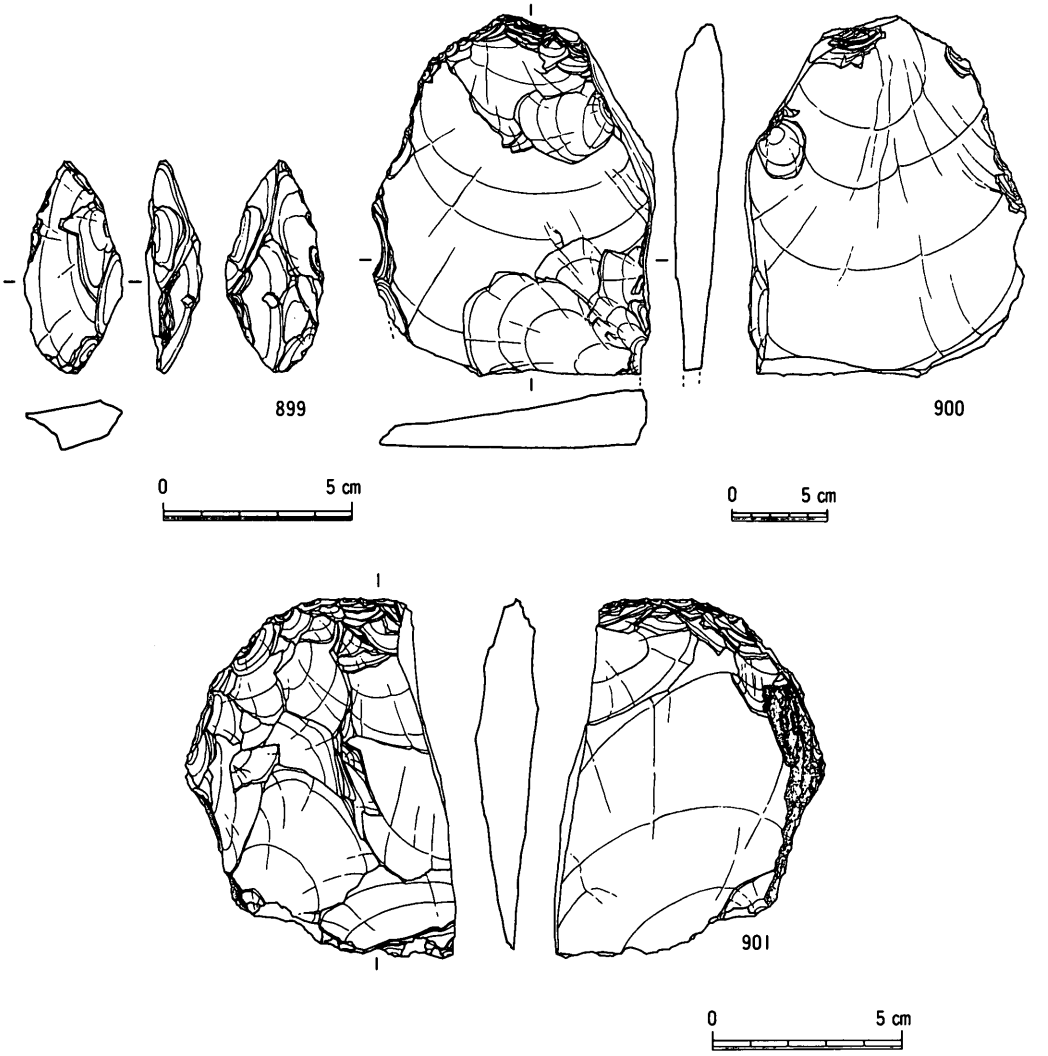
註1　『瀬戸大橋に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会　1990.3



第105図　ＳＤ10最下層出土遺物実測図



第106図　ＳＤ10出土遺物実測図（石製品）①



第107図　ＳＤ10出土遺物実測図（石製品）②

4．まとめ（第108・109図）

川津元結木遺跡で検出された遺構を共伴遺物などから各時期ごとに分け，その様相を述べることでまとめにかえたい。

川津元結木遺跡で検出された遺構は弥生時代前期から中世までである。それらを各時期ごとに分けると弥生時代前期（Ⅰ－①期），弥生時代後期（Ⅰ－②期），古墳時代後期（Ⅱ－①～⑥期），12世紀以降（Ⅲ－①，②期）の11の時期に分けられる。

－Ⅰ－①期－

Ⅰ－①期は弥生時代前期である。第3調査区で溝（SD12）が検出されているが残りが悪く，全容は不明である。

遺物は石製品がかなり多く，特にサヌカイト製の打製石斧が多い。土器は口縁部が如意状を呈した甕が出土し，逆Ｌ字状口縁の甕が一点も認められないことから弥生時代前期でも新段階以前の時期であることが判る。

－Ⅰ－②期－

Ⅰ－②期は弥生時代後期である。

下川津遺跡の弥生時代後期の編年に照らしあわせて時期を決定すると，Ⅰ－②ａ期は下川津遺跡Ⅳ式に併行するものと思われる。

検出された遺構は竪穴住居2棟（SH05・SH06），溝2条（SD04・SD11）がある。竪穴住居は第2調査区の南端部で検出されている。SD04は第1調査区と第2調査区にまたがりほぼ流路を南北に取るように検出されており，ちょうどSH05･SH06の間を流れていたようである。SD11は第3調査区で流路を東西に取るように検出されている。しかし，第2調査区と第3調査区の検出面にかなり差があるためにSD04が第3調査区で検出されておらず両者の関係は不明である。竪穴住居SH05･06とも隅丸方形を呈しており，出土遺物からもほぼ同時期と思われ，また，溝とも同時期であることが判る。

－Ⅱ－①～⑥期－

Ⅱ期は古墳時代後期の遺構である。ここで古墳時代後期を①～⑥に分けたのはそれぞれの遺構に伴う遺物があまりなく，時期決定の出来る遺構を基準に遺構の切り合いで前後関係を出したためである。

Ⅱ－①期

Ⅱ－①期には主軸を真北より10°前後西偏させる掘立柱建物SB05･06･15が検出されている。柱穴掘り形がやや大型の隅丸方形を呈するものである。

Ⅱ－②期

Ⅱ－②期にはほぼ真北に主軸を持つ竪穴住居SH01が検出されている。全体にかなりの削平を受

けているが，ほぼ方形の竪穴住居で東壁際に焼土が見られるものの竈があったかどうかは不明である。

II－③期

II－③期には主軸が真北より約35°西偏している竪穴住居SH02が検出されている。全体にかなりの削平を受けており，一部壁溝と主柱穴を残すのみであるが形態はほぼ方形を呈するものと思われる。北壁際に焼土が認められる。

II－④期

II－④期には主軸を真北より約22°西偏している竪穴住居SH03・04が検出されている。この2棟の竪穴住居は切り合いがあるがほとんど時期差が考えられないもので，SH03より出土した遺物より6世紀末頃に比定できよう。形態は方形を呈するもので，北壁に造り付けの竈が認められる。

川津元結木遺跡で造り付けの竈を持つ竪穴住居が出現するのはほぼ6世紀末頃からである。

II－⑤期

II－⑤期にはほぼ円形で大きめの掘り形を持つ掘立柱建物SB01・02・04が検出されている。柱穴埋土より7世紀前半の遺物が出土している。

II－⑥期

II－⑥期にはほぼ真北に主軸を持つ掘立柱建物SB07・13・14が検出されている。方形でやや大きめの掘り形を持つものである。

以上述べたように7世紀前後の時期に何回かの立て替えがあったものと思われるが，調査面積が少なかったために全体像をつかむまでには至っていない。

－III－①・②期－

III－①期

III－①期には掘立柱建物SB03・08・09・10・16・17，土坑SK01・02，柵列SA01～04，溝SD01・07～10が検出されている。

掘立柱建物は柵列SA01・02で区画されたものとそれ以外のものがあるようである。

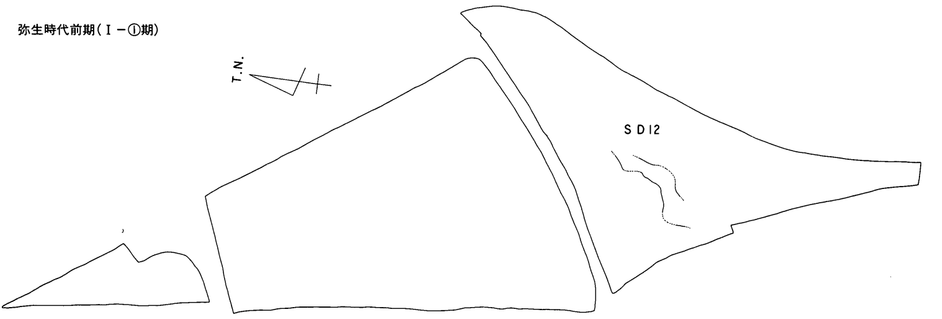
掘立柱建物はSD01・09・10に囲まれているものと思われる。東西は不明であるが南北は約54.8mである。

遺物からは12世紀頃の遺構と思われる。

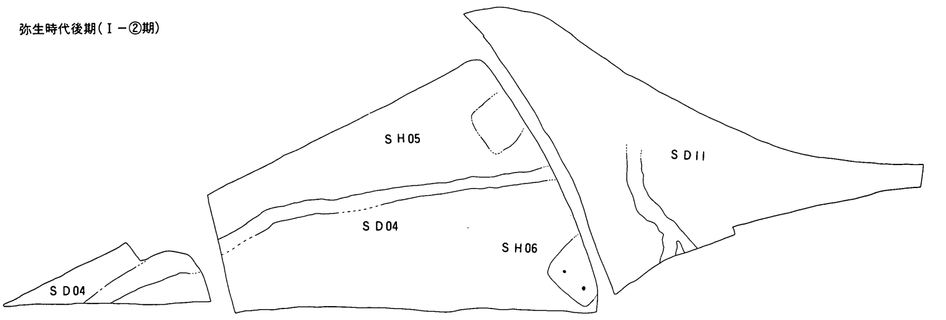
III－②期

III－②期には主軸をN－40°－W前後に持つ掘立柱建物SB11・12が検出されている。

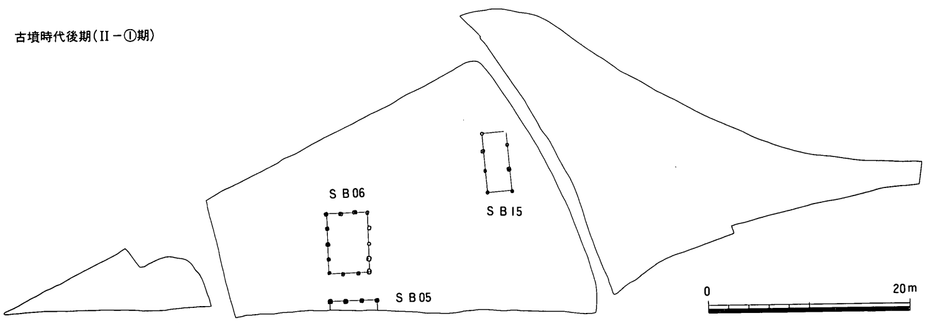
弥生時代前期(Ⅰ－①期)



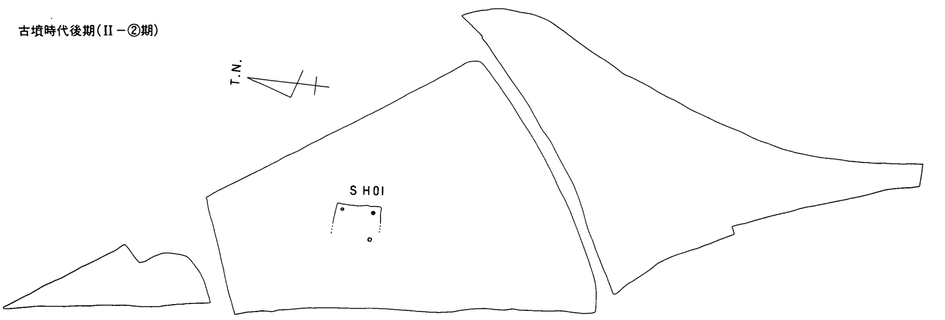
弥生時代後期(Ⅰ－②期)



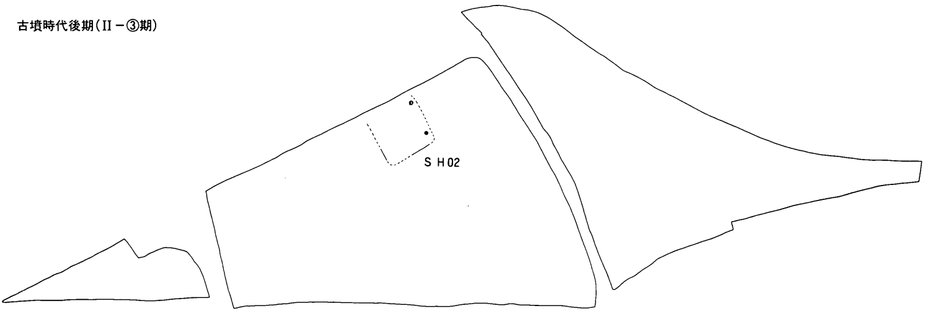
古墳時代後期(Ⅱ－①期)



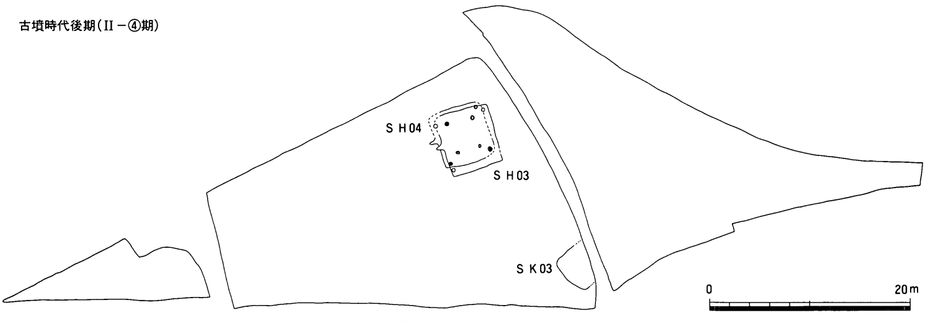
古墳時代後期(Ⅱ－②期)



古墳時代後期(Ⅱ－③期)



古墳時代後期(Ⅱ－④期)



第108図　川津元結木遺跡遺構変遷図①

第109図　川津元結木遺跡遺構変遷図②

第4章　自然化学分析

坂出市川津町川津元結木遺跡出土の土器に付着の赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部
安田博幸　森眞由美

川津元結木遺跡の溝の遺構より12世紀（平安末～鎌倉時代）の高台付の椀（土師器）が出土した。それらの椀には，痕跡程度にではあるが赤色顔料の塗布痕の残存が見られる。今回，それらの赤色顔料について，化学分析による鑑定を依頼されたので，筆者等の常法[1]とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない，所見を得たので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

試料31…土師器椀の高台内面に付着した赤色顔料　SD10第2溝第104図864

試料42…土師器椀の高台内面に付着した赤色顔料　SD10第2溝第101図809

試料19…土師器小皿の内面に付着した赤色顔料　SD10第1溝第1砂層第96図724

試料32…土師器椀の内面に付着した赤色顔料　SD10第2溝第101図812

試料A…黒色土器外面に付着した赤色顔料　SD10上層第84図584

試料B…土師器椀内外面に付着した赤色顔料　SD10第1溝第1砂層第96図749

上記の各試料上に残存する僅微な赤色顔料を，調査担当者の指示する箇所より鋼針を用いて0.1mg削り取ったものを分析用試料とする。椀の内面より採集した分析試料にａ，椀の外面より採集した分析試料にｂ，高台部の内面より採集した分析試料にｃを付記する。

試料検液の作製

上記の分析用試料のそれぞれをガラス尖形管に移し，濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え，加温し，酸可溶性成分を溶解させたのち，適当量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ，酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して，ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。試料検液の番号は，試料番号にそれぞれ対応させ，採取箇所のａ，ｂ，ｃを付記する。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No.51B（2cm×40cm）を使用し，ブタノール硝塩酸を展開溶媒として，試料検液と対照の鉄イオン（Fe^{3+}）と水銀イオン（Hg^{2+}）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し，その一方は検出試薬として1％ジフェニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し，もう一方には検出試薬として，0.05％ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して，それらの際に，ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は，下記の表1，表2のとおりである。

(1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：（Hg^{2+}は紫色，Fe^{3+}は紫褐色のスポットとして検出される。）

表1　ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と同色

試　　料	Rf値（色調）
試料検液31－a	0.12（紫褐色）
試料検液31－c	0.11（紫褐色）
試料検液42－a	0.11（紫褐色）
試料検液42－b	0.10（紫褐色）
試料検液19－c	0.10（紫褐色）
試料検液32－a	0.12（紫褐色）
試料検液32－b	0.12（紫褐色）
試料検液32－c	0.12（紫褐色）
試料検液A－a	0.12（紫褐色）
試料検液B－b	0.12（紫褐色）
Fe^{3+}標準液	0.12（紫褐色）
Hg^{2+}標準液	0.90（紫色）

(2) ジチゾンによる検出：(Hg^{2+}は橙色スポットとして検出され，Fe^{3+}は反応陰性のため呈色せず。)

表2　ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

試　　料	Rf値（色調）
試料検液31－a	呈色スポット発現せず
試料検液31－c	呈色スポット発現せず
試料検液42－a	呈色スポット発現せず
試料検液42－b	呈色スポット発現せず
試料検液19－c	呈色スポット発現せず
試料検液32－a	呈色スポット発現せず
試料検液32－b	呈色スポット発現せず
試料検液32－c	呈色スポット発現せず
試料検液A－a	呈色スポット発現せず
試料検液B－b	呈色スポット発現せず
Fe^{3+}標準液	呈色スポット発現せず
Hg^{2+}標準液	0.90（橙色）

判定

上記の結果のように，今回提供された12世紀の高台付椀上に残された赤色顔料のすべての分析用試料からは，Hg^{2+}は一切検出されず，すべてFe^{3+}のみが検出された。したがって，試料椀上に残存した赤色顔料は水銀朱（辰砂，HgS）ではなく，すべて，ベンガラ（Fe_2O_3）であったと判定する。

1991年6月分析

〔註〕

1）安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料学」『斎藤　忠編集　日本考古学論集1考古学の基本的諸問題』吉川弘文館　pp.389-407(1986)

安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならび技法の伝流に関する二，三の考察」『橿原考古学研究所論集　第七』吉川弘文館　pp.449-471(1984)

第5章　考察　—古代から中世にかけての土器様相—

1．はじめに

香川県において昭和58年から始まった大規模調査により，香川県の古代から中近世までの様相が（大まかにではあるが）窺える遺構が検出された。また，出土遺物からは各時期の土器編年が確立できるものが多数出土し，なかには地域相まで論じることができるものもある。

特にここでは弥生時代・古墳時代の土器研究に比べてかなり遅れている古代から中世にかけての土器様相を出土資料により考察したい。

古代から中世にかけての土器様相についての考察は，最近活発にはなってきたもののまだ古代讃岐国の土器様相を明らかにするまでには至っていない。そこで研究史を簡単に述べると昭和55年～57年にかけて香川県最大の須恵器生産地である綾歌郡綾南町陶で西村遺跡が調査され，土師器・黒色土器・いわゆる瓦質土器が多数出土した。その資料をもとに廣瀬常雄氏は11世紀から14世紀前後までの土器編年を組みたてている[註1]。また，大門遺跡において野中寛文氏は13世紀後半頃から15世紀頃までの土器編年を試みている[註2]。これ以降古代から中世にかけての土器編年は研究されておらず，まして土器様相まで論じた者がいないのが現状である。筆者も昨年黒色土器の編年を中心に香川県の古代から中世にかけての土器様相を論じた[註3]がまだまだ不十分なところがあることを痛感している。そこでここでは新資料も加え，再度香川県における古代から中世にかけての土器様相を論じたい。

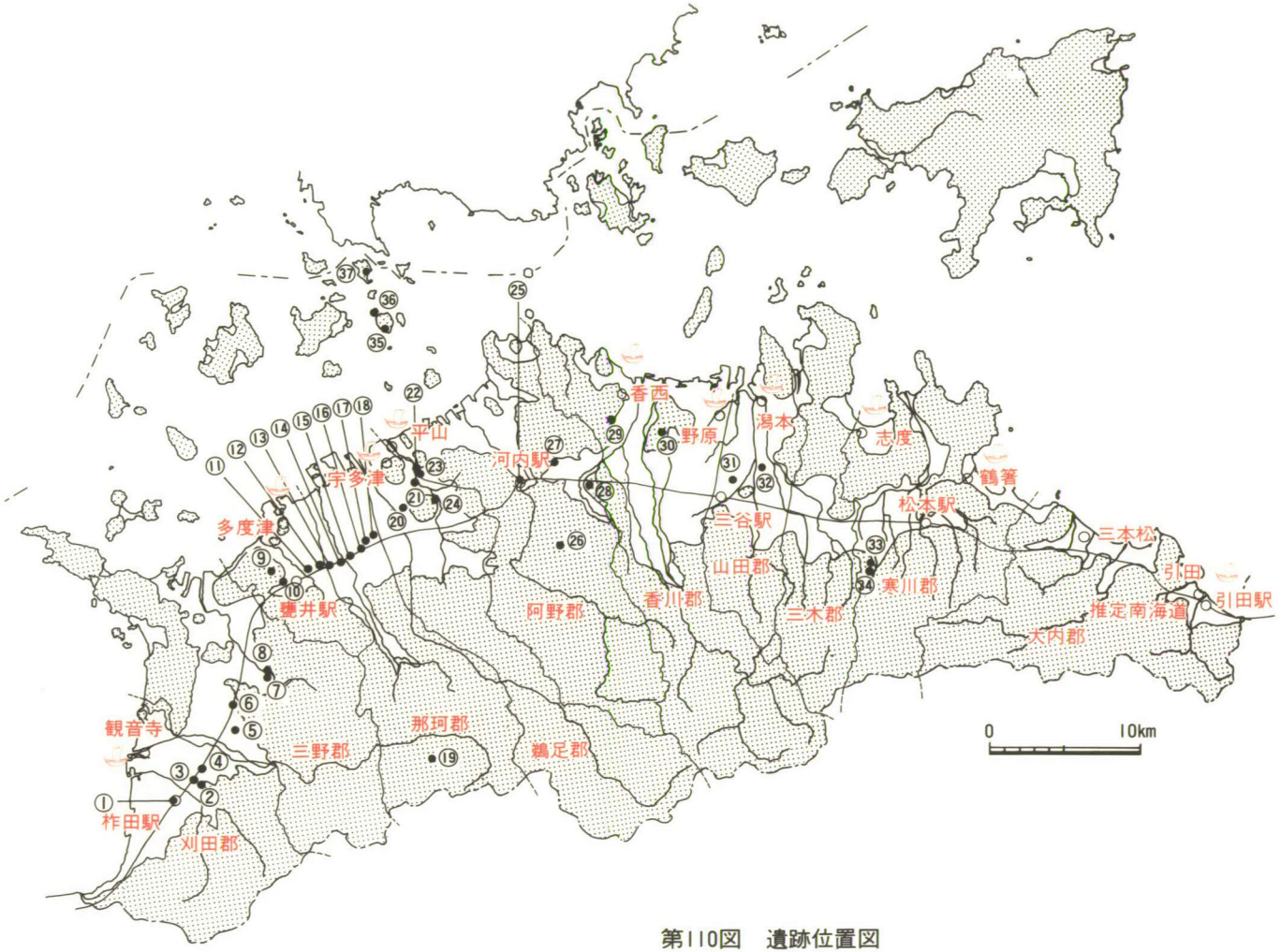
2．各時期の基準資料の検討

土器編年を組みたてるのに先立って，使用した資料（中世前半期まで）を各時期ごとに説明したい（第3表）。

Ⅰ－①期（第111図）

Ⅰ－①期の資料としては，下川津遺跡[註4] SE Ⅲ03，郡家原遺跡[註5] SR05Ⅳ層下層およびⅤ層がある。

1～10は下川津遺跡 SE Ⅲ03出土の遺物である。1～3は須恵器の皿である。1は口径13.2cm，器高1.7cm，底径9.9cmを計るもので底部はヘラ切りされており，体部はほぼ直線的に外上方に延びる。2は口径16.6cm，器高2.0cm，底径13.5cmを計るもので，3は口径18.0cm，器高2.6cm，底径14.8cmを計る。底部調整及び体部の形態は，1とほぼ同様である。この時期では法量で大・中・小が確認されている。4・5は須恵器の坏である。底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外上方に延びる。内外面に火襷が認められる。6は須恵器の壺である。7は土師器坏である。



第110図　遺跡位置図

1．柞田八丁遺跡
2．鑵子塚古墳
3．長砂古遺跡
4．石田遺跡
5．延命遺跡
6．宮脇遺跡
7．矢ノ岡遺跡
8．大門遺跡
9．天霧城跡
10．矢ノ塚遺跡
11．乾遺跡
12．中村遺跡
13．永井遺跡
14．金蔵寺下所遺跡
15．龍川四条遺跡
16．三条番ノ原遺跡
17．郡家原遺跡
18．郡家一里屋遺跡
19．尾ノ背寺跡
20．飯野・東二瓦楽遺跡
21．川津元結木遺跡
22．下川津遺跡
23．川津中塚遺跡Ⅰ・Ⅱ区
24．川津川西遺跡
25．讃岐国府跡
26．西村遺跡
27．讃岐国分寺跡
28．国分寺楠井遺跡
29．平木Ⅰ号墳
30．南山浦古墳群
31．空港跡地（仮称）
32．東山崎・水田遺跡
33．椋ノ木古墳
34．大石北谷古墳
35．塩浜遺跡
36．羽佐島遺跡
37．大浦浜遺跡

口径12.5cm，器高3.2cm，底径5.5cmを計るもので，底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外上方に延びる。いわゆる回転台土師器の坏である。8は土師器椀である。底部にヘラ切り痕が認められる。回転台土師器の椀である。9は土師質の土釜である。水平方向にやや薄い鍔が付くもので，口縁部は欠損しているが外方に屈曲するものと考えられる。10は緑釉陶器である。底部は円盤状高台を呈している。焼成は硬質で，内面見込み部に重ね焼痕が認められる。釉は全面にかけられており，淡黄緑色を呈している。京都産と思われる。

11～18は郡家原遺跡SR05Ⅳ層下層およびⅤ層から出土したものである。11は須恵器の皿である。口径14.2cm，器高1.8cm，底径10.4cmを計る。底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外上方に延びる。12・13は須恵器の坏である。12は口径12.8cm，器高3.4cm，底径6.6cmを計り，13は口径11.8cm，器高3.6cm，底径8.0cmを計る。両者とも底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外上方に延びる。底径と口径の差が大きいもの（12）と小さいもの（13）がある。14は土師器の坏である。口径12.6cm，器高3.2cm，底径6.6cmを計る。底部はヘラ切りされており，体部はほぼ直線的に外上方に延びる。回転台土師器の坏である。15は土師器の椀である。体部と底部の境に断面三角形状の高台を持ち，体部は直線的に外上方に延びる。底部にヘラ切り痕が認められる。回転台土師器の椀である。16は黒色土器A類椀である。底部と体部の境に断面方形の高台を持つもので，体部はやや内彎気味に外上方に延びるものである。わずかに内面にヘラ磨きが認められる。17・18は緑釉陶器である。17は底部が蛇の目高台を呈しており，焼成は硬質である。釉は全面にかけられており，淡黄緑色を呈している。一部ヘラ磨きが認められる。京都産と思われる。18は耳皿である。底部は糸

		遺跡名	註
Ⅰ	①	下川津遺跡ＳＥⅢ03	4
		郡家原遺跡ＳＤ05Ⅳ層下層・Ⅴ層	5
	②	下川津遺跡ＳＥⅢ04	4
		郡家原遺跡ＳＤ05Ⅳ層上層	5
		矢ノ塚遺跡包含層	8
		石田遺跡ＳＤ61	9
		南山浦古墳群11号墳	10
	③	石田遺跡ＳＫ11	9
	④	讃岐国分寺跡ＳＫ25・26	12
		矢ノ塚遺跡包含層	8
Ⅱ		南山浦古墳群11号墳	10
	①	下川津遺跡ＳＤⅢ03・05	4
	②	下川津遺跡ＳＤⅢ75	4
	③	川津元結木遺跡ＳＤ10最下層	19
	④	川津元結木遺跡ＳＤ10第２溝	19
	⑤	川津元結木遺跡ＳＤ10第１溝第１砂層	19
	⑥	川津元結木遺跡ＳＤ10第１溝上層	19
		南山浦古墳群９号墳	10
	⑦		
	⑧	下川津遺跡ＳＤⅢ71	4
	⑨	延命遺跡ＳＤ47・ＳＫ18	25
Ⅲ	①		
	②		
	③	国分寺補井遺跡	45
	④		
	⑤	大門遺跡ＳＤ02	2
	⑥	下川津遺跡ＳＥⅣ02・ＳＤⅣ01	4
	⑦		
	⑧	天霧城跡	35
	⑨		

第３表　各期遺跡一覧

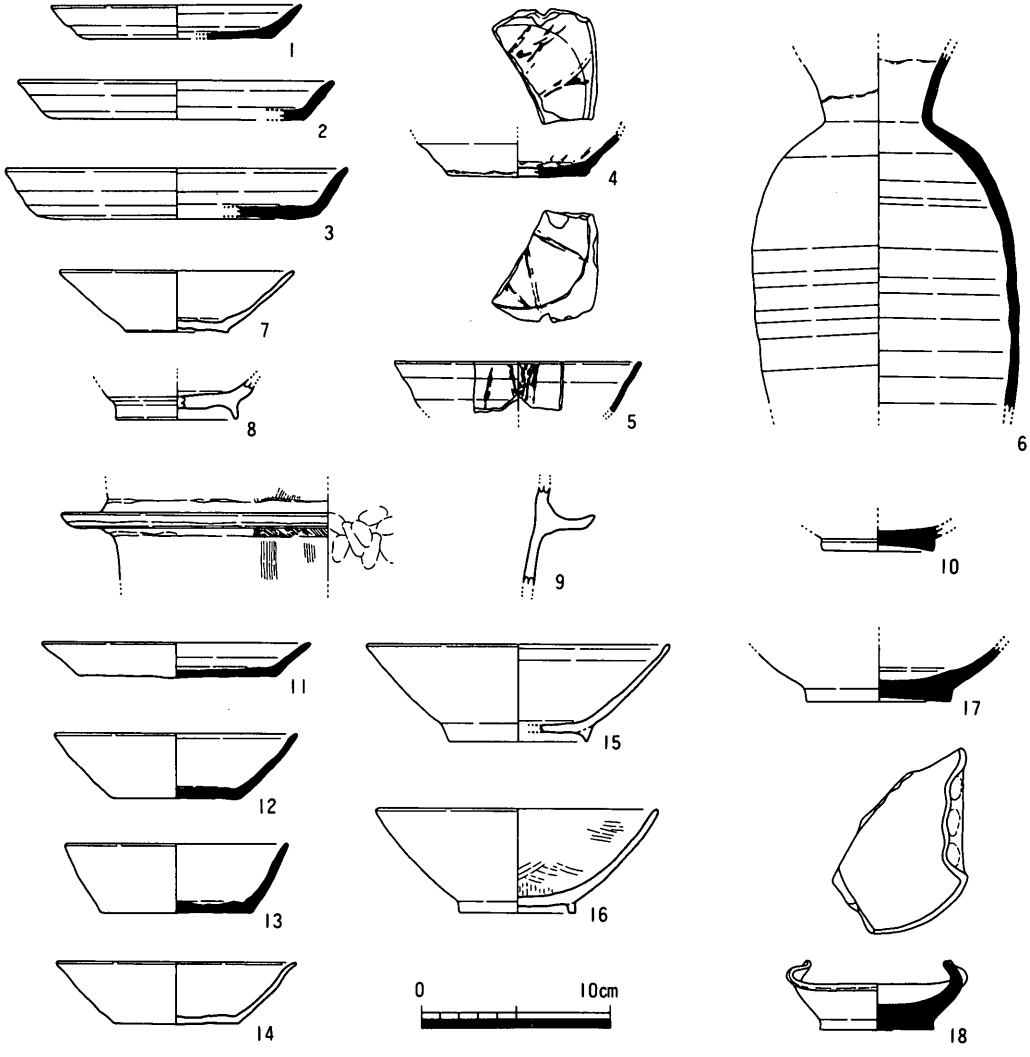
切りされており，口縁部の折り曲げには指の跡が明瞭に見られる。釉は底部以外全面に施釉されており，淡緑色を呈している。

Ⅰ－②期（第112・113図）

Ⅰ－②期の資料としては下川津遺跡[註6] SE Ⅲ04，郡家原遺跡[註7] SR05Ⅳ層上層，矢ノ塚遺跡[註8]包含層，石田遺跡[註9] SD61，南山浦古墳群第9号墳[註10]出土遺物などがある。

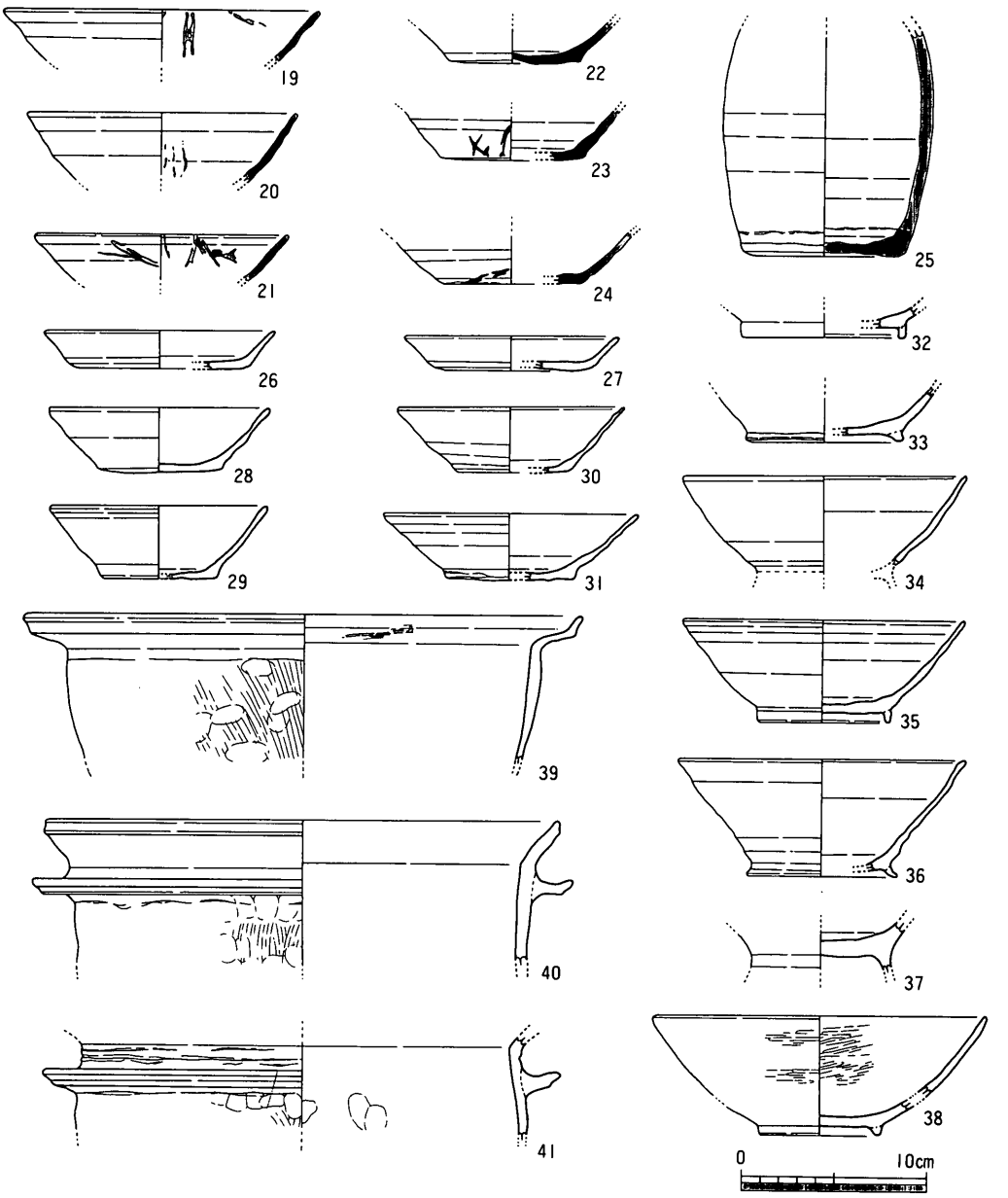
19～41は下川津遺跡 SE Ⅲ04出土の遺物である。

19～24は須恵器の坏である。底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外上方に延びる。内外面に火襷が認められる。26・27は土師器の皿である。26は口径12.8cm，器高2.0cm，底径8.9cmを計り，27は口径11.8cm，器高1.8cm，底径8.6cmを計る。両者とも底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外上方に延びる。28～31は土師器の坏である。底部は全てヘラ切りされている。



第111図　下川津遺跡ＳＥⅢ03・郡家原遺跡ＳＲ05Ⅳ層下層・Ⅴ層出土遺物実測図

28は口径12.2cm，器高3.4cm，底径5.8cmを計り，29は口径12.2cm，器高3.9cm，底径6.3cmを計り，30は口径12.5cm，器高3.4cm，底径5.1cmを計り，31は口径14.1cm，器高3.5cm，底径7.0cmを計る。形態的にみると，底部が円盤状高台[注11]状を呈するもの（29・31）とそうでないもの（28・30）に細分可能で，また底径と口径の差が大きいもの（30・31）と小さいもの（28・29）でも分けられるようである。回転台土師器の坏である。32～37は土師器の椀である。ほとんどが体部と底部の境



第112図　下川津遺跡ＳＥ104出土遺物実測図

に断面方形状の高台が付くもので，体部はやや内彎気味のものもあるが，ほぼ直線的に外上方に延びるものが多いようである。33・35の底部にはヘラ切り痕が認められる。37は高台のやや高いものと考えられる。回転台土師器の椀である。38は黒色土器A類椀である。底部にやや小さめの高台が付き，体部は内彎気味に外上方に延びる。体部内外面にヘラ磨きが認められる。39は土師質の土鍋である。頸部を外方に「く」の字に屈曲させ，口縁端部を外上方につまみ出す。体部外面には縦方向の刷毛目が認められる。40・41は土師質の土釜である。体部上端に鍔が付くもので頸部が「く」の字に屈曲し，口縁端部を上方につまみ出す。鍔先端部も上半をつまみ出している。体部外面には縦方向の刷毛目が施されている。

42・43は郡家原遺跡SR05Ⅳ層上層出土の遺物である。

42は須恵器の坏である。口径14.4cm，器高5.9cm，底径7.0cmを計る。底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外上方に延びる。43は緑釉陶器である。高台は削りだされ，体部はやや内彎しながら外上方に延びる椀である。内面に重ね焼痕が認められる。釉は全面に施釉されており，濁淡緑色を呈する。京都産と思われる。

44・45は矢ノ塚遺跡包含層出土の遺物である。

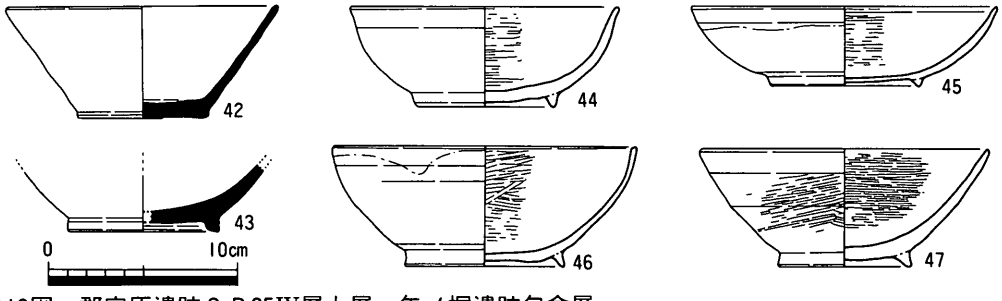
44は黒色土器A類椀である。底部にやや径の大きい高台を持ち，体部は内彎しながら外上方に延び，口縁部で外方に小さく延びている。体部内面にかすかにヘラ磨きが認められる。45は畿内産の黒色土器A類椀と思われる。底部に断面三角形の小さい高台を持ち，体部は内彎しながら外上方に延びる。器高はやや低く，体部内面にヘラ磨きが認められる。

46は石田遺跡SD61出土の黒色土器A類椀である。底部にやや径の大きい高台を持ち，体部はやや内彎しながら外上方に延びる。底部にはかすかにヘラ切り痕が認められる。体部内面にはヘラ磨きが認められ，かなり薄く作られている。

47は南山浦古墳群の第9号墳玄室内より出土した黒色土器A類椀である。底部に外方にふんばる高台が付き，体部は直線的に外上方に延びる。体部内外面にヘラ磨きが認められる。

Ⅰ－③期（第114図）

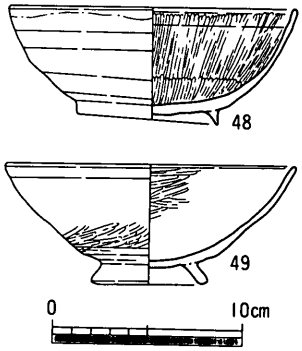
Ⅰ－③期の資料としては石田遺跡[註12] SK11がある。



第113図　郡家原遺跡ＳＲ05Ⅳ層上層・矢ノ塚遺跡包含層・
石田遺跡ＳＤ61・南山浦古墳群第9号墳玄室内出土遺物実測図

48・49は石田遺跡SK11出土の黒色土器A類椀である。

48は底部にやや径の大きい高台を持つもので，体部は内彎しながら外上方に延びる。内面には放射状のヘラ磨きが内面見込み部と体部内面とに分割されて施されている。49は底部に径が小さく，外方にふんばる高台を持ち，体部はほぼ直線的に外上方に延びる。



第114図　石田遺跡SK11出土遺物実測図

Ⅰ－④期（第115・116図）

Ⅰ－④期の資料としては讃岐国分寺跡[註13] SK25・26，矢ノ塚遺跡包含層[註14]の遺物がある。

50～69は讃岐国分寺跡SK25・26出土の遺物である。

50～53はSK25出土の遺物である。50は口径10.2cm，器高2.5cm，底径7.4cmのやや小振りの土師器坏である。底部はヘラ切りされている。51は口径11.7cm，器高3.8cm，底径6.7cmの土師器坏である。底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外上方に延びる。回転台土師器の坏である。52は底部にやや高い高台を持つ土師器椀である。坏部底部にはヘラ切り痕が認められる。回転台土師器の椀である。53は黒色土器A類椀である。底部にしっかりした高台が付くもので，体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部内面には沈線が認められ，体部内面にはヘラ磨きが施されている。楠葉産の黒色土器と思われる。

54～69はSK26出土の遺物である。

54～59は土師器の坏である。土師器の坏には法量によって小型のものと大型のものがある。前者はほぼ口径11.2cm，器高2.7cm，底径7.4cmを計り，後者はほぼ口径11.9cm，器高3.6cm，底径7.6cmを計る。底部は全てヘラ切りされている。後者が回転台土師器の坏である。60は須恵器の坏である。底部はヘラ切りされており，体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口径12.8cm，器高4.3cm，底径6.9cmを計る。61は須恵器の椀である。底部はヘラ切りされ，高台を持たないもので，体部はやや内彎気味に外上方に延びる。口径15.2cm，器高4.6cm，底径7.1cmを計る。62・63は黒色土器A類椀である。底部にやや径の大きい高台を持ち，体部は内彎しながら外上方に延びる。体部内面に分割ヘラ磨きが認められる。64・65は土師器の椀である。器形的には坏に高い高台がつくものである。回転台土師器の坏である。66は土師質の土釜である。しっかりした鍔がほぼ水平につき，口縁部は短い。67・68は土師質の土鍋である。67はやや小型のもので，体部が脹らむ甕の可能性も考えられる。69は篠窯系のこね鉢である。内彎する体部から口縁部をやや外方に肥厚させながら丸くおさめる。

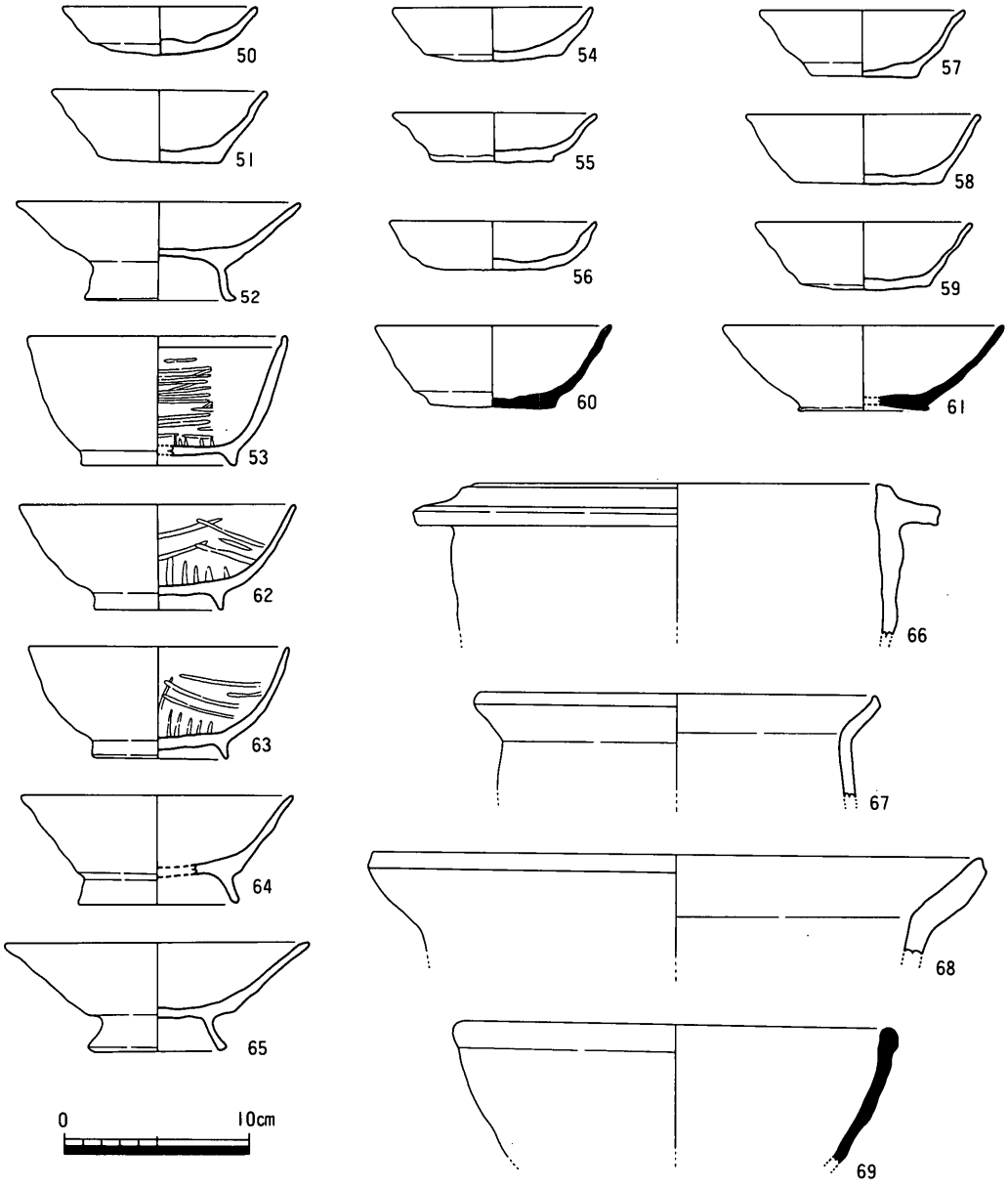
70～72は矢ノ塚遺跡包含層出土の遺物である。

70は黒色土器A類椀である。底部に外方に張りだす高台を持ち，体部内面に放射状のヘラ磨きが施されている。その放射状のヘラ磨きは見込み部分と体部内面が分割されており，ほぼ同時期

の高知県ひびのきサウジ遺跡[註15]のものと共通する特徴である。71は黒色土器B類椀である。この黒色土器にも前述した黒色土器A類椀（48・70）と同様に体部内面に放射状のヘラ磨きが施されている。72は黒色土器B類椀で体部と高台の境に凸帯を持ついわゆる托上椀である。香川県ではこの托上椀の出土例は少なく，讃岐国分寺に少量見られるだけである。[註16]

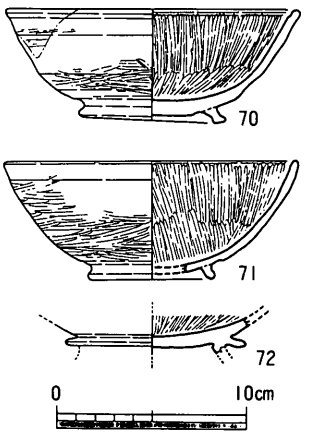
II－①期（第117～120図）

II－①期の資料としては下川津遺跡[註17] SD III03・05，南山浦古墳群第11号墳[註18]出土遺物がある。



第115図　讃岐国分寺跡ＳＫ25・26出土遺物実測図

73～99は下川津遺跡SD Ⅲ03出土の遺物である。

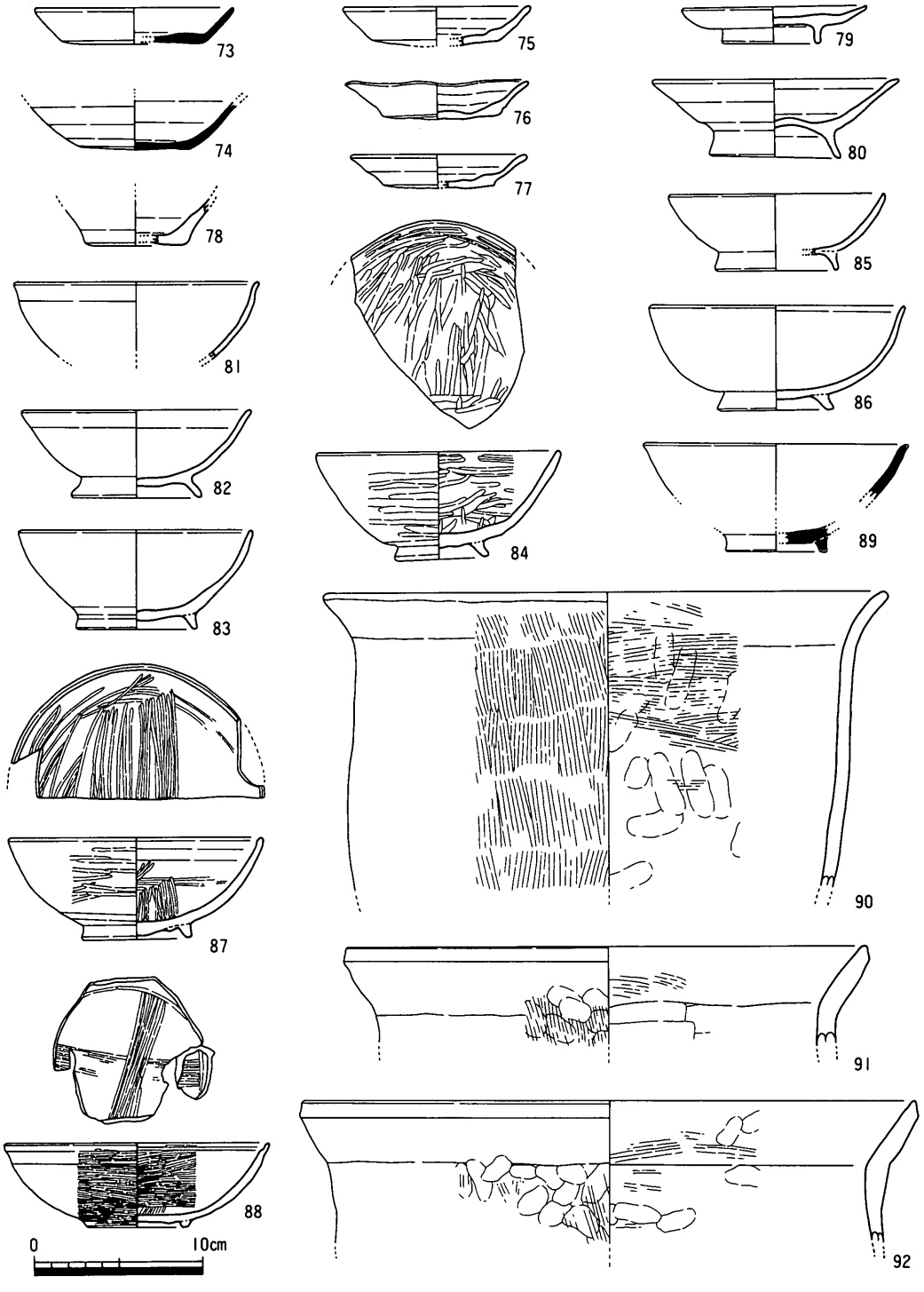


第116図　矢ノ塚遺跡包含層出土遺物実測図

73は須恵器の皿である。底部はヘラ切りされている。口径12.0cm，器高2.1cm，底径8.1cmを計る。74は須恵器の坏である。底部はヘラ切りされている。75～77は土師器の坏である。底部はヘラ切りされている。法量は約口径11.2cm，器高2.1cm，底径7.3cmを計る。78は底部が円盤状高台状を呈する坏である。79は器高の低い土師器坏に高台が付いた小型の器台である。80は土師器の坏にやや高い高台が付いた椀である。81～83は土師器の椀である。体部のやや厚いものと薄いものがあるようである。84～88は黒色土器である。84～86は黒色土器A類椀である。85はやや小振りの黒色土器A類椀である。体部が内彎しながら外上方に延びる。87は黒色土器B類椀である。体部内外面にヘラ磨きが認められる。88は楠葉産の黒色土器B類椀である。体部内外面に細かいヘラ磨きが，内面見込み部には「＋」字状のヘラ磨きが施されている。口縁端部内面には沈線が認められる。89はいわゆる瓦質土器椀である。底部に断面方形状のしっかりした高台が付き，口縁部はやや外反させる。90～92は土師質の土鍋である。90は体部から口縁部にかけて緩やかに外反するものである。体部外面には縦方向の，内面には横方向の刷毛目が施されている。91・92は体部から口縁部にかけて稜を残しながら外方に屈曲するもので，口縁端部は上方に小さくつまみ出している。体部内外面には刷毛目が認められる。93～95は土師質の土釜である。93は外面に水平方向に鍔が付き，口縁部にかけて稜を残しながら外方に屈曲させるもので，鍔及び口縁端部は上方に小さくつまみ出している。全体に薄い作りである。94・95は体部からそのまま口縁部に至るもので，口縁端部を内方に小さくつまみ出す。体部外面には縦方向の刷毛目が施されている。全体に厚い作りである。96～98は緑釉陶器である。96は軟質の緑釉陶器椀で口縁部が輪花状を呈する。釉は濃緑色を呈している。97は軟質の耳皿である。底部には内面に段を持つ高台が付き，坏底部には糸切り痕が認められる。釉は全面に施されており，濃緑色を呈している。98は軟質の緑釉陶器の皿である。底部には不定方向のヘラ削りが施されている。釉は全面に施されており，濃緑色を呈している。全て近江産か。99は土師質の蛸壺である。底部は尖底気味で，体部は卵形を呈している。口縁部は外方に短く屈曲させ，端部は丸くおさめている。体部内外面に指頭痕が顕著に認められる。

100～114は下川津遺跡SD Ⅲ05出土の遺物である。

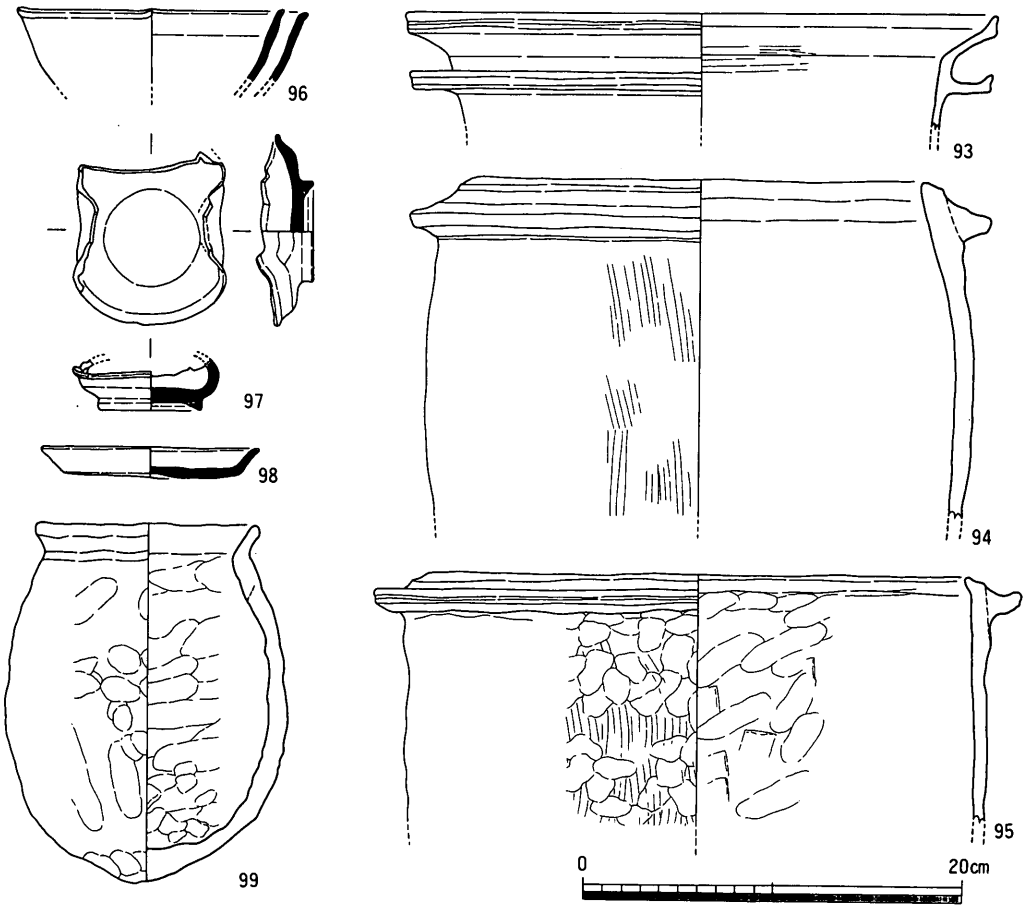
100～102は底部が円盤状高台状を呈する坏である。103は土師器椀である。体部はかなり薄く作られている。104～106は黒色土器A類椀である。体部内外面にやや太いヘラ磨きが施されている。107は底部に高台を持たない須恵器の椀である。底部は糸切りされており，体部はやや内彎ぎみに延びる。産地は不明であるが搬入品と思われる。108は須恵器の壺である。口縁部は朝顔状に開き，



第117図　下川津遺跡ＳＤⅢ03出土遺物実測図①

口縁端部を丸くおさめている。109・110は須恵器のこね鉢である。体部が内彎しながら外上方に延び，口縁部が外方に屈曲し，口縁端部を上方につまみ出している。やや軟質焼成されている。十瓶山周辺窯で生産されたものである。111は篠窯系のこね鉢である。底部は糸切りされている。112・113は土師質の土釜である。112は体部外面に水平に延びる鍔が付き，口縁部は外方に屈曲し，鍔及び口縁端部は上方につまみ出している。113は口縁部が延びないもので，やや厚手に作られている。114は緑釉陶器椀である。底部には内面に段を持つ高台が付き，高台内面には糸切り痕が認められる。焼成は硬質である。釉は全面に施されており，濃緑色を呈する。近江産と思われる。

115は南山浦古墳群第11号墳出土の黒色土器B類椀である。底部にはやや外方に踏張る高台が付き，体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部内面には沈線が施されている。体部内外面および高台外面には細かいヘラ磨きが施されている。体部外面のヘラ磨きは分割ヘラ磨きである。楠葉産の黒色土器B類である。下川津遺跡SD III03出土の楠葉産黒色土器椀より若干古いものと思われる。

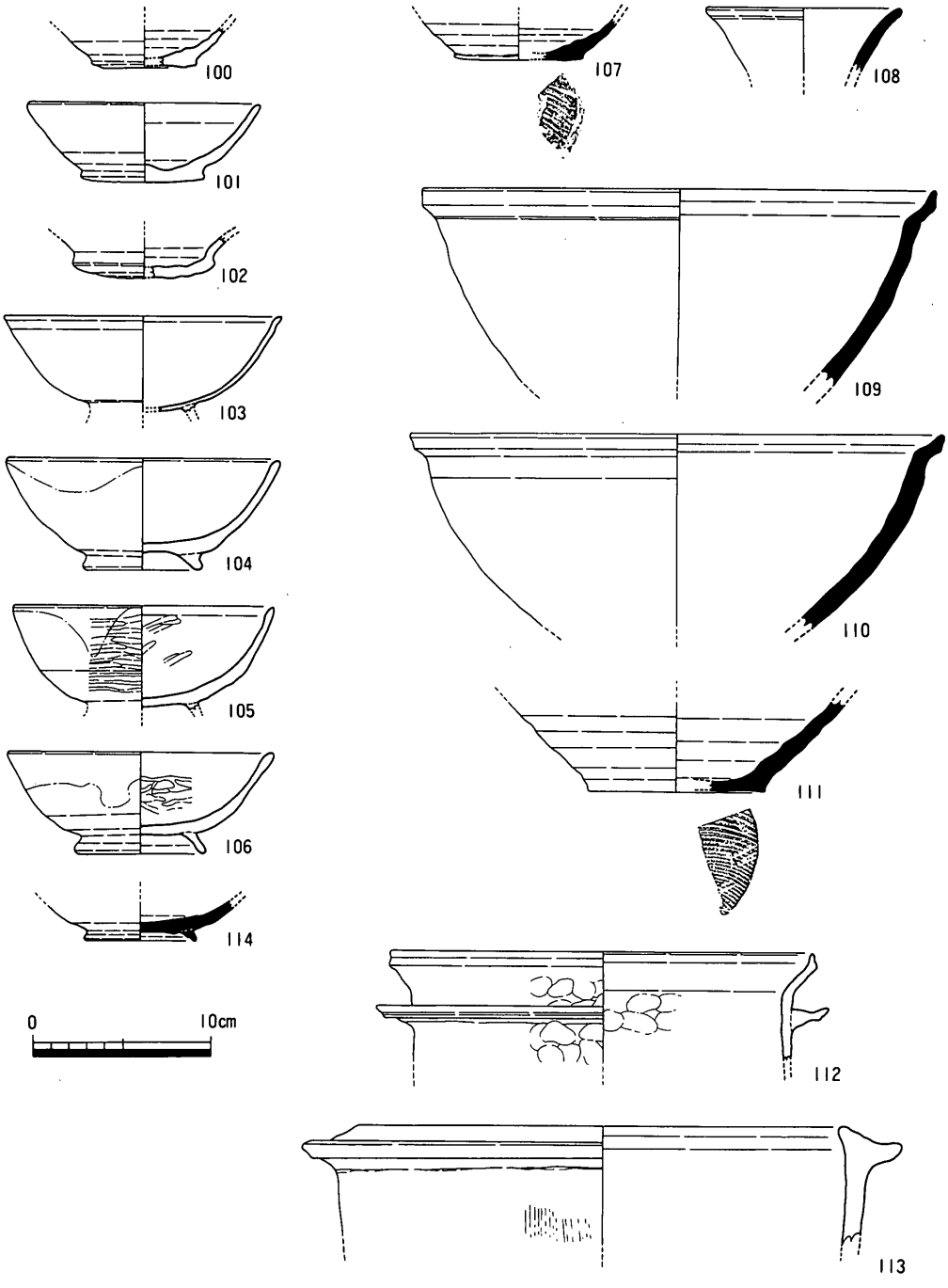


第118図　下川津遺跡ＳＤIII03出土遺物実測図②

II－②期（第120図）

II－②期の資料としては下川津遺跡[註19] SD III75がある。

116～122は下川津遺跡 SD III75出土の遺物である。



第119図　下川津遺跡ＳＤIII05出土遺物実測図

116は須恵器の坏である。底部はヘラ切りされている。117～119は土師器の坏である。底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外上方に延びる。117は口径10.4cm，器高2.1cm，底径6.4cmを計る。118は口径9.5cm，器高3.7cm，底径6.3cmを計る。119はやや器高の深いものである。口径は16.0cmを計る。120は小型の器台である。坏部は円盤状に作られており，底部にはやや高い高台が付く。121は黒色土器A類椀である。122は畿内産の瓦器椀である。底部には断面方形の高台が付き，体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部内面には沈線が施されている。体部内外面には細かいヘラ磨きが施されている。内面見込み部には6方向のヘラ磨きが施されている。楠葉型の瓦器椀である。

II－③期（第105図）

II－③期の資料としては川津元結木遺跡[註20] SD10最下層がある。

II－④⑤期（第100～104図）

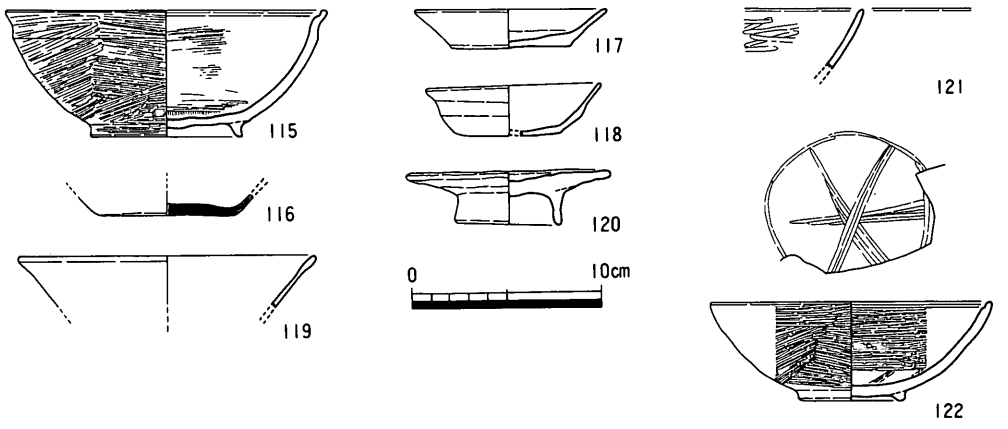
II－④⑤期の資料としては川津元結木遺跡[註21] SD10第2溝がある。

II－⑥期（第81～95，121図）

II－⑥期の資料としては川津元結木遺跡[註22] SD10上層と南山浦古墳群第9号墳[註23]，下川津遺跡[註24] SB III 05がある。

123～133は南山浦古墳群第9号墳出土の遺物である。

123～125は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。123・124はほぼ口径8.2cm，器高1.1cm，底径6.9cmを計る。125はやや大振りのもので，口径9.5cm，器高1.6cm，底径5.3cmを計る。126は土師器の坏である。底部はヘラ切りされており，体部は直線的に外上方に延びる。口径14.8cm，器高3.8cm，底径8.2cmを計るものである。127～130は黒色土器A類椀である。体部外面下半に指頭痕が顕著に認められるものがある。また，全面に摩滅しており調整は判りにくいが内面にヘラ磨きが施されているものも見られる。131は畿内産の瓦器椀である。体部外面下半に指頭痕が



第120図　南山浦古墳群第11号墳・下川津遺跡ＳＤIII75出土遺物実測図

顕著に施されている。和泉型の瓦器椀と思われる。132は土師質の土鍋である。器形は浅い洗面器状を呈しており，口縁部は外方に屈曲させている。133は土師質の土釜である。体部外面にしっかりした鍔がやや下方に延びるように付けられており，鍔から口縁部はやや長く，内彎させている。

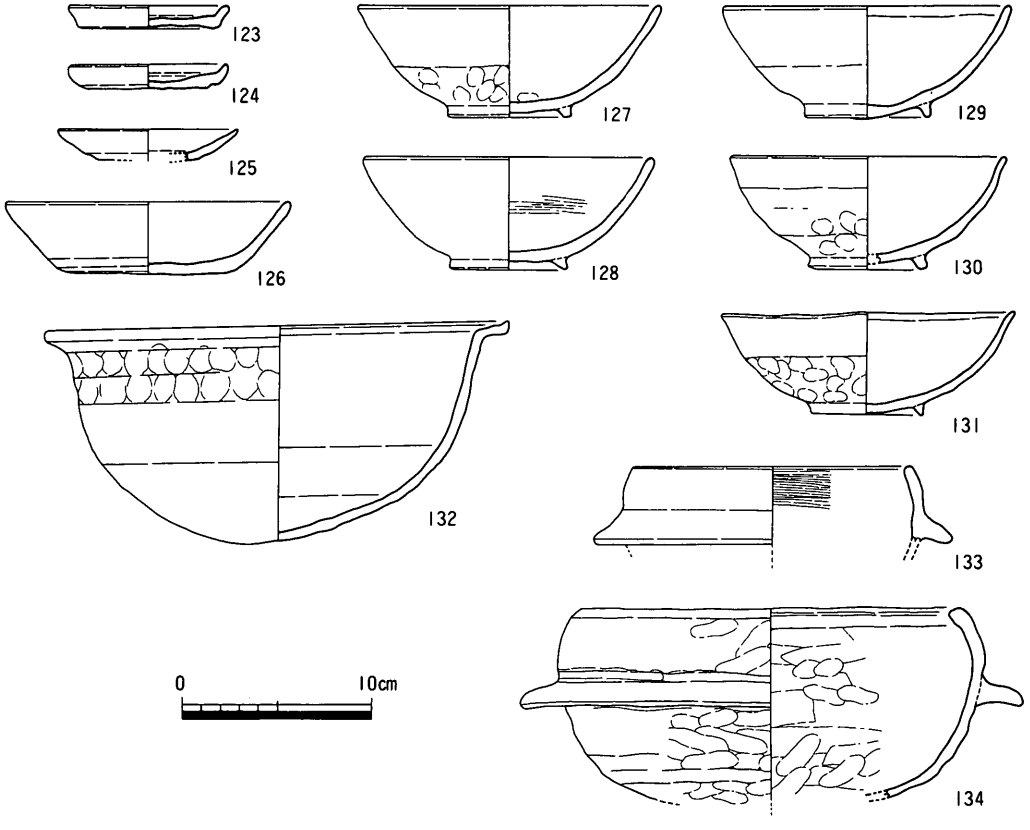
134は下川津遺跡SB III05出土の土師質の土釜である。この土釜の方がやや大振りではあるが，南山浦古墳群第9号墳出土の土釜と同様な形態を呈している。器高は浅いものである。体部内外面に指なでが顕著に認められる。

II－⑧⑨期（第122・123図）

II－⑧⑨期の資料としては下川津遺跡[註25] SD III71，延命遺跡[註26] SD47・SK18がある。

135～147は下川津遺跡SD71出土遺物である。

135は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。口径7.0cm，器高1.1cm，底径5.2cmを計るものである。136は土師器の坏である。底部はヘラ切りされている。口径12.0cm，器高3.2cm，底径7.0cmを計るものである。137は土師器の椀である。器形的には136の土師器の坏に高台を付けたものの様である。138・139はいわゆる瓦質土器椀である。138は底部に粘土紐状の高台が付き，体部は内彎しながら外上方に延びる。内面に下方から上方への刷毛目（または板なで）が施され

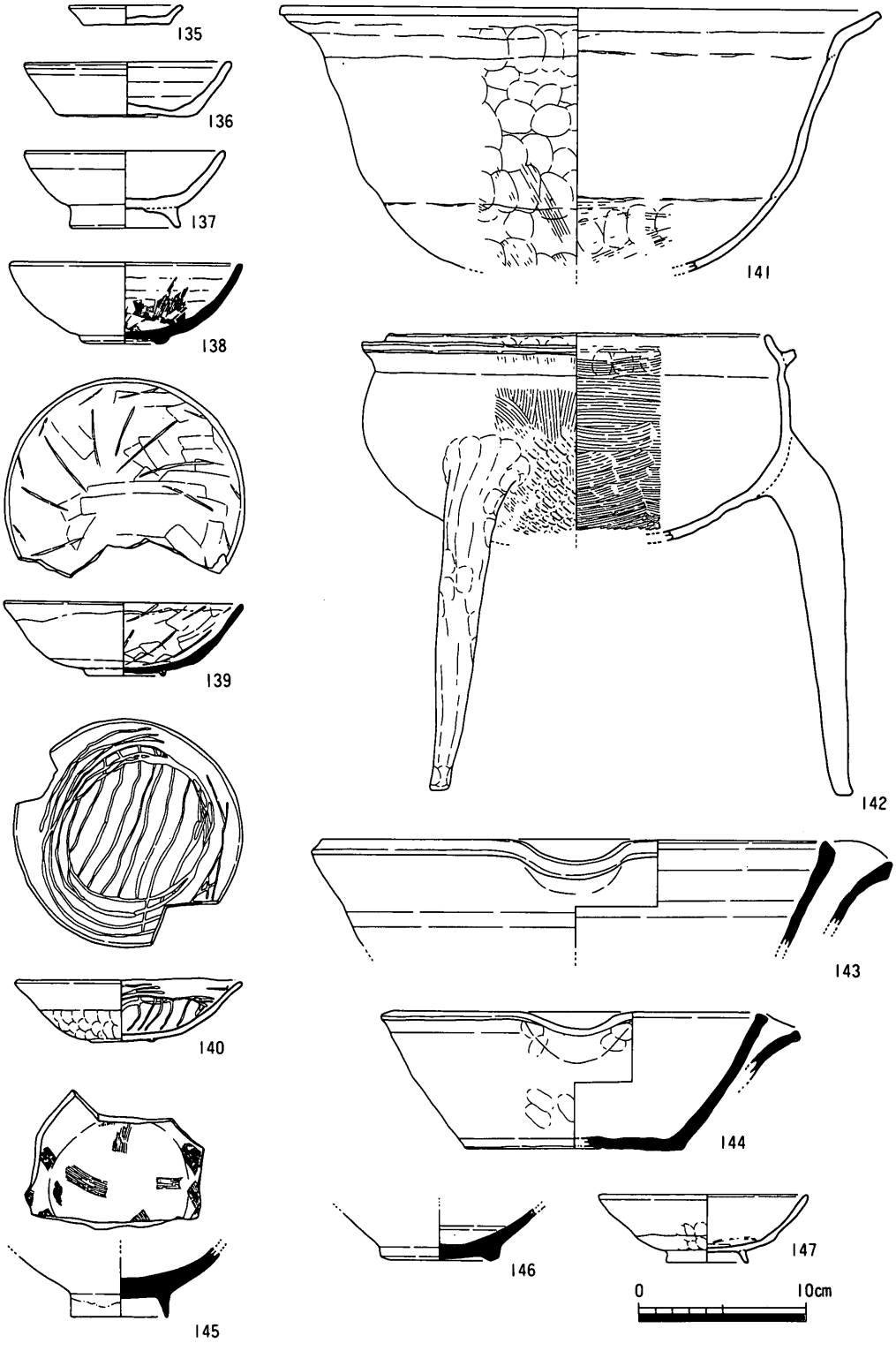


第121図　南山浦古墳群第9号墳・下川津遺跡S B III05出土遺物実測図

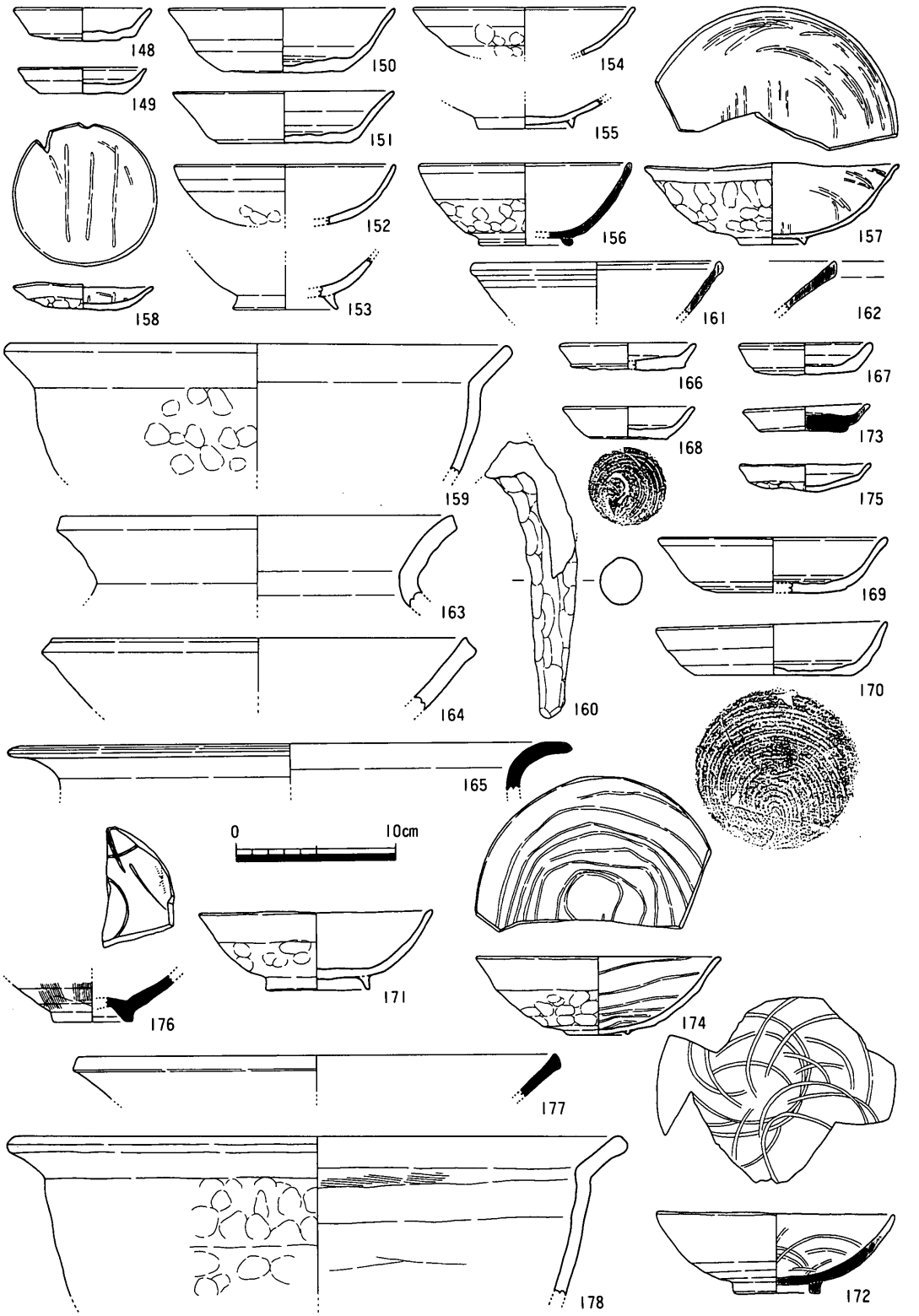
ている。139は内面に横方向の板なでが施されている。特に板なでの最初の部分がくぼみになって顕著に認められる。140は畿内産の瓦器椀である。底部には断面三角形状の小さい高台が付き，体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面には指頭痕が，口縁部には横なでが施され，内面にはヘラ磨きが施されている。ヘラ磨きは粗い。和泉型の瓦器椀と思われる。141は土師質の土鍋である。体部はやや深いが洗面器状を呈しており，口縁部は外方に屈曲させている。体部外面には指頭痕が顕著に認められる。142は土師質の土釜である。いわゆる三足土釜である。体部は浅く，鍔はしっかりしたものが付く土釜である。体部外面には上半に刷毛目が，下半に格子状の叩き目が施されている。内面には横方向の刷毛目が施されている。143は東播系のこね鉢である。口縁部が内側にやや肥厚し，小さくつまみ出すものである。144はいわゆる瓦質のこね鉢である。体部は直線的に外上方に延び，口縁部は体部からそのまま終わらせている。十瓶山周辺窯で生産されたものである。145・146は輸入磁器である。145は白磁Ⅴ類[註27]椀である。高台は細く高く，直立した高台を有するものである。内面には櫛描が認められる。146は白磁Ⅳ類椀である。底部に幅広の高台が付くもので，削りだしが浅いため，底部の器肉が厚い。147は土師器椀である。底部にしっかりした細い高台が付き，体部は内彎気味に外上方に延びる。体部下半に指頭痕が顕著に認められる。全体にやや小振りで，いわゆる早島式土器（吉備系土師器椀）である。

148～165は延命遺跡SD47出土遺物である。

148・149は土師器の小皿である。148は底部ヘラ切り調整されたもので，149は底部糸切り調整されたものである。底部調整に違いはあるが法量はほぼ同じで，口径7～9cm，器高1～2cmを計るものである。150・151は土師器の坏である。150は底部ヘラ切り調整され，151は底部糸切り調整されている。土師器坏も土師器小皿と同様に底部調整に違いはあるが，口径13～15cm，器高3～4cmとほぼ同形態を呈している。152・153は土師器椀である。底部には外方に踏張る高台が付き，体部はやや内彎気味に外上方に延びる。体部の器壁はやや厚いものである。154・155は底部に断面三角形状の高台が付き，体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面下半に指頭痕が顕著に見られ，器壁はやや薄く作られている。早島式土器（吉備系土師器椀）である。156はいわゆる瓦質土器椀である。底部に粘土紐状の高台が付き，体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面下半には指頭痕が顕著に認められる。157・158は瓦器である。157は瓦器椀で底部に断面三角形状の小さい高台が付き，体部外面には指頭痕が，内面にはヘラ磨きが施されている。158は瓦器小皿である。体部外面に指頭痕が顕著に見られ，内面にはヘラ磨きが施されている。両者とも和泉型の瓦器椀と思われる。159は土師質の土鍋である。体部は浅い洗面器状で，口縁部を外方に屈曲させている。160は土師質の土釜の脚である。161・162は東播系こね鉢である。口縁端部をあまり肥厚させないもので，外面を三角形状に，端部を上方につまみ出すものである。163・164は瓦質焼成の土器である。163は甕である。頸部を緩やかに外方に屈曲させ，頸部からそのまま口縁端部に至るものである。164はこね鉢である。体部からそのまま口縁端部に至るものである。両者とも



第122図　下川津遺跡ＳＤⅢ71出土遺物実測図



第123図　延命遺跡ＳＤ47・ＳＫ18出土遺物実測図

亀山焼と思われる。165は常滑焼の甕である。口縁部をほぼ直角に外反させ，口縁端部上端に沈線を持つ。体部外面には粘土紐の接合痕にそって平行に叩き痕が認められる。

166～178は延命遺跡SK18出土遺物である。

166～168は土師器の小皿である。166･167は底部ヘラ切りされており，168は底部糸切りである。底部糸切りは回転糸切りである。169・170は土師器の坏である。169は底部ヘラ切り，170は糸切りである。土師器小皿・坏とも法量はSD47で示した法量とほぼ同じである。171は土師器の椀である。体部外面下半に指頭痕が施されている。172･173は瓦質土器である。172は椀で，底部に断面方形の高台が付き，体部は内彎しながら外上方に延びるものである。内面に連結輪状のヘラ磨きが施されている。173は小皿で，底部はヘラ切りされている。174・175は畿内産の瓦器である。174は椀で内面に螺旋状のヘラ磨きが施されている。175は小皿である。176は輸入磁器である。底部に台形状の厚い高台を有し，体部外面に細かい櫛目を施す。同安窯系青磁椀Ⅰ類である。177は東播系のこね鉢である。口縁部はあまり肥厚せず，外面を三角形状におさめる。178は土師質の土鍋である。器形は浅い洗面器状を呈しており，口縁部は外方に屈曲させている。

以上Ⅱ－⑧⑨期までの基準資料を説明した。以下この資料を基に編年作業を試みることにする。

3．土器編年

(1) 供膳具について

古代の食器には須恵器と土師器があり，その両者によって供膳具は構成されていた。その供膳具内の須恵器製品と土師器製品の比率は7世紀前半以降徐々に須恵器製品の占める比率が減じ，土師器製品の占める比率が増加する。そして，9世紀後半[註28]には須恵器製品と土師器製品の占める比率が逆転することが下川津遺跡の第1低地帯流路2の構成比によって明らかとなっている[註29]。しかし，ここで問題としたいのは8世紀前半までの土師器と9世紀後半以降の土師器に違いがあることである。8世紀以前の土師器は多器種・多形態のもので，a手法，b手法などの製作技法的な面からも畿内中枢部の「律令的土器様式」の範疇に入るものである。しかし，9世紀後半以降の土師器は前段階の「律令的土器様式」としての土師器が徐々に少なくなり，それに代わって主流を占めてくるものとして回転台土師器[註30]があげられる。

この回転台土師器は須恵器に素形が有り，焼成が低火度酸化焔焼成[註31]されているもので，器形は皿・坏・椀などがある。

この回転台土師器の出現期も含め，9世紀後半以降の供膳具のなかに占める須恵器・回転台土師器・土師器・土師質土器・その他を各器種ごとに説明し，その出現と消長を述べたいと思う。

また，それぞれの地域性を見るために，地域をおおまかではあるが大別して西から西讃地域(刈田郡・三野郡)，中讃地域（多度郡・那珂郡・鵜足郡・阿野郡)，東讃地域（香川郡・山田郡・三

木郡・寒川郡・大内郡）とする（第125図）。それぞれの説明のなかで特に地域についての説明がない場合は中讃地区の概要である。

須恵器皿

須恵器皿は底部がヘラ切りされており，体部はやや外反するものと直線的に外上方に延びるものがある。また，法量によって３種類（須恵器皿Ａ・Ｂ・Ｃ）に分けられる。須恵器皿Ａの法量は口径17～18cm，器高２～３cmである。須恵器皿Ｂの法量は口径15～16cm，器高２cm前後である。須恵器皿Ｃの法量は口径12～13cm，器高 1.5～２cmである。

須恵器皿は，Ⅰ－①期に皿Ａ・Ｂ・Ｃの３種類の法量があるがⅠ－②期以降皿Ａ・Ｂがなくなり，皿Ｃのみが生産量を減じながら存続し，Ⅱ－①期に消滅するようである。

供膳具に占める割合は，Ⅰ－①期には３種類あるために19％と多いが，この期以降は少なくなる（第４表）。

須恵器坏

須恵器坏は底部がヘラ切りされており，体部がほぼ直線的に外上方に延びる。また，法量によって２種類（須恵器坏Ａ・Ｂ），形態によって須恵器坏Ｂが４種類（須恵器坏Ｂ－1a・Ｂ－1b・Ｂ－2a・Ｂ－2b）に細分できる。

須恵器坏Ａの法量は口径14～15cm，器高９cm程度である。

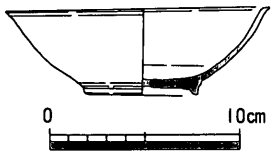
須恵器坏ＡはⅠ－①期に出現し，Ⅰ－②期以降消滅する。

須恵器坏Ｂには底部と体部の境に円盤状高台状の若干の段差を持つもの（１）と段差を持たないもの（２）がある。また，それぞれに底径に比べて口径の大きいもの（ａ）とそうでないもの（ｂ）がある。須恵器坏Ｂの法量は口径が大きいもので13～14cm（ａ），小さいもので12～13cm（ｂ），器高３～４cmである。

須恵器坏ＢはⅠ－①期で38％，Ⅰ－②期で15％，Ⅰ－③④期で４％，Ⅱ－①②期で６％と徐々に供膳具に占める割合を減じながらⅡ－①期以降消滅する（第４表）。

須恵器椀

須恵器椀は底部がヘラ切りされており，体部がやや内椀気味に外上方に延びる。高台は体部と底部の境に断面方形状のものが付くものである。量的には多くなく，生産地ではすべっと２号窯[註32]（第124図）で，消費地では郡家一里屋遺跡[註33]でⅠ－①②期に若干見られるだけである。



第124図　すべっと２号窯跡出土遺物実測図

須恵器円盤状高台坏・椀

円盤状高台坏・椀は底部がヘラ切りされており，体部が直線的に外上方に延びるものである。この円盤状高台坏・椀は，底部と体部の境に１cm程の段差があるのが特長である。これらはⅡ－①～Ⅱ－⑥期に若干見られる。

須恵器小皿・坏D・椀（瓦質土器）

須恵器小皿・坏D・椀は従来香川県で「瓦質土器」と呼ばれていたものである。ここで須恵器小皿・坏D・椀としたのは「瓦質土器」の出現が須恵器生産の一生産上にあることからである。

この瓦質土器の出現及び製作技法については後述し，須恵器小皿・坏D・椀とした理由を述べたい。

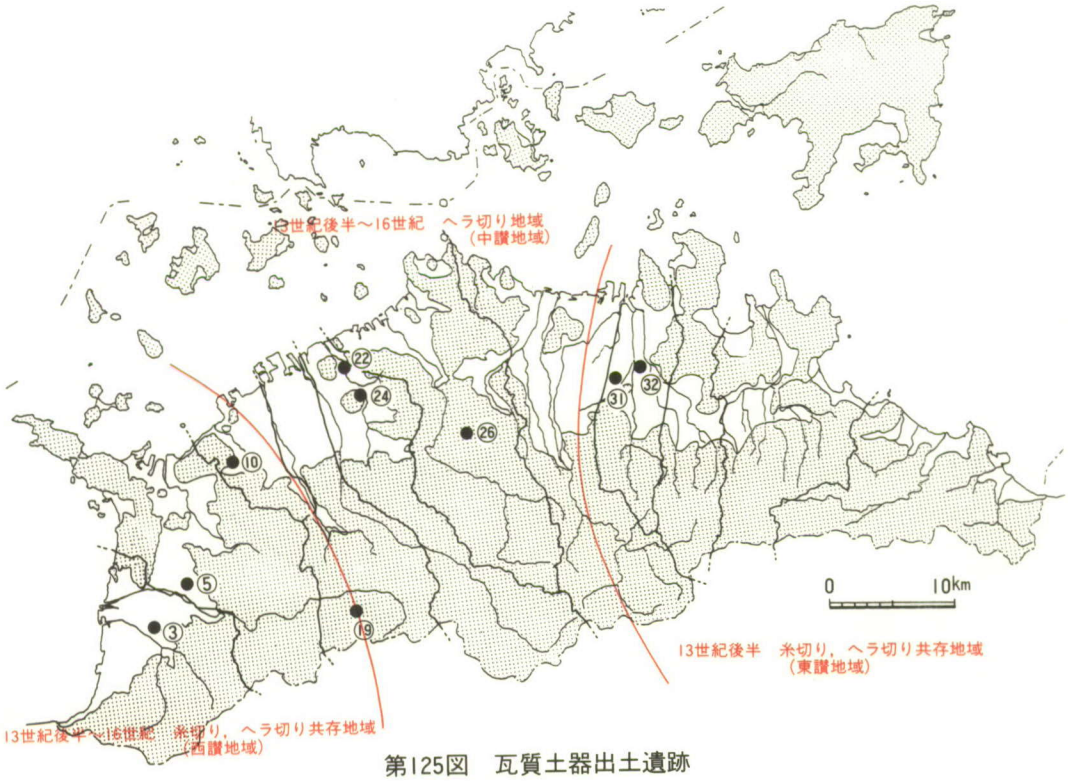
須恵器小皿・坏D・椀（第117図89）はII－①期に生産が開始されるが供膳具に占める割合は1％以下と量的には多くない。特に須恵器椀（瓦質土器椀）が消費地において多量に出土してくるのはII－⑦期以降である。そしてII－⑧⑨期になり中讃地域24％，西讃地域７％と供膳具に占める割合は多くなり，III－①期には消滅する（第４表）。

この須恵器椀が多量に出土する時期はII－⑧⑨期で，中讃地域と西讃地域においては出土量に地域差が見られる。また，瓦質土器椀は遺跡数は少ないがほぼ香川県全域で出土していることが判っている（第125図）。

須恵器円盤状高台坏・椀（瓦質土器）

II－①期～II－⑥期に少量みられるが詳細については不明である。

土師器小皿（第126図）



第125図　瓦質土器出土遺跡

土師器小皿は底部がヘラ切りあるいは糸切りされており，体部が短く外上方に延びる。土師器小皿は口径約７～９cm，器高約１～２cmのもので，第127・128図をみると時期差と地域差によって若干の法量差がみられる。

土師器小皿はII－①期（11世紀前半頃）に西村遺跡においてまず出現する。この期の供膳形態において小皿はまだ一般的ではなく，西村遺跡においてII－①期に小皿が出現するということは「中世的土器様式」である小皿・坏・椀というセットのなかの小皿がいち早く受け入れられる地域ということで重要視する必要があると考えている。その他の地域に小皿が受け入れられるのはII－④⑤期からである。II－④～⑨期において供膳具に占める割合は20～30％と高比率である（第４表）。また，底部切り離し手法に糸切りとヘラ切りが認められ，この手法の違いによって中讃地域（ヘラ切り）とそれ以外の西讃・東讃地域[註34]（糸切り・ヘラ切り共存地域）に分けられる（第125図）。この底部切り離し手法の違いは土師器坏にも言えることである。糸切り・ヘラ切り共存地域に糸切り手法が導入される時期は現時点では不明であり，確実にII－⑧⑨期には供伴していることが確認されているだけである。西讃地域においてこの時期の土師器小皿の糸切り手法・ヘラ切り手法の比率は前者が８％，後者が27％とヘラ切り手法が多数を占めている（第４表）。

次に法量的に概観すると西村遺跡においてII－①②期の小皿は良好な資料が少ないが，おおよそ口径８～９cm，器高 1.5～２cmのものである。中讃地域のII－④～⑥期では口径８～10cm，器高１～ 2.5cm，西村遺跡出土土師器小皿は口径７～８cm，器高１～２cmと，西村遺跡出土の小皿の方が中讃地域のものより口径及び器高のやや小振りのものが主流を占める。中讃地域のII－⑧⑨期では口径７～９cm，器高１～２cmと前時期より口径及び器高がやや小さくなる。少し時期差はあるがIII－⑥⑦期では口径８～９cm，器高１～ 1.5cmとなる（第127・128図）。

II－④⑤期以降の時期ごとに若干の口径及び器高の変化が見られる程度で大きい変化は見られない。しかし中讃地域のなかにあって西村遺跡だけは特異な状況であることが判る。

次に土師器小皿の地域性について概観する（第127・128図）。

II－⑧⑨期

この時期の中讃地域の土師器小皿は底部切り離し手法が全てヘラ切りで，口径７～９cm，器高1～2cmのものが主流である。中讃地域の南西部（尾ノ背寺跡[註35]）では，若干底部糸切り手法が入っている。ここで主流を占める底部ヘラ切り手法の土師器小皿は口径６～９cm，器高１～ 1.5cmで，やや口径にばらつきがみられる。西讃地域東部（大門遺跡・矢ノ岡遺跡[註36]）の土師器小皿は底部切り離し手法に糸切りとヘラ切りが見られる。底部ヘラ切りの資料が少ないためここでは糸切り手法の土師器小皿だけで言うと口径７～８cm，器高１～ 1.5cmのものが主流である。次に西讃地域中央部（延命遺跡[註37]）では糸切り手法の土師器小皿は口径７～９cm，器高１～２cmである。また，ヘラ切り手法の土師器小皿は口径７～９cm，器高１～２cmとほぼ糸切り・ヘラ切りに関係なく法量的には同じであることが判る。

III－⑥⑦期

この時期の中讃地域の土師器小皿は底部切り離し手法が全てヘラ切りで，口径8cm前後，器高1～1.5cmのものが主流である。西讃地域と中讃地域の境である地域（天霧城跡[註38]）の土師器小皿は底部切り離し手法に糸切りとヘラ切りが見られ，両者ともに口径8cm前後，器高1～2cmのものである。西讃地域東部（大門遺跡[註39]）の土師器小皿には底部切り離し手法に糸切りとヘラ切りが見られる。糸切り手法の土師器小皿は口径8～10cm，器高2cm前後で，ヘラ切り手法のものは口径7～9cm，器高1～1.5cmである。

以上のことから各時期ごと及び地域ごとに若干ではあるが法量に差が認められる。これは製作工人の違いによるものと思われる。換言すれば土師器小皿はそれぞれの地域ごと（集落ごと）に製作され，使用されていた可能性が考えられるが，小皿としての統一性はある。

土師器皿（第126図）

土師器皿は回転台土師器第2群[註40]に当たるものである。器形および調整は須恵器皿と同じで，ただ焼成が低火度酸化焔焼成されているものである。そのために須恵器皿と同様に法量によって土師器皿A・B・Cに分けられ，供膳具に占める割合I－①②期に3％，II－①期に1％以下と徐々に減少し，II－①期以降に消滅する(第4表)。このように須恵器皿と同様な消長を土師器皿も示している。

土師器坏（第126図）

土師器坏は器形及び法量によって4種類（土師器坏A・B・C・D）に分けられる。

土師器坏Aは現在確認されていない。しかし，供膳具のなかの須恵器がほとんど回転台土師器として焼成されている事実からここに土師器坏Aを設定した。この土師器坏Aは回転台土師器第2群に当たるもので，器形及び調整は須恵器坏Aと同じで，ただ焼成が低火度酸化焔焼成されている。

土師器坏Bは回転台土師器第2群に当たるもので，器形および調整は須恵器坏Bと同じで，ただ焼成が低火度酸化焔焼成されている。

この土師器坏BはI－①期で27％，I－②期で61％，I－④期で35％，II－①期で4％とI－①期より徐々に供膳具における割合が増加し，I－②期に最も多くなるようである。そしてI－③④期にかけて減少し，II－①期に消滅する（第4表)。

ところでこの土師器坏Bの供膳具における割合を同形態である須恵器坏Bの割合と比較するとI－①期では須恵器坏Bの方が多いがI－②期ではそれが逆転し，土師器坏Bは須恵器坏Bの約4倍もの高比率を占めていることが判る（第4表)。

法量的にはI－②期では口径12～14cm，器高3～4cmであるがI－④期に口径11～13cm，器高3～4cmとやや口径が小さくなる（第127図)。

土師器坏Bの出現期については資料の制約もあり不明である。

土師器坏Cは底部がヘラ切りされており，体部は内椀しながら外上方に延び，口縁部をやや外反させる。

土師器坏Cの供膳具に占める割合はⅠ－④期で33%，Ⅱ－①期で37%，Ⅱ－④期以降ほとんど見られないことから，Ⅰ－③④期に出現し，Ⅱ－④期には消滅する。

法量的にはⅠ－④期では口径10～12cm，器高2～3cmを計る。Ⅱ－①期になると口径10～11.5cm，器高2～2.5cmとやや前段階に比べると器高がやや小さくなっているようである(第127図)。

土師器坏Dは底部がヘラ切りされており，体部が外上方に延びるものである。体部の形態には直線的に延びるものや，やや内椀するものがあり，また時期差および地域差によって体部の長さ，法量などに若干の差が認められる。

土師器坏DはⅡ－①期に西村遺跡周辺においてのみ出現する。西村遺跡においては土師器小皿で述べたように土師器小皿・坏Dと同時期に出現しており土師器椀・黒色土器椀を含めた「中世的土器様式」が最初に受け入れられる地域である。この土師器坏Dが一般的に出現する時期はⅡ－④期で若干の法量変化をみせながらⅢ－⑨期頃まで確認されている。

供膳形態に占める割合はⅡ－④期以降22～31%の高比率を占めている。

また，Ⅱ－⑧⑨期に中讃地域以外の地域において底部切り離し手法に糸切りが導入されている。この底部切り離し手法による地域差はⅢ－⑨期まで残るようで，土師器小皿にも同様のことが確認されている。糸切り手法とヘラ切り手法の割合は西讃地域（延命遺跡）では前者が24%，後者が5%と土師器坏Dには底部切り離し手法に糸切りが多いことが確認された(第4表)。この結果，西讃地域（延命遺跡）においては土師器小皿は主としてヘラ切り手法を持つ工人が，土師器坏Dは主として糸切り手法を持つ工人によって製作されたことが確認された。

次に各時期ごとに法量面から概観する（第127・128図)。

Ⅱ－①②期

中讃地域のなかでもいち早く土師器坏Dが出現する西村遺跡周辺部について概観すると資料点数は少ないのであるがおおよそ口径13～14cm，器高3～4cmの程度のものが出現する。

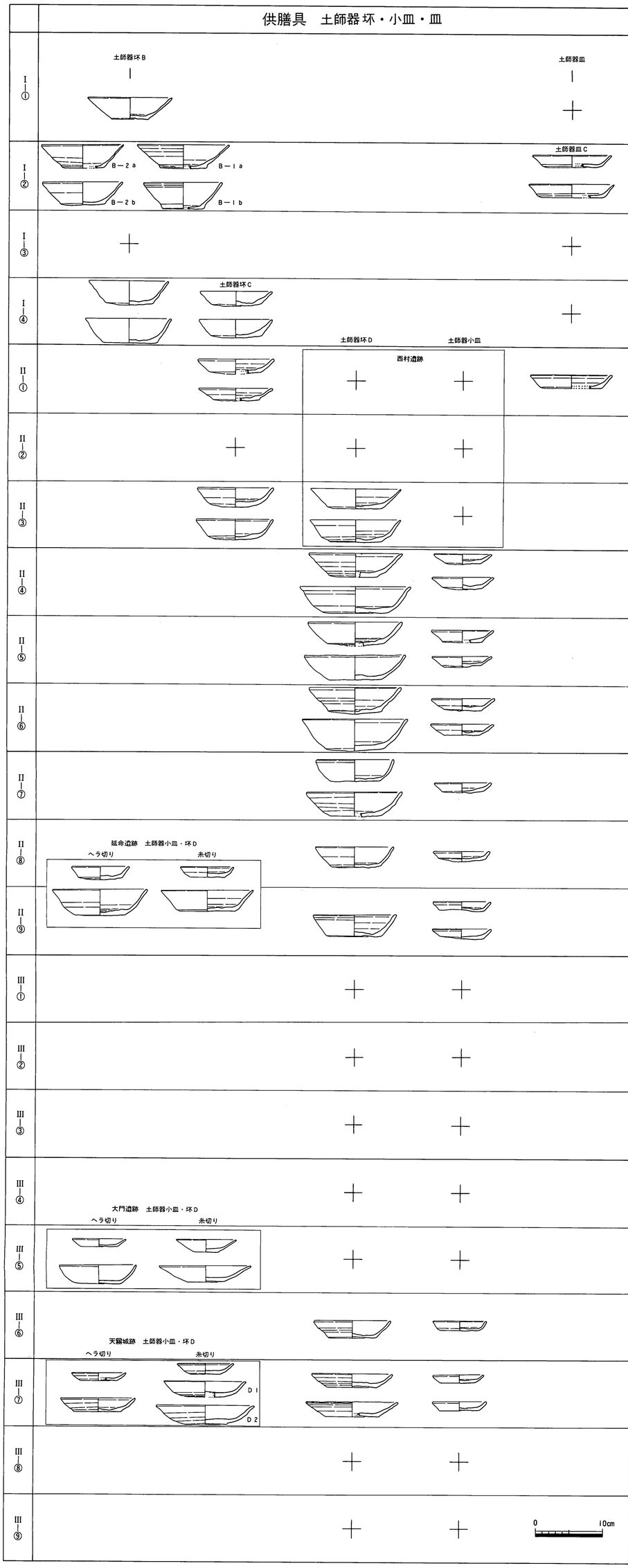
Ⅱ－④～⑥期

この時期には土師器坏Dが普及する。法量は口径13～16cm，器高3～4cmのものが多い。細かくみれば口径16cm前後，器高4cm前後のものと，口径14cm前後，器高3cm前後のものの2種類あるようである。

しかし第128図からはⅡ－⑥期の土師器坏Dにはあまり斉一性が認められない。

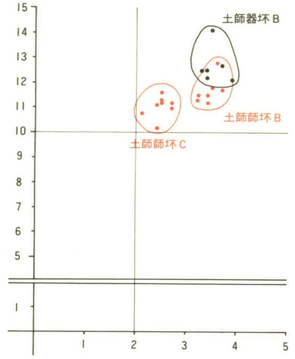
Ⅱ－⑧⑨期

この時期になると法量に地域差が認められる。この現象はⅡ－⑥期から徐々に見られたもので土師器坏DにおいてもⅡ－⑥期以降は確実に地域ごと（郡単位あるいは集落単位）に生産されていたことが窺える結果である。

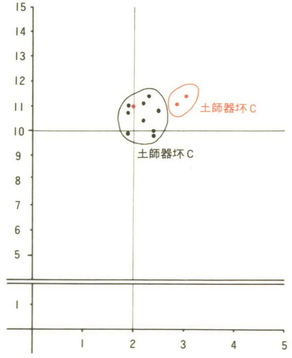


第126図　供膳具　土師器杯・小皿・皿編年（試案）

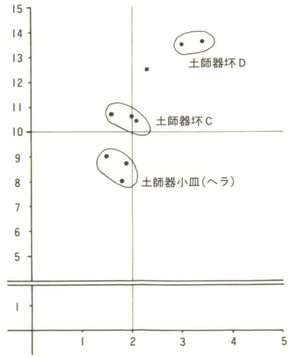
坂出平野（下川津遺跡他）　西村遺跡　讃岐国府跡　天霧城跡　尾ノ背寺跡　大門遺跡　延命遺跡



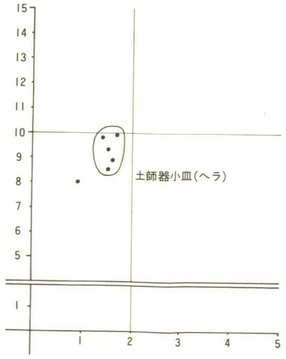
Ⅰ－②期，Ⅰ－④期　土器分布図



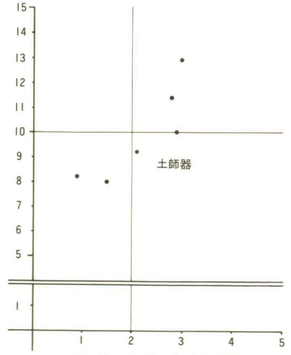
Ⅱ－①期，Ⅱ－③④期　土器分布図



Ⅱ－①～③期　土器分布図



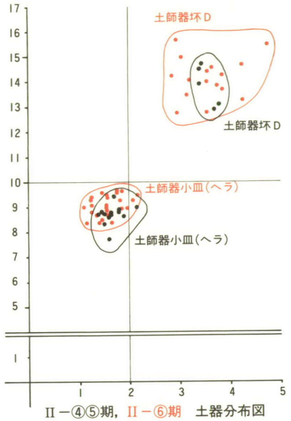
Ⅱ－①～③期　土器分布図



Ⅱ－①～③期　土器分布図

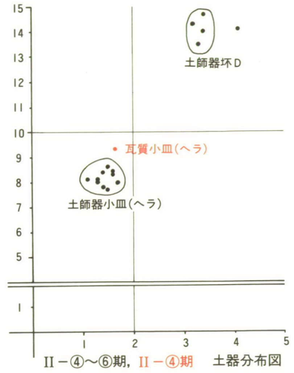
第127図　土師器小皿・坏法量分布図(1)

坂出平野（下川津遺跡他）



II－④⑤期，II－⑥期　土器分布図

西村遺跡



II－④～⑥期，II－④期　土器分布図

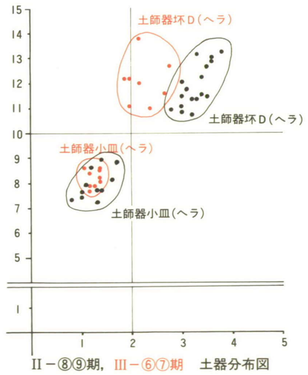
讃岐国府跡

天霧城跡

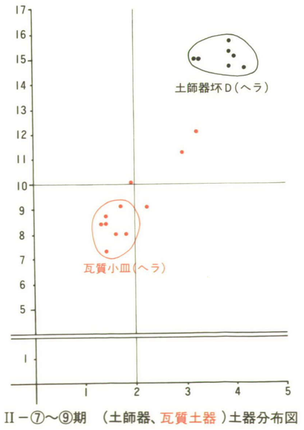
尾ノ背寺跡

大門遺跡

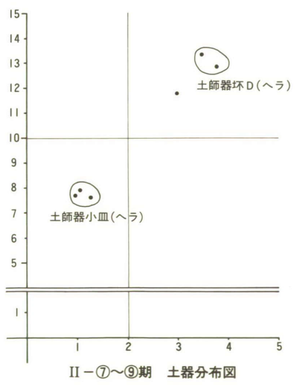
延命遺跡



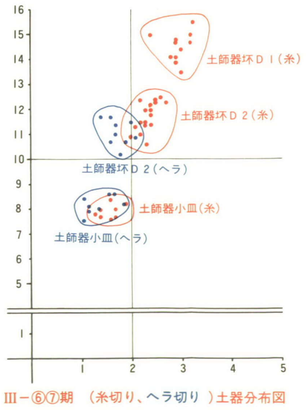
II－⑧⑨期，III－⑥⑦期　土器分布図



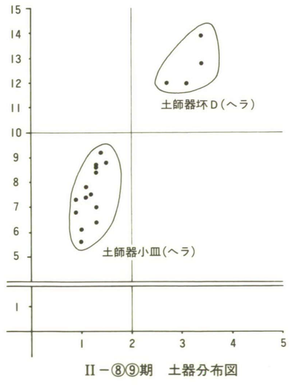
II－⑦～⑨期　（土師器、瓦質土器）土器分布図



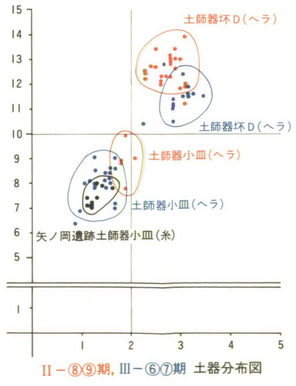
II－⑦～⑨期　土器分布図



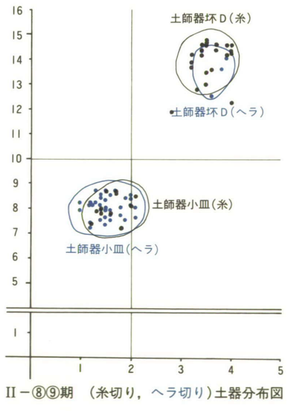
III－⑥⑦期　（糸切り、ヘラ切り）土器分布図



II－⑧⑨期　土器分布図



II－⑧⑨期，III－⑥⑦期　土器分布図



II－⑧⑨期　（糸切り，ヘラ切り）土器分布図

第128図　土師器小皿・坏法量分布図(2)

まず，中讃地域でも特に西村遺跡周辺（讃岐国府跡[註41]も含む）では口径14～16cm，器高３～４cmとやや口径の大きいものが生産されている。これは後述するが西村遺跡周辺部において土師器椀・黒色土器椀・須恵器椀（瓦質土器椀）などの椀形態を作る際にこの土師器坏Ｄの形態が必要になるからである。

その他の中讃地域では口径11～13cm，器高３～４cmの土師器坏Ｄが多数を占めていることが確認された。西村遺跡周辺部の土師器坏Ｄと比較するとやや小振りである。

底部切り離し手法に糸切り手法が導入されている西讃地域においてその中央部に位置する延命遺跡では糸切り手法の土師器坏Ｄは口径13～15cm，器高３～４cmで，ヘラ切り手法のものも口径13～15cm，器高３～４cmと同形態を示していることが判る。中讃地域のものと比較すると延命遺跡出土の土師器坏Ｄは西村遺跡周辺部のものとそれ以外の地域のもののほぼ中間的な法量であることが判った。また，中讃地域南西部（内陸部）に位置する尾ノ背寺跡では資料点数が少ないものの上記３箇所のものとは若干の違いを見せている。

Ⅲ－⑤期

この時期には西讃地域の東部に位置する大門遺跡でも底部切り離し手法に糸切りとヘラ切りが共存している。前者の法量は口径11.5～14cm，器高２～３cmで，後者の法量は口径10～12cm，器高2.5～3.5cmである。糸切りとヘラ切りで若干の法量差が認められる。

Ⅲ－⑥⑦期

この時期になるとそれぞれの地域でより複雑に法量分化をする。

まず，中讃地域の土師器坏Ｄの法量は口径11～13cm，器高２～３cmである。

次に中讃地域と西讃地域の境に位置する天霧城跡では底部切り離し手法に糸切りとヘラ切りがあり，前者は法量が口径10～12.5cm，器高２～３cmのもの（土師器坏Ｄ1）と口径13～15cm，器高３cm前後のもの（土師器坏Ｄ2）の２種類が認められる。また，後者は法量が口径10～12cm，器高1.5～2.5cmの１種類が確認されている。このように天霧城跡では底部糸切りとヘラ切りに法量差が認められ，底部糸切り手法の土師器坏Ｄにおいては２種類の法量分化を起こしている。

中讃地域の土師器坏Ｄと比較するとそれぞれの遺跡（地域）ごとに法量の差と技術面の差が認められる。

このように土師器坏Ｄは大別した西・中・東讃地域という区分が当てはまらない，もっと小地域での地域差が見られ，また底部切り離し手法という技術面での法量差も見られるようである。これは，土師器坏Ｄが集落単位程度の小地域で生産されていたことを窺わせる。

土師器椀（第130図）

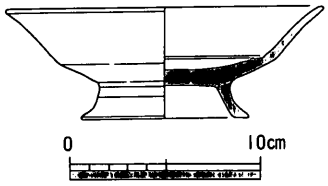
土師器椀には回転台土師器第２群である土師器椀Ａと深椀タイプの土師器椀Ｂがある。

土師器椀Ａは回転台土師器第２群に当たり，器形的に土師器坏Ａの底部に高台を付けたものである。底部に断面方形状の高台が付き，体部と底部の境に明瞭な稜を持ち，体部は直線的に外上

方に延びる（土師器椀A1）。底部はヘラ切りされている。また，形態は回転台土師器第2群であるが高台が高いもの（土師器椀A2）も認められる。

土師器椀A1はⅠ－①期には確認されており，Ⅰ－③期に消滅する。供膳具に占める割合は5％以下とあまり多くない（第4表）。土師器椀A2（足高高台椀）はⅠ－②期に出現し，Ⅰ－③④期に多くなり，それ以降出土量は減少し，Ⅱ－⑦期以降消滅する。

初期の土師器椀A2は寺院・官衙関係の遺跡でよく見られるもので，一般の集落ではほとんど見られない。特に讃岐国分寺遺跡SK25・26より出土している土師器椀A2（第115図52，65）は福岡県多々良込田遺跡[註42]出土の越州窯系青磁椀（第129図）と同形態を呈している。以上のことから土師器椀A2の出現は形態的に金属器模倣あるいは磁器模倣によるものと考えられる。



第129図　多々良込田遺跡出土越州窯系青磁器実測図

土師器椀Bは体部が内彎しながら外上方に延びるもので，いわゆる深椀タイプである。この深椀タイプには灰釉模倣のもの（土師器椀B2）がある。土師器椀B2はⅡ－②③期に出現し，Ⅱ－⑦期頃まで見られる。この土師器椀B2はやや腰の張る体部を持ち，虎渓山2号窯出土の灰釉陶器の深椀と同形態である[註43]。また，土師器椀B1のなかにも灰釉陶器椀Bに形態的に類似するものがあることからこのⅡ－②③期に灰釉模倣の土師器椀が製作され始めたことが窺える資料である。

土師器椀Bの供膳具に占める割合はⅡ－①期で9％，Ⅱ－④⑤期で28％，Ⅱ－⑥期で35％，Ⅱ－⑧⑨期で10％とⅡ－①期に出現し，Ⅱ－④～⑥期にかけて供膳具に占める割合が多くなり，Ⅱ－⑦期からⅡ－⑧⑨期にかけて割合を減らし，この時期以降消滅する（第4表）。

成形技法面では中讃地域（特に西村遺跡周辺）で底部押し出し技法を導入し，生産が開始される。これについては後述する。

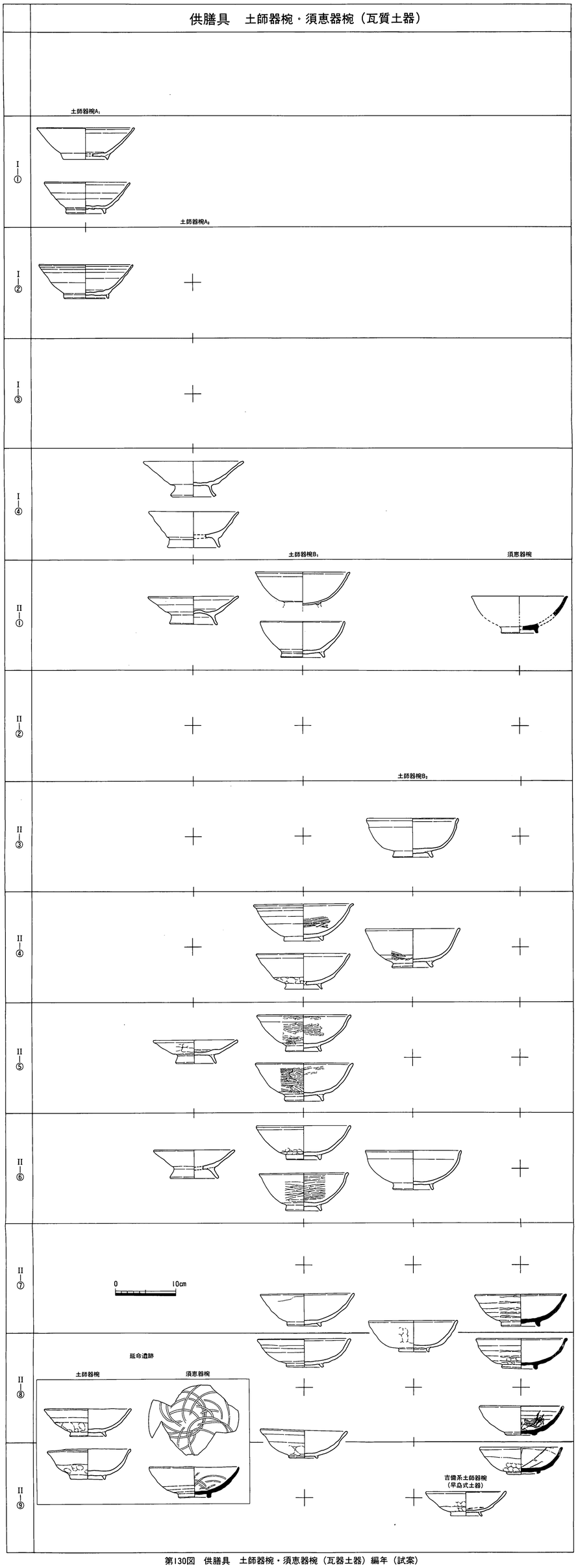
土師器円盤状高台坏・椀（第137図）

底部が円盤状を呈しており，体部は直線的に外上方に延びるものである。底部はヘラ切りされている。

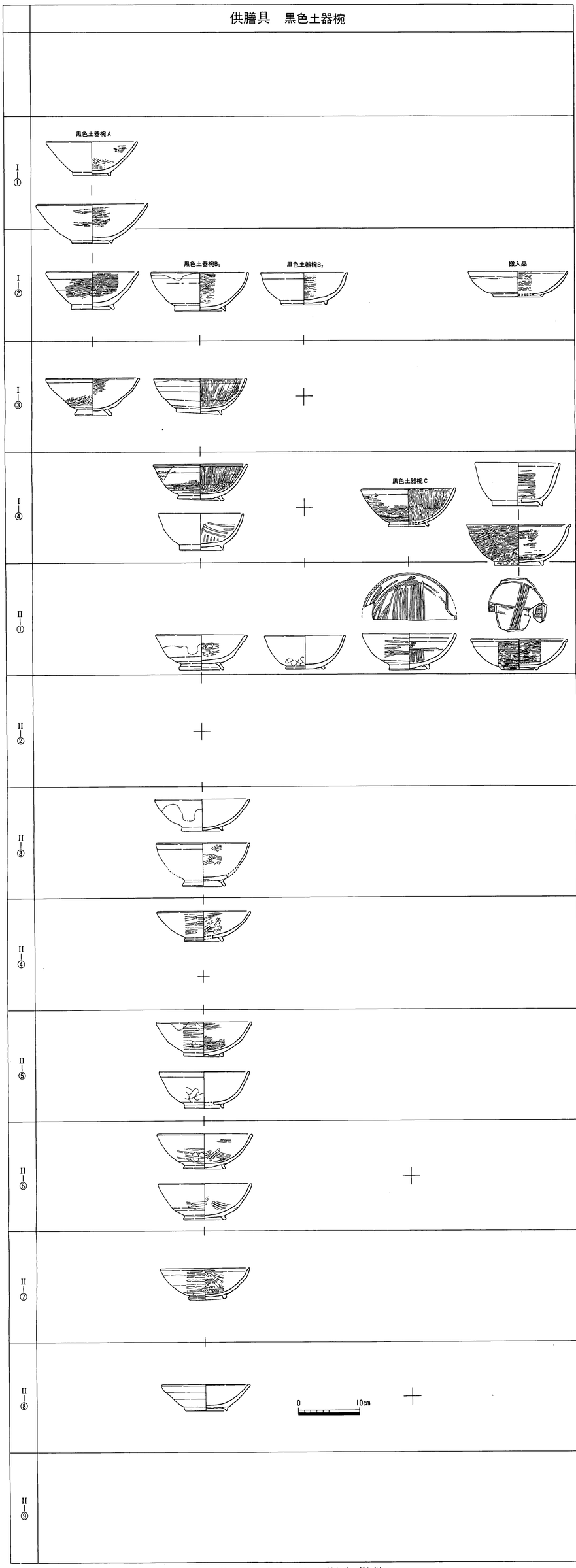
土師器円盤状高台坏・椀はⅠ－②期に若干出現し，Ⅰ－③④期からⅡ－①期にかけて供膳具に占める割合を増やし，Ⅱ－⑥期以降消滅する。

供膳形態に占める割合はⅠ－④期で6％，Ⅱ－①期に14％と供膳形態のなかでは多い傾向を示している（第4表）。

Ⅱ－①期の時期に多くなるのは椀形態受容期に椀形態の代替品として受容された結果と考えられる。



第130図　供膳具　土師器椀・須恵器椀（瓦器土器）編年（試案）



第131図　供膳具　黒色土器椀編年（試案）

黒色土器椀（第131図）

黒色土器椀には内面だけに炭素を吸着させたA類と内外面に炭素を吸着させたB類とがある。この黒色土器椀を器形および調整で細分すると次の4種類（黒色土器椀A・B1・B2・C）と搬入品に分けられる。

黒色土器椀Aは黒色土器A類で，底部に断面方形状の高台を持つ。底部と体部の境には明瞭な稜を持ち，体部が直線的に外上方に延びるもので，底部はヘラ切りされている。形態は回転台土師器第2群に入るものと思われるが，体部の彎曲化が土師器椀より早いこともあり，ここでは別のものとした。この黒色土器椀AはⅠ－①期に出現し，Ⅰ－③期に消滅する。

供膳形態に占める割合は5％以下と多くない（第4表）。

黒色土器椀Bには形態的に2種類（黒色土器椀B1・B2）が認められる。

黒色土器椀B1は黒色土器A類でいわゆる深椀タイプのものである。Ⅰ－②期に出現し，Ⅱ－⑧期に消滅する。

供膳具に占める割合はⅠ－②～④期は3～9％と少ないが，Ⅱ－①期になると22％と，椀形態を黒色土器椀B1で占めている。そしてⅡ－③～⑥期になると黒色土器椀B1が15～18％，土師器椀Bが28～35％と土師器椀Bの方が多くなり，その後徐々に割合を減じながらⅡ－⑧期に消滅する（第4表）。

形態的にⅠ－②期では深椀タイプのもので体部がかなり薄く作られ，底部に径の大きい高台（底径8.4cm）がつく。Ⅰ－③期では底径もやや小さくなり（底径7.6cm），体部も丁寧に作られている。Ⅰ～④期では底径も一般的な大きさ（底径6㎝前後）になり，体部もやや厚く作られる。器面調整は基本的にはヘラ磨き手法であるがその施され方に若干地域差が見られる。中讃地域では体部内外面に分割のヘラ磨きが施されているが，西讃及び中讃の最西端の地域では内面を見込み部と体部内面に分けて2段の縦方向の放射状ヘラ磨きが施されているものがある。前述した高知県ひびのきサウジ遺跡出土の黒色土器A類椀との関係が注目される。

Ⅱ－①期以降中讃地域には西村遺跡周辺で製作された黒色土器椀B1が多く確認される。この期に西村遺跡周辺では土師器小皿・坏Dが出現するのと同時期に黒色土器椀においても底部押し出し技法を導入し，黒色土器椀・土師器椀の生産が開始される。この期以降の黒色土器椀B1の特徴は器高指数が減少[注43]するという傾向が見られる。つまり口径に比べ器高が徐々に低くなるのである。また，西村遺跡周辺で生産された黒色土器椀のヘラ磨き調整の特長は体部外面にはやや太め（3～4㎜）のヘラ磨きが間隔を開けながら回転ヘラ磨きされており，内面には間隔を開けた分割ヘラ磨きが認められることである。しかし，そのヘラ磨きも徐々に簡略化されており，Ⅱ－⑦期以後はほとんど認められないものも出現する。以上のような特徴は西村遺跡で黒色土器椀B1が生産され始めてから終わるまで見られる。

黒色土器椀B2は黒色土器A類で，体部が内椀気味に外上方に延び，口縁端部を外反させる。黒

色土器椀B1に比べるとやや小型のものである。

Ⅰ－②期に出現し，Ⅱ－①期に消滅する。供膳具に占める割合は少ない。

黒色土器椀Cは内外面に炭素を吸着させる黒色土器B類である。器形はほとんど黒色土器椀B1と同じである。Ⅰ－④期に出現し，Ⅱ－⑧⑨期まで確認されるが供膳具に占める割合は1～2％と少ない（第4表）。

搬入品である黒色土器椀は全て畿内からの搬入品で，Ⅰ－②期に確認され，Ⅱ－②期の楠葉産の黒色土器椀をもって見られなくなるようである。供膳具に占める割合は1％と少ない（第4表）。

瓦器

瓦器には小皿と椀があり，全て畿内からの搬入品である。

瓦器はⅡ－②③期にかけて搬入されるが量的には多くない。Ⅱ－⑦期頃より増加し，Ⅱ－⑧⑨期になると供膳具に占める割合が6～10％とこの時期の土師器椀Bと同じ割合である。そしてⅢ－①期に畿内産の瓦器は確認されていない。

Ⅱ－②③期に搬入される瓦器椀のほとんどは楠葉産である。

それ以降は和泉型の瓦器椀で占められる。

吉備系土師器椀（早島式土器）

ここでいう吉備系土師器椀は岡山県西部から広島県東部にかけて分布する早島式土器と呼ばれるものである。

Ⅱ－⑧⑨期に2～3％程度確認されている（第4表）。

まとめ

以上の結果から，供膳具における各時期の土器様相をもとにそれぞれの画期を概観する。

供膳具だけで中世の土器組成を考えると大別して皿・坏・椀があげられる。この皿・坏・椀のセットが中世的土器様式とするならば，このセットの出現期および確立期を求めることが古代から中世の画期を論じるものと考える。そのためにまずここでは供膳具に須恵器が占める割合が徐々に減る時期から皿・坏・椀のセットが確立する時期までを簡単に述べてみたい。

供膳形態のなかに須恵器と土師器が占める割合はⅠ－①期では須恵器60％，土師器40％，Ⅰ－②期では須恵器15％，土師器85％，Ⅰ－③④期では須恵器5％，土師器95％，Ⅱ－①期では須恵器8％，土師器92％，Ⅱ－②期以降須恵器は見られなくなる。このようにⅠ－①期から時期をおうごとに須恵器製品が減少し，土師器製品が増える傾向が認められる。

次に須恵器・土師器を別にした各時期の皿（Ⅱ－①期以降の皿には小皿が含まれ，徐々に主体を占める。）・坏・椀の比率を見るとⅠ－①期には皿22％，坏65％，椀13％，Ⅰ－②期では皿3％，坏76％，椀21％，Ⅰ－④期では皿0％，坏72％，椀21％と供膳形態に坏が占める割合が非常に高い。しかし，Ⅱ－①期になると皿3％，坏47％，椀34％，Ⅱ－④⑤期では皿（小皿）28％，坏23％，椀49％，Ⅱ－⑥期では皿（小皿）23％，坏26％，椀50％，Ⅱ－⑧⑨期では皿（小皿）20％，

供膳具

地域	中讃地域														西讃地域	
時期	Ⅰ－①期		Ⅰ－②期		Ⅰ－④期		Ⅱ－①期		Ⅱ－④⑤期		Ⅱ－⑥期		Ⅱ－⑧⑨期			
須恵器　皿	17	(19)					0.5	(1)								
〃　坏A																
〃　坏B	33	(38)	15	(15)	4	(4)	5	(6)								
〃　椀	2	(3)														
〃　円盤状高台坏・椀					1	(1)	0.5	(1)								
〃　小皿（瓦質土器）													0.6	(1)	ﾍﾗ 0.5 糸 1	(1) (1)
〃　坏D（　〃　）													0.3	(0.5)		
〃　椀（　〃　）							0.5	(1)					15	(24)	5	(7)
〃円盤状高台坏・椀（　〃　）							0.5	(1)			0.5	(0.6				
土師器　小皿							0.5	(1)	20	(28)	14	(23)	12	(19)	ﾍﾗ 20 糸 6	(27) (8)
〃　皿（回）	2	(3)	3	(3)			0.5	(1)								
〃　坏A（回）																
〃　坏B（回）	24	(27)	59	(61)	34	(35)	2	(4)								
〃　坏C					32	(33)	29	(37)	1	(1)						
〃　坏D									16	(22)	16	(26)	ﾍﾗ 22 糸 0.5	(31) (1)	ﾍﾗ 4 糸 18	(5) (24)
〃　椀A（回）	5	(5)	12	(12)	11	(11)		+				+				
〃　椀B			1	(1)			7	(9)	20	(28)	21	(35)	6	(10)	8	(10)
〃　円盤状高台坏・椀				+	5	(6)	11	(14)							ﾍﾗ 0.5 糸 1	(1) (2)
黒色土器　椀A	5	(5)	4	(5)												
〃　椀B			3	(3)	6	(9)	18	(22)	13	(18)	10	(15)				
〃　椀C（B類）							1	(1)	2	(2)	0.3	(0.4				
〃　椀（搬入品）					1	(1)	1	(1)								
瓦器　小皿													0.6	(0.5)	1	(2)
〃　椀									1	(1)			4	(6)	8	(10)
吉備系土師器椀（早島式土器）													2	(3)	1	(2)

煮沸具	供膳具36固体	97固体	123固体	134固体	20固体	47固体	217固体	100% 186固体
土師質土鍋A	3		2	3	2	6		
〃　B						2	7	11
土師質土釜A	7			10				
〃　B							8	3
〃　C			2	2	8	5		

調理具								
楠系　こね鉢			1	1				
須恵器　こね鉢				2.5	1	1.8	5	0.5
東播系　こね鉢							0.7	1
亀山系　こね鉢							0.6	0.5

貯蔵具								
須恵器　壺		1		1	2	1	1	0.5
須恵器　甕		1	1	1	4	3	3	1.5
東播系　甕							0.6	1.5
亀山系　甕							1	1.5
常滑焼　甕								0.5

その他								
輸入磁器					1	0.9	7	2
土師質鍾	1	1		1	1	0.5	1	1.5
特殊土器					8	18	2	1
緑釉陶器	1		+	1.5				

100%

※（回）…回転台土師器　（　）内の数字は供膳具だけでの%である。ﾍﾗ…底部切り離し手法がﾍﾗ切り。糸…底部切り離し手法が糸切り。
Ⅰ－④期の数値は緑釉陶器を除いてのものである。固体数は供膳具だけの固体数である。

第4表　各時期の各器種比率

坏32%，椀40%と徐々に坏と椀の比率が逆転し，皿（小皿）・坏・椀ともに一定量見られるようになる。

しかし，中世的土器様式としての皿・坏・椀は土師器小皿・土師器坏D・土師器椀Bが主体を占めていることから次に各時期ごとにそれぞれの比率を見るとⅠ－①期では土師器皿３％，土師器坏B27%，土師器椀 A5%，黒色土器椀 A5%，Ⅰ－②期では土師器皿３％，土師器坏B61%，土師器椀A12%，黒色土器椀 A5%，黒色土器椀 B3%，Ⅰ－④期では土師器皿０％，土師器坏B35%，土師器坏C33%，土師器椀A11%，黒色土器椀 B9%，Ⅱ－①期では土師器小皿１％，土師器皿１％，土師器坏 B4%，土師器坏C37%，土師器椀 B9%，黒色土器椀B22%，Ⅱ－④⑤期では土師器小皿28%，土師器坏 C1%，土師器坏D22%，土師器椀B28%，黒色土器椀B18%，Ⅱ－⑥期では土師器小皿23%，土師器坏D26%，土師器椀B35%，黒色土器椀B15%となる。以上のことから土師器皿は回転台土師器の皿がⅡ－①期をもって終わり，その代わりに土師器小皿が出現する。土師器坏では回転台土師器の坏BがⅠ－③期以降徐々に減少し，その代わり坏Cが出現する。この坏CはⅡ－③期まで確認されている。そして土師器坏DがⅡ－④⑤期から出現する。次に椀形態ではⅠ－①期には土師器・黒色土器ともに椀Aが主流を占めるがこの時期以降は徐々に椀Bが主流を占める。若干ではあるが椀Bになるのは黒色土器の方が早いようである。また，Ⅰ－②～④期の土師器椀Aは高台の高いもの（土師器椀 A2）が主流を占めている。

以上の結果から，各時期の供膳具の土器組成を概観し，供膳具における古代から中世への変容とその画期について述べたい。

まず，Ⅰ－①期では依然須恵器が60%と半数以上を占めている。しかし，土師器の台頭も著しく40%を占めるまでになっている。器種的にはやはり坏類が多く全体の65%も占めている。黒色土器椀Aおよび土師器椀Aもこの時期前後に出現しているものと考えられている。この坏を主体とした供膳具様式はⅠ－④期まで続く。次のⅡ－①期には器種が多くなるが，その中でも確実に椀形態は増える傾向にある。Ⅱ－④⑤期になると土師器小皿28%，土師器坏D22%，土師器椀B28%，黒色土器椀B18%と小皿・坏・椀からなる中世的供膳具様式が完成する。

以上の結果から，いくつかの画期が認められる。

まず第１の画期としては上記にはないが回転台土師器が出現する時期である。これは須恵器生産のなかから陶土や燃料効率の改善と，生産面での合理化，省力化を計った結果出現してきたものと理解されている。資料的には不明な部分が多いがおおよそ８世紀後半頃に位置付けられると考えている。

第２の画期としては器形面で在地的な土器生産により土師器椀・黒色土器椀が出現する時期である。特に黒色土器の焼成手法は畿内からの技術波及によって起こったと考えられていることからこの時期に画期を設定した。おおよそ９世紀後半頃と考えている。

第３の画期としては以前の坏を主体とした供膳具様式から中世的な皿・坏・椀を主体とした供

膳具様式に変わる時期である。坏を主体とした供膳具様式はII－①期に消滅し，小皿・坏・椀が徐々に出現する。しかし前述したようにその供膳具様式をまず受け入れるのは7世紀より一大窯業生産地であった十瓶山周辺（特に西村遺跡）であった。そして徐々にその他の地域にこの供膳具様式は波及し，完成を見るのがII－④⑤期と考えている。よって時期的にはII－①期から徐々に変わり始め，II－④⑤期には完成しているものと考えられる。

第4の画期としては椀形態に土師器椀がなくなる時期であろうか。供膳具に占める椀形態はII－④⑤期では46%，II－⑥期では50%，II－⑧⑨期では43%（中讃地域），29%（西讃地域）とII－⑦期頃より，椀形態における土師器椀の量が若干少なくなる傾向が見られる。この時期頃より椀形態に漆器あるいは木器の椀が徐々に増加していると考えられる。そして完全に椀形態が木製品に変わる時期がIII－①期頃である。時期は14世紀前半頃と考えている。この時期以降椀形態に木製椀・陶磁器椀が徐々に増加し，質的には変わっていくが，椀形態は残り，小皿・坏も以前として残ることが確認されている。

以上4つの画期を挙げたがその中で供膳具から見た古代から中世への画期には第3の画期（II－①期～II－④⑤期）が当たるものと考えられる。

II－②③期の良好な資料がないことから今後の検討課題は大きい。

(2) 煮沸具について

土師質土鍋（第132・133図）

土師質土鍋には体部が長い長胴タイプのもの（土師質土鍋A）と体部が短く洗面器状を呈するもの（土師質土鍋B）がある。両者とも体部の長短はあるが底部は丸底で，頸部が「く」の字に外反するものである。体部外面には縦方向の刷毛目や指頭痕が施されている。

土師質土鍋Aは長胴タイプで，頸部が「く」の字に外反する。しかし，頸部の外反には内面に明瞭な稜を持たないもの（土師質土鍋A1）と持つもの（土師質土鍋A2）がある。

土師質土鍋AはI－③④期からII－⑥期にかけて多く，II－⑦期ではII－⑥期より徐々に出現する土師質土鍋Bが主流になり消滅してしまう。

全体に占める土師質土鍋Aの割合は2～6%と少ない（第4表）。

土師質土鍋Bは体部が短く洗面器状を呈するもので，頸部は「く」の字に外反する。体部外面には指なでおよび指頭痕が，底部には格子目叩きが施されている。底部外面には叩きが施されていないものもありさらに細分は可能かと思われる。

土師質土鍋BはII－⑥期に出現し，III－⑨期までは残る。

土師質土鍋Bの全体に占める割合はII－⑥期以降10%前後である（第4表）。

中世後半期より土師質土鍋B以外に口縁部が「て」の字状を呈したもの（土師質土鍋C）や口縁部に内耳が付くもの（土師質土鍋D）が出現してくる。

土師質土鍋Cは時期が降るに連れて口縁部の屈曲がやや鈍くなる。また，土師質土鍋Dは鍔お

よび鍔から上部が形骸化する。

土師質土釜（第134・135図）

土師質土釜には体部外面に鍔が付き，頸部を「く」の字に屈曲させるもの（土師質土釜A）と体部外面に鍔が付き，体部からそのまま口縁部に至るもので，底部には3本の脚が付くもの（土師質土釜B）と体部外面に鍔が付き，体部からそのまま口縁部に至るもの（土師質土釜C）の3種類が確認されている。

土師質土釜Aは体部外面に鍔が付き，頸部を「く」の字に外反させる。全体に薄く作られており，鍔先端部および口縁部を小さくつまみ出し，屈曲を付けている。体部外面には縦方向の刷毛目が施されている。

形態的にはⅠ－①～④期までは薄く，鍔から頸部屈曲部までやや間隔があるが，Ⅱ－①期以降鍔から頸部屈曲部までが短くなる。消滅するⅡ－③期には器壁もやや厚くなり，鍔から頸部までの間隔もますます短くなる。

全体に占める割合はⅠ－①～Ⅱ－①②期に7～10％と同時期の土師質土鍋Aよりは多いようである（第4表）。

土師質土釜Bは体部外面に鍔が付き，体部からそのまま口縁部になる。底部には3本の脚が付くいわゆる三足土釜である。体部外面には指なでおよび指頭痕が，底部には格子目叩きあるいは指なでが施されている。体部内面には刷毛目あるいは指なでが施されている。

この土師質土釜BはⅡ－⑦期に出現し，以後Ⅲ－⑨期まで確認されているが徐々に量は減少する。これは中世後半頃から普及する鉄製釜によるためであろうか。

形態は出現期のⅡ－⑦期には鍔および口縁部がしっかりしているが，時期が下るにつれて鍔および口縁部が小さくなり，形骸化の傾向が認められる。

全体に占める割合はⅡ－⑧⑨期に3～8％と幅があり，地域差が認められるがほぼ同時期の土師質土鍋Bと同等量と思われる（第4表）。

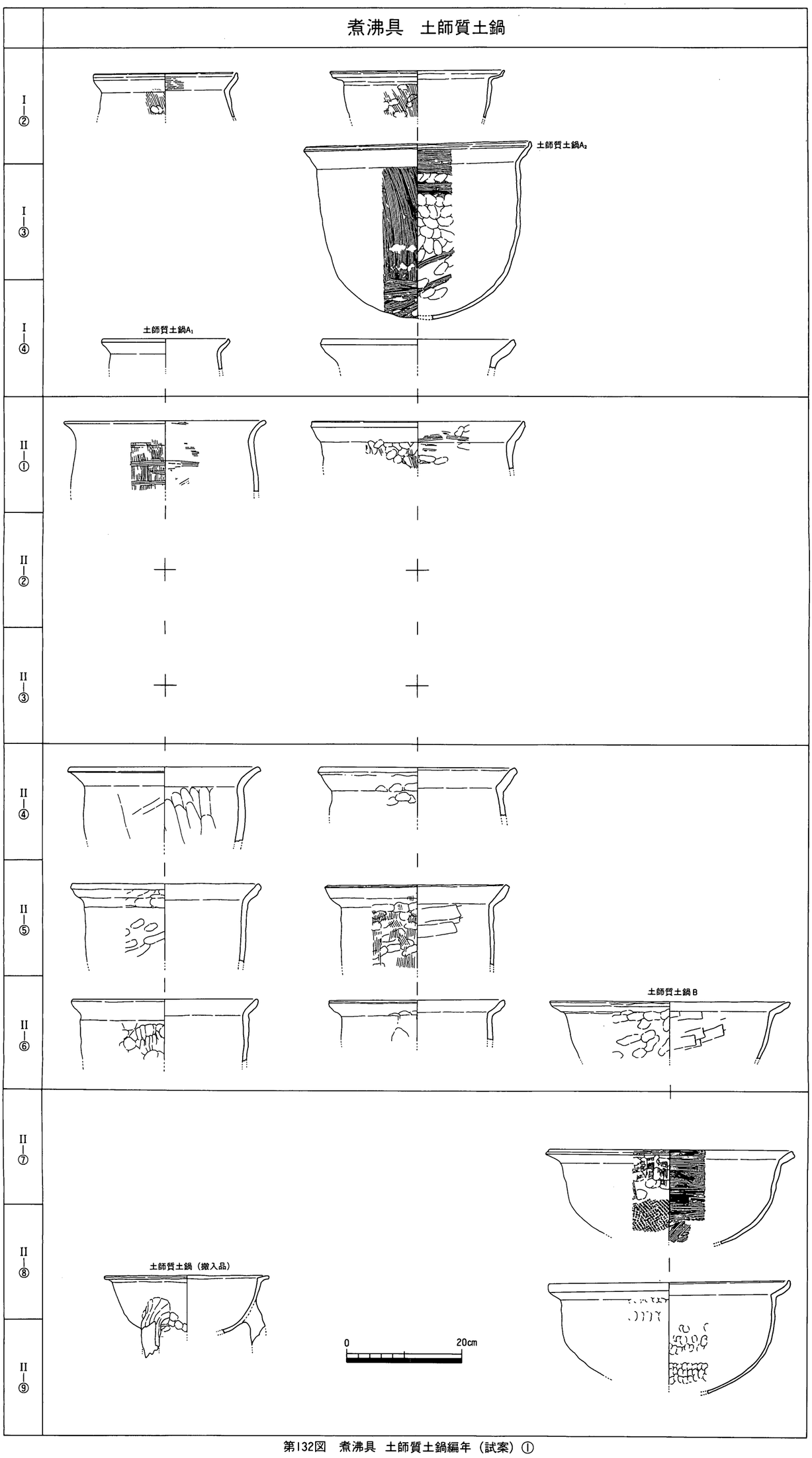
土師質土釜Cは体部外面にやや太めの鍔が付き，体部からそのまま口縁部になるいわゆる摂津C型[注45]と呼ばれるものである。体部は長胴タイプで，外面には縦方向の刷毛目が施されている。

この土師質土釜CはⅠ－②期に出現し，Ⅱ－⑥期まで確認される。

形態的にはⅠ－②期～Ⅱ－①期はしっかりした太い鍔が付き，口縁部までは短い。口縁部は上面に横なでが施され，外面が階段状になっている。しかし，Ⅱ－④⑤期以降になると鍔から口縁部が若干長くなり，口縁端部もそのまま終わらせるものと外半を指なでするもの，内方につまみ出すものと口縁端部にバリエーションが認められる。そしてⅡ－⑥期には口縁部を丸くおさめている。鍔は端部下半を指なでしている。

口縁部形態から細分は可能である。

全体に占める割合はⅠ－②～Ⅱ－①②期で2％以下で，Ⅱ－④⑤期で8％，Ⅱ－⑥期で5％と



第132図　煮沸具　土師質土鍋編年（試案）①

煮沸具　土師質土鍋

III—①
III—②
III—③
III—④
III—⑤
III—⑥
III—⑦
III—⑧
III—⑨

土師質土鍋B

土師質土鍋C

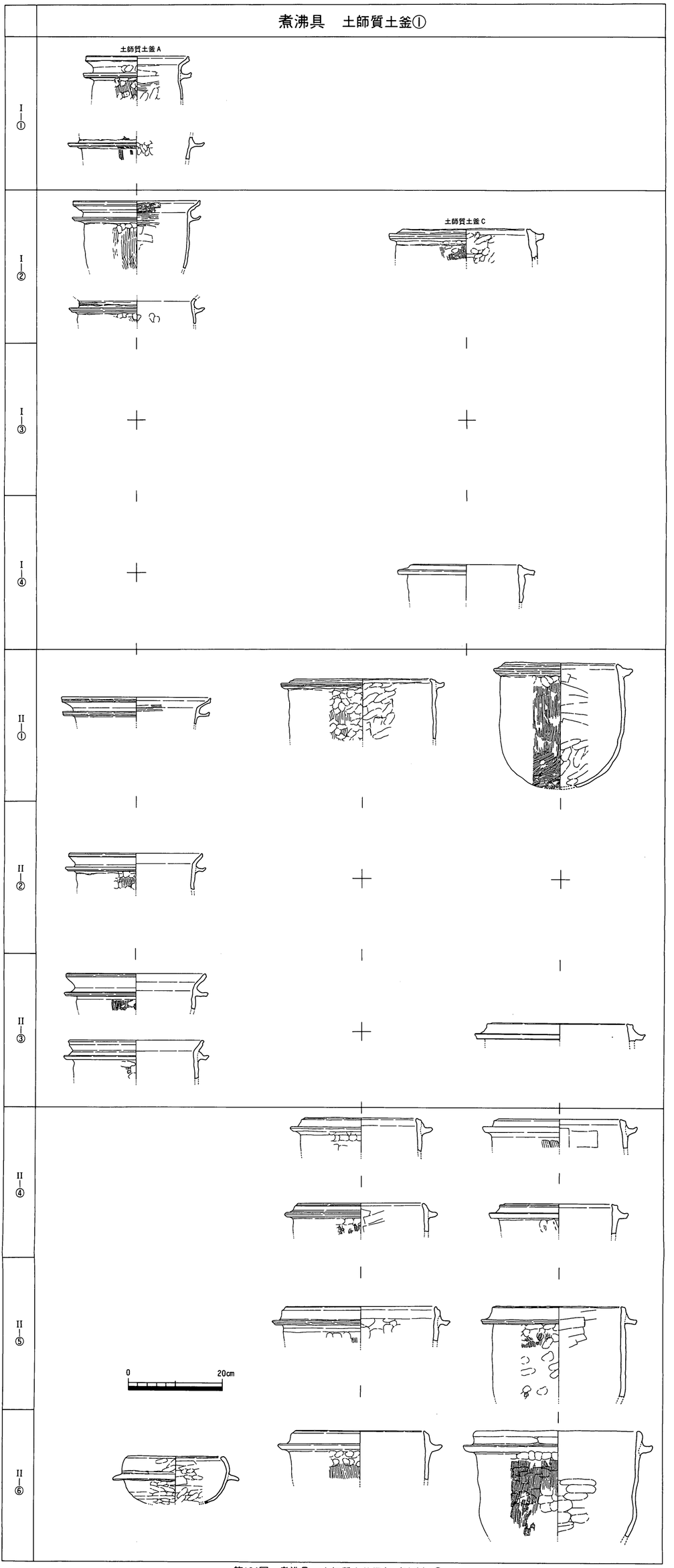
土師質土鍋D1

0　20cm

延命遺跡　土師質土鍋B

第133図　煮沸具　土師質土鍋編年（試案）②

煮沸具　土師質土釜①

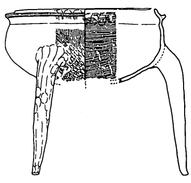


第134図　煮沸具　土師質土釜編年（試案）①

煮沸具　土師質土釜②

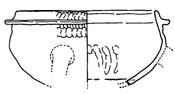
II—⑦

II—⑧



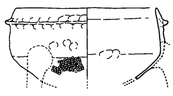
II—⑨

III—①

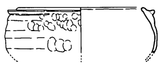


III—②

III—③

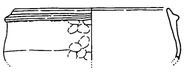


III—④

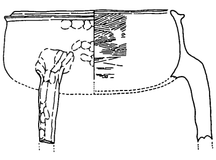


III—⑤

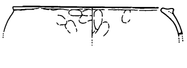
III—⑥



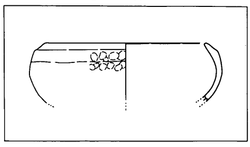
III—⑦



III—⑧



III—⑨



第135図　煮沸具　土師質土釜編年（試案）②

同時期の土師質土鍋Aと同等量である。

この土師質土釜Cが畿内からの搬入品かどうかは不明である。

まとめ

中世的土器様式としての煮沸具は土師質土鍋B・土師質土釜Bのセットである。この土師質土鍋Bと土師質土釜Bが確立する時期はII－⑦期である。これらの出現はII－⑥期から⑦期にかけて土師質土鍋Aが土師質土鍋Bに代わり，土師質土釜Cも土師質土釜Bに代わって出現している。

以上のことから煮沸具においての古代から中世の画期はII－⑥期からII－⑦期にかけてと考えている。

(3) 調理具について

調理具にはこね鉢がある。こね鉢には丹波国篠窯で生産されたと思われるもの(篠窯系こね鉢)，十瓶山周辺窯で生産されたもの，播磨国で生産されたもの(東播系こね鉢)，備中国で生産されたもの（亀山系こね鉢）などがある。

篠窯系こね鉢（第136図）

篠窯系こね鉢は丹波国篠窯[註46]で生産されたものでI－④期～II－①期に確認されている。この時期の形態には体部からやや内彎気味に外上方に延び，口縁部を玉縁状に丸くおさめるものがみられる。

全体に占める割合は1％以下とあまり多くないようである。しかし，この時期頃より食生活になんらかの変化が現われたと考えられる資料である。

十瓶山窯こね鉢（第136図）

十瓶山周辺窯で生産されたこね鉢は体部が内彎しながら外上方に延び，口縁部が「く」の字に外反し，口縁端部を上方につまみあげるものである。このこね鉢はII－①期に出現し，III－①期には消滅している。

形態的には口縁部の外方への屈曲がII－①期では明瞭に稜を残し，口縁端部がシャープであるが，それ以降は口縁端部のシャープさもなくなり，口縁部の屈曲も徐々に緩やかになる傾向を示す。II－⑧⑨期になるとほとんどが体部からそのまま口縁部に至るものになる。これはII－⑦期頃に2形態に分化した結果と思われる。

このこね鉢は出現期より低火度還元焔焼成されており，II－⑤期以降徐々に瓦質焼成のものになる。

全体に占める割合はII－①期で2.5％，II－④⑤期で1％，II－⑥期で1.8％になり，II－⑧⑨期では中讃地域5％，西讃地域 0.5％となる。西讃地域でのII－⑧⑨期以前の出土は確認されていない。そのため中讃地域の割合を見るとおおよそII－⑧⑨期以前は1～ 2.5％程度であるがII－⑧⑨期になると5％と増えるようである。しかし西讃地域では1％以下と地域によって出土量に違いが見られるようである（第4表)。

東播系こね鉢（第136図）

東播系こね鉢は播磨国魚住[註47]窯で生産されたものである。

このこね鉢はII－⑦期に若干量搬入され，II－⑧⑨期に１％程度になる。III－①期以降も少量ではあるが搬入されており，III－③期前後で搬入されなくなる。

形態的にはII－⑧⑨期に搬入されるものは口縁部がやや肥厚するもので，この時期以降この口縁部の肥厚が徐々に大きくなるようである。

亀山系こね鉢

亀山系こね鉢は備中国亀山[註48]窯で生産されたものである。

このこね鉢はII－⑧⑨期だけに少量認められる。

形態的には体部からそのまま口縁部に至るもので，搬入されているものは全て瓦質焼成である。

土師質すり鉢

香川県国分寺楠井遺跡で土師質すり鉢を焼成したであろう窯跡が５基確認されている[註49]。この窯の一つはいわゆる煙管状を呈する構造で，規模は全長1.9m，焼成部径約1.0m，同高約0.5mを計る。その他の窯もほぼ同形態でやや小型の窯であることが確認されている。この窯で焼成されたものには土師質の土釜・土鍋・甕・すり鉢などがある。その中ですり鉢は瓦質焼成されているものが多いようである。また，このすり鉢は同時期の備前焼のすり鉢と同形態を呈していることが確認されている。

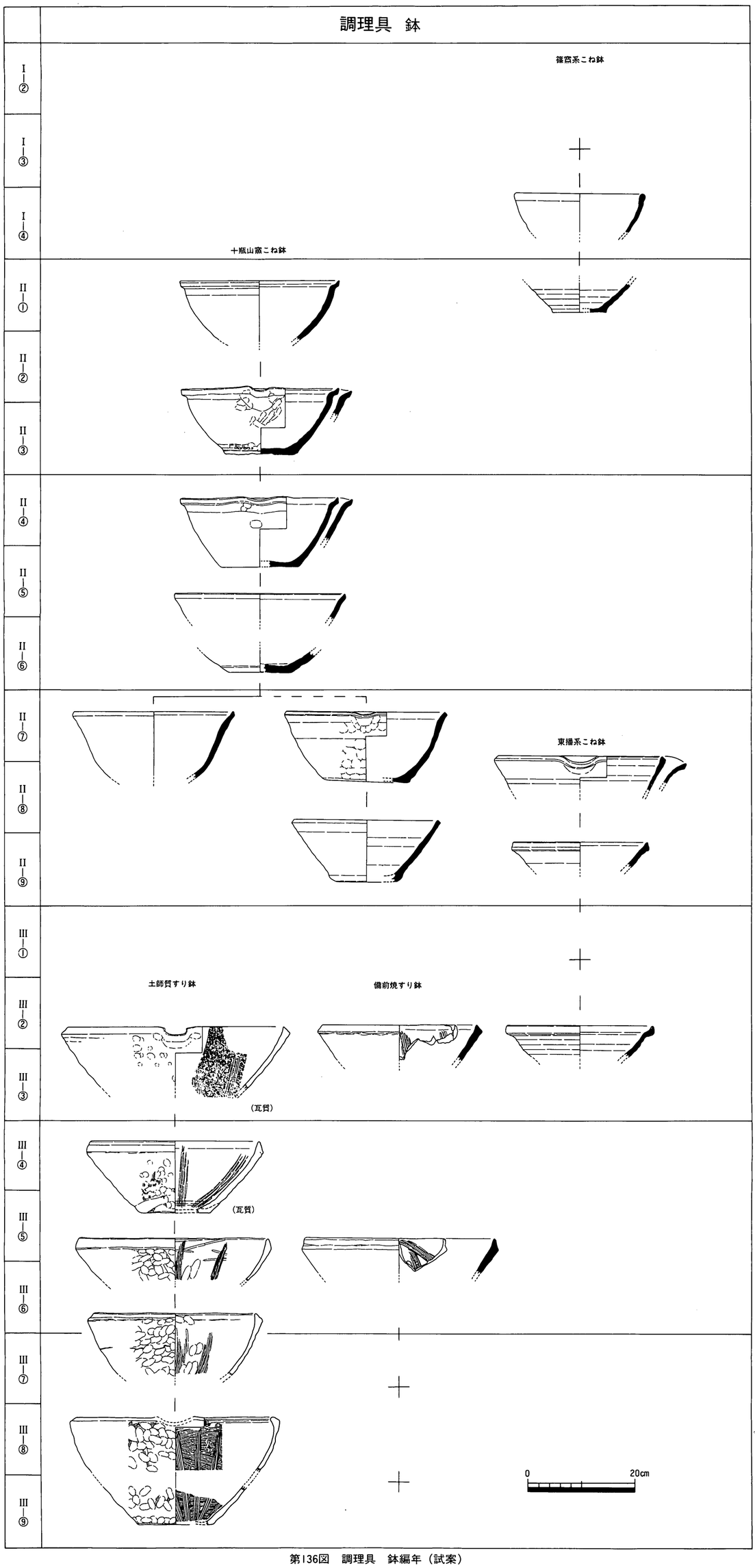
土師質のすり鉢はIII－③期頃より出現する。これは同時期に流通範囲を広げている備前焼のすり鉢を模倣することにより出現したと考えられる。形態的には時期が降るにつれ口縁端部の上方へのつまみ上げが短くなり，内方へ折り返すような形態になる。出現当初は備前焼模倣であるが，それ以降備前焼は口縁部を拡張し，外面に凹線を施すような形態になるが，土師質すり鉢はそれとは逆に口縁部の上方へのつまみ上げが無くなり，内方に折り返すような形態になる。

まとめ

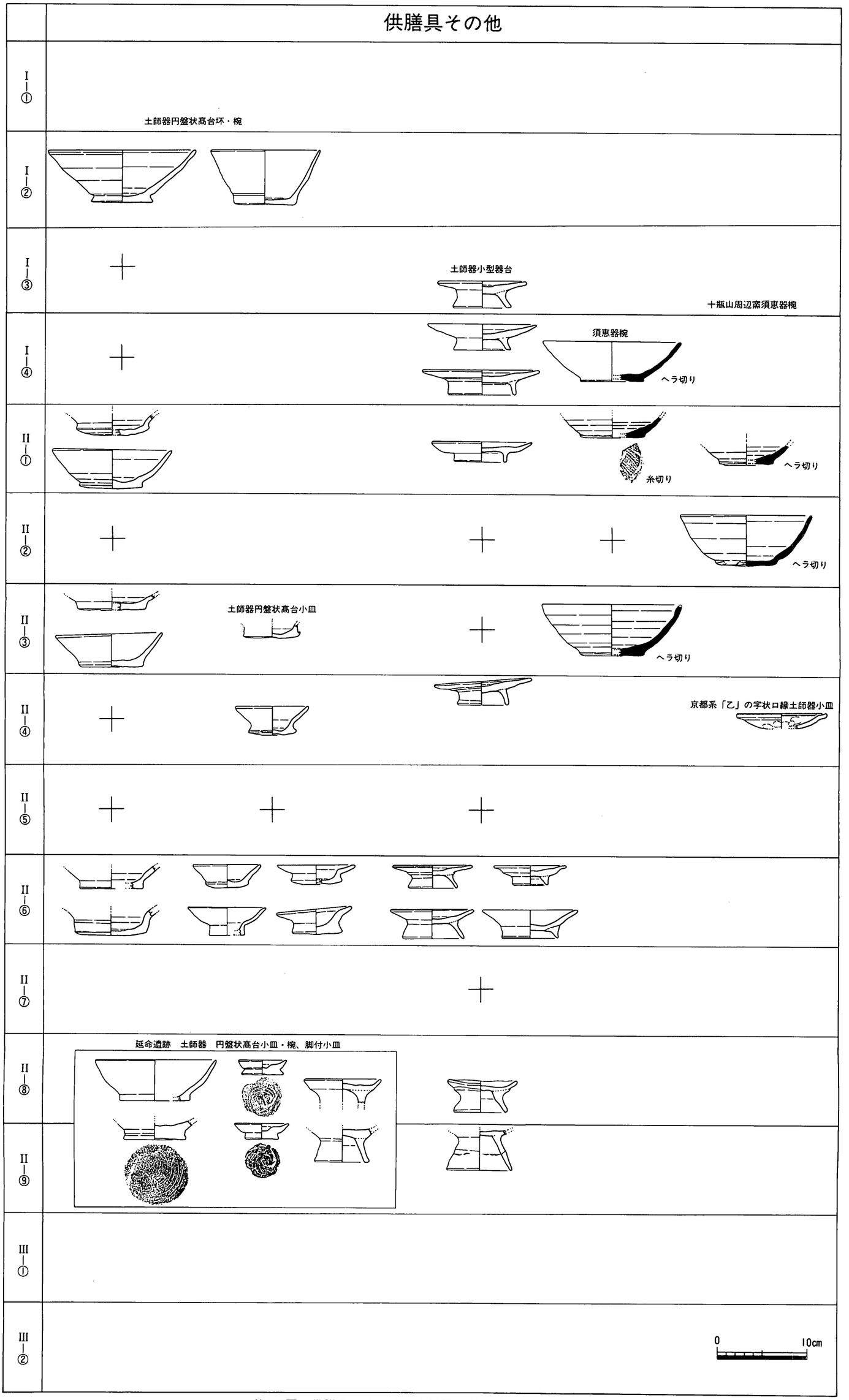
調理具が生活のなかに出現してくるのはI－③④期である。しかし，この時期に使用されているのは搬入品である篠窯系こね鉢で，使用されている遺跡も寺院・官衙遺跡に限られ，公的な機関に食生活における変化が最初に入ってきたことが窺えるのである。この篠窯系こね鉢に代わり，次に十瓶山周辺窯で生産されたこね鉢がII－①期より出現する。全体に占める割合は出現期のII－①期より１～３％を占めており，最終段階のII－⑧⑨期には５％と高くなる。しかしこの時期には西讃地域では0.5％と低いことから地域差が認められる。次にこの時期より出現するのが東播系こね鉢である。東播系こね鉢はIII－③期頃まで搬入され，III－③期頃より，多量に搬入されだす備前焼にとって代わられる。また，土師質のすり鉢もIII－③期頃より出現する。

以上のことから調理具における画期は食生活と関連させた場合に「こねる」と言う行為が一般的に食生活に導入された時期II－①期にひとつの画期があるものと考えられる。また，「こねる」

調理具　鉢



第136図　調理具　鉢編年（試案）



第137図　供膳具　その他　土師器・須恵器編年（試案）

という行為から「する」という行為に代わるIII－③④期にも画期があるのではないかと考えている。

(4) 貯蔵具について

貯蔵具には十瓶山周辺窯で生産されたもの（壺・甕），播磨国で生産されたもの（東播系甕），備中国で生産されたもの（亀山系甕），尾張国で生産されたもの（常滑焼甕）がある。

十瓶山系壺

十瓶山周辺窯で生産された壺は口縁部が朝顔型に開くもので，端部を上方につまみ上げているものとそのまま丸くおさめるものとがある。

全体に占める割合はI－②期からII－⑧⑨期にかけて約1～2％程度を占めている（第4表）。

形態的には口縁端部をつまみ上げ，端部をシャープにするものである。また，別系統の大型の壺もII－③期頃より出現する。焼成はII－③期頃より低火度還元焔焼成されるようで，次のII－⑤期から徐々に瓦質焼成される。

十瓶山系甕

十瓶山周辺で生産された甕は頸部が「く」字に外反し，口縁端部を下方につまみ出すものである。

全体に占める割合は出現期のI－②期～II－①期では1％程度であるがII－④期以降は3～4％とやや高い傾向が認められる（第4表）。

形態的には頸部が「く」字に外反し，口縁端部外面をつまみ出しているが，そのつまみ出しが時期が降るにつれてなくなり，そのまま終わらせるものになる。焼成は生産が終了するII－⑧⑨期まで還元焔焼成されている。

これは経筒外容器として，特産品的に生産されていたと考えられる。

東播系甕

東播系甕は東播磨魚住窯で生産されたもので，頸部が「く」字に外反し，体部外面に平行叩きを綾杉状に施されているものである。

全体に占める割合はII－⑧⑨期に1％前後認められる（第4表）。

亀山系甕

亀山系甕は備中国亀山窯で生産されたもので，頸部が「く」字に外反し，体部外面に格子叩きが施されているものである。焼成は瓦質焼成されたものが多い。

全体に占める割合はII－⑧⑨期に1～2％程度認められる（第4表）。

常滑焼甕

常滑焼甕は尾張国常滑窯[註50]で生産されたもので，頸部が「く」字に外反し，口縁端部上面に一条の沈線が認められるもの（II－⑧⑨期）である。体部外面には叩き痕が粘土紐のつなぎ目部分に施されている。

全体に占める割合はII－⑧⑨期に少量認められ，この時期以降も少量認められる。

まとめ

貯蔵具において古代から中世への画期は器形的には認められない。しかし，壺においてはII－⑤⑥期にかけて瓦質焼成されることから，この時期になんらかの画期を見いだせるかもしれない。甕については十瓶山周辺窯の生産が終わるまで還元焔焼成されている。

(5) その他

京都系土師器小皿（第137図）

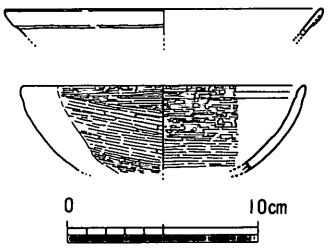
京都系土師器小皿はいわゆる「て」の字状口縁のもので，畿内からの搬入品である。下川津遺跡・川津元結木遺跡（第95図715，第100図780）で少量確認されている。

輸入陶磁器

輸入陶磁器は白磁・青磁・染付を中心として香川県全域のほとんどの遺跡においてかなりの量出土している。若干ではあるが輸入陶器も出土している。

白磁

白磁には椀・皿がある。時期ごとに出土するものをあげて説明する。



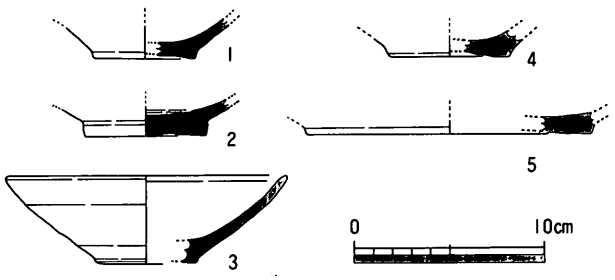
第138図　讃岐国府跡出土遺物実測図

まず，香川県において白磁が出現するのは11世紀である。この時期に讃岐国府跡で楠葉型の瓦器椀と白磁椀Ⅰ類が出土している（第138図）。その他に少量ではあるが白磁皿Ⅳ類が出土している。12世紀になると白磁椀Ⅰ類が無くなり，代わって白磁椀Ⅳ類が多く出土する。その他に椀ではII・Ⅴ・Ⅷ類，皿ではⅤ・Ⅵ類が見られる。13世紀になると白磁椀Ⅳ・Ⅴ類が主流を占めており，若干ではあるが口禿白磁椀（Ⅸ類）もみられる。14世紀は良好な資料が出土していない。15世紀になると少量の端反り口縁を呈した白磁椀が出土している。16世紀になるとその量が増加する。

青磁

青磁には椀・皿がある。時期ごとに出土するものをあげて説明する。

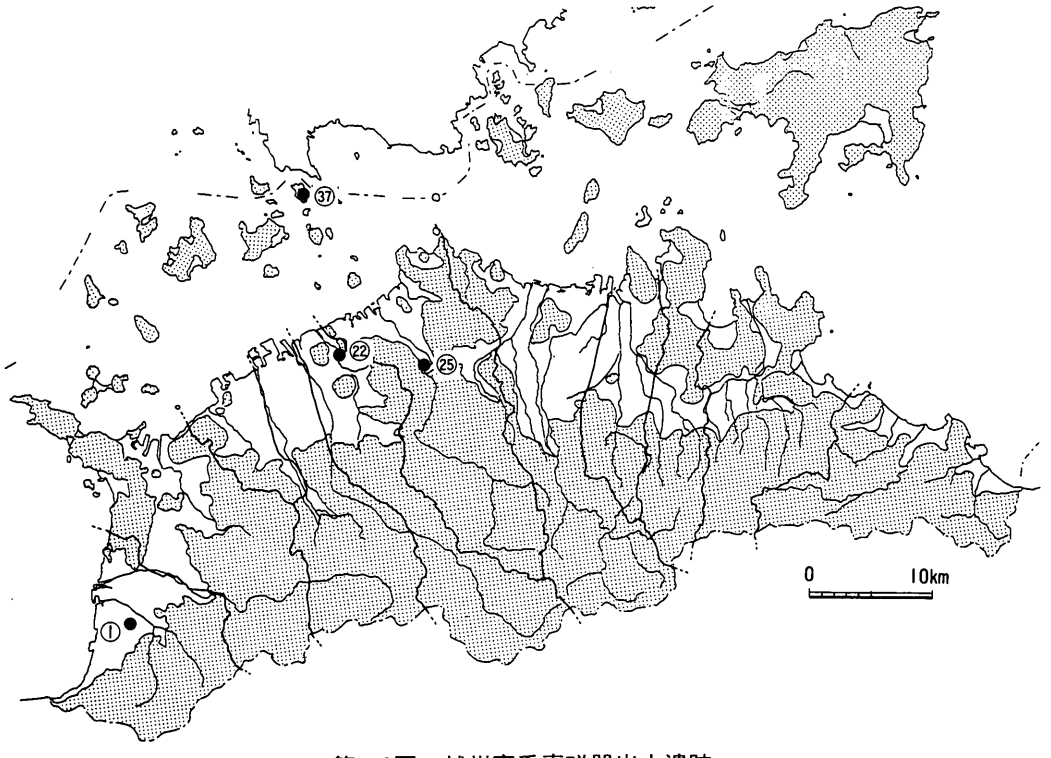
まず香川県において青磁が出現するのは10世紀頃と思われる。この時期に出現するのは越州窯系青磁椀Ⅰ－1a類である。香川県において越州窯系青磁は4遺跡5点出土している（第140図）。11世紀には出土していない。12世紀になると同安窯系青磁椀Ⅰ類・龍泉窯系



第139図　香川県出土の越州窯系青磁椀実測図

青磁椀Ⅰ－4類がみられる。13世紀になると龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類が多くなる。14世紀にも龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類が残る。15世紀になると雷文帯青磁椀や外面の蓮弁が簡略化された鎬蓮弁文系青磁椀が多くみられる。16世紀になると外面の蓮弁が線描になった青磁椀が見られる。

第139図1は柞田八丁遺跡出土の越州窯系青磁である。底部は蛇の目高台を呈している。2は讃岐国府跡出土のものである。底部は蛇の目高台を呈している。内面見込み部に沈線が認められる。3は下川津遺跡SKⅢ49出土のものである。体部はやや内彎気味に外上方に延びる。4・5は大浦浜遺跡出土のものである。4の底部は蛇の目高台を呈している。全てⅠ類である。



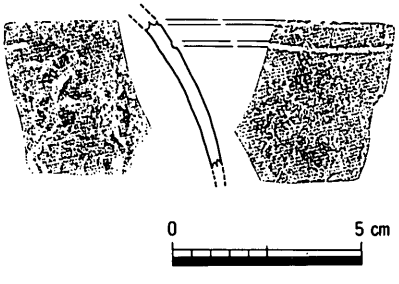
第140図　越州窯系青磁器出土遺跡

染付

輸入染付は15世紀後半頃より少量確認されている。16世紀になると青花椀や口縁部が輪花状になった皿がみられる。

陶器

輸入陶器は16世紀に天霧城跡で朝鮮製の舟徳利[註51]が少量出土している（第141図）。内面に青海波状の叩きが指なでで消されてはいるが認められる。また外面には



第141図　天霧城跡出土陶器実測図

2条の沈線が見られる。

まとめ

香川県において輸入陶磁器は10世紀頃より越州窯系青磁を中心に搬入されるようである。そして11世紀になって越州窯系青磁がなくなると代わって白磁椀Ⅰ類が搬入されている。12世紀になると白磁椀Ⅳ類が主流を占め，Ⅱ・Ⅴ・Ⅷ類が出土している。この時期に同安窯系青磁椀Ⅰ類が少量出土している。13世紀になると12世紀に多量に搬入されていた白磁が徐々に少なくなり，代わって青磁が多くなる。青磁はⅠ－5類を中心としてⅠ－2・4類がみられる。また，同安窯系青磁椀Ⅰ－1類がみられる。14世紀になると龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類が主流を占めている。15世紀になると鎬蓮弁文系青磁椀・雷文帯青磁椀が主流を占めている。この時期に白磁・染付も若干出土している。16世紀になると青磁椀が少なくなり，代わって白磁椀・皿，染付が多量にみられる。16世紀後半になると国産の陶磁器が生産され，輸入陶磁器は減少する（第4・5表）。

土師質竈

土師質竈はⅠ－①期にはみられ，Ⅱ－⑧⑨期まで確認されている。

	遺跡名	越州窯系青磁	白磁	青磁	染付	備考
10C	下川津遺跡 SKⅢ49	椀（Ⅰ－1a類）				越州窯系青磁椀（Ⅰ類）が少量出土している。 その他の遺跡 大浦浜遺跡（2点）・讃岐国府跡（1点）・作田八丁遺跡（1点）
11C	下川津遺跡 SDⅢ03 国府 第7層		椀（Ⅰ類） 皿（Ⅵ類）			越州窯系青磁の出土が見られなくなり、そのかわり白磁の椀Ⅰ類の出土が見られる。 讃岐国府跡出土の白磁椀Ⅰ類は楠葉型瓦器椀（Ⅰ－1・2）と供伴している。
12C	下川津遺跡 STⅢ20 国府 第5・6層		椀（Ⅴ類） 椀（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類） 皿（Ⅴ・Ⅵ類）	椀（Ⅰ類 同安） 椀（Ⅰ類 龍泉） 椀（Ⅰ類 同安）		白磁の椀Ⅳ類がもっとも多く、Ⅱ・Ⅴ・Ⅷ類などがある。同安窯系青磁椀Ⅰ類と龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4類が出土している。
13C	下川津遺跡 SDⅢ71 延命遺跡		椀（Ⅳ、Ⅴ類） 椀（Ⅳ－1、Ⅴ、Ⅷ－2類）	椀（Ⅰ－2・5類 龍泉） 椀（Ⅰ-1類同安） 椀（Ⅰ-4・5類 龍泉）		白磁椀ではⅡ類が無くなり、Ⅳ・Ⅴ類が多いようである。また口禿白磁椀（Ⅸ類）も出土している。 青磁は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5類が多い。
14C				椀（Ⅰ－5類）		良好な遺構が検出されていない。 遺物として青磁椀B－Ⅰ類（Ⅰ－5類）が出土している。
15C	下川津遺跡 SDⅣ01		椀 少量	椀（B類、C－Ⅱ類） 多量	椀 少量	鎬蓮弁文系青磁椀B類、雷文帯青磁椀C－Ⅱ類などの青磁が多く、白磁は少ない。15世紀後半頃より輸入染付が少量出現してくるようである。
16C	昼寝城跡 天霧城跡		椀・皿（端反り口縁）	椀（B－Ⅳ類） 椀（B－Ⅳ類）	青花椀・皿（口縁部が輪花状） 青花椀・皿 船徳利（筒描製）	青磁椀が少なくなり、白磁椀・皿と輸入染付椀・皿が多くなっている。 16世紀後半頃より国産の陶磁器が多くなり、輸入陶磁器は少なくなる。

第5表　輸入陶磁器変遷表

全体に占める割合は１～２％程度である。

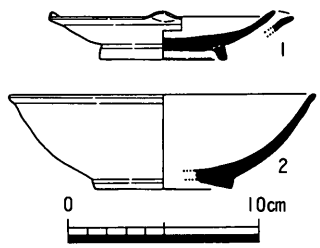
特殊土器（第137図）

ここで特殊土器としてあげたものは底部が円盤状高台を呈した坏・皿類と土師器の坏・皿に高台が付くものである（第95図679～699，706～711）。

この特殊土器はII－④⑤期で８％，II－⑥期に18％と多く，この時期以外は少ないものと思われる（第４表）。しかし，その出土量はこの土器群に祭祀性を持たす場合において，遺跡の性格に左右される可能性がある。

緑釉陶器[註52]

緑釉陶器は香川県において９世紀後半頃より出土している。下川津遺跡・讃岐国府跡・讃岐国分寺跡というような官衙・寺院関係遺跡からの出土量が多い。



第142図　緑釉陶器実測図

第142図１は香川県三豊郡財田町出土の緑釉陶器[註53]皿である。出土遺構は墳墓出土と記載があるが詳細については不明である。底部に高台端部に沈線状の段がある高台が付き，口縁部は四方を輪花状にしているものである。高台内面には糸切り痕が認められる。釉は全面に施釉されており，黄緑色を呈している。焼成はやや悪い。近江産の緑釉陶器と思われる。

２は讃岐国府出土の緑釉陶器椀である。底部は蛇の目高台を呈しており，体部はやや内彎気味に外上方に延びるものである。内面見込み部に重ね焼の痕跡が認められる。釉は全面に施釉されており，淡緑色を呈している。焼成は硬質である。京都産と思われる。

4．讃岐における回転台土師器について

まず，回転台土師器とは「須恵器的な製作技法に通じる低速回転台成形を手法上の特長とする土師器」の略称で，森氏が「土師器の生産において，在来の須恵器工人が陶土や燃焼効率の改善と，生産面での合理化，省力化を計り，意図的に低火度酸化焔焼成に製品を仕上げる生産形態と定義づけた回転台土師器第2群[註54]に当たるものである。

香川県における回転台土師器をみると，「須恵器に形態面での素形が有り，器形及び調整が須恵器と同じで焼成が低火度酸化焔焼成されているもの」と言う要素が森氏の定義に追加される。以上の定義に基づくと香川県において回転台土師器は器種的に土師器皿・坏A・坏B・椀Aがあげられる。

回転台土師器の出現時期については良好な資料がないため不明である。

供膳具に占める回転台土師器（主として須恵器坏B・土師器坏B・土師器椀A）の消長をⅠ－①期から時期ごとに追ってみたい。

まず，須恵器坏Bと回転台土師器の坏Bの供膳具に占める割合を見るとⅠ－①期では須恵器坏38%，土師器坏B27%，Ⅰ－②期では須恵器坏B15%，土師器坏B61%，Ⅰ－④期では須恵器坏B4%，土師器坏B35%，Ⅱ－①期では須恵器坏B6%，土師器坏B4%とⅠ－①期より須恵器坏Bが徐々に減少し，代わって土師器坏Bが増加する。その土師器坏BはⅠ－②期に最高頂に達し，以後徐々に減少する。そして，須恵器坏Bが消滅する時期に土師器坏Bも消滅してしまう。このように須恵器坏Bと土師器坏Bは器型及び調整そして消滅期まで同じことから土師器坏Bの製作に当たっては須恵器工人が関与していたことが考えられる。また，皿ではⅠ－①期に須恵器皿17%，土師器皿3%とあまり生産されていない。この時期以降須恵器皿は徐々に減少し，土師器皿も同じように減少する。次に土師器椀Aは須恵器坏Aの底部に高台を付けたものによく似ており，ここではこの須恵器坏Aと比較したい。須恵器坏AはⅠ－②期まで見られ，同様に土師器坏AもⅠ－②期まで認められる。土師器椀AでⅠ－③期に残るものはⅠ－②期より徐々に出現する土師器椀A2である。

このようにⅠ－①期から須恵器に代わり土師器の割合が高くなっていることが判る。この様な結果は生産工程を合理化し，省力化を計り，生産性を高めたために起こった現象と考えられる。そして回転台土師器が出現した背景として天平13（741）年の国分僧寺・尼寺の造営と関連があると巽氏が考察している[註55]。ということは奈良時代後半に造られた[註56]と思われる讃岐国分寺があることより，香川県に於いても8世紀中葉から後半において回転台土師器の生産が行われていた可能性が考えられる。

5．十瓶山周辺窯業の変容について

(1) はじめに

香川県綾南町陶の十瓶山周辺に分布する窯跡群は約100基程度で構成されており，古代より窯業の中心であったことが知られている。「延喜主計寮式」によれば，平安京に須恵器を調貢する国は摂津・和泉・近江・美濃・播磨・備前・讃岐・筑前の８ヵ国である。讃岐の国はその調貢国の一つで，十瓶山周辺の窯業も９世紀頃までは確実に国衙の支配下に置かれていたことが推定される。

十瓶山周辺窯の土器生産は７世紀頃より開始され，13世紀後半頃まで続けられている。須恵器の生産はほとんどの地域で９世紀頃に終わるが，９世紀以降も継続して窯業活動を行っている地域もある。そのひとつに十瓶山周辺窯群も含まれる。たとえば備前国伊部に基盤を置く寒風を始めとする須恵器窯はその後も継続され，その一部は備前焼として今日まで生産されている。

このようにひとつの流れのなかでも備前焼のように還元焔焼成から酸化焔焼成へと焼成が変わり，焼成器種にしても徐々に器種が少なくなり，最終的には壺・甕・鉢の特定器種量産体制に変わるものもある。このような現象は多少の違いはあるが十瓶山周辺窯群にも言えることである。

ここでは十瓶山周辺における窯業生産体制の変化を供膳具のなかの椀形態の製作技法を解明することにより考察してみたい。

(2) 椀形態の製作技法について

西村遺跡の調査において土師器椀・黒色土器椀・須恵器椀（瓦質土器椀[註57]）と土師器小皿・土師器坏・瓦質小皿などが多数出土している。

これら出土遺物の中の特に椀形態の土器には法量，製作技法および器面調整技法に同様な技法を用いていることが判っている。

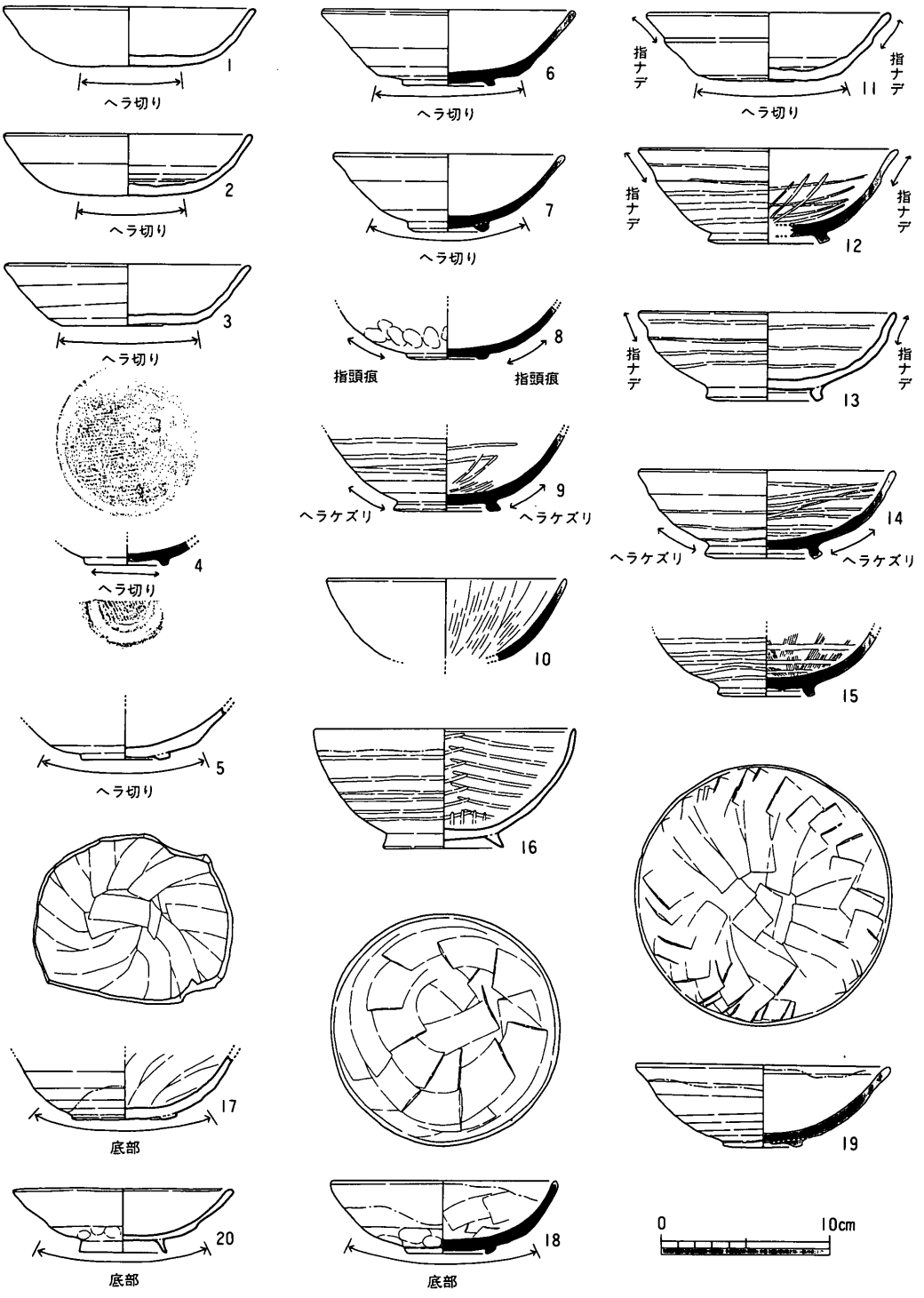
これらの遺物を細かく見ることにより，椀形態の製作技法を復元してみたい。

まず，復元作業に資料として用いた遺物（第143図）を説明する。

１～５は西村遺跡０トレンチ第４層上部出土の遺物である。１～３は土師器坏である。底部はヘラ切りされており，体部内外面は横なでされている。３の底部には板状圧痕が見られる。形態的に体部と底部の境に稜を持つもの（３）と稜を持たないで丸くおさめるもの（１・２）がある。

４は須恵器椀（瓦質土器椀）である。底部に板状圧痕が認められる。５は土師器椀である。体部外面下半に稜を持つものである。体部内面には下方から上方への刷毛目が施されている。時期は13世紀後半頃と思われる。

６～８は西村遺跡Ｎ－14SK3出土の遺物である。６～８は須恵器椀(瓦質土器)である。６は体部下半に稜を持つものである。体部内外面は横なでされている。７は体部内外面が横なでされており，体部外面下半に明瞭な稜を持たないものである。８は体部外面下半に指頭痕が顕著に認められる。時期は13世紀後半頃と思われる。



第143図　土師器坏・椀，黒色土器椀，瓦質土器椀実測図

9・10は西村遺跡1号窯から出土した遺物である。9は須恵器椀（瓦質土器椀）である。体部外面に3～4㎜のやや太いヘラ磨きが間隔を開けながら施されている。内面にも同様なものと方向を異にするヘラ磨きが施されている。10は須恵器椀（瓦質土器椀）である。体部内面に下方からの板なでが施されている。時期は12世紀前半頃と思われる。

11～15は西村遺跡N－35SK25出土の遺物である。11は土師器坏である。底部はヘラ切りされており，体部内外面は横なでされている。12・14・15は須恵器椀（瓦質土器椀）である。体部内外面にやや太いヘラ磨きが間隔を開けながら施されている。15はヘラ磨きの前に下方からの刷毛目が施されている。13は土師器椀である。体部内外面の調整は須恵器椀（瓦質土器）と同様である。

11～13の外面口縁部にはやや強い指なでが施されている。時期は12世紀頃と思われる。

16は西村遺跡N－3SK01出土の黒色土器A類椀である。体部外面には3～4㎜のやや太いヘラ磨きが間隔を開けながら，内面には同様のヘラ磨きが分割手法で施されている。時期は11世紀頃と思われる。

17～20は下川津遺跡SD Ⅲ71出土の遺物である。17～19は須恵器椀（瓦質土器椀）である。体部内面に板なで（刷毛目状のものもある。）が施されている。20は吉備系土師器椀（早島式土器）である。体部外面下半にわずかに屈曲部が見られ，その屈曲部より下方に指頭痕が顕著に認められる。上方及び内面は横なでされている。時期は13世紀後半頃と思われる。

以上の遺物で土師器椀・黒色土器椀・須恵器椀（瓦質土器椀）等の椀形態の製作技法について述べたい。

土器椀の製作工程を復元すると，陶土採取，成形，器面調整，焼成の4つの工程に大きく分けられる。

① 陶土採取

西村遺跡において多数の土坑が検出されている。廣瀬氏はこの土坑を粘土採掘坑であると考えている[註58]。おそらく集落近辺が良質の粘土が採取できる場所であったためにこのような採掘坑が掘られたものと考えられる。

② 成形

成形段階には①坏を作る工程，②椀型にする工程が考えられる。

坏を作る工程

坏の成形は粘土紐巻き上げ回転台成形が考えられる。これによって出来たものが第143図1～3・11である。坏には底部と体部の境に稜を持つもの（3・11），体部と底部の境に稜を持たないで丸くおさめるもの（1・2）が認められる。法量は口径13～15cm，器高3～3.5cmで，同時期の下川津遺跡SD Ⅲ03，05出土遺物には見られないやや大振りの坏である。

この土師器坏は外面口縁端部下にやや強い横なでが施されている。底部は全てヘラ切りされており，中には板状圧痕が残っているものも見られる。

椀型にする工程

この工程は前工程で作った坏を椀型にする工程である。

第143図5・6を見ると底部に高台がついているものの，高台を取ると11の坏とほぼ同形態になる。ということは前工程で作った坏と椀形態になんらかの関係が想定される。そこで椀形態を呈する土器を細かく見ると12～13世紀の椀の体部外面下半には稜が見られるものが多いことが確認された。そしてこの稜間に時として底部切り離し手法であるヘラ切りが認められるものを少量ではあるが確認している。この稜は椀5・6で見られた稜と同様のもので，土師器坏の底部と体部の境の稜であることが判る。そして，その稜の部分を実測図断面で見るとかならずその他の器壁の厚さに比べてやや厚いことが判った。ここで考えられるのは坏を何らかの方法により底部を丸くし，外面に高台を付けたという工程が想定できるのである。

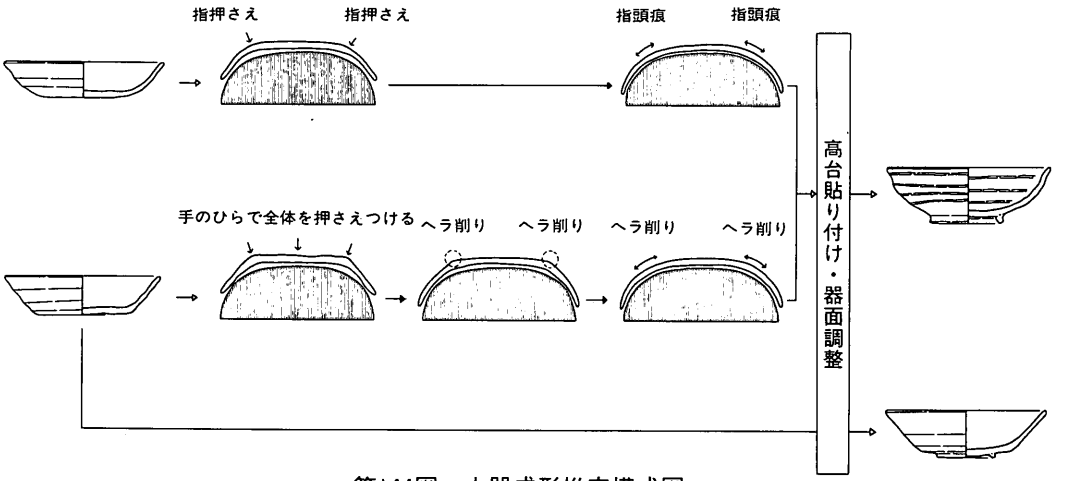
底部を丸くする方法は内面見込み部を指で押し出す方法と半球形状の内型を使い底部内面を丸くする方法が考えられるが，現在のところその方法については推測の域をでない。しかし，第143図8の体部外面下半のちょうど屈曲部の稜があった部分には指頭痕が顕著に見られるものがある。

この指頭痕は坏を内型に伏せた時に出来る隙間の部分（ちょうど坏の底部と体部の境）を外面から押し，その隙間を無くしたことによって出来たものの可能性が考えられ，前述した内型を使った底部押し出し技法の傍証になると考えられる（第144図）。

要するに底部を押し出す方法を考察すると坏を内型に乗せ，坏外面の体部と底部の境の部分を押し，坏を椀型にする工程が復元できるのではないだろうか（第144図）。

また，体部外面下半には指頭痕のほかにヘラ削りが施されているものがみられる。これは6・7で見られる体部と底部の境の器壁の厚さを一定にするために外面をヘラ削りしたためであることも考えられる。

このようにして出来た椀型の坏の底部に高台を付けるのである。



第144図　土器成形推定模式図

③　器面調整

器面調整は1次調整と2次調整に分けられる。

1次調整は前工程の内型による底部押し出し技法によって出来た内面凹凸を平滑にするために板状のものによるなでを施す。17～19の土器の内面に見られる見込み部から口縁部に向っての螺旋状の板なでがそれである。10は下方から上方への板なでが施されている。ここで言う板なでは刷毛目状になるものやこてあて痕のように最初に器面に押し込んだ部分しか残っていないものも含めての総称である。

2次調整としては体部内外面に施されている3～4㎜とやや太いヘラ磨きがある。このヘラ磨きは内外面とも間隔を開けて施しているのが特徴で，内面には分割によるヘラ磨きも見られる。

しかし，13世紀になるとヘラ磨きは認められず1次調整だけで終わらせているものが顕著になる。

椀15ではヘラ磨きによって切られている刷毛目状の板なでが見られることから器面を平滑にする器面調整を施した後に暗文風のヘラ磨きが施されることが判る。

1次調整の板なでは13世紀後半になると雑になり，刷毛目状の板なでが目立つようになる。2次調整のヘラ磨きも簡略化され，最後にはほとんど施されなくなる。

④　焼成

前工程で製作された椀はそれぞれの製品の特徴から同時に焼成されたものとは考えられず，土師器椀・黒色土器椀・瓦質土器椀というようにそれぞれに焼分けされたと考えられる。

それぞれの窯構造については現在不明であるがおそらく十瓶山周辺窯で確認されているような平窯あるいは登窯で焼かれたものと考えられる。それぞれの焼成方法は土師器椀が低火度酸化焔焼成で，黒色土器も低火度酸化焔焼成でその後内面黒色処理すると考えられる。また，瓦質土器は低火度還元焔焼成すると考えられる。

このように平窯あるいは登窯構造の窯を使い焼成方法を変えることにより，製品を焼分けていたことが推測される。

(3)　まとめ

以上の結果西村遺跡で出土している土師器椀・黒色土器椀・瓦質土器椀の製作技法が内型を使った底部押し出し技法であると推定した。この技法は九州大宰府で森田勉氏が指摘したもので，森田氏はそのなかで丸底の坏と椀の形態及び製作技術上の共通点を指摘し，坏から椀を作る製作手順を復元した[註59]。

このように椀型を作る技術には指による内面底部押し出しか，内型を使い内面底部を押し出すかの差はあるが坏から椀を作るという工程に差はなく，その面からすると大宰府と香川でほぼ同様な椀形態の製作技法が見られる。以上のことから大宰府と香川県の西村窯とが何らかの繋がりがあったことが指摘できる。

そこで次に両地域における底部押し出し技法についての出現期を見る。

香川県においてこの底部押し出し技法が出現する地域は西村遺跡（十瓶山周辺窯）と考えている。廣瀬氏は西村遺跡のなかで製作技法については考察していないが，西村遺跡出土の土師器小皿・坏・椀，黒色土器椀，瓦質土器椀を編年しており，ほぼ11世紀の前半頃に生産開始を設定している。この11世紀前半に十瓶山周辺窯（西村遺跡）の画期を設定するもので，底部押し出し技法を採用し，土師器椀・黒色土器椀・瓦質土器椀の生産を開始したものと考える。

一方，大宰府では山本信夫氏によって10世紀末頃より内面のコテの痕跡が徐々に出現し，11世紀前半頃に多くなると指摘されている[註60]。

以上のことより時期的にみると両地域において11世紀前半中頃という同時期に底部押し出し技法が成立していることになる。

このことから両地域における繋がりをみると，大宰府条坊跡第88次SE040（井戸跡）から西村遺跡で生産されたこね鉢が出土している（第145図）。時期は山本編年のXI期頃（11世紀中頃）である。

このように大宰府において十瓶山周辺窯産の須恵器こね鉢はまだ他にも確認されており，調理具として篠窯系の須恵器鉢から東播系の須恵器こね鉢に変わる間を埋めるように西村産のこね鉢が搬入されているとのことである[註61]。

おそらく11世紀前半～中頃に十瓶山周辺窯で生産されたもの（こね鉢）の大宰府への搬出と同時に椀形態における底部押し出し技法を受け入れ，西村遺跡において今までの窯業生産を再編成したものと考えられる（第146図）。

再編成は須恵器製作工人と土師器製作工人を一つの集落内（西村遺跡）にまとめ，低燃料・低コストで生産するもの（低火度還元焔焼成および酸化焔焼成）と従来と同様の生産をするもの（還元焔焼成）に分けたことである。

ここに須恵器工人と土師器工人の同一集落内の統合化が起こり，両者による焼物別の生産が行われたのである。

また，それはそれぞれの椀の器面調整からも言えることである（第143図）。

土師器椀5・13，黒色土器椀16，瓦質土器椀9・10・12・14・15を見ると，椀型の器面調整，内外面の回転ヘラ磨きおよび板なで調整等がほとんど同じことが判る。これは同一工人集団が椀型を製作したものか，あるいは各工人間に同様な技術がないと出来ないことである。

以上のことから西村遺跡はその再編成が行われた遺跡で，ここで同一技法により椀形態まで作り，従来の還元焔焼成するもの，低火度還元焔焼成するもの，酸化焔焼成するものに分けて土器生産が行われたと思われる。

その時期は11世紀第2四半期頃と推定する。

この時期を以て十瓶山周辺窯では椀形態を作る前段階の坏Dが必要となり，中世的土器様相である小皿・坏D・椀というセットがいち早く完成したものと思われる。

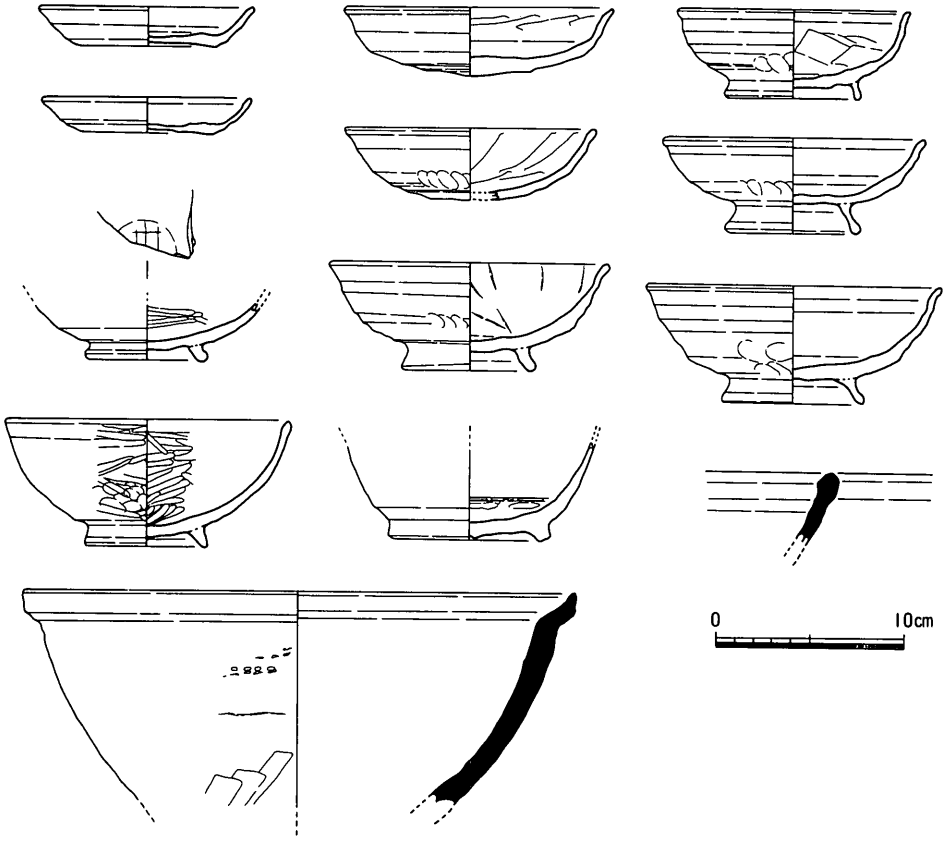
また，12世紀中葉には十瓶山周辺窯にも次の画期が認められる。それは瓦器の外観的色調を模倣したのか外面を黒色化するものが多くなることである。この時期に今まで還元焔焼成されていた壺が低火度還元焔焼成されるものに焼分けられることが指摘できる。この画期を第２の画期として位置付けたい。

そして，十瓶山周辺窯は13世紀末を以て終焉を迎えるのである。これが第３の画期である。

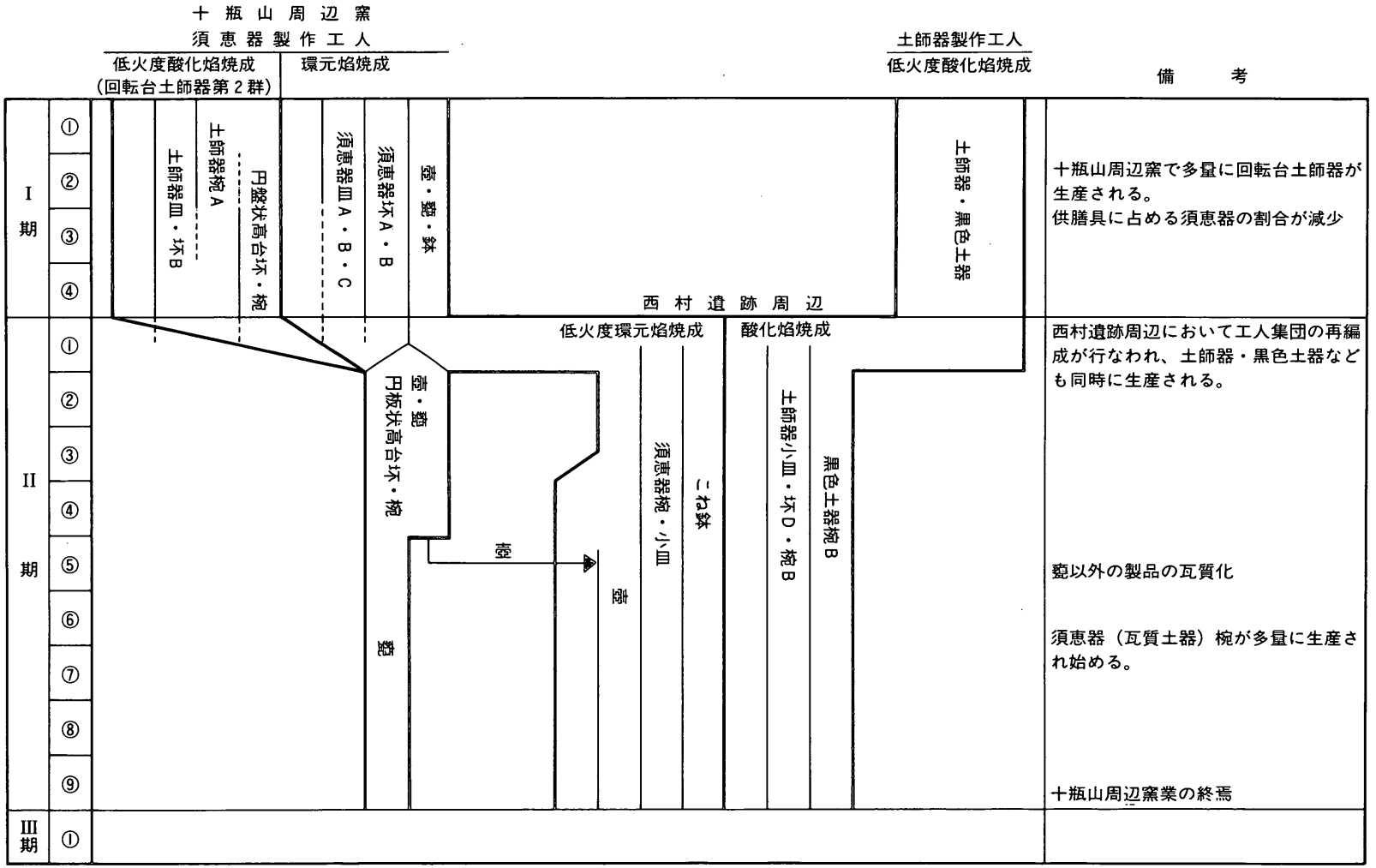
追記

ところで九州大宰府・香川で確認された椀形態の底部押し出し技法の技術面での広がりは，どうであろうか。

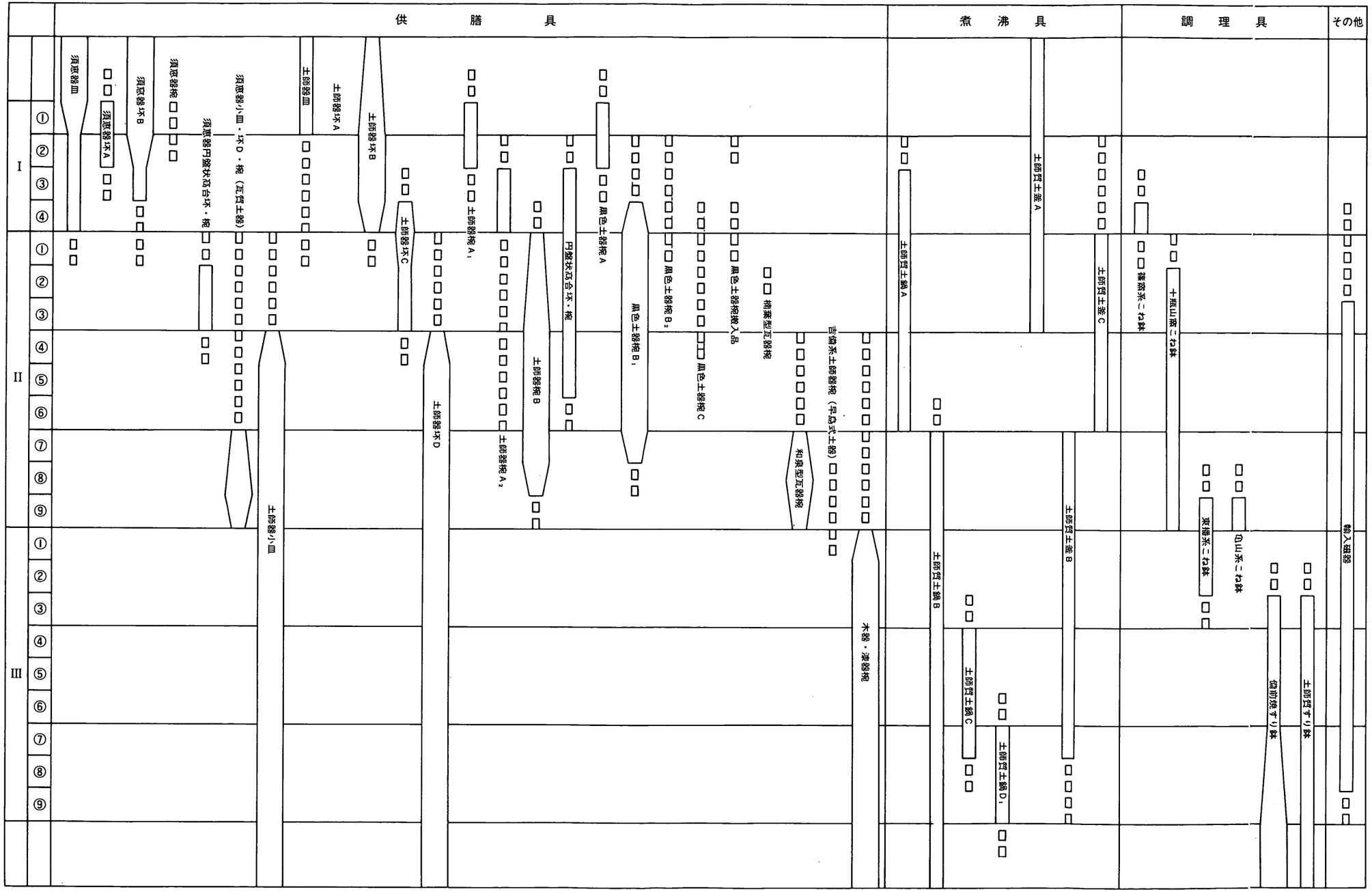
愛媛県古照遺跡出土遺物のなかに底部押し出し技法で製作されたと思われる黒色土器が確認された[註62]。また，第122図20の早島式土器（吉備系土師器椀）にも体部下半に稜が見られ，この技法での製作を窺わせるものがある。このように技術の分布論についてはまだまだ考察を加えたものが多くないのが現状である。しかし，おおまかに西日本特に香川・岡山以西に分布しているようである。



第145図　大宰府条坊跡第88次ＳＥ040（井戸跡）出土資料



第146図　十瓶山周辺窯の変容



第147図　9～16世紀の器種変遷図

しかし，早島式土器（吉備系土師器椀）については，鈴木康之氏により，瓦器椀と同様な内型あるいは粘土紐まき上げによる製作手法を復元しており[註63]，まだまだ椀形態の製作技法については不明な部分が多く，今後の研究課題としておきたい。

6．まとめ

以上，古代後半から中世にかけての資料を基に各時期の供膳具・煮沸具・調理具・貯蔵具について，それぞれの各期を設定した。

供膳具おいて第1の画期は，回転台土師器の出現するであろう8世紀後半頃である。

回転台土師器の出現は岡山県でもほぼ同時期に出現していることが報告されている[註64]。

供膳具の構成から見るとこの時期より徐々に供膳具に占める須恵器製品の割合が減少し，いわゆる回転台土師器が増加する傾向が窺われる。

第2の画期としては黒色土器の出現するⅠ－①期（9世紀後半頃）である。この時期の黒色土器の形態は畿内と香川県で違いがあることから，黒色土器の黒色処理技法だけを受け入れたものと考えられる。つまり，この黒色処理技法だけを取り入れ，在地の土師器製作工人集団が黒色土器の製作に当たったものと考えられる。

第3の画期としては土師器小皿・坏・椀の中世的土器様式を取り入れるⅡ－①期（11世紀第2四半期頃）である。しかし，土師器小皿・坏・椀の一般的な普及はⅡ－④期以降であることから若干の幅を持たせてⅡ－①期～Ⅰ－④期（11第2四半期～12世紀前後）を第3の画期としたい。つまり，中世的土器様式のⅡ－①期を受入期，Ⅱ－②③期を過渡期，Ⅱ－④期を完成期とする。しかし，Ⅱ－①期の受入期では香川県の十瓶山周辺において受け入れられるようで，須恵器・土師器の窯業生産を統一することによってであり，地域は十瓶山周辺という一部の地域に限られる。

第4の画期としては供膳具に土師器椀がなくなるⅢ－①期（14世紀前半頃）である。この時期に土師器椀が木製椀になるものと考えられる。

次に煮沸具における画期としてはⅡ－⑥⑦期（13世紀前後）が考えられる。この時期には土師質の土鍋・土釜において体部が長胴タイプのものから浅い洗面器状のものになり，この時期を境に違う形態のものが両者ともに出現するのである。

次に調理具における第1の画期はこの鉢の出現するⅡ－①期（11世紀第2四半期）である。この時期のこね鉢の出現をもって食生活に変化があったことが窺える。第2の画期は鉢形態のなかに内面に条溝を持つすり鉢が出現するⅢ－③期（14世紀後半頃）である。この時期にも「こねる」という行為から「する」という行為になり，ここにも食生活の変化があったことが窺える。

貯蔵具については不明である。しかし，須恵器製品（こね鉢・壺・甕）において低火度還元焔焼成された製品が出現し始めるⅡ－①期（11世紀第2四半期）に第1の画期が，器表面に炭素を吸

着させた瓦質土器焼成になるII－⑤期（12世紀中葉頃）に第2の画期があるものと思われる。

以上の結果から土器からみた古代から中世の画期は煮沸具を除くとおおよそ11世紀第2四半期に画期の初源があり，完成するのが12世紀であることが判った。

土器編年の軸となるⅠ～Ⅲ期のぞれぞれの時期に実年代を当てるとおおよそⅠ－①期が9世紀後半，Ⅰ－②～④期が10世紀前半～10世紀末，II－①～II－③期が11世紀前半～11世紀末，II－④～II－⑥期がほぼ12世紀，II－⑦～II－⑨期がほぼ13世紀，Ⅲ－①～Ⅲ－③期がほぼ14世紀，Ⅲ－④～Ⅲ－⑥期がほぼ15世紀，Ⅲ－⑦～Ⅲ－⑨期がほぼ16世紀と考えられる。

註1　廣瀬常雄「西村遺跡出土の土器について」『西村遺跡Ⅲ』香川県教育委員会 1982
　土師器供膳具については西村遺跡Ⅲで廣瀬常雄氏が11世紀から14世紀前後の時期までの編年を組みたてている。年代的にはこの報告以後若干の年代修正が松井忠春・大山真充両氏によって加えられた。しかし，各器種の時間的な器形の流れに変化はなくこの編年に賛同するものであるが，この編年は生産地の編年であるためにここでは消費地での編年を組み立てた。

註2　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告　第二冊　大門遺跡』香川県教育委員会 1987

註3　片桐孝浩「古代から中世にかけての土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会 1990

註4　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会 1990

註5　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報　昭和63年度』香川県教育委員会 1989

註6　註4に同じ

註7　註5に同じ

註8　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告　第三冊　矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会 1987

註9　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告　第五冊　石田遺跡』香川県教育委員会 1988

註10　藤井雄三他『南山浦古墳群調査報告』高松市教育委員会 1985

註11　ここで「円盤状高台状」としたのは円盤状高台のように底部から1㎝程度の粘土板上方から体部が外上方に延びるものであるが，これほど底部からの段差がないもので5㎜程度のものを指す。

註12　註9に同じ

註13　松尾忠幸『特別史跡讃岐国分寺跡　昭和61年度発掘調査概報』国分寺教育委員会 1987

註14　註8に同じ

註15　高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1990

註16　讃岐国分寺跡資料館において実見した。

註17　註4に同じ

註18　註10に同じ

註19　註4に同じ

註20　本報告書『川津元結木遺跡』

註21　註20に同じ

註22　註20に同じ

註23　註10に同じ

註24　註４に同じ

註25　註４に同じ

註26　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告　第八冊　延命遺跡』香川県教育委員会 1990

註27　横田賢二郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について－形式分類と編年を中心に－」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館 1978

以後，輸入磁器の形式については基本的にこの形式分類を用いた。

註28　下川津遺跡の考察のなかで大久保氏が９世紀前半としている遺構を，若干の修正を加えここでは９世紀後半とした。

註29　大久保徹也「下川津遺跡における７・８世紀代の土器様相について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会 1990

註30　森　隆「畿内における古代後半の土器様相」『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」』シンポジウム実行委員会 1990

この中で森氏が定義した回転台土師器と同じものを指す。

註31　ここで用いた「低火度酸化焔焼成」は備前焼などの高火度による酸化焔焼成と区別してのものである。

註32　「すべっと２号窯」『かめ焼谷１号窯跡－香川県綾歌郡綾南町陶十瓶山区工業団地造成に伴う須恵器窯跡の発掘調査－』香川県教育委員会 1991

註33　現在（財）香川県埋蔵文化財調査センターにおいて整理中の遺物を実見した。

註34　（財）香川県埋蔵文化財調査センターによって現在調査中の「空港跡地遺跡」出土の遺物を実見した結果，13世紀後半の遺構から底部糸切りの土師器小皿・坏が出土している。

註35　『尾ノ背寺跡発掘調査概要(1)』仲南町教育委員会 1980

註36　『矢ノ岡遺跡』註２に同じ

註37　註26に同じ

註38　『天霧城跡発掘調査概報』香川県教育委員会 1982

註39　註２に同じ

註40　註30に同じ

この中で森氏が定義した「土師器の生産において，在来の須恵器工人が陶土や燃焼効率の改善と，生産面での合理化，省力化を計り，意図的に低火度酸化焔焼成に製品を仕上げる生産形態」としている回転台土師器第２群である。

註41　『讃岐国府跡』香川県教育委員会 1982

註42　『多々良込田遺跡Ⅲ』福岡市教育委員会 1985

註43　前川　要「猿投窯における灰釉陶器生産最終末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要III』瀬戸市歴史民俗資料館 1984

註44　註1に同じ

器高指数とは器高における口径の百分比を示すものである。西村遺跡の土器編年ではI期に40～45、II期に34～38、III期に32前後と器高指数が減少することが判っている。しかし、消費地での土師器・黒色土器椀の編年からはあまりこの器高指数の減少は見られず、それが顕著に見られるのはII－⑦期以降であるという結果が出た。

註45　菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』同朋舎 1982

註46　石井清司「篠窯跡群出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報　第7号』(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983

石井清司「篠窯跡群出土須恵器の編年」『京都府遺跡調査報告書第11冊　篠窯跡群II』　(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989

伊野近富「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報　第37号』(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990

註47　「魚住古窯跡群」『兵庫県文化財調査報告　第19冊』兵庫県教育委員会 1983

註48　「亀山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69』岡山県教育委員会 1988

註49　「国分寺楠井遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成2年度』香川県教育委員会 1991

註50　『世界陶磁全集 3 日本中世』小学館 1977

註51　奈良県田原本町教育委員会　北野隆亮氏より御教示

註52　百瀬正恒「平安時代の緑釉陶器－平安京近郊の生産窯について－」『中近世土器の基礎研究II』日本中世土器研究会 1982

平尾政之「右京三条三坊の平安時代の遺物の検討」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告　第10冊 平安京右京三条三坊』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1990

註53　この緑釉陶器は坂出市鎌田共済資料館に展示しているものを館長山路正夫氏の御好意により掲載させて頂いた。

註54　註30に同じ

註55　巽淳一郎「古代窯業生産の展開－西日本を中心として－」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』同朋舎 1982

註56　讃岐国分寺の造営時期については正確には判らないが，『続日本紀』などから天平勝宝八 (756) 年には完成したと言われており，また讃岐国分寺の発掘調査の結果よりほぼ同時期の遺物が出土していることからも香川県における回転台土師器の成立時期を8世紀の中葉から後半にかけての時期に比定してもよいものと考える。

註57　土師器小皿・坏・椀，黒色土器椀，瓦質土器小皿・椀などは西村遺跡で多数出土している。

ここでいう瓦質土器は中世後半より出現する火舎・羽釜などに使われている用語とは違い西村遺跡出土の小皿・椀を意味した用語である。しかし，西村遺跡出土の須恵器軟質焼成土器を瓦質土器と呼ぶにははなはだ疑問ではあるが，呼び変える適切な用語が思いつかないこともあり，ここでは須恵器椀（瓦質土器）と呼ぶことにする。

註58　註1に同じ

註59　森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」『九州歴史資料館研究論集3』1976

註60　山本信夫「大宰府における古代から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』1988

註61　太宰府市教育委員会中島恒次郎氏御教示

註62　中野良一「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会 1988

註63　鈴木康之「鹿田遺跡出土の中世土器について」『岡山大学校内遺跡発掘調査報告 第3冊 鹿田遺跡Ⅰ』 1986

註64　武田恭彰「古代土器生産についての一考察(1)－鐘鋳場1号窯の遺物を中心に－」『古代吉備第11集』1989

武田恭彰「古代土器生産についての一考察(2)－備中の10・11世紀の土器様相を中心に－」『古代吉備12集』 1990

第4表の補足

この表の各時期の割合は遺跡の性格及び遺構の性格が統一されてはいないので，ここから読み取れる傾向は各時期の土器組成のおおまかな傾向を示すものであり，その時期の土器組成を確実に表しているとは限らない。しかし，Ⅰ－①期に比定される郡家原遺跡SR05で同じ様にそれぞれの比率を出したところ須恵器皿…13（14）％，須恵器坏A…2（2）％，須恵器坏B…34（37）％，須恵器円盤状高台坏・椀…1（1）％，土師器皿…5（5）％，土師器坏B…26（28）％，土師器椀A…5（5）％，土師器円盤状高台坏・椀…0.5（1）％，黒色土器…6（7）％，土師質土鍋A…3％，須恵器壺…2％，須恵器甕…0.5％，土師質竈…1％，緑釉陶器…1％（全個体数180点，供膳具個体数166点）という結果が出た。この結果を第4表Ⅰ－①期（下川津遺跡SE Ⅲ03）と比較するとほぼ同じであることが判った。このように違う遺構でしかも中讃地域で，やや離れた地域で同じ結果を示したことは確実とまでは言えないがある程度の信頼性は有るのではないかと考えている。

観　察　表

第6表　遺物観察表

SD12

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
5	21 1	弥生　壺	20.0	—	—	0.5～3mmの長石，石英，金雲母を含む。	良	濁淡褐色	頸部から口縁部にかけて段を持ちながら小さく屈曲する
5	21 2	弥生　甕	23.1	—	—	0.1～3mmの長石，石英を含む。	良	暗茶褐色	如意状口縁
5	21 3	〃	19.6	—	—	0.5～5mmの長石，石英を含む。	良	濁淡褐色	〃
5	21 4	〃	20.0	—	—	0.5～3mmの長石，石英を含む。	良	橙褐色	〃
5	— 5	弥生　底部	—	—	7.5	0.5～3mmの長石，石英を含む。	良	黒茶褐色	

挿図番号	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
6	48 6	石包丁	サヌカイト	12.9	5.2	1.4	121.4	両縁共に鈍い。
6	49 7	打製石斧	砂岩	8.9	6.9	1.6	141.5	基部を欠損している。
6	— 8	〃	サヌカイト	8.3	6.1	1.9	113.0	両側縁剝離時に折れたものである。
6	— 9	〃	〃	6.5	6.4	1.3	78.8	左刃部に摩滅，擦痕あり，基部が欠損している。
7	49 10	〃	〃	11.8	6.5	1.7	142.4	表面に自然面を残す。先端を欠損している。
7	— 11	〃	〃	7.6	5.7	1.5	94.7	表面に自然面を残す。先端及び基部を欠損している。
7	— 12	〃	〃	6.2	4.9	1.6	57.3	先端部を欠損している。
7	— 13	〃	〃	7.4	4.6	0.9	42.4	小型品
8	49 14	〃	砂岩	10.1	7.4	2.2	183.7	先端部を欠損している。
8	49 15	〃	〃	12.6	8.9	1.3	207.8	全体に摩滅，基部を欠損している。
8	— 16	スクレイパー	〃	6.3	3.0	0.7	16.0	
8	— 17	〃	〃	7.2	3.2	0.6	15.8	切り出しナイフ状を呈している。
9	— 18	〃	〃	7.1	6.7	1.0	66.7	
9	— 19	ラウンドスクレイパー	サヌカイト	7.2	6.5	1.0	50.7	
9	— 20	楔状石器素材	〃	4.9	3.3	1.5	29.4	
9	— 21	〃	〃	4.0	3.3	1.2	21.3	表面に自然面を残す。

SH05

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
11	— 22	弥生　甕	16.7	—	—	0.5～3mmの長石・石英を含む。	良	濁黄褐色	口縁部内面：ハケ 体部　内面：指なで
11	— 23	〃	16.7	—	—	0.5～2mmの長石・石英を含む。	良	淡黄褐色	口縁部内面：ハケ 体部　内面：板なで 外面：ハケ
11	— 24	〃	14.5	—	—	2mm以下の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：ハケ　外面：ハケ 体部　内面：指押さえ，ヘラ削り 外面：ハケ
11	— 25	〃	—	—	3.6	0.5～3mmの長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部　内面：板なで 外面：指押さえ，ハケ
11	— 26	〃	—	—	4.0	0.2～3mmの長石・石英を含む。	良	濁褐色	体部　外面：ハケ

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
11 27	—	弥生 甕	—	—	3.3	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：板なで 外面：板なで
11 28	—	〃	—	—	3.2	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	濁褐色	体部 内面：指押さえ，ハケ 外面：ハケ
11 29	—	〃	—	—	5.0	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	濁淡褐色	体部 内面：ハケ 外面：ハケ
11 30	—	〃	—	—	3.2	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	体部 内面：指押さえ，板なで 外面：叩き，板なで，ハケ 底部 ：ヘラ削り
11 31	—	弥生 鉢	20.8	—	—	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	内：黄褐色 外：黒褐色	体部 内面：なで 外面：ハケ
11 32	—	弥生 甕	15.7	—	—	堅緻0.5～3㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	茶褐色	下川津B類
11 33	—	〃	14.7	—	—	堅緻，微細長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	口縁部内面：横なで 外面：横なで 下川津B類
11 34	—	〃	—	—	5.0	〃	良	〃	体部 内面：指押さえ，ハケ 外面：ハケ 下川津B類
11 35	—	〃	—	—	3.9	1.5㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	体部 内面：指押さえ，ヘラ削り 下川津B類
11 36	—	弥生 壺	19.4	—	—	堅緻，微細長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	口縁部外面：横なで 下川津B類
11 37	—	弥生 脚付き小型丸底壺脚部	—	—	16.0	0.2～2㎜位の長石・石英・金雲母・角閃石を含む。	良	〃	内面：ヘラ削り 下川津B類
11 38	21	弥生 小型丸底壺	—	—	—	堅緻，微細長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	体部 内面：ヘラ削り 外面：ヘラ磨き 下川津B類

SH06

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
13 39	—	弥生 甕	10.6	—	—	1.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：板なで 外面：ハケ
13 40	—	〃	15.6	—	—	1㎜以下の長石・石英・角閃石を含む。	良	〃	口縁部外面：横なで 体部 外面：叩き
13 41	—	〃	—	—	—	3㎜大の長石・石英を含む。	良	淡茶褐色	体部 内面：ヘラ削り，指なで 外面：ハケ
13 42	—	〃	—	—	—	1.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡黄褐色	体部 内面：ハケ，ヘラ削り 外面：叩き，ハケ
13 43	—	〃	—	—	2.5	1㎜以下の（まれに2㎜）の長石・石英を含む。	良	淡褐色	体部 内面：指なで 外面：板なで，指なで
13 44	—	〃	—	—	2.7	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	赤褐色	体部 内面：指なで 外面：ハケ
13 45	—	〃	—	—	4.1	小粒の長石・石英を含む。	良	赤茶褐色	体部 内面：指押さえ，板なで 外面：ハケ 底部：ハケ
13 46	—	弥生 鉢	13.9	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	体部 内面：ハケ
13 47	—	〃	13.5	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	体部 外面：叩き
13 48	—	弥生 甕	14.8	—	—	小粒の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	茶褐色	下川津B類
13 49	—	〃	—	—	3.4	1㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	淡茶褐色	体部 内面：指押さえ，板なで 下川津B類
13 50	22	弥生 壺	27.4	—	—	小粒の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	口縁部内面：横なで 外面：横なで 下川津B類
13 51	—	弥生 小型丸底壺	9.3	—	—	〃	良	茶褐色	口縁部内面：指なで 下川津B類
13 52	21	弥生 長頸壺	—	—	—	1㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	淡褐色	口縁部内面：指押さえ 外面：ハケ 下川津B類
13 53	—	〃	—	—	—	小粒の長石・石英・少量の角閃石・金雲母を含む。	良	赤茶褐色	体部下半に穿孔あり。下川津B類

SD04

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
16 54	22	弥生 甕	14.0	32.3	5.3	1.5㎜程度の長石・石英を含む。	良	淡褐色	1区 体部 内面：指押さえ，指なで，ヘラ削り 外面：板なで

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
16	22 55	弥生 甕	11.4	21.4	3.4	0.1～2㎜の長石・石英を含む。	良	橙褐色～淡茶褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り，指押さえ 外面：ハケ
16	— 56	〃	15.1	—	—	2～3㎜長石・石英等の砂粒を含む。	良	橙褐色	口縁部内面：ハケ 外面：叩き 体部 内面：ヘラ削り 外面：ハケ
16	22 57	〃	17.7	—	—	微細なものから3㎜程迄の多量の長石・石英を含む。	良	淡茶褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：指押さえ，ヘラ削り 外面：叩き，ハケ
16	— 58	〃	17.4	—	—	1㎜程度の石英等の砂粒を多く含む。	良	淡褐色	口縁部内面：板なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り，なで 外面：なで
16	— 59	〃	16.4	—	—	0.1～3㎜の長石・石英・金雲母を含む。	良	淡橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り 外面：板なで
16	— 60	〃	17.8	—	—	1～2㎜程度の長石・石英を含む。	良	淡茶褐色	口縁部内面：ハケ 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り 外面：なで
16	— 61	〃	—	—	2.7	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	濁淡褐色	体部 内面：ヘラ削り，指押さえ 外面：叩き，板なで
16	23 62	〃	18.4	—	—	1～2㎜程の石英及び，3㎜程の長石を含む。	良	淡橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り 外面：叩き，ハケ
16	— 63	〃	15.4	—	—	1㎜以下の細かい長石等の砂粒を含む。	良	〃	体部 外面：ハケ
16	— 64	〃	12.7	—	—	0.1～3㎜の長石・石英を含む。	良	茶褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ハケ 外面：叩き，ハケ
16	23 65	〃	16.7	—	—	0.1～3㎜以下の長石等の砂粒を含む。	良	淡茶褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ハケ 外面：叩き，ハケ
17	24 66	〃	—	—	3.9	4㎜以下の長石・石英等の砂粒を含む。	良	濁褐色	体部 内面：なで，指押さえ，ヘラ削り 外面：叩き，ハケ
17	— 67	〃	—	—	5.0	1.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	体部 内面：ヘラ削り，指押さえ 外面：叩き，ハケ
17	— 68	〃	—	—	3.2	4㎜以下の長石・石英等を含む。	良	淡褐色～灰褐色	体部 内面：ヘラ削り 外面：叩き
17	— 69	〃	—	—	3.3	3㎜以下の石英を含む。	良	暗赤褐色	体部 内面：指押さえ 外面：叩き
17	— 70	〃	—	—	4.0	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	赤茶褐色	体部 内面：なで 外面：叩き
17	— 71	〃	—	—	4.0	0.2～2㎜の長石・石英・金雲母を含む。	良	赤褐色	体部 内面：なで
17	— 72	〃	—	—	3.4	0.5～2㎜の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：指押さえ 外面：ヘラ削り
17	— 73	〃	—	—	3.4	1㎜以下の長石・石英を少量含む。	良	淡褐色	体部 内面：なで，指押さえ 外面：ハケ
17	— 74	〃	—	—	4.1	1㎜以下の長石・石英・金雲母を含む。	良	赤褐色 淡褐色	体部 内面：板なで 外面：ハケ
17	— 75	〃	—	—	2.7	1～2㎜の長石・石英・金雲母を含む。	良	暗褐色	体部 内面：ハケ 外面：ハケ
17	— 76	〃	—	—	3.1	微細長石・石英・金雲母を含む。	良	濁褐色	
17	— 77	〃	—	—	2.3	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：ハケ 外面：なで
17	— 78	〃	—	—	3.8	比較的細かい長石・角閃石を含む。	良	黄灰褐色	体部 内面：なで 外面：ハケ
17	— 79	〃	—	—	3.7	2～3㎜程度の長石・石英等粗い砂粒を含む。	良	灰褐色	
17	— 80	〃	—	—	2.6	5㎜以下の石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：ハケ，指押さえ 外面：ハケ
17	— 81	〃	18.7	—	—	0.1～4㎜の長石等の砂粒を含む。	良	暗黒褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：なで 外面：なで
17	24 82	〃	—	—	2.5	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗褐色	体部 内面：ハケ 外面：指押さえ
17	— 83	〃	—	—	2.1	1㎜程の細かい長石・石英を含む。	良	暗黒褐色	体部 内面：板なで 外面：ハケ
17	— 84	〃	—	—	1.5	小粒の砂粒を少量含む。	良	暗褐色	体部 外面：ハケ
17	— 85	〃	—	—	3.1	1～2㎜程度の長石・石英・角閃石を含む。	良	淡茶褐色	体部 内面：板なで 外面：叩き
17	— 86	〃	—	—	4.0	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	体部 内面：板なで

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
17	—	弥生 甕	—	—	3.8	1～2㎜の長石・石英を含む。	良	濁褐色	
87									
17	—	〃	—	—	2.7	0.5～2㎜の長石・石英を含む。	良	赤褐色	体部 内面：板なで，指押さえ 底部穿孔あり。
88									
18	24	〃	15.0	20.3	4.0	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡茶褐色	2区 口縁部内面：ハケ 外面：ハケ 体部 内面：ハケ，ヘラ削り 外面：ハケ
89									
18	24	〃	13.3	19.3	3.4	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色～茶褐色	口縁部内面：ハケ 外面：横なで 体部 内面：ハケ，指なで 外面：ハケ
90									
18	—	〃	—	—	4.0	4㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：ハケ，ヘラ削り 外面：ハケ
91									
18	—	〃	22.0	—	—	1～2㎜程の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り
92									
18	—	〃	17.0	—	—	2㎜以下の長石・石英等を含む。	良	暗橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ハケ
93									
18	—	〃	17.0	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：指押さえ
94									
18	25	〃	15.1	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：板なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り
95									
18	—	〃	17.6	—	—	5㎜以下の長石等の砂粒を含む。	良	淡褐色～灰褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ハケ
96									
18	—	〃	16.9	—	—	0.5～2㎜の長石・石英を含む。	良	濁黄茶褐色	口縁部内面：ハケ 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り 外面：ハケ
97									
18	—	〃	14.0	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：指押さえ
98									
18	—	〃	16.4	—	—	1～2㎜程度の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り 外面：なで
99									
18	—	〃	20.1	—	—	5㎜以下の長石・石英を含む。	良	茶褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り 外面：板なで
100									
18	25	〃	14.8	—	—	1㎜以下の石英・長石を含む。	良	淡茶褐色	口縁部内面：板なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り 外面：板なで
101									
18	—	〃	16.5	—	—	1～2㎜の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：指押さえ，板なで 外面：板なで
102									
18	—	〃	15.4	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	口縁部内面：ハケ 外面：横なで 体部 内面：なで 外面：ハケ
103									
18	—	〃	13.5	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡赤茶褐色	口縁部内面：板なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り，指押さえ 外面：板なで
104									
18	—	〃	13.8	—	—	1㎜位の長石・石英・金雲母を含む。	良	橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで
105									
19	—	〃	—	—	3.9	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	灰褐色	体部 内面：ヘラ削り
106									
19	—	〃	—	—	5.7	3㎜以上の粗い長石・石英を含む。	良	黄白褐色	
107									
19	—	弥生 小型鉢	14.0	12.1	3.6	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：板なで 外面：板なで
108									
19	—	弥生 甕	18.3	—	—	5㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	口縁部内面：横なで，ハケ 外面：横なで，ハケ
109									
19	—	〃	—	—	7.1	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡～橙褐色	体部 内面：指押さえ 外面：指押さえ
110									
19	—	〃	—	—	6.0	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡茶褐色	体部 内面：ハケ 外面：ハケ
111									
19	—	〃	—	—	3.5	2㎜以下の長石・石英・金雲母を含む。	良	茶褐色	体部 内面：指なで，指押さえ 外面：ハケ
112									
19	—	〃	—	—	3.0	小粒（まれに3㎜大）の長石・石英を含む。	良	黒褐色	体部 内面：ハケ 外面：叩き，ハケ
113									
19	—	〃	—	—	3.9	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	体部 内面：指押さえ，板なで 外面：ハケ
114									
19	—	〃	—	—	4.6	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	
115									
19	—	〃	—	—	4.0	1～3㎜位の長石・石英を含む。	良	黒褐色	
116									
19	—	〃	—	—	4.4	5㎜以下の長石・石英等を含む。	良	暗茶褐色～暗橙褐色	体部 内面：ヘラ削り 外面：板なで
117									
19	—	〃	—	—	5.5	5㎜以下の長石・石英等を含む。	良	淡褐色	体部 内面：板なで 外面：ハケ，指押さえ
118									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
19	25 119	弥生 甕	—	—	4.7	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：指なで 外面：叩き
19	— 120	〃	—	—	2.6	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	体部 内面：板なで
19	— 121	〃	—	—	3.0	3㎜以下の長石・石英等を含む。	良	赤褐色	体部 内面：ヘラ削り 外面：なで
19	— 122	〃	—	—	3.2	0.5～3㎜の長石・石英等を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：なで 外面：なで
19	— 123	〃	—	—	3.5	4㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗褐色	体部 内面：ヘラ削り 外面：ハケ
19	25 124	〃	—	—	4.0	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	体部 内面：底部・板なで 外面：指押さえ，板なで
19	— 125	〃	—	—	3.8	細かい砂粒を含む。	良	淡褐色 淡黒褐色	体部 内面：指なで 外面：指押さえ
19	— 126	〃	—	—	3.1	1.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	
19	— 127	〃	—	—	2.2	比較的細かい長石・石英等の砂粒を含む。	良	暗赤褐色	体部 内面：板なで，指押さえ 外面：なで
19	— 128	〃	—	—	2.2	2㎜以下の長石・石英等を含む。	良	暗橙褐色	体部 内面：ヘラ削り，指押さえ
19	— 129	〃	—	—	2.1	1㎜以下の長石等の砂粒を含む。	良	淡褐色 暗褐色	体部 内面：ハケ 外面：ハケ
20	— 130	弥生 壺	19.0	—	—	1㎜以下の長石・石英を少量含む。	良	淡褐色	1区 口縁部内面：横なで 外面：横なで
20	— 131	〃	22.0	—	—	0.5㎜以下の長石・石英・金雲母を含む。	良	黒褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで
20	— 132	〃	21.8	—	—	1㎜以下の長石等の砂粒を少量含む。	良好	茶褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで
20	— 133	〃	—	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	頸部 内面：ハケ 外面：ハケ
20	— 134	〃	14.8	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：ハケ 外面：ハケ
20	— 135	〃	—	—	9.2	4㎜以下の長石・石英・金雲母を含む。	良	〃	体部 内面：なで 外面：板なで
20	— 136	〃	—	—	6.7	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	
20	25 137	〃	29.1	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良好	橙褐色	2区 口縁部内面：横なで 外面：波状文
20	25 138	〃	28.0	—	—	1～3㎜程の長石・石英を含む。	良好	〃	口縁部内面：横なで 外面：波状文
20	25 139	〃	26.8	—	—	堅緻，1～2㎜程の長石・石英・金雲母を含む。	良	淡褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで
20	— 140	〃	20.0	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良好	淡茶褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで
20	— 141	〃	19.5	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで
20	— 142	〃	17.6	—	—	1～2㎜程度の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：横なで 外面：ハケ
20	26 143	〃	15.0	24.4	5.8	堅緻，微細～2㎜程の長石・石英・金雲母を含む。	良好	〃	口縁部内面：横なで 外面：横なで，ハケ 体部 内面：指押さえ，ハケ，ヘラ削り 外面：ハケ
20	— 144	〃	9.2	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	黒～淡褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで
20	— 145	〃	10.5	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良好	淡褐色	口縁部内面：条痕のある横なで，指押さえ 外面：条痕のある横なで，ハケ
20	— 146	〃	13.8	—	—	2.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：指押さえ 体部 内面：指なで 外面：板なで
20	26 147	〃	12.8	33.5	6.0	4㎜以下の長石・石英を含む。	良	赤褐色	口縁部内面：ハケ 外面：ハケ 体部 内面：ハケ，ヘラ削り 外面：叩き，ハケ
21	— 148	〃	16.7	—	—	6㎜以下の長石・石英等の砂粒を含む。	良	橙褐色	口縁部内面：横なで，ハケ 外面：横なで
21	27 149	〃	20.8	—	—	1㎜程度の長石・石英を多く含む。	良	淡褐色 黒褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで，ハケ
21	27 150	〃	15.4	—	—	1～2㎜程度の長石・石英を含む。	良	黄褐色	口縁部内面：横なで，板なで，ヘラ削り 外面：横なで，縦ヘラ磨き

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
151	27	弥生 壺	15.3	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	茶褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：指押さえ，ヘラ削り 外面：板なで，叩き
152	27	〃	—	—	3.8	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色 淡褐色	体部 内面：板なで，指押さえ 外面：板なで，指押さえ
153	—	〃	—	—	—	4㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：指押さえ 外面：なで
154	27	〃	17.2	—	—	全体的に粗い大粒の長石・石英を含む。	良	淡褐色	体部 内面：板なで 外面：ハケ
155	27	〃	—	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡茶褐色	体部 外面：ヘラ磨き
156	—	〃	30.0	—	—	1～3㎜位の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 二重口縁
157	—	弥生 鉢	13.0	7.6	3.2	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	黒～橙褐色	1区 体部 内面：ハケ 外面：指押さえ
158	—	〃	12.7	8.0	—	細かいものに3㎜程度の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：ハケ 外面：指押さえ
159	28	〃	13.3	10.7	5.6	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：板なで，指なで 外面：なで，指押さえ
160	28	〃	14.7	5.3	3.8	4㎜以下の長石・石英等の砂粒を含む。	良	〃	体部 内面：ハケ，指なで 外面：なで
161	—	〃	19.5	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。内面は極小の砂粒を含む。	良	淡茶褐色	体部 内面：なで 外面：ハケ
162	—	〃	20.5	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：ハケ 外面：なで
163	—	〃	—	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡茶褐色	体部 内面：板なで 外面：なで
164	28	〃	13.9	7.2	3.3	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：板なで，指押さえ 外面：指押さえ，板なで
165	—	〃	27.4	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：板なで，指なで 外面：なで
166	—	〃	42.7	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良好	淡茶褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで
167	28	〃	12.7	7.7	2.7	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	茶褐色	2区 体部 内面：板なで 外面：なで，板なで
168	—	〃	12.9	7.6	2.7	1～2㎜程の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：板なで 外面：板なで，指押さえ
169	—	〃	12.8	6.0	3.2	0.5～2㎜程の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：なで 外面：板なで
170	—	〃	17.0	8.1	2.7	1～4㎜の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：なで 外面：ハケ
171	—	〃	18.7	10.6	5.5	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：なで 外面：板なで，叩き
172	—	〃	12.0	4.0	2.7	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：板なで 外面：横なで 体部 内面：板なで 外面：指押さえ
173	—	〃	13.1	3.0	3.2	5㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗茶褐色	体部 内面：板なで 外面：指押さえ，板なで
174	—	〃	18.4	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：なで 外面：なで
175	—	〃	23.8	—	—	1～3㎜の長石・石英を含む。	良	黄灰褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：なで 外面：板なで
176	—	〃	12.7	—	—	1.5㎜以下の長石等の砂粒を含む。	良好	暗茶褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：なで 外面：板なで
177	28	〃	11.4	11.6	2.9	5㎜以下の長石・石英と1cm大の小石を含む。	良	淡褐色 明橙褐色	口縁部内面：ハケ 外面：なで 体部 内面：指押さえ 外面：指押さえ，板なで
178	28	〃	9.5	6.3	2.7	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色	体部 外面：ハケ
179	28	〃	17.9	8.3	4.5	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	茶褐色	口縁部内面：ハケ 外面：ハケ 体部 内面：指なで 外面：ハケ
180	28	〃	11.0	8.2	—	0.5～3㎜の長石・石英等を含む。	良	淡橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：板なで 外面：指押さえ
181	—	〃	—	—	—	1～2㎜程の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：ハケ 外面：ハケ
182	—	〃	—	—	—	微細長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：ハケ 外面：ハケ

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
23	— 183	弥生 鉢	—	—	3.5	2～3㎜位の長石・石英を含む。	良	明橙褐色	体部 内面：ハケ 外面：ハケ，指押さえ
23	— 184	〃	27.9	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡黄褐色	口縁部内面：横なで 体部 内面：板なで
23	— 185	〃	11.8	—	—	0.5～2㎜程度の長石・石英を含む。	良	赤茶褐色	体部 内面：ハケ 外面：なで
23	29 186	〃	33.5	20.9	7.2	4㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	口縁部・体部内面：条痕のある板なで 口縁部・体部外面：条痕のある板なで
23	29 187	弥生 高坏	—	—	15.3	1㎜以下の長石・石英・金雲母を含む。	良	濁褐色	1区 脚部 内面：ハケ 外面：ハケ，ヘラ磨き
23	— 188	〃	—	—	—	1㎜程度のものに3～4㎜の長石・石英を含む。	良	黄灰褐色	2区 脚部 内面：ヘラ削り 外面：ヘラ削り
23	— 189	弥生 ミニチュア甕	—	—	1.1	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	黒褐色	1区 体部 内面：板なで 外面：ハケ
23	29 190	弥生 ミニチュア壺	—	—	2.8	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡～橙褐色	〃 体部 外面：ハケ，指押さえ
23	29 191	〃	—	—	—	5㎜以下の長石・石英等の砂粒を含む。	良	淡褐色	〃 口縁部内面：なで 体部 内面：ヘラ削り 外面：ハケ
23	— 192	製塩土器	15.1	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗茶褐色	〃 口縁部内面：なで 外面：叩き
24	— 193	弥生 壺	25.0	—	—	1.5㎜以下の長石・石英，1㎜以下の角閃石・金雲母を含む。	良	淡褐色	〃 下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで
24	— 194	〃	25.0	—	—	1.5㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	茶褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：ヘラ削り
24	— 195	〃	27.6	—	—	5㎜以下の長石・石英，1㎜以下の角閃石・金雲母を含む。	良	〃	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで
24	— 196	〃	—	—	—	1㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	下川津B類
24	— 197	弥生 甕	15.4	—	—	堅緻，比較的細かい長石・石英・角閃石を含む。	良	褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り 外面：なで
24	— 198	〃	16.3	—	—	堅緻，微細長石・石英・金雲母を含む。	良好	暗褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：指なで 外面：ハケ
24	— 199	〃	16.6	—	—	0.1～1㎜の長石・金雲母を含む。	良	茶褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：指押さえ 外面：ハケ
24	— 200	〃	15.5	—	—	1.5㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	暗褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで
24	— 201	〃	—	—	5.2	0.2～2㎜の長石・石英・金雲母を含む。	良	赤茶褐色	下川津B類 体部 内面：横なで，指押さえ 外面：ハケ，ヘラ削り
24	— 202	〃	—	—	5.8	堅緻，細かい長石・石英・金雲母を含む。	良	暗黒褐色	下川津B類 体部 内面：指押さえ 外面：ヘラ磨き
24	— 203	〃	—	—	3.0	1～3㎜位の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	暗褐色	下川津B類 体部 内面：ハケ，ヘラ削り，指押さえ 外面：ハケ
24	— 204	〃	—	—	2.9	3㎜以下の長石・石英・金雲母を含む。	良	茶褐色	下川津B類 体部 内面：板なで 外面：叩き
24	— 205	〃	—	—	2.4	微細長石・石英に3㎜ほどのもの，角閃石・金雲母を含む。	良	暗橙褐色	下川津B類 体部 内面：なで 外面：叩き
24	— 206	弥生 長頸壺	—	—	—	小粒の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	茶褐色	下川津B類 体部 内面：ヘラ削り 外面：ハケ
24	— 207	弥生 壺	—	—	—	5㎜以下の長石等の砂粒を含む。	良	淡茶褐色	体部 内面：指押さえ，ヘラ削り 外面：ハケ
24	30 208	弥生 脚付き小型丸底壺	9.4	11.7	14.8	堅緻，細かい長石・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	下川津B類 脚部 内面：ヘラ削り 外面：ハケ 脚部不揃いの穿孔あり。
24	30 209	〃	10.0	11.4	16.5	極小粒の砂粒・角閃石・金雲母を含む。	良	茶褐色	下川津B類 口縁部内・外面：横なで 体部 内面：指なで 外面：なで 脚部 内面：横なで 外面：ハケ
24	— 210	〃	—	—	—	2㎜以下の長石等の砂粒・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	下川津B類 体部 内面：指押さえ 外面：なで 脚部 内面：ヘラ削り 外面：なで
24	— 211	弥生 鉢	22.0	—	—	極小粒の砂粒を少量と角閃石・金雲母を含む。	良好	淡茶褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ハケ 外面：ハケ
24	— 212	〃	18.6	—	—	5㎜以下の長石・石英等の砂粒・金雲母・角閃石を含む。	良	茶褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ハケ，指なで 外面：ヘラ削り
25	30 213	弥生 小型壺	5.9	—	—	細かい砂粒及び角閃石，金雲母を含む。	良	〃	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：指押さえ 外面：ハケ
25	30 214	弥生 甕	10.5	10.0	2.4	細かい砂粒と金雲母・角閃石を含む。	良	橙褐色	下川津B類 口縁部内面：ハケ 外面：横なで 体部 内面：指なで，ハケ 外面：ハケ

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
25	—	弥生 甕	13.4	—	—	2㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	茶褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 外面：指なで
215									
25	30	〃	—	—	6.1	6㎜以下の長石・石英・金雲母・角閃石を含む。	良	暗褐色～黒色	下川津B類 体部 内面：ヘラ削り，指押さえ 外面：ハケ，ヘラ磨き
216									
25	—	〃	—	—	4.5	1㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	濁褐色	下川津B類 体部 内面：ヘラ削り，指押さえ 外面：ヘラ磨き
217									
25	—	弥生 高坏	—	—	—	1㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	淡～橙褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで
218									
25	—	〃	23.8	—	—	1.5㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	茶褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：横なで 外面：ヘラ削り
219									
25	30	弥生 小型丸底壺	9.8	8.6	—	堅緻，1㎜以下の微細長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	暗褐色	下川津B類 口縁部内面：指押さえ，しぼり 口縁部外面：ハケ 体部 内面：なで 外面：ヘラ磨き
220									
25	—	弥生 脚付き小型丸底壺	—	—	—	1㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	茶褐色	下川津B類 体部 内面：横なで 外面：横なで
221									

挿図番号	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
25	—	石鏃	サヌカイト	2.2	1.2	3.8	0.56	基部を欠損している。
222								
25	—	打製石斧	安山岩	9.6	8.3	1.5	126.4	〃
223								

SD11

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
27	—	弥生 甕	15.0	—	—	0.2～2㎜の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	体部 内面：指押さえ
224									
27	—	〃	14.1	—	—	0.5～2㎜の長石・石英を含む。	良	〃	体部 外面：ハケ
225									
27	—	〃	14.7	—	—	1～3㎜位の長石・石英を含む。	良	濃橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 外面：ハケ
226									
27	—	〃	13.9	—	—	1～2㎜位の長石・石英等を含む。	良	黄褐色	口縁部内面：ハケ 体部 内面：ヘラ削り 外面：ハケ
227									
27	—	〃	17.4	—	—	0.2～2㎜の長石・石英を含む。	良	淡黄褐色	口縁部内面：ハケ 外面：指押さえ 体部 内面：ハケ
228									
27	—	〃	16.7	—	—	0.1～2㎜の長石・石英を含む。	良	淡褐色	口縁部内面：ハケ 外面：ハケ 体部 内面：ハケ，指押さえ 外面：ハケ
229									
27	—	〃	16.9	—	—	0.5～2㎜程の長石・石英を含む。	良	濁黄褐色	口縁部内面：ハケ 外面：横なで 体部 内面：ハケ 外面：ハケ
230									
27	—	〃	14.7	—	—	0.2～5㎜の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：指なで 外面：叩き
231									
27	—	〃	15.9	—	—	0.2～2㎜の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：横なで 外面：横なで
232									
27	—	〃	13.0	—	—	0.5～2㎜の長石・石英を含む。	良	暗黄褐色	口縁部内面：ハケ 外面：横なで 体部 内面：ハケ 外面：ハケ
233									
27	—	〃	14.6	—	—	2～4㎜の長石・石英を含む。	良	濁黄褐色	体部 外面：叩き
234									
27	—	〃	13.4	—	—	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	淡黄褐色	口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ削り 外面：ハケ
235									
27	—	〃	15.0	—	—	0.2～3㎜の長石・石英を含む。	良	濁淡黄褐色	口縁部内面：横なで 体部 内面：ヘラ削り
236									
27	31	〃	—	—	2.0	1～2㎜の長石・石英を多量に含む。	良	淡褐色	体部 内面：指押さえ，ハケ 外面：ハケ
237									
27	31	〃	—	—	3.9	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	褐～茶褐色	体部 内面：ハケ，指なで，指押さえ 外面：叩き，板なで
238									
27	—	〃	—	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	体部 内面：ヘラ削り 外面：叩き，板なで
239									
27	—	〃	—	—	—	1～2㎜程の長石・石英を含む。	良	濁黄灰褐色	体部 内面：ハケ 外面：ハケ，叩き
240									
27	—	〃	—	—	2.9	5㎜位の粗い長石・石英を含む。	良	黒褐色	体部 内面：ヘラ削り 外面：叩き
241									
27	—	〃	—	—	4.2	0.2～3㎜の長石・石英を含む。	良	暗茶褐色	体部 内面：ヘラ削り 外面：ハケ，叩き
242									

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
28	—	弥生 甕	—	—	4.3	0.2～3㎜の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	体部 内面：なで 外面：ハケ，叩き
243									
28	—	〃	—	—	2.1	2㎜位の長石・石英を含む。	良	橙褐色	
244									
28	—	〃	—	—	3.4	3㎜程の長石・石英を含む。	良	褐色	体部 内面：指押さえ，板なで
245									
28	—	〃	—	—	2.8	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	淡黄褐色	体部 内面：指押さえ 外面：ハケ
246									
28	—	〃	—	—	3.7	0.5～5㎜の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：指なで，指押さえ
247									
28	—	〃	—	—	3.3	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	黒褐色	体部 内面：ヘラ削り 外面：なで
248									
28	—	〃	—	—	2.6	0.5～3㎜位の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：指押さえ
249									
28	—	〃	—	—	3.3	1㎜以下の細かい長石・石英を含む。	良	淡黄褐色	体部 内面：ハケ
250									
28	—	〃	—	—	2.9	1㎜以下の細かい長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：ヘラ削り
251									
28	—	〃	—	—	2.8	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	褐色	体部 内面：ハケ 外面：なで
252									
28	—	〃	—	—	2.3	0.5～2㎜の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：板なで 外面：ヘラ削り
253									
28	—	〃	—	—	3.9	0.2～3㎜の長石・石英を含む。	良	淡黄茶褐色	体部 内面：なで
254									
28	—	〃	—	—	4.1	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	濁赤褐色	体部 内面：ハケ，指押さえ
255									
28	—	〃	—	—	4.3	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	暗赤褐色	体部 内面：指なで
256									
28	—	〃	—	—	5.3	1～3㎜の長石・石英を含む。	良	黄褐色	体部 内面：ヘラ削り 外面：ハケ
257									
28	—	〃	—	—	3.8	3～4㎜の粗い長石・石英を含む。	良	〃	体部 外面：板なで
258									
28	—	〃	—	—	3.3	1～5㎜の長石・石英を含む。	良	濃橙褐色	体部 内面：板なで
259									
28	—	〃	—	—	2.2	2㎜以下の比較的細かい長石・石英を含む。	良	明褐色	体部 内面：なで 外面：なで 底部ヘラ描き痕あり。
260									
28	—	〃	—	—	2.0	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：ハケ 外面：叩き
261									
28	—	〃	—	—	2.8	0.2～3㎜の長石・石英を含む。	良	〃	
262									
28	—	〃	—	—	3.0	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	〃	体部 内面：ハケ 外面：ハケ
263									
28	—	〃	—	—	5.4	3～4㎜の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	
264									
28	—	製塩土器	—	—	4.8	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	淡赤白褐色	脚部 内面：指なで 外面：指なで
265									
28	31	〃	—	—	4.6	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	〃	脚部 外面：指なで
266									
29	—	弥生 壺	18.1	—	—	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	濁黄褐色	口縁部内面：ハケ
267									
29	—	〃	20.0	—	—	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	淡褐色	口縁部内面：ハケ 外面：ハケ
268									
29	—	〃	26.8	—	—	0.1～3㎜台の長石・石英等を多く含む。	良	橙褐色	口縁部内面：板なで 外面：指なで，ハケ
269									
29	—	〃	22.8	—	—	0.5～2㎜の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：波状文
270									
29	—	〃	20.8	—	—	1～4㎜の長石・石英を含む。	良	茶褐色	
271									
29	—	〃	36.4	—	—	0.5～2㎜の細かい長石・石英を含む。	良	淡褐色	口縁部内面：ハケ 外面：ハケ
272									
29	—	〃	—	—	—	2㎜位の長石・石英を含む。	良	橙褐色	口縁部外面：鋸歯文，ハケ
273									
29	31	〃	37.8	—	—	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	茶褐色	口縁部内面：ヘラ磨き 外面：半裁竹管文，ハケ
274									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
29	—	弥生 壺	27.5	—	—	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	淡褐色	口縁部内面：ハケ 外面：鋸歯文，竹管文，ハケ
275									
29	31	〃	23.8	—	—	1～2㎜の長石・石英を含む。	良	淡黄白褐色	口縁部外面：鋸歯文
276									
29	—	〃	22.7	—	—	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	橙褐色	口縁部内面：横なで 外面：波状文
277									
29	—	〃	21.6	—	—	0.2～3㎜程の長石・石英を含む。	良	淡黄褐色	口縁部内面：横なで 外面：ハケ
278									
29	—	〃	—	—	—	0.5～2㎜程度の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	頸部 内面：横なで
279									
29	—	〃	—	—	—	0.5～5㎜の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	頸部 外面：ハケ 体部 内面：指押さえ
280									
29	—	〃	7.1	—	—	0.5～5㎜の長石・石英，角閃石を含む。	良	暗橙褐色	体部 内面：指押さえ
281									
29	—	〃	—	—	—	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	淡褐色	体部 内面：板なで 外面：叩き，指押さえ
282									
30	—	〃	11.3	—	—	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	淡茶褐色	口縁部内面：ハケ 外面：横なで
283									
30	32	〃	—	—	—	0.2～5㎜の長石・石英を含む。	良	濁茶褐色	口縁部内面：ハケ，板なで 外面：ハケ 体部 内面：指なで，ハケ 外面：ハケ
284									
30	—	〃	14.8	—	—	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	茶褐色	口縁部外面：叩き，ハケ
285									
31	32	弥生 鉢	9.7	6.8	1.1	0.5～2㎜の長石・石英を含む。	良	淡褐色	体部 内面：ハケ 外面：なで
286									
31	—	〃	—	—	—	0.2～3㎜の長石・石英を含む。	良	乳白褐色	
287									
31	—	〃	—	—	—	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	淡黄褐色	体部 内面：指押さえ，ハケ 外面：指なで，ハケ
288									
31	—	〃	9.7	5.4	—	0.5～2㎜の長石・石英を含む。	良	淡褐色	体部 内面：板なで 外面：指押さえ
289									
31	—	〃	—	—	2.0	0.2～2㎜の細かい長石・石英を含む。	良	暗褐色	体部 内面：指なで 外面：叩き
290									
31	—	〃	—	—	1.3	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	濁淡褐色	体部 内面：指押さえ
291									
31	—	〃	—	—	3.3	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	濁淡黄褐色	体部 内面：ハケ 外面：ハケ
292									
31	—	〃	—	—	4.0	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	暗褐色	体部 内面：ハケ，ヘラ削り 外面：叩き，ハケ
293									
31	—	〃	16.0	—	—	微細砂粒を含む。	良	暗橙褐色	口縁部内面：ハケ
294									
31	—	〃	20.0	—	—	比較的細かい砂粒を含む。	良	淡褐色	体部 内面：ハケ，ヘラ磨き 外面：ハケ
295									
31	—	〃	—	—	—	1㎜以下の微細長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	体部 内面：ハケ 外面：指押さえ，板なで
296									
31	—	〃	—	—	—	微細長石・石英を含む。	良	橙褐色	体部 内面：なで 外面：ヘラ削り
297									
31	—	〃	—	—	—	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	茶褐色	体部 内面：ハケ，指押さえ 外面：ハケ 脚部 内面：指押さえ 外面：叩き
298									
31	—	〃	36.6	—	—	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	暗橙褐色	口縁部内面：ハケ 外面：横なで 体部 内面：ハケ 外面：なで
299									
31	32	〃	38.6	—	—	0.5～4㎜の長石・石英を含む。	良	茶褐色	口縁部内面：ハケ 外面：横なで 体部 内面：ハケ，ヘラ磨き 外面：ハケ
300									
31	32	〃	35.2	—	—	0.5～3㎜の長石・石英を含む。	良	〃	口縁部内面：ハケ 外面：横なで 体部 内面：ハケ，ヘラ削り 外面：叩き，ハケ，ヘラ削り
301									
32	—	弥生 甕	13.0	—	—	微細長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	橙褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで
302									
32	—	〃	16.1	—	—	0.2～2㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	暗橙褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 体部 内面：ヘラ削り
303									
32	—	〃	—	—	3.4	堅緻，比較的細かい長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	明褐色	下川津B類 体部 内面：指押さえ 外面：なで
304									
32	—	〃	—	—	5.0	堅緻，細かい長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	褐色	下川津B類 体部 内面：ヘラ削り 外面：なで
305									
32	—	〃	15.0	—	—	1～2㎜位の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	濁橙褐色	下川津B類 口縁部内面：ハケ 外面：叩き 体部 内面：板なで
306									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
32	— 307	弥生 甕	—	—	4.0	0.2～2㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	濁黄褐色	下川津B類 体部 内面：なで 外面：ハケ
32	— 308	〃	—	—	2.9	微細な長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	褐色	下川津B類 体部 内面：ハケ 外面：ハケ
32	— 309	〃	—	—	3.4	0.5～4㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	下川津B類 体部 内面：指なで 外面：ハケ
32	— 310	弥生 壺	—	—	5.4	0.5～6㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	下川津B類 体部 内面：指なで
32	32 311	弥生 長頸壺	—	—	9.5	堅緻，微細長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	淡橙褐色	下川津B類 頸部 内面：指押さえ 外面：なで
32	— 312	〃	—	—	—	堅緻，微細長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	明褐色	下川津B類 頸部 内面：指押さえ 外面：なで
32	32 313	〃	—	—	—	堅緻，微細長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	下川津B類 体部 内面：ヘラ削り，指押さえ 外面：なで
32	33 314	弥生 小型丸底壺	—	—	—	堅緻，微細長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	褐色	下川津B類 体部 内面：なで，指押さえ 外面：なで
32	33 315	〃	—	—	—	堅緻，1.5㎜以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	茶褐色	下川津B類 体部 内面：指なで，横なで
32	— 316	〃	11.0	—	—	0.5～3㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	暗橙褐色	下川津B類 口縁部内面：ハケ 外面：なで
32	33 317	〃	—	—	—	0.5～3㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	明褐色	下川津B類 体部 内面：なで 外面：なで 脚部 内面：指押さえ，ヘラ削り 外面：ハケ
32	— 318	〃	—	—	—	0.5～1㎜の細かい長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	淡橙褐色	下川津B類 体部 内面：なで 外面：なで
32	33 319	〃	—	—	—	微細長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	明橙褐色	下川津B類 体部 内面：なで 外面：なで
32	33 320	〃	—	—	—	1㎜以下の長石・角閃石・金雲母を含む。	良好	茶褐色	下川津B類 体部 内面：横なで 外面：横なで
32	— 321	〃	9.8	—	—	1～3㎜位の長石・石英・角閃石・金雲母を含む・。	良	濁橙褐色	下川津B類
32	33 322	〃	—	—	—	0.5～2㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	淡黄褐色	下川津B類 体部 内面：なで
32	— 323	〃	—	—	20.2	0.5～3㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	暗橙褐色	下川津B類 脚部 内面：ヘラ削り
32	— 324	〃	—	—	18.3	1～4㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良	〃	下川津B類
32	— 325	弥生 鉢	9.8	—	—	0.5～3㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	褐色	下川津B類 体部 内面：ハケ
32	34 326	〃	22.8	6.6	—	0.2～4㎜の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	暗橙褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ磨き 外面：ヘラ削り
32	— 327	弥生 高坏	17.6	—	—	小粒の長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	良好	茶褐色	下川津B類 口縁部内面：横なで 外面：横なで 体部 内面：ヘラ磨き

挿図番号	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
33	— 328	石鏃	サヌカイト	2.4	1.4	0.7	1.2	
33	50 329	打製石斧	〃	7.7	7.4	2.1	118.0	若干の敲打痕あり。
33	— 330	〃	〃	9.6	5.6	1.8	106.1	頭部及び左側面に摩滅が見られる。基部欠損
33	— 331	〃	〃	9.5	4.6	1.5	86.3	刃部に摩滅・傷痕が見られる。先端部欠損
33	50 332	ラウンドスクレイパー	〃	8.9	7.8	2.9	239.0	風化が著しい，基部欠損，旧石器の可能性あり。
34	— 333	スクレイパー	〃	6.9	5.8	0.6	24.5	

SH03

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
38	— 334	須恵器 坏蓋	17.2	—	—	堅緻，きめ細かい砂粒を含む。	良	灰色	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
38	—	須恵器 高坏坏部	—	—	—	比較的細かい砂粒を含む。	やや悪	薄濁灰色	
335									
38	—	土師器 甕	20.8	—	—	0.5～1.5mmの長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	
336									
38	—	〃	21.8	—	—	1.5mm位の長石・石英を含む。	良	淡桃褐色	
337									
38	—	土師器 把手付甕	—	—	—	0.5～3mmの長石・石英を含む。	良	橙褐色	
338									

挿図番号	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
38	—	スクレイパー	サヌカイト	2.9	2.8	0.6	5.7	風化が著しい。
339								

SB01

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
41	—	須恵器 坏蓋	15.2	—	—	小粒の長石・石英を含む。	良	灰色	
340									

SB04

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
43	—	須恵器 坏蓋	14.9	—	—	小粒の長石・石英を含む。	良	灰色	
341									
43	—	〃	13.1	—	—	小粒の砂粒を含む。	やや悪	濁褐色	
342									

SB13

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
48	—	土師器 甕	9.7	—	—	1mm以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	
343									

SK03

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
53	—	須恵器 坏蓋	13.6	—	—	1mm以下の砂粒少量を含む。	良	灰色	
344									
53	—	〃	14.0	—	—	精緻	良	〃	
345									
53	—	〃	14.0	—	—	1mm以下の砂粒を含む。	良好	〃	
346									
53	—	須恵器平瓶または直行壺	7.9	—	—	小粒の砂粒を含む。	良好	〃	
347									
53	—	土師器 甕	35.2	—	—	1mm以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	
348									

SD03・06

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
54	—	須恵器 坏蓋	12.9	—	—	0.5～1mmの細かい長石・石英を含む。	良	灰色	
349									
54	—	須恵器 壺	19.4	—	—	微細ななかに2～3mmの長石・石英を含む。	良	緑灰色	
350									

挿図番号	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
54	—	スクレイパー	サヌカイト	4.2	3.7	7.6	11.9	
351								

SD05

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
56	—	弥生 鉢	15.0	—	—	1㎜程度の長石・石英を含む。	良	淡黄褐色	
352									
56	—	土師器 甕	24.7	—	—	2㎜程度の長石・石英を含む。	良	淡黄白褐色	
353									
56	34	〃	27.6	—	—	1㎜程度の長石・石英を含む。	良	淡褐色	
354									

挿図	図版	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
番号								
56	—	石包丁	サヌカイト	5.2	6.4	1.2	43.1	
355								

SB03

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
57	—	土師器 小皿	—	—	4.7	極小粒の砂粒少量を含む。	良	淡茶褐色	
356									

SB10

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
59	—	土師器 坏	11.4	—	—	極小粒の砂粒を含む。	良	橙褐色	
357									

SB11

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
60	—	土師器 小皿	9.3	—	—	極小粒の長石・石英を含む。	良	白褐色	
358									

SK02

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
70	—	土師器 椀	15.7	—	—	小粒の砂粒を含む。	良	淡褐色	
359									

SD01

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
71	—	土師器 小皿	8.5	—	—	0.5㎜以下の微細長石・石英を含む。	良	濁褐色	
360									
71	—	須恵器 坏蓋	12.7	—	—	微細砂粒を含む。	良	灰色	
361									
71	—	須恵器 坏身	—	—	—	微細砂粒を含む。	良	薄灰色	
362									
71	—	須恵器 高坏坏部	10.0	—	—	微細砂粒を含む。	良	灰色	
363									

SD07

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
73	—	土師器 小皿	—	—	6.0	微細砂粒を含む。	良	淡橙褐色	
364									
73	—	土師器 椀	14.2	—	—	微細砂粒を含む。	良	乳白色	
365									
73	—	〃	14.9	—	—	微細砂粒を含む。	良	白褐色	
366									

SD09

挿図番号	図版	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
75	—	土師器 小皿	—	—	6.6	微細長石・石英を含む。	良	淡橙白褐色	
367									
75	—	土師器 円盤状高台	—	—	高台径 7.2	比較的細かい長石・石英を含む。	良	明褐色	
368									
75	—	〃	—	—	高台径 5.2	堅緻，微細砂粒を含む。	良好	白褐色	
369									
75	—	〃	—	—	高台径 6.1	細かいものに1～2㎜の長石・石英が混じる。	良	濁橙褐色	
370									
75	—	〃	—	—	高台径 8.7	微細長石・石英を含む。	良好	淡褐色	
371									
75	—	土師器 椀	13.0	—	—	微細長石・石英を含む。	良好	褐色	
372									
75	—	〃	14.7	—	—	微細長石・石英を含む。	良好	白褐色	
373									
75	—	〃	—	—	高台径 7.8	微細長石・石英を含む。	良好	淡橙褐色	
374									
75	—	黒色土器 A類 椀	9.9	—	—	堅緻，微細砂粒を含む。	良好	外：黒～白褐色 内：黒色	口縁部内外面ヘラ磨き
375									
75	—	〃	—	—	高台径 6.9	微細長石・石英を含む。	良好	淡赤褐色	内面ヘラ磨き
376									
75	—	土師質 土釜	24.0	—	—	微細長石・石英を多量に含む。	良	赤褐色	
377									
75	—	蛸壺	—	—	—	1～2㎜の砂粒を含む。	良	淡黄褐色	
378									
75	—	土師器 小皿	—	—	5.7	0.5㎜程度の長石・石英を含む。	良好	橙褐色	底部ヘラ切り
379									
75	—	土師器 円盤状高台	—	—	高台径 9.1	微細長石・石英を含む。	良	淡褐色	〃
380									
75	—	土師器 椀	—	—	高台径 6.9	堅緻，微細長石・石英を少量含む。	良好	乳白色	
381									
75	34	須恵器 椀	15.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	灰色	体部内外面回転なで
382									
75	—	土師質 土鍋	33.5	—	—	2㎜程度の長石・石英を含む。	良	褐色	
383									
75	—	土師質 土釜	27.0	—	—	1㎜位の長石・石英を含む。	良	〃	
384									
75	—	土師器 椀	17.0	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良好	白褐色	
385									
75	34	黒色土器 A類 椀	15.1	5.8	高台径 8.1	堅緻，微細長石・石英を含む。	良好	外：黒灰色 内：黒色	
386									
75	—	黒色土器 B類 椀	—	—	高台径 7.6	堅緻，微細長石・石英を含む。	良好	黒色	
387									
75	—	土師質 土釜	31.0	—	—	1㎜程度の長石・石英と1.5cmの小石を含む。	良	濁淡褐色	
388									
76	—	土師器 坏	11.6	3.1	7.5	1㎜以下の細かい長石・石英を含む。	良好	橙褐色	底部ヘラ切り
389									
76	—	〃	—	—	7.3	微細砂粒を含む。	良好	淡橙褐色	〃
390									
76	—	〃	—	—	7.4	微細砂粒を含む。	良好	淡黄白褐色	〃
391									
76	—	土師器 円盤状高台	—	—	5.7	微細長石・石英を含む。	良	白褐色	
392									
76	—	〃	—	—	6.8	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	
393									
76	—	土師器 椀	13.0	—	—	微細砂粒を含む。	良	薄灰色	
394									
76	—	〃	18.9	—	—	0.5～1㎜の長石・石英を含む。	良	赤灰色	
395									
76	—	〃	—	—	高台径 7.0	微細砂粒を含む。	良	白褐色～黒色	
396									
76	—	〃	15.5	6.0	高台径 5.6	微細砂粒を含む。	やや悪	褐色	
397									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
76	— 398	土師器 椀	—	—	高台径 7.0	微細砂粒を含む。	良	橙褐色	
76	— 399	瓦器 椀	17.0	5.5	高台径 4.0	堅緻，微細砂粒を含む。	良好	濃灰色	和泉型
76	— 400	土師質 土鍋	34.2	—	—	1～5㎜の長石・石英を含む。	良	暗褐色	
76	— 401	〃	40.0	—	—	0.5～2㎜程の長石・石英を含む。	良	〃	
76	— 402	〃	36.0	—	—	0.5～1㎜程度の長石・石英を含む。	良	〃	
76	— 403	平瓦	—	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む。	やや悪	白褐色	
76	— 404	〃	—	—	—	〃	良	〃	
76	— 405	須恵器 甕体部	—	—	—	1㎜位の長石・石英を少量含む。	良	明灰色	
77	— 406	土師器 小皿	7.4	1.0	5.6	0.5㎜の長石・石英を含む。	良	橙褐色	
77	— 407	土師器 坏	—	—	7.8	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	底部ヘラ切り
77	— 408	〃	—	—	6.8	微細長石・石英を含む。	良	暗濁褐色	〃
77	— 409	土師器 円盤状高台付坏	7.9	2.7	5.0	0.5～1㎜の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	
77	34 410	〃	8.0	2.2	4.4	微細長石・石英を含む。	良	白褐色	
77	— 411	土師器 椀	16.0	—	—	微細長石・石英を含む。	良好	乳白色	
77	34 412	〃	16.8	5.6	高台径 6.6	微細なものに2～3㎜の長石・石英が混じる。	良好	〃	
77	— 413	〃	—	—	高台径 5.4	堅緻，微細長石・石英を含む。	良好	〃	
77	— 414	黒色土器 A類 椀	13.8	—	—	微細長石・石英を含む。	良好	外：黒～白褐色 内：黒色	内外面ヘラ磨き
77	— 415	〃	—	—	高台径 6.5	0.5㎜以下の長石・石英を含む。精緻	良好	内：黒色 外：淡黒褐色～淡橙褐色	〃
77	— 416	〃	—	—	高台径 6.7	微細長石・石英を含む。	良好	内：黒色 外：白褐色	〃
77	— 417	〃	—	—	高台径 6.9	微細長石・石英を含む。	良好	〃	〃
77	34 418	黒色土器 B類 椀	13.8	5.9	高台径 6.6	堅緻，微細長石・石英を含む。	良好	黒褐色	〃
77	— 419	土師器 円盤状高台付坏	—	—	高台径 7.5	微細長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	底部ヘラ切り
77	— 420	黒色土器 A類 椀	14.5	5.9	高台径 7.4	堅緻，0.5㎜位の細かい長石・石英を含む。	良好	内：黒色 外：白褐色	口縁部内面沈線 内外面ヘラ磨き

挿図番号	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
77	— 421	打製石斧	サヌカイト	7.0	5.9	0.9	56.5	

SA02

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
78	— 422	土師質 土鍋	50.7	—	—	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗茶褐色	

柱穴出土遺物

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
79	— 423	黒色土器 A類 椀	—	—	高台径 5.4	小粒の砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡橙褐色	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
79	—	土師器 円盤状高台 坏または椀	—	—	7.0	0.7㎜程の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	底部ヘラ切り
424									
79	—	土師器 坏	10.5	—	—	小粒の長石・石英を含む。	良	〃	〃
425									
79	—	土師器 小皿	9.0	1.5	7.1	小粒の長石・石英を含む。	良	淡褐色	〃
426									
79	—	〃	8.4	1.7	4.8	小粒の砂粒を多量に含む。	良	白褐色	〃
427									
79	—	須恵器 坏身	14.0	—	—	微細粒を含む。	やや悪	灰色	
428									
79	—	土師器 小皿	7.8	1.5	5.4	小粒の砂粒を含む。	良	淡褐色	底部ヘラ切り
429									
79	35	瓦質 摺り鉢	28.0	12.9	12.7	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	灰色	
430									
79	—	須恵器 高坏	—	—	—	小粒の砂粒を含む。	良好	〃	内外面ヘラ磨き
431									

挿図番号	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
79	—	スクレイパー	サヌカイト	10.2	8.8	2.1	280.9	刃部若干磨滅
432								
79	—	石皿	安山岩	24.5	13.0	4.6	1806.8	全体に若干の磨滅・擦痕が見られる。
433								

SD10

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
81	35	土師器 小皿	8.3	1.5	5.2	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白褐色	底部ヘラ切り
434									
81	—	〃	8.9	1.1	7.0	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡濁灰褐色	〃
435									
81	—	〃	9.2	1.3	6.0	細砂粒を含む。赤色顔料塗付。	良	黄白色	〃
436									
81	—	〃	9.0	1.3	5.8	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	〃
437									
81	—	〃	8.6	1.4	6.0	1.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白色	〃
438									
81	—	〃	8.4	1.5	6.8	微細な砂粒を含む。	良	淡白褐色	〃
439									
81	35	〃	9.4	2.2	6.4	砂粒をあまり含まない。	良	淡灰茶褐色	〃
440									
81	—	〃	9.2	2.1	8.1	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白褐色	〃
441									
81	—	〃	8.3	1.2	6.1	微細砂粒を含む。	良	淡橙褐色	〃
442									
81	—	〃	8.7	1.3	5.7	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡灰暗茶褐色	〃
443									
81	—	〃	9.3	1.3	6.0	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	乳白褐色	〃
444									
81	35	〃	9.0	1.6	6.3	微細砂粒を含む。	良	明淡褐色	〃
445									
81	—	〃	8.9	1.2	5.7	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙白褐色	〃
446									
81	35	〃	9.6	1.8	6.0	細砂粒を含む。	良	黄白色	〃
447									
81	—	〃	9.4	1.6	5.4	微砂粒を含む。	良	淡褐黄色	〃
448									
81	—	〃	9.5	1.5	5.6	細砂粒を含む。	良	黄白色	〃
449									
81	—	〃	8.8	1.6	5.2	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	〃
450									
81	35	〃	9.2	1.9	6.0	細砂粒を含む。	良	淡黄褐色	〃
451									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
81	— 452	土師器　小皿	8.9	1.6	5.8	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙褐色	底部ヘラ切り
81	— 453	〃	9.0	1.6	5.0	1㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	〃	〃
81	— 454	〃	8.6	1.6	5.6	微砂粒を含む。	良	濁褐黄色	〃
81	— 455	〃	9.0	1.6	6.6	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡灰白褐色	〃
81	— 456	〃	9.6	1.9	5.6	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	〃
81	— 457	〃	8.4	1.5	7.1	1㎜以下の砂粒を含む。	良	乳白色	〃
81	— 458	〃	9.3	1.6	7.3	細砂粒を含む。	良	淡黄褐色	〃
81	— 459	〃	8.4	1.7	5.5	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	〃
81	— 460	〃	8.9	2.0	6.2	微細砂粒を含む。	良	乳白褐色	〃
81	— 461	〃	8.8	1.9	5.9	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡褐色～淡明橙褐色	〃
81	— 462	〃	9.5	1.8	5.9	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙褐色	〃
81	— 463	土師器　坏	—	—	6.6	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	赤褐色	〃
81	— 464	〃	—	—	7.5	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	乳白褐色	〃
81	— 465	〃	—	—	8.1	1㎜以下の砂粒を多く含む。	良	白黄褐色	〃
81	— 466	〃	12.6	2.5	5.7	細砂粒を含む。	良	淡橙褐色	〃
81	35 467	〃	12.7	3.0	6.4	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色～淡乳白褐色	〃
81	— 468	〃	15.6	3.0	7.7	1㎜以下の砂粒を多く含む。	良	淡橙褐色～明淡桃褐色	〃
81	— 469	〃	14.2	—	7.2	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙灰褐色	〃
81	— 470	〃	14.2	2.9	7.0	1.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	濁淡橙褐色	〃
81	— 471	〃	14.0	3.3	8.6	微細砂粒を含む。	良	淡乳灰白褐色	〃
81	— 472	〃	13.8	3.8	7.4	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	〃
81	35 473	〃	14.3	3.6	8.9	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	〃
81	— 474	〃	—	—	7.0	1㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡乳白褐色	〃
81	— 475	〃	—	—	9.4	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡濁褐色	〃
81	— 476	〃	—	—	7.4	0.5㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡橙褐色	〃
81	— 477	〃	12.7	3.6	5.7	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	〃
81	— 478	〃	14.0	3.9	7.3	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡灰褐色～淡茶灰褐色	〃
81	— 479	〃	14.2	3.9	7.6	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	白褐色～濁淡灰褐色	〃
81	— 480	〃	13.9	3.6	5.9	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白褐色	〃
81	— 481	〃	13.9	3.6	6.8	1㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡橙白褐色	〃
81	— 482	〃	14.5	3.7	7.7	微細砂粒を含む。	良	淡黄白色	〃
81	— 483	〃	14.6	4.3	8.0	1㎜以下の砂粒を多く含む。	良	淡白褐色	〃

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
81	— 484	土師器 坏	—	—	7.3	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色～淡灰茶褐色	底部ヘラ切り
81	— 485	〃	—	—	8.0	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白褐色	〃
81	— 486	〃	—	—	7.0	微細砂粒を含む。	良	〃	〃
81	— 487	〃	13.2	4.3	7.4	1㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡濁褐色	〃
81	— 488	〃	13.6	3.9	8.0	1㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡白褐色～淡明橙褐色	〃
81	— 489	〃	13.4	3.2	6.2	1㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡橙白褐色	〃
81	— 490	〃	14.9	3.1	7.6	1㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡濁灰褐色	〃
81	— 491	〃	15.4	4.8	8.9	1㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡白褐色	〃
81	— 492	〃	14.3	4.9	8.5	0.5㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡橙白褐色	〃
82	— 493	土師器 椀	13.2	—	—	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡乳濁白褐色	体部内外面ヘラ磨き
82	— 494	〃	17.0	—	—	微細砂粒を含む。	良	乳白色	〃
82	— 495	〃	15.9	—	—	微細砂粒を含む。	良	〃	〃
82	— 496	〃	15.8	—	—	微細砂粒を含む。	良好	淡乳白褐色	〃
82	— 497	〃	15.4	—	—	微細砂粒を含む。	良好	〃	〃
82	— 498	〃	15.4	—	—	微細砂粒を多量に含む。	良	乳白色	〃
82	— 499	〃	15.8	6.5	高台径 6.4	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	〃
82	— 500	〃	15.0	5.3	高台径 5.9	細砂粒を含む。	良	白褐色	〃
82	— 501	〃	13.0	—	—	微砂粒を含む。	良好	暗褐茶色	〃
82	— 502	〃	15.0	—	—	堅緻，微細砂粒を含む。	良好	淡黄白褐色	〃
82	— 503	〃	14.8	—	—	微細砂粒を含む。	良	乳白色	〃
82	— 504	〃	14.7	—	—	2㎜以下の砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	〃
82	— 505	〃	14.4	5.5	高台径 5.6	1.5㎜以下の砂粒を含む。	良好	乳白色	〃
82	35 506	〃	15.2	5.6	高台径 5.2	0.3㎜の砂粒を多く含む。	良	橙白褐色	〃
82	— 507	〃	15.6	6.4	高台径 5.0	微細砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	〃
82	— 508	〃	—	—	高台径 7.0	微細砂粒を含む。	良	淡白褐色	〃
82	— 509	〃	12.8	—	—	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡乳灰白褐色	〃
82	— 510	〃	15.9	—	—	微砂粒を含む。	良好	白色	〃
82	— 511	〃	15.4	6.4	高台径 6.4	3㎜以下の砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	〃
82	— 512	〃	16.4	—	—	微砂粒を含む。	良好	淡褐色	〃
82	— 513	〃	14.8	—	—	微細砂粒を含む。	良	乳白褐色	〃
82	35 514	〃	—	—	高台径 5.6	微細砂粒を含む。	良	乳白色	〃
82	— 515	〃	15.8	6.0	高台径 6.5	1.5㎜以下の長石・石英を含む。	やや悪	淡褐色	〃

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
82	— 516	土師器 椀	13.9	—	—	1㎜以下の長石・石英を多量に含む。	良	淡褐色	体部内外面ヘラ磨き
82	— 517	〃	—	—	高台径 5.5	微細砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	体部内面板なで
82	— 518	〃	—	—	高台径 6.2	微細砂粒を含む。	良好	淡乳白色	〃
82	36 519	〃	—	—	高台径 5.2	微細砂粒を含む。	良	乳白褐色	体部内外面ヘラ磨き
83	— 520	〃	—	—	高台径 5.5	微細砂粒を含む。	良	淡白褐色	〃
83	— 521	〃	—	—	高台径 6.0	細砂粒を含む。	良	淡橙白褐色	〃
83	— 522	〃	—	—	高台径 6.5	微細砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	〃
83	— 523	〃	—	—	高台径 5.8	微細砂粒を含む。	良	〃	〃
82	— 524	〃	—	—	高台径 5.7	微細砂粒を含む。	良好	乳白色	〃
82	— 525	〃	—	—	高台径 5.8	微細砂粒を含む。	良	〃	〃
83	— 526	〃	—	—	高台径 6.1	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	乳白褐色	〃
83	— 527	〃	—	—	高台径 5.6	微細砂粒を含む。	良	乳白褐色～淡灰褐色	〃
83	— 528	〃	—	—	高台径 5.0	1㎜以下の砂粒を含む。	良	乳白褐色	〃
83	36 529	〃	—	—	高台径 5.8	微細砂粒を含む。	良	淡乳白灰色	〃
83	— 530	〃	—	—	高台径 7.5	微細砂粒を含む。	良	乳白色	〃
83	— 531	〃	—	—	高台径 6.1	微細砂粒を含む。	良好	淡白褐色	〃
83	— 532	〃	—	—	高台径 6.1	微細砂粒を含む。	良	乳白色	〃
83	— 533	〃	—	—	高台径 6.4	微細砂粒を含む。	良好	淡乳白褐色	〃
83	— 534	〃	—	—	高台径 7.4	微細砂粒を含む。	良	暗赤褐色	〃
83	— 535	〃	—	—	高台径 5.6	微細砂粒を含む。	良好	淡乳白黄色	〃
83	— 536	〃	—	—	高台径 6.6	精良	良好	黄白色	〃
83	— 537	〃	—	—	高台径 5.3	微細砂粒を含む。	良好	乳白色	〃
83	— 538	〃	—	—	高台径 6.9	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	濁茶褐色	〃
83	— 539	〃	—	—	高台径 6.2	微細砂粒を含む。	良	淡乳白黄褐色	〃
83	— 540	〃	—	—	高台径 6.2	微細砂粒を含む。	良好	淡橙白褐色	〃
83	— 541	〃	—	—	高台径 4.8	微細砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	〃
83	— 542	〃	—	—	高台径 6.0	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡濁褐色	〃
83	— 543	〃	—	—	高台径 5.2	微細砂粒を含む。	良好	乳白色	〃
83	— 544	〃	—	—	高台径 5.8	細砂粒を含む。	良	淡橙褐色	〃
83	— 545	〃	—	—	高台径 6.3	1㎜以下の砂粒を含む。	良	乳白色	〃
83	— 546	〃	—	—	高台径 6.3	精良	良好	淡茶白色	〃
83	— 547	〃	—	—	高台径 6.3	微細砂粒を含む。	良	淡褐色～灰色	〃

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
83	— 548	土師器 椀	—	—	高台径 6.1	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	体部内外面ヘラ磨き
83	— 549	〃	—	—	高台径 6.3	微細砂粒を含む。	良	乳白褐色	〃
83	— 550	〃	—	—	高台径 6.0	0.5㎜前後の砂粒を含む。	良好	暗茶白色	〃
83	— 551	〃	—	—	高台径 5.5	微細砂粒を含む。	良	淡乳白色	〃
83	36 552	〃	—	—	高台径 6.2	細砂粒を含む。	良	白褐色	〃
83	— 553	〃	—	—	高台径 6.0	精良	良好	淡褐白色	〃
83	— 554	〃	—	—	高台径 5.7	微細砂粒を含む。	良	乳白褐色	〃
83	— 555	〃	—	—	高台径 6.3	微細砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	〃
83	— 556	〃	—	—	高台径 7.0	1㎜以下の砂粒を含む。	良	濁灰橙褐色	〃
83	36 557	〃	—	—	高台径 6.4	微細砂粒を含む。	良	淡乳白色	〃
83	— 558	〃	—	—	高台径 6.4	微細砂粒を含む。	良	乳白色	〃
83	— 559	〃	—	—	高台径 5.4	微細砂粒を含む。	良好	〃	〃
83	— 560	〃	—	—	高台径 6.0	微細砂粒を含む。	良	淡黄白褐色	〃
83	— 561	〃	—	—	高台径 8.0	0.7㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白茶褐色	〃
84	— 562	黒色土器 A類 椀	14.6	—	—	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：黒～淡褐色	
84	— 563	〃	14.0	—	—	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：白褐色	
84	— 564	〃	13.8	—	—	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡橙褐色	
84	— 565	〃	16.0	—	—	細砂粒を多量に含む。	良好	内：黒色 外：濁黄白色	
84	— 566	〃	15.0	5.9	高台径 6.4	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡乳白褐色	
84	— 567	〃	15.6	5.4	高台径 6.2	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：黒～淡乳白褐色	
84	— 568	〃	14.8	—	—	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：白褐色	
84	— 569	〃	14.9	—	—	0.5㎜以下の微細長石・石英を含む。	良好	〃	
84	— 570	〃	15.0	—	—	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：乳白褐色	
84	36 571	〃	14.5	5.5	高台径 6.2	1㎜程度の砂粒を含む。	良	内：黒色 外：白褐色	
84	— 572	〃	15.4	5.7	高台径 6.4	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡灰褐色～暗茶褐色	
84	— 573	〃	18.8	—	—	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡濁白褐色	
84	— 574	〃	14.9	—	—	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡白褐色	
84	— 575	〃	16.2	—	—	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：黒～淡褐色	
84	— 576	〃	14.2	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：白褐色	
84	36 577	〃	15.5	5.7	高台径 6.3	微細砂粒を含む。	良	〃	
84	— 578	〃	16.2	—	—	細砂粒を含む。	良好	暗黒灰色	
84	36 579	〃	—	—	高台径 6.3	微細砂粒を含む。	良	内：暗灰色～淡白褐色 外：淡白褐色	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
84	— 580	黒色土器 A類 椀	—	—	高台径 5.7	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡褐色～淡灰色	
84	— 581	〃	—	—	高台径 6.0	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：黒褐色 外：白褐色	
84	— 582	〃	—	—	高台径 6.0	細砂粒を多量に含む。	良	内：黒色 外：淡白褐色	
84	— 583	〃	—	—	高台径 5.4	1㎜以下の砂粒を含む。	良	内：黒色 外：白褐色	
84	36 584	〃	—	—	高台径 5.5	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡褐色	
84	— 585	〃	—	—	高台径 7.3	1㎜程の砂粒を含む。	良	内：黒色 外：白褐色	
84	— 586	〃	—	—	高台径 7.1	微細砂粒を含む。	良	内：黒褐色 外：白褐色	
84	— 587	〃	—	—	高台径 7.2	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡濁白褐色	
84	— 588	〃	—	—	高台径 5.8	微細砂粒を含む。	良	内：黒灰色 外：乳白灰褐色	
84	36 589	〃	—	—	高台径 6.3	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡白乳褐色	
84	36 590	〃	—	—	高台径 6.2	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡白褐色	
84	— 591	〃	—	—	高台径 6.2	微細砂粒を含む。	良	淡白褐色	
84	— 592	〃	—	—	高台径 5.8	微細砂粒とともに4㎜台の石英を一粒含む。	良	内：淡灰黒色 外：橙褐色	
84	— 593	〃	—	—	高台径 6.0	微細砂粒を含む。	良	内：淡灰黒色 外：淡褐色～灰黒色	
84	— 594	〃	—	—	高台径 6.0	細砂粒を多量に含む。	良好	暗茶灰色	
84	— 595	〃	—	—	高台径 5.3	微細長石・石英を含む。	良	淡橙褐色～乳白色	
84	— 596	〃	—	—	高台径 6.7	1㎜以下の砂粒を含む。	良	内：黒色 外：濁褐色	
84	— 597	〃	—	—	高台径 6.1	微細砂粒を含む。	良	内：黒色 外：淡白黄褐色	
84	— 598	〃	—	—	高台径 6.3	微細砂粒を含む。	良	内：淡黒色 外：淡褐色	
84	— 599	瓦器 椀	15.7	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡暗赤褐色～灰白色	内外面細かいヘラ磨き
84	— 600	〃	15.1	—	—	微細砂粒を含む。	良	黒色	
85	— 601	須恵器 坏蓋	8.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	青暗灰色	
85	— 602	須恵器 坏	—	—	6.0	1㎜以下の砂粒を含む。	良	灰色	
85	— 603	須恵器 高坏	—	—	14.0	2㎜以下の砂粒を含む。	良	淡灰色	脚部に透かしを施す。
85	— 604	須恵器 壺	—	—	9.0	1㎜以下の砂粒を含む。	良	暗灰色	
85	— 605	〃	—	—	10.6	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	
85	— 606	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	やや悪	黒灰色	底部ゲタ痕あり。瓦質
85	— 607	須恵器 甕	30.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	釉：緑黒褐色	灰釉がかかっている。
85	— 608	〃	22.6	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	暗濁灰色	
85	— 609	〃	23.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	灰白色	
85	— 610	〃	32.0	—	—	0.5㎜以下の砂粒を少量含む。	良	暗灰色 釉：緑黒色	灰釉がかかっている。
85	— 611	〃	31.2	—	—	3㎜以下の砂粒を含む。	瓦質	表面：暗灰色 胎土：紫灰色	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
85	— 612	須恵器 甕	31.2	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	瓦質	表面：暗灰色 胎土：白灰色	体部外面格子叩き，平行叩き，内面指なでが施される。
85	— 613	〃	—	—	—	2㎜以下の砂粒を含む。	良	灰色	
85	— 614	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	青暗灰色	
85	— 615	〃	—	—	—	2㎜以下の砂粒を含む。	良	明灰色	
86	— 616	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒少量を含む。	良	淡明灰色～暗灰色	
86	— 617	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	灰色	
86	— 618	〃	—	—	—	2㎜以下の砂粒を含む。	良	暗灰色～灰色	
86	— 619	〃	—	—	—	微細砂粒を少量含む。	良	灰白色～黒色	
86	— 620	須恵器 こね鉢	25.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良好	暗灰色	
86	36 621	〃	20.9	—	—	微細砂粒を含む。	瓦質	淡白褐色～濁灰色	
86	36 622	〃	—	—	29.7	4㎜以下の砂粒を含む。	良	淡灰色	
86	36 623	〃	31.6	—	—	2㎜以下の砂粒を含む。	瓦質	表面：暗灰色 胎土：白灰色	
86	36 624	〃	—	—	12.0	5㎜位の粗い砂粒を含む。	良	〃	
86	36 625	〃	29.2	12.7	14.4	1㎜以下の砂粒を含む。	良	濁灰色	
86	— 626	〃	—	—	14.7	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡灰白色	
87	— 627	土師質 土釜	25.2	—	—	1㎜以下の砂粒を多く含む。	良	乳白褐色	
87	— 628	〃	26.2	—	—	1㎜以下の砂粒を多く含む。	良	淡褐色	
87	— 629	〃	24.5	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	暗灰褐色	
87	— 630	〃	23.6	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙褐色～淡褐色	
87	— 631	〃	33.0	—	—	微細砂粒を含む。	良	淡褐色～茶褐色	
87	— 632	〃	26.0	—	—	1㎜以下の砂粒を多く含む。	良	淡褐色	
87	— 633	〃	27.2	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色～黒茶褐色	
87	37 634	〃	31.4	—	—	2㎜以下の砂粒を含む。	良	淡褐色～暗濁褐色	
87	— 635	〃	33.0	—	—	1㎜以下の砂粒を多く含む。	良	淡褐色～濁褐色	
87	— 636	〃	25.2	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡褐色	
88	37 637	〃	26.7	—	—	3㎜以下の砂粒を含む。	良	濁茶灰橙褐色	
88	38 638	〃	33.4	—	—	3㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡褐色	
89	— 639	土師質 土鍋	21.8	—	—	4㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：茶色 外：黒褐色	
89	38 640	〃	28.2	—	—	5㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	褐色～暗褐色	
89	— 641	〃	28.5	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	黒褐色～暗橙褐色	
89	— 642	〃	34.8	—	—	3㎜以下の砂粒を多く含む。	良	濁茶褐色～淡茶褐色	
89	— 643	〃	30.8	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
89	—	土師質　土鍋	31.5	—	—	長石等の1㎜以下の砂粒を含む。	良	暗濁褐色～橙褐色	
644									
89	38	〃	34.0	—	—	3㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	濁褐色	
645									
89	—	〃	29.7	—	—	3㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	〃	
646									
90	—	〃	34.8	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗褐色～濁淡褐色	
647									
90	—	〃	37.2	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗茶褐色	
648									
90	—	〃	39.6	—	—	3㎜以下の砂粒を含む。	良	濁暗茶褐色～淡茶褐色	
649									
90	39	〃	31.2	—	—	2㎜以下の砂粒を多く含む。	良	暗茶褐色～暗橙褐色	
650									
90	38	〃	39.4	—	—	3㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	橙褐色～淡褐色	
651									
90	—	〃	29.0	—	—	2㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	橙褐色	
652									
90	—	〃	35.0	—	—	7㎜以下の粗い長石・石英を多く含む。	良	淡茶褐色	
653									
91	—	〃	34.2	—	—	5㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色～淡茶褐色	
654									
91	—	〃	40.0	—	—	3㎜程度の長石を含む。	良	淡灰橙褐色	
655									
91	—	〃	32.6	—	—	4㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡褐色～暗茶褐色	
656									
91	—	〃	36.0	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色～褐色	
657									
91	—	〃	37.8	—	—	3㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	暗茶褐色～淡褐色	
658									
91	—	〃	39.2	—	—	2㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	暗茶褐色	
659									
91	—	〃	40.1	—	—	2㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	暗茶褐色～濁橙褐色	
660									
91	—	〃	41.3	—	—	微細砂粒と5㎜大の石英一粒を含む。	良	橙褐色～濁茶橙褐色	
661									
91	—	〃	35.5	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗茶褐色～茶褐色	
662									
92	—	〃	35.9	—	—	2㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡褐色～暗濁褐色	
663									
92	—	〃	38.1	—	—	2㎜以下の砂粒を含む。	良	淡茶灰褐色	
664									
92	—		38.6	—	—	1㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	暗茶褐色	
665									
92	—	〃	32.1	—	—	3㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	黒褐色～濁淡褐色	
666									
92	—	〃	30.0	—	—	3㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	橙褐色	
667									
93	—	〃	42.2	—	—	2㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	濁褐色	
668									
93	—	〃	41.5	—	—	1㎜以下の砂粒を多く含む。	良	淡褐色	
669									
93	—	〃	41.6	—	—	3㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	暗淡褐色～淡橙褐色	
670									
93	—	〃	42.0	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	濁褐色	
671									
93	—	〃	42.0	—	—	5㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	暗茶褐色～淡茶褐色	
672									
93	—	〃	46.8	—	—	2㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	暗茶褐色	
673									
93	39	土師質　壺	25.0	—	—	4㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡褐色	
674									
94	40	土師質　竈	—	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色～濁褐色	
675									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
94	40 676	土師質 竈	—	—	—	2㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	淡褐色～淡橙褐色	
94	40 677	〃	—	—	35.5	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	濁茶橙褐色	
94	— 678	〃	—	—	—	7㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	
95	— 679	土師器 円盤状高台 坏	—	—	4.3	微細砂粒を含む。	良	濁暗褐色	
95	— 680	〃	7.5	2.5	4.8	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡灰白褐色	
95	— 681	〃	—	—	4.8	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡灰褐色～淡橙褐色	
95	— 682	〃	—	—	5.1	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙乳白褐色	
95	— 683	〃	—	—	4.6	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	〃	
95	— 684	〃	—	—	4.5	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙白褐色	
95	— 685	〃	—	—	4.2	微細砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	
95	— 686	〃	—	—	4.6	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡茶白褐色	
95	— 687	〃	—	—	4.6	微細砂粒を含む。	良	暗灰褐色～淡褐色	
95	— 688	〃	—	—	4.6	微細砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	
95	— 689	〃	—	—	4.2	1㎜以下の砂粒を含む。	良	〃	
95	— 690	〃	—	—	4.5	微細砂粒を含む。	良	淡黄白褐色	
95	— 691	〃	—	—	4.2	微細砂粒を含む。	良	淡橙乳白褐色	
95	— 692	〃	—	—	4.2	1㎜以下の砂粒を含む。	良	黒茶灰色	
95	— 693	〃	—	—	4.9	微細砂粒を含む。	良	淡橙乳白褐色	
95	— 694	〃	—	—	4.4	微細砂粒を含む。	良	〃	
95	— 695	〃	—	—	5.1	6㎜以下の石英等の砂粒を含む。	良	乳黄白褐色～明橙褐色	
95	— 696	〃	8.5	2.7	5.6	微細砂粒を含む。	良	淡橙褐色	
95	— 697	土師器 円盤状高台 小皿	8.6	2.1	5.7	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙乳白褐色	
95	— 698	〃	7.9	2.0	5.2	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙白褐色	
95	— 699	土師器 円盤状高台 坏	8.1	3.0	4.0	微細砂粒を含む。	良	淡茶白褐色	
95	— 700	〃	—	—	6.8	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	白乳褐色	
95	— 701	〃	—	—	7.0	微細砂粒を含む。	良	暗茶橙褐色	
95	— 702	〃	—	—	7.6	微細砂粒を含む。	良	淡橙褐色	
95	— 703	〃	—	—	8.2	1㎜以下の砂粒を含む。	良	濁淡茶褐色	
95	— 704	〃	—	—	8.5	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白黄褐色	
95	— 705	〃	—	—	8.1	2㎜以下の長石・石英を多く含む。	良	乳白褐色	
95	— 706	土師器 高台付小皿	7.8	2.1	高台径 3.8	微細砂粒を含む。	良	乳橙白褐色	
95	— 707	〃	8.6	2.5	高台径 5.3	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙白褐色	

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
95	—	土師器 高台付小皿	9.0	3.2	高台径 6.7	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙褐色	
708									
95	—	土師器 高台付坏	10.0	3.0	高台径 6.2	微細砂粒を含む。	良	淡乳白黄褐色	
709									
95	—	〃	—	—	高台径 4.7	微細砂粒を含む。	良	淡橙乳白褐色	
710									
95	—	〃	—	—	高台径 4.8	1㎜以下の砂粒を含む。	良	乳白褐色	
711									
95	—	〃	—	—	高台径 9.0	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡橙乳白色	
712									
95	—	〃	—	—	高台径 6.9	1㎜以下の砂粒を含む。	良	乳橙白褐色	
713									
95	—	〃	12.3	4.6	高台径 7.8	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	淡茶白褐色	
714									
95	—	土師器 小皿	10.1	1.6	—	1㎜以下の砂粒少量を含む。	良	淡橙乳白褐色	京都系
715									
95	—	備前 壺	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	内：暗紫赤褐色 外：淡緑灰色	
716									
95	—	瓦	—	—	—	2㎜以下の砂粒を含む。	良	暗灰色	
717									
95	—	手づくね 小壺	5.0	—	—	極小の砂粒を含む。	良	灰黒色	
718									
95	—	輸入磁器 白磁椀	—	—	—	緻密	良好	白灰褐色	
719									
95	—	〃	—	—	4.8	微細砂粒を含む。	良好	表面：濁淡緑色 胎土：白灰色	釉は高台部以外にかかる。
720									
96	—	土師器 小皿	—	—	6.2	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡褐色	底部ヘラ切り
721									
96	—	〃	8.0	1.2	5.2	微細砂粒を含む。	良	淡灰褐色	〃
722									
96	—	〃	9.9	1.2	7.2	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	乳白褐色	〃
723									
96	—	〃	8.5	1.5	5.7	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡黄白褐色	〃
724									
96	—	〃	9.3	1.8	6.0	微細砂粒を含む。	良	灰褐色～淡褐色	〃
725									
96	41	〃	8.2	1.1	5.0	1㎜以下の砂粒を含む。	良	乳白褐色	〃
726									
96	42	〃	8.2	1.6	5.6	1㎜以下の砂粒を含む。	良	白褐色	〃
727									
96	—	〃	9.1	1.9	5.7	1㎜以下の砂粒を多く含む。	良	淡灰褐色	〃
728									
96	—	土師器 坏	—	—	7.2	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡黄白褐色	〃
729									
96	—	〃	—	—	7.4	微細砂粒を含む。	良	淡白褐色	〃
730									
96	—	〃	14.0	—	8.4	微細砂粒を含む。	良	乳白褐色	〃
731									
96	—	〃	15.0	3.6	7.9	微細砂粒を含む。	良	淡橙褐色	〃
732									
96	—	土師器 円盤状高台	—	—	7.5	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	乳白褐色	〃
733									
96	—	土師器 脚付坏	13.8	3.8	高台径 6.3	微細砂粒を含む。	良	暗茶灰褐色～灰茶褐色	
734									
96	—	黒色土器 A類椀	15.8	—	—	微細砂粒を含む。	良	内：黒灰褐色 外：白褐色	
735									
96	—	〃	—	—	高台径 3.7	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：淡黄白色	
736									
96	—	〃	—	—	高台径 6.2	1㎜以下の砂粒を含む。	良	内：黒色 外：乳白褐色	
737									
96	41	〃	15.2	5.7	高台径 5.9	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：暗灰色 外：淡乳白褐色	
738									
96	—	〃	14.9	6.1	高台径 5.8	4㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：淡灰黄褐色	
739									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
96	—	黒色土器 A類	15.9	5.9	高台径 6.1	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：淡褐色	
740		椀							
96	—	〃	14.6	5.7	高台径 6.0	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：白褐色	
741									
96	—	黒色土器 B類	—	—	高台径 5.9	微細砂粒を含む。	良	黒色	
742		椀							
96	—	土師器 椀	15.9	—	—	微細砂粒を含む。	良	淡白黄褐色	
743									
96	—	〃	15.3	—	—	微細砂粒を含む。	良	淡黄白褐色	
744									
96	—	〃	—	—	—	微細長石・石英を含む。	良	淡橙褐色～淡灰白褐色	
745									
96	—	〃	—	—	高台径 6.0	微細長石・石英を含む。	良	乳白褐色	
746									
96	—	〃	14.4	5.4	高台径 5.2	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	
747									
96	41	〃	15.5	6.0	高台径 5.1	微細砂粒を含む。	良	白褐色	
748									
96	—	〃	15.8	6.3	高台径 5.9	微細砂粒を含む。	良	淡乳白褐色	
749									
96	—	須恵器 壺	8.3	—	—	微細砂粒を含む。	良	淡灰色	
750									
96	41	〃	—	—	7.2	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	濁灰色	底部ヘラ切り
751									
96	—	〃	—	—	16.2	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗灰色	
752									
96	—	須恵器 鉢	22.8	—	—	2㎜以下の砂粒を含む。	良	灰白色	
753									
96	—	〃	27.0	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	黒灰色～乳白褐色	
754									
96	—	須恵器 甕	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	灰白色	
755									
97	42	〃	27.8	—	—	3㎜以下の砂粒を含む。	良	淡灰色	
756									
97	—	土師質 土釜	26.8	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色～黒茶褐色	
757									
97	42	〃	28.2	—	—	微細砂粒を多く含む。	良	暗茶褐色～淡茶褐色	
758									
97	—	〃	30.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡茶褐色～暗茶褐色	
759									
97	—	〃	27.5	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	
760									
97	—	〃	30.2	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	黒茶淡褐色	
761									
97	—	土師質 土鍋	26.6	—	—	4㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	
762									
98	—	〃	30.8	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	
763									
98	—	〃	30.8	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白褐色	
764									
98	—	〃	32.5	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	黒茶褐色	
765									
98	—	〃	35.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む。	良	淡茶褐色～暗茶褐色	
766									
98	—	〃	32.9	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色～暗茶褐色	
767									
98	—	〃	40.0	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	赤茶褐色～暗茶褐色	
768									
98	—	〃	45.6	—	—	4㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗赤茶褐色～淡茶褐色	
769									
98	—	〃	47.0	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	黒褐色	
770									
99	—	土師器 小皿	10.7	—	—	微細砂粒を含む。	良	淡黄白褐色	
771									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
99	— 772	土師器 坏	—	—	7.0	微細砂粒を含む。	良	淡褐色	底部ヘラ切り
99	— 773	須恵器 甕	30.2	—	—	1.5mm以下の砂粒を含む。	良	黒灰色	
99	— 774	土師器 小皿	8.3	1.5	5.0	1mm以下の砂粒を含む。	良	淡橙褐色	
99	— 775	土師器 坏	—	—	7.7	1mm以下の砂粒を含む。	良	淡橙褐色～暗橙褐色	
99	— 776	土師質 蛸壺	10.8	—	—	3mm以下の長石・石英を含む。	良	淡灰褐色	
99	— 777	須恵器 甕	—	—	—	1mm以下の砂粒を含む。	良	暗灰色	
99	— 778	土師質 土鍋	30.7	—	—	1.5mm以下の長石・石英を含む。	良	黒褐色～淡褐色	
99	— 779	土師質 土釜	30.5	—	—	1mm以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	
100	— 780	土師器 小皿	9.9	—	—	1mm以下の長石・石英を少量含む。	良	淡橙白褐色	
100	— 781	土師器 坏	—	—	6.2	微細砂粒を含む。	良	乳白褐色	底部ヘラ切り
100	— 782	〃	13.1	—	10.0	微細砂粒を少量含む。	良	〃	〃
100	— 783	土師器 椀	—	—	高台径 6.8	1mm以下の長石・石英を含む。	やや悪	淡白褐色	
100	— 784	〃	—	—	高台径 6.1	微細砂粒を含む。	良	淡黄褐色	
100	— 785	土師器 椀	—	—	高台径 8.0	微細砂粒を少量含む。	良	淡黄褐色	
100	— 786	黒色土器 A類 椀	—	—	高台径 6.0	1mm以下の長石・石英を含む。	良	内：淡黒灰色 外：乳白色～淡赤褐色	
100	— 787	〃	15.2	4.9	高台径 6.0	1mm以下の砂粒を含む。	良	内：黒灰色 外：白褐色～淡白黄褐色	
100	42 788	土師質 土釜	26.6	—	—	1mm以下の長石・石英を含む。	良	白黄褐色～暗茶褐色	
100	42 789	〃	27.8	—	—	1mm以下の長石・石英を含む。	良	淡灰褐色	
100	42 790	〃	26.2	—	—	1mm以下の長石・石英を含む。	良	白褐色～暗茶褐色	
100	— 791	〃	25.7	—	—	1mm以下の砂粒を含む。	良	濁茶橙褐色	
100	42 792	〃	34.0	—	—	1mm以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色～白褐色	
101	— 793	土師器 小皿	7.7	1.6	4.8	1mm以下の長石・石英を少量含む。	良	白黄褐色	底部ヘラ切り
101	— 794	〃	8.3	1.5	5.3	微細長石・石英を含む。	良	濁明灰色	〃
101	— 795	〃	8.8	1.5	5.6	微細砂粒を少量含む。	良	白褐色	〃
101	43 796	〃	8.6	1.9	5.9	0.5mm以下の砂粒と4mmの砂を一粒含む。	良	〃	〃
101	— 797	土師器 坏	13.9	3.4	7.3	0.5mm以下の長石・石英を含む。	良	〃	
101	— 798	〃	16.5	3.9	9.7	1mm以下の長石・石英を少量含む。	良	淡橙白褐色～淡灰白褐色	
101	43 799	土師器 円盤状高台 坏	8.0	3.1	4.2	0.5mm以下の砂粒を含む。	良	白褐色	底部ヘラ切り
101	— 800	土師器 坏または小皿	—	—	高台径 5.7	1.5mm以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	
101	— 801	土師器 椀	15.0	—	—	微細砂粒を含む。	良	乳白色	体部内外面ヘラ磨き
101	— 802	〃	14.8	—	—	胎土がきめ細かく，砂粒を少量含む。	良	白褐色	〃
101	— 803	〃	—	—	高台径 6.4	2.5mm以下の長石・石英を含む。	良	内：黒灰色 外：白褐色	〃

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
101	— 804	土師器　椀	—	—	高台径 6.7	微細長石・石英を含む。	良	灰白色	体部内外面ヘラ磨き
101	— 805	〃	—	—	高台径 5.9	微細長石・石英を含む。	良	乳白褐色	〃
101	— 806	〃	—	—	高台径 5.4	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色	〃
101	— 807	〃	—	—	高台径 5.6	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	〃
101	— 808	〃	—	—	高台径 6.2	砂粒をほとんど含まない。	良	白褐色	〃
101	— 809	〃	—	—	高台径 5.7	微細砂粒を含む。	良	白褐色～淡橙褐色	〃
101	— 810	〃	15.2	5.8	高台径 6.2	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	乳白色	〃
101	43 811	〃	14.7	5.7	高台径 5.6	微細砂粒を含む。	良	白褐色	〃
101	43 812	〃	15.5	6.4	高台径 6.3	微細砂粒を含む。	良	〃	〃
101	— 813	黒色土器　A類椀	—	—	高台径 6.0	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：白褐色	
101	— 814	〃	—	—	高台径 6.0	0.5㎜以下の微細長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：濁淡白褐色	
101	43 815	輸入磁器　白磁椀	15.8	—	—	緻密	良好	釉：緑色 胎土：灰色	
101	— 816	須恵器　壺	—	—	11.1	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	黒灰色	
101	43 817	須恵器　こね鉢	29.4	12.5	12.8	細かい砂粒を含む。	良	白灰色	
102	— 818	土師器　小皿	8.2	1.6	5.9	微細砂粒を多く含む。	良	淡橙褐色	
102	— 819	〃	8.7	1.7	6.8	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	
102	— 820	〃	8.8	1.7	7.3	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白茶褐色	
102	— 821	土師器　坏	14.0	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡黄白褐色	
102	44 822	〃	14.5	3.4	7.5	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良	白褐色	
102	44 823	〃	12.9	3.7	7.3	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	
102	— 824	〃	—	—	高台径 6.7	微細砂粒を含む。	良	淡橙褐色	
102	— 825	土師器　円盤状高台　坏	—	—	高台径 4.6	1㎜以下の砂粒を含む。	良	白茶褐色	
102	— 826	土師器　椀	15.8	—	—	0.3㎜以下の長石・石英を少量含む。	良	淡黄白色	体部内外面ヘラ磨き
102	— 827	〃	15.8	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色	〃
102	— 828	〃	15.8	—	—	微細砂粒を少量含む。	良	明白橙色	〃
102	— 829	〃	—	—	高台径 6.7	微細砂粒を含む。	良	白黄褐色	
102	— 830	〃	16.0	6.0	高台径 6.2	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色	体部内外面ヘラ磨き
102	— 831	黒色土器　A類椀	—	—	高台径 5.7	2㎜以下の砂粒を含む。	良	内：黒色 外：薄茶白褐色	
102	— 832	〃	—	—	高台径 6.8	1㎜以下の長石・石英に3㎜大の石英を一粒含む。	良	内：黒色 外：淡赤白褐色	
102	— 833	黒色土器　B類椀	15.0	—	—	微細砂粒を少量含む。	良	黒色	体部内面ヘラ磨き
102	44 834	須恵器　壺	—	—	—	微細砂粒を含む。	良好	濁緑灰色	四耳壺あるいは三耳壺
102	— 835	須恵器　甕	—	—	—	2㎜以下の砂粒を含む。	良	淡灰色	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
102	— 836	須恵器 甕	—	—	—	1㎜以下の砂粒を少量含む。	良	青灰色	
102	— 837	須恵器 壺	—	—	18.9	1㎜以下の砂粒を少量含む。	良	暗灰色	
102	44 838	土師質 土釜	22.6	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色～濁褐色	
102	44 839	土師質 土鍋	32.8	—	—	4㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	
102	— 840	〃	36.8	—	—	7㎜以下の粗い長石・石英を含む。	良	赤茶褐色	
102	— 841	〃	39.0	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	黒茶褐色	
103	— 842	土師器 小皿	8.7	1.5	5.3	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色	
103	— 843	〃	8.7	1.4	7.4	2㎜以下の砂粒を含む。	良	白褐色～暗赤白褐色	
103	— 844	〃	8.8	—	6.1	0.3㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙白褐色	
103	— 845	〃	8.9	1.8	5.9	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙白褐色～淡白色	
103	— 846	〃	9.0	2.2	5.5	微細砂粒を含む。	良	灰白色～灰白褐色	
103	— 847	土師器 坏	13.1	—	7.4	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白褐色	
103	45 848	〃	14.7	3.5	7.8	1㎜以下の長石・石英・角閃石を含む。	良	淡橙白褐色	
103	— 849	土師器 円盤状高台 坏	—	—	5.4	1㎜以下の長石・石英を多量に含む。	良	乳白褐色	
103	— 850	土師器 椀	17.4	—	—	微細長石・石英を含む。	良	灰白褐色	
103	— 851	〃	—	—	高台径 5.4	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	乳白褐色	
103	45 852	〃	—	—	高台径 5.9	微細砂粒を含む。	良	白褐色	
103	— 853	〃	—	—	高台径 6.6	極微細砂粒を含む。	良	〃	
103	— 854	瓦器 椀	14.7	—	—	微細砂粒を含む。	良	淡灰色	内面密なヘラ磨き
103	— 855	須恵器 甕	—	—	—	2㎜以下の砂粒を少量含む。	良	濁青灰色	体部外面格子叩き，内面指なで
103	— 856	土師質 土釜	27.2	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	濁淡茶褐色	
103	— 857	土師質 土鍋	41.0	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	暗茶灰褐色	
103	— 858	〃	38.4	—	—	2㎜以下の長石・石英，1.5cm大の小石を含む。	良	暗褐色	
103	— 859	〃	39.0	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	濁褐色	
104	— 860	土師器 小皿	11.0	2.1	7.7	微細長石・石英を含む。	良	淡茶白褐色	
104	— 861	土師器 坏	9.4	—	6.0	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡橙白褐色	
104	— 862	〃	13.5	—	—	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡白褐色	
104	— 863	〃	—	—	8.4	1㎜以下の砂粒を含む。	良	白褐色	
104	— 864	土師器 椀	15.9	5.6	高台径 5.6	微細砂粒・金雲母を含む。	良	〃	体部内外面やや太めのヘラ磨き
104	— 865	黒色土器 A類 椀	15.5	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：乳白褐色	
104	— 866	須恵器 甕	—	—	—	細かい砂粒を少量含む。	良	灰色	体部外面格子叩き，内面指なで
104	46 867	土師質 蛸壺	12.7	20.9	—	2㎜以下の砂粒を多く含む。	良	淡褐色～明橙褐色	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
104	46	土師質 甕	—	—	—	5㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色～暗褐色～白褐色	
868									
105	—	土師器 坏	7.6	—	—	微細長石・石英を含む。	良	白橙褐色	
869									
105	—	〃	10.6	—	—	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	橙褐色	
870									
105	47	〃	11.1	2.9	7.1	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色	
871									
105	—	〃	11.4	3.1	6.7	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	灰褐色～淡茶褐色	
872									
105	—	土師器 円盤状高台 坏または椀	—	—	4.2	0.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	
873									
105	—	〃	—	—	7.6	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色～淡褐色	
874									
105	47	〃	12.0	3.6	6.9	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	
875									
105	—	土師器 椀	14.8	6.3	6.2	0.5㎜以下の砂粒，2㎜大の石英を含む。	良	〃	
876									
105	—	〃	—	—	5.6	微細長石・石英を含む。	良	淡褐色	
877									
105	47	黒色土器 A類 椀	15.3	5.3	高台径 6.7	1㎜以下の細かい長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：黒～白褐色	
878									
105	—	〃	15.1	—	—	微細長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：淡灰褐色	
879									
105	—	〃	—	—	高台径 6.4	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	内：黒色 外：白褐色	
880									
105	—	〃	—	—	高台径 8.0	微細長石・石英を含む。	良	〃	
881									
105	—	瓦器 椀	16.3	—	—	微細石英・金雲母を含む。	良	褐白色	
882									
105	—	須恵器 椀	15.4	5.6	6.9	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	明灰白色	底部ヘラ切り
883									
105	48	土師質 土釜	28.0	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	
884									
105	48	〃	—	—	—	3㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡灰茶褐色～暗灰茶褐色	
885									
105	48	〃	25.4	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色～暗赤褐色	
886									
105	48	〃	28.7	—	—	3.5㎜以下の長石・石英を含む。	良	灰茶褐色	
887									
105	48	〃	26.4	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	灰褐色～淡褐色	
888									
105	48	〃	23.3	—	—	2㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色～橙褐色	
889									
105	48	〃	24.4	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	白褐色	
890									
105	—	土師質 土鍋	30.8	—	—	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡灰褐色	
891									
105	—	〃	28.9	—	—	5㎜以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	
892									
105	—	土師質 小壺	4.4	3.3	2.5	1㎜以下の長石・石英を含む。	良	〃	
893									

挿図番号	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
106	—	砥石	砂岩	7.5	5.8	1.7	120.1	
894								
106	—	磨石	砂岩	8.7	7.7	5.6	605.1	
895								
106	—	〃	安山岩	15.5	11.5	1.8	462.7	
896								
106	50	磨製石斧	緑泥片岩	12.9	5.3	2.1	209.3	
897								

挿図番号	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
106	—	スクレイパー	サヌカイト	12.6	3.1	1.4	39.5	
898								
107	—	ナイフ形石器	サヌカイト	5.4	2.6	1.3	13.5	白色風化
899								
107	—	母岩	サヌカイト	18.9	15.0	3.6	947.0	
900								
107	50	スクレイパー	サヌカイト	6.6	9.2	1.6	107.0	
901								

第7表　遺構一覧

SD（溝）

SD	グリッド	規模(cm) 天幅	規模(cm) 深さ	出土遺物	時期	備考
01	A－1	85	31	弥生土器・サヌカイト・須恵器・土師器	6世紀末，7世紀前半，12世紀	東西の条里地割りに合うものである。
02	A－1	25	13	土師器・須恵器		
03	A－1，B－1	36	9	弥生土器・土師器・須恵器	7世紀前半	
04	A－1，B－1，C－1・2	131	44	弥生土器（壺・甕・鉢・高坏），石製品	弥生時代後期（下川津Ⅳ式）	
05	B－1，C－1・2	53	12	弥生土器・サヌカイト・土師器・須恵器	6世紀末	
06	B－1	40	14	弥生土器・須恵器		
07	C－2	22	5	土師器・須恵器	12世紀頃か	12世紀頃の掘立柱建物に伴うものか。
08	C－2	(21)	－	弥生土器・サヌカイト・土師器		
09	C－2，D－2	212	105	土師器小皿・坏・椀・黒色土器椀・土師質土鍋・土釜など	12世紀	南北の条里地割りに合うものである。
10	D－1・2	456	71	土師器小皿・坏・椀，黒色土器椀，土師質土鍋・土釜など	12世紀	東西の条里地割りに合うものである。
11	D－1・2	158	24	弥生土器（壺・甕・鉢・高坏），石製品	弥生時代後期（下川津Ⅳ式）	SD10に切られていて詳細は不明。
12	D－1・2	96	44	弥生土器（壺・甕），石製品	弥生時代前期	SD10・11に切られていて詳細は不明。

SH（竪穴住居）

SH	グリッド	形状	方位	規模(cm) 東西	規模(cm) 南北	規模(cm) 深さ	出土遺物	時期	備考
01	C－1	方形	N-3°-W	(196)	460	5	土師器		東半分が少し残っているだけでほとんど削平を受けている。焼土は東壁やや南よりにあり。
02	C－1・2	方形	N-35°-W	(522)	(548)	10			
03	C－1・2	方形	N-23°-W	604	542	6	土師器・須恵器・サヌカイト・焼土		削平を受け残りが悪い。北壁に造り付けのカマドあり。
04	C－1・2	方形	N-22°-W	572	530	4	土師器		〃
05	C－2	隅丸方形	N-45°-W	492	(356)	17	弥生土器（壺・甕）焼土・サヌカイト	弥生時代後期	中央にファイヤーピットらしきものあり。角閃石を含む土器あり。
06	D－1	ほぼ方形	N-56°-W	(290)	(550)	10	弥生土器（小型丸底壺）	弥生時代後期	壁溝あり。

SK（土坑）

SK	グリッド	形状	規模(cm) 天幅	規模(cm) 深さ	出土遺物	時期	備考
01	C－2	楕円形	長 175 短 105	27	土師器・須恵器・サヌカイト	12世紀？	12世紀頃の掘立柱建物を伴うものか。
02	C－2	楕円形	長(116) 短(46)	－	土師器	12世紀？	〃
03	D－1	隅丸方形	406	30	弥生土器・土師器・サヌカイト	6世紀末	竪穴住居の窪みに堆積したような状態で検出された。
04	D－1	不定形	長 138 短 96	13	弥生土器 サヌカイト	弥生時代後期	

掘立柱建物

	規模(梁間×桁行) 大きさ(cm)	方位	柱穴平均(cm)	柱間(cm) 梁間(平均)	柱間(cm) 桁行(平均)	出土遺物	備考
SB01	(2)×(3) (476)×(557)	N-26°-W	53	(238)	(186)	弥生土器 須恵器 土師器	
SB02	2×(2) 318×(228)	N-37°-W	52	159	(198)		

	規模(梁間×桁行) 大きさ(cm)	方位	柱穴平均(cm)	柱間(cm)		出土遺物	備考
				梁間(平均)	桁行(平均)		
SB03	(1)×(2) (362)×(424)	N-20°-W	25	−	(104)	土師器坏	
SB04	(1)×(3) (148)×(584)	N-23°-W	44	(148)	(195)	土師器 須恵器	
SB05	3×(1) 468×100	N-9°-W	43	156	(96)		円形のやや大きい掘り方を持つ柱痕を残す。
SB06	3×4 404×594	N-9°-W	41	135	149	土師器	
SB07	2×2 384×480	N-4°-W	30	192	240		
SB08	2×3 386×628	N-22°-W	22	193	209		
SB09	(2)×(1) (420)×(146)	N-24°-W	26	(210)	(146)		
SB10	(2)×(1) (390)×(178)	N-23°-W	22	(195)	(178)	土師器	
SB11	1×3 300×464	N-38°-E	25	300	155	土師器	
SB12	1×3 338×568	N-41°-E	30	338	189	土師器	
SB13	2×3 386×508	N-1°-E	35	193	169	須恵器 土師器	
SB14	2×3 350×528	N-3°-W	29	175	176		
SB15	1×3 246×582	N-13°-W	36	246	194	土師器	
SB16	(1)×(2) (346)×(454)	N-16°-W	24	−	(217)	壁土？	
SB17	(1)×(2) (386)×(426)	N-16°-W	35	−	(198)		
SB18	1×1 153×176	N-26°-W	25	153	176		

図　　版

(1)第 1 調査区発掘前風景

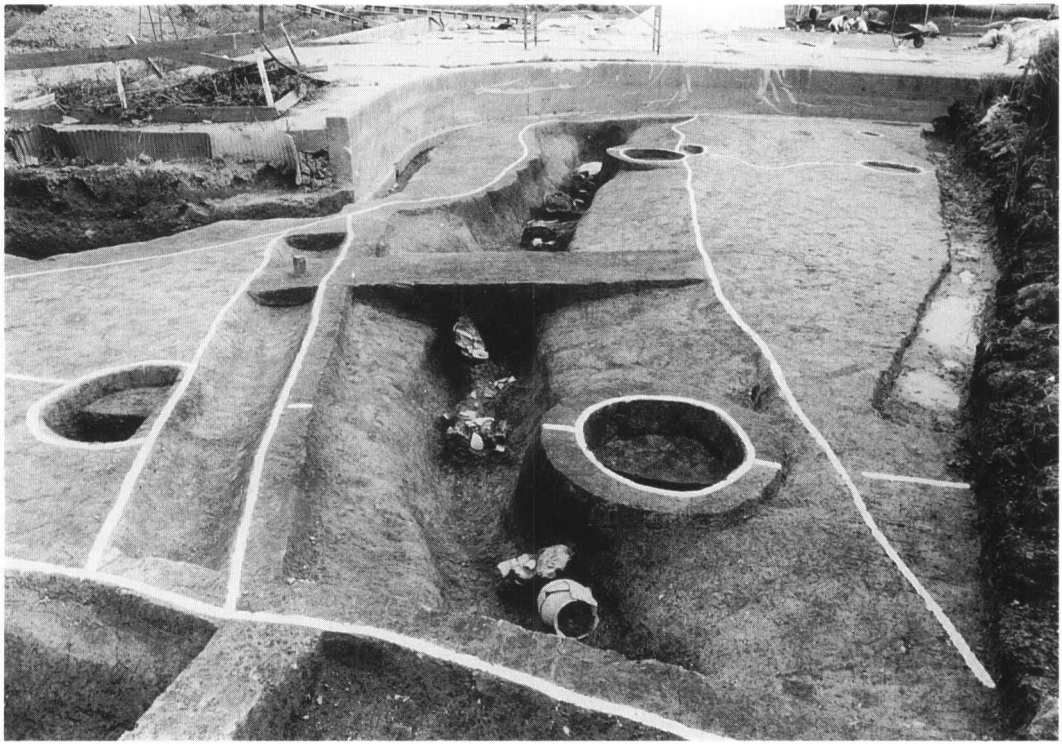
(2)第 2 調査区発掘前風景

図版 2

(1)調査区から北方遠景

(2)ＳＤ12土層断面（Ｊ－Ｊ′）

(1)第 1 調査区遺構検出状況



(2)ＳＤ04遺物出土状況

(1)ＳＤ04遺物出土状況

(2)ＳＤ04遺物出土状況

(1)ＳＤ04遺物出土状況

(2)ＳＤ04土層断面（Ｂ－Ｂ′）

(1)第 2 調査区遺構検出状況（南より）

(2)ＳＤ04土層断面（Ｃ－Ｃ′）

(1) S D04遺物出土状況

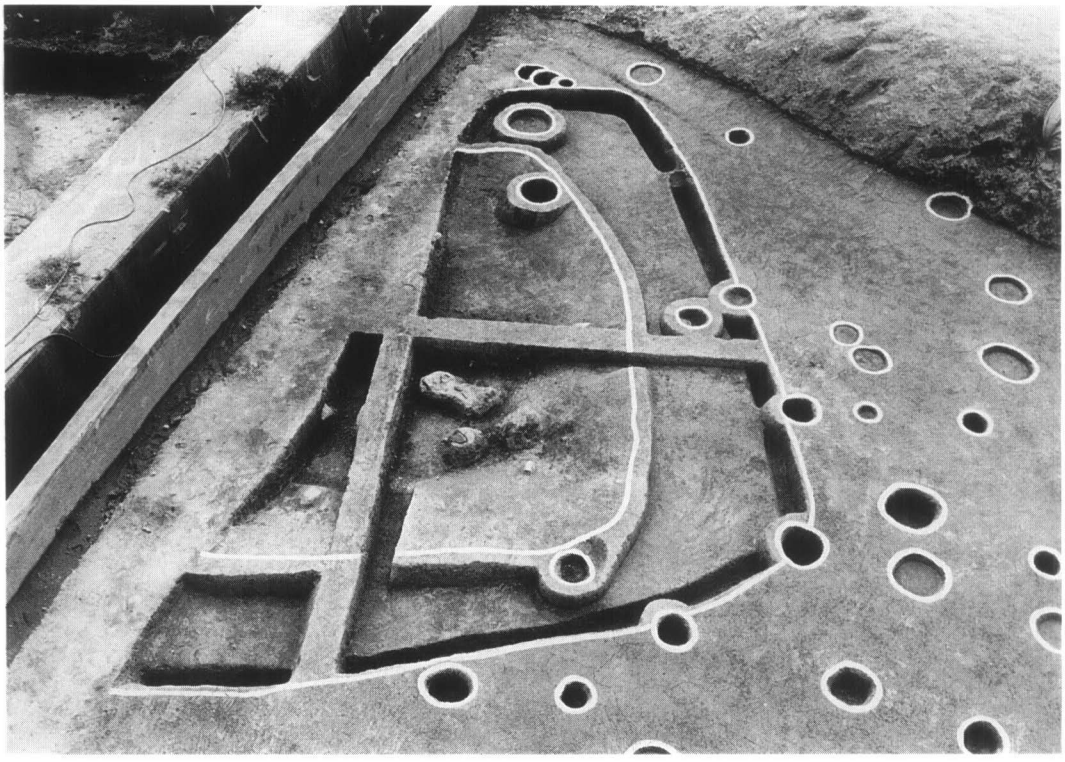
(2) S D04遺物出土状況

(1)ＳＤ04遺物出土状況

(2)ＳＤ04遺物出土状況

(1)ＳＤ04遺物出土状況

(2)ＳＤ11土層断面（Ｋ－Ｋ′）



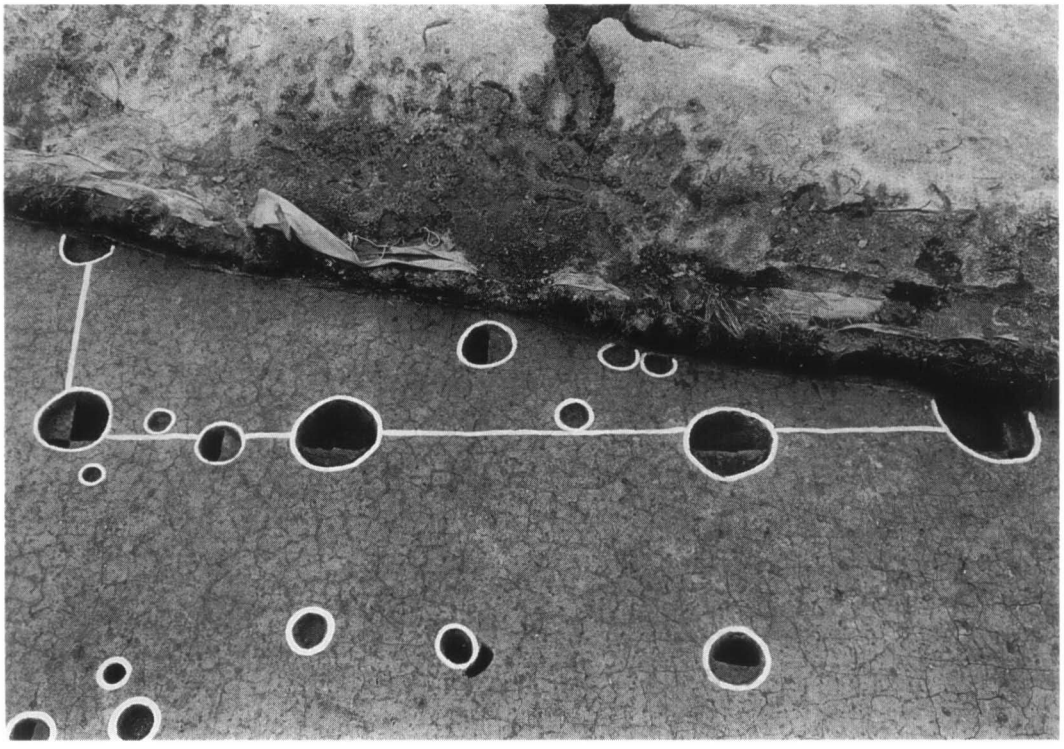
(1)ＳＨ06検出状況（東より）

(2)ＳＨ06遺物出土状況

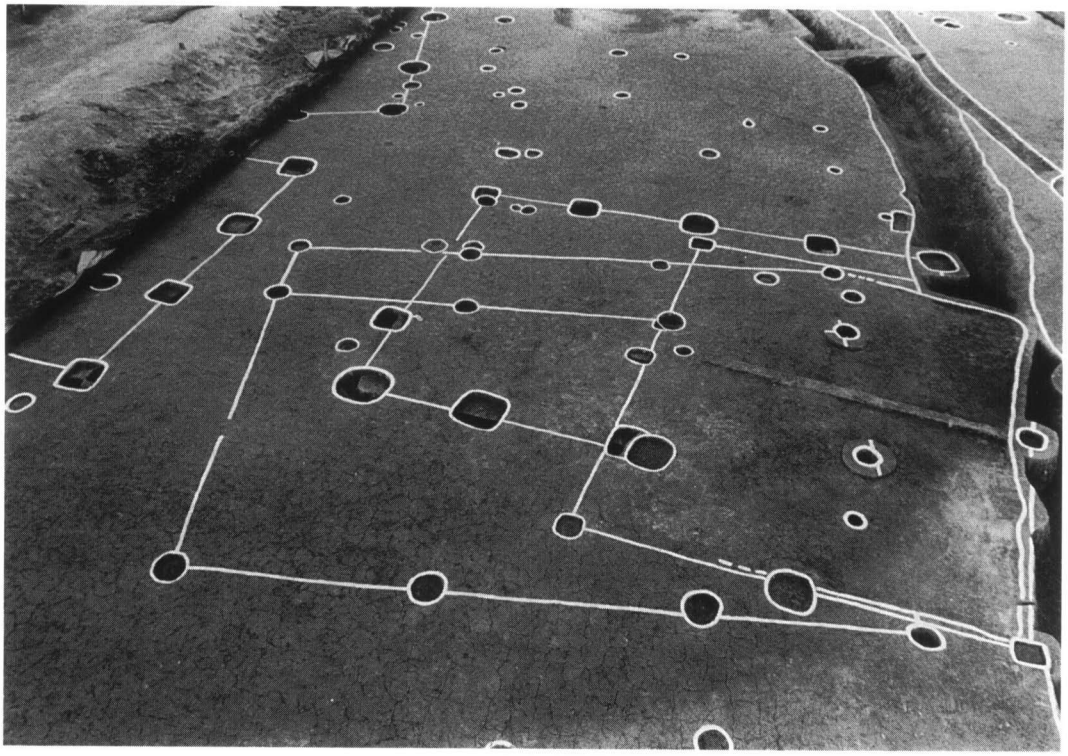
(1)第 2 調査区遺構検出状況（南より）

(2)第 2 調査区遺構検出状況（南より）

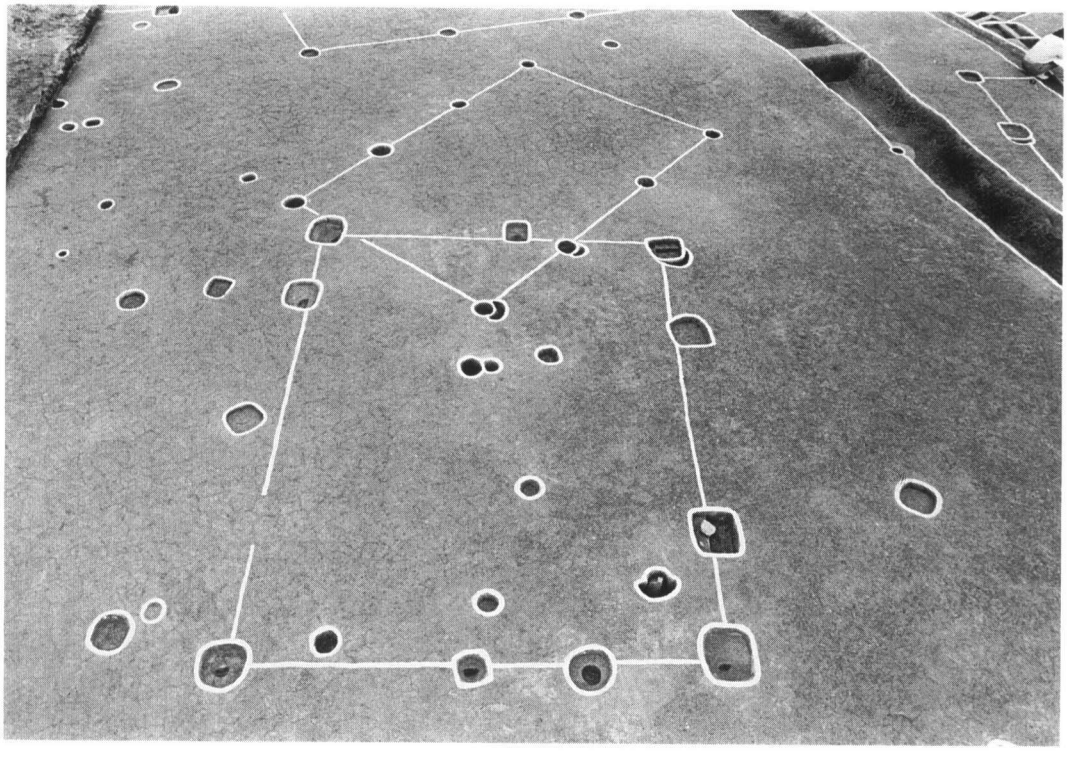
(1)ＳＢ01柱穴断面土層



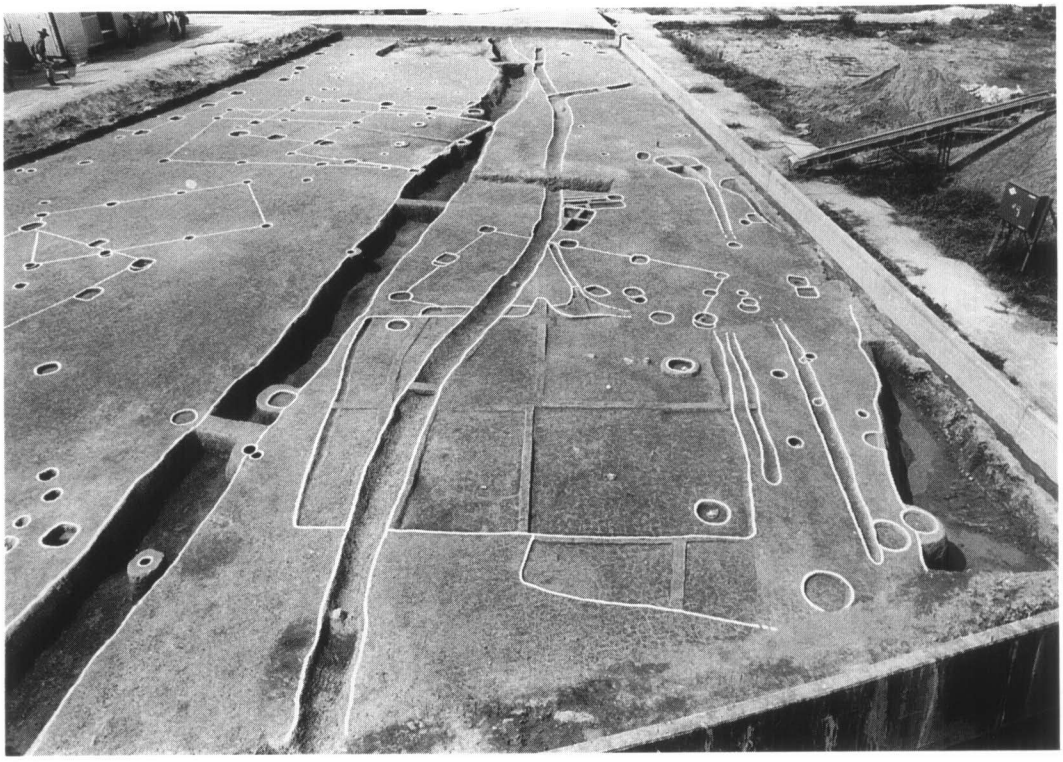
(2)ＳＢ04検出状況（東より）



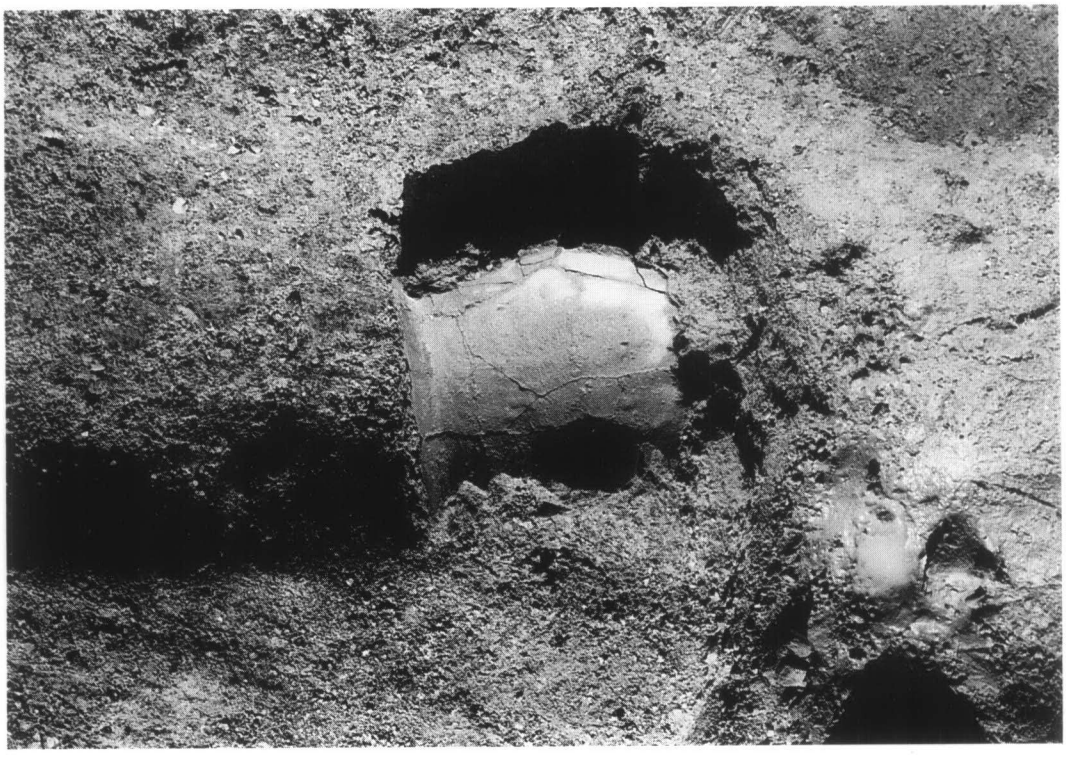
(1)ＳＨ01、ＳＢ06・07・08検出状況（南より）



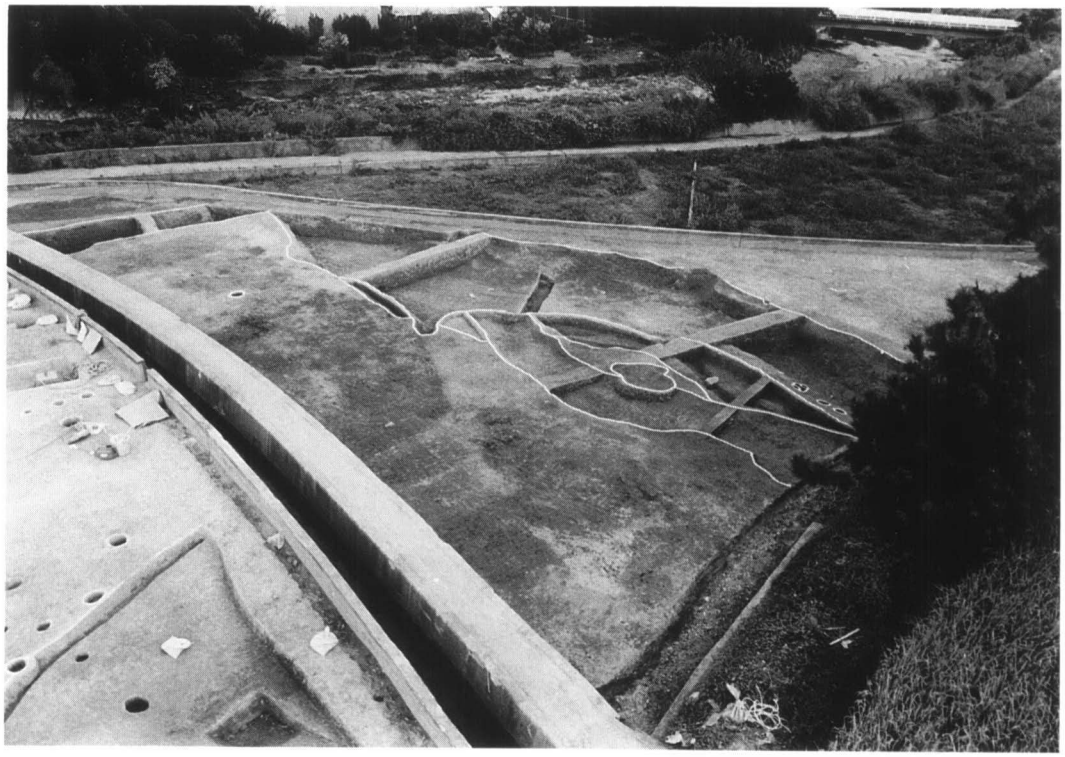
(2)ＳＢ11・13検出状況（南より）



(1)ＳＨ03・04検出状況（南より）



(2)ＳＤ05遺物出土状況



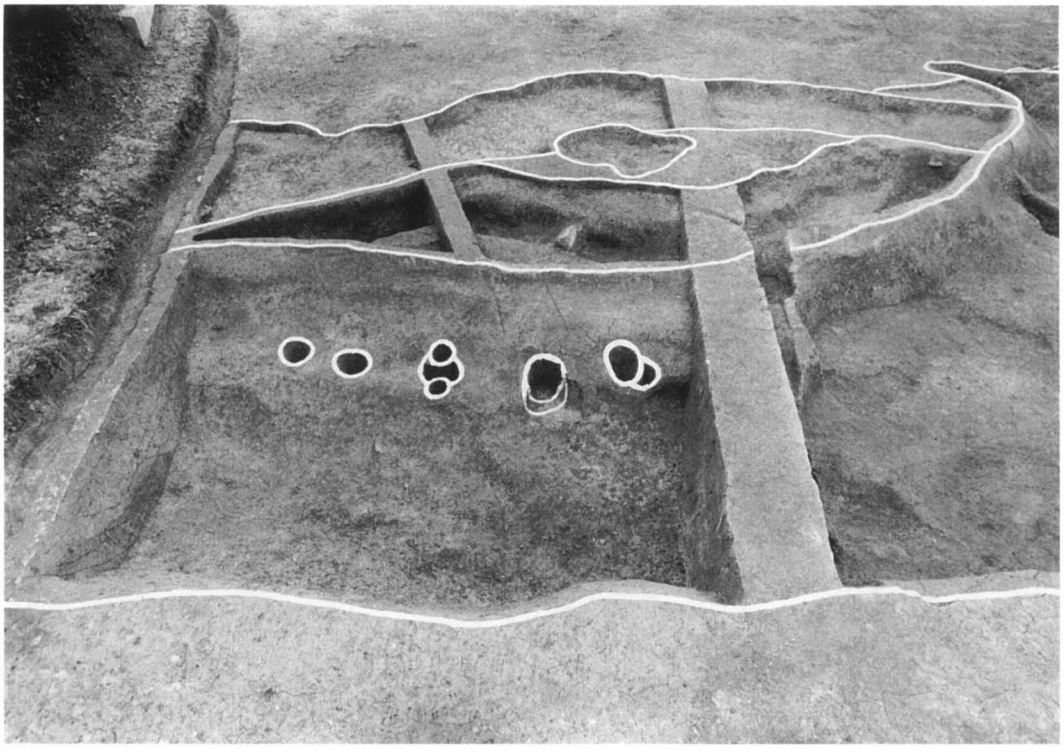
(1)第 3 調査区遺構検出状況（北西より）

(2)ＳＤ10土層断面（Ｊ－Ｊ′）

(1)ＳＤ10遺物出土状況

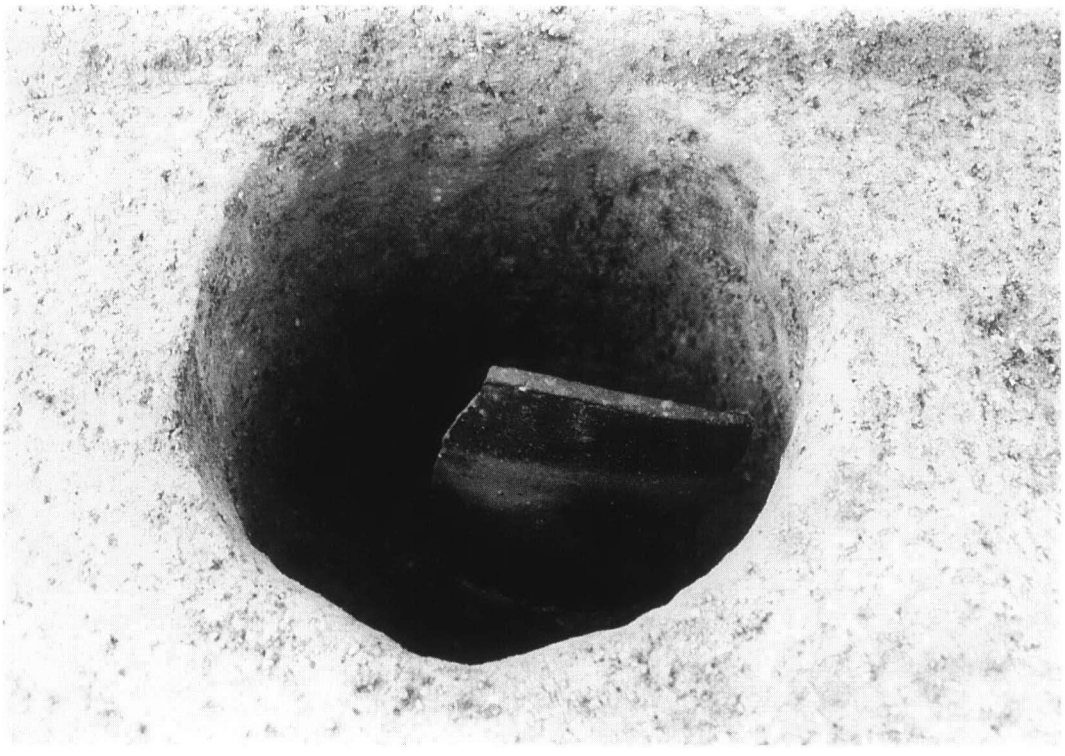
(2)ＳＤ10遺物出土状況

(1) ＳＤ10遺物出土状況



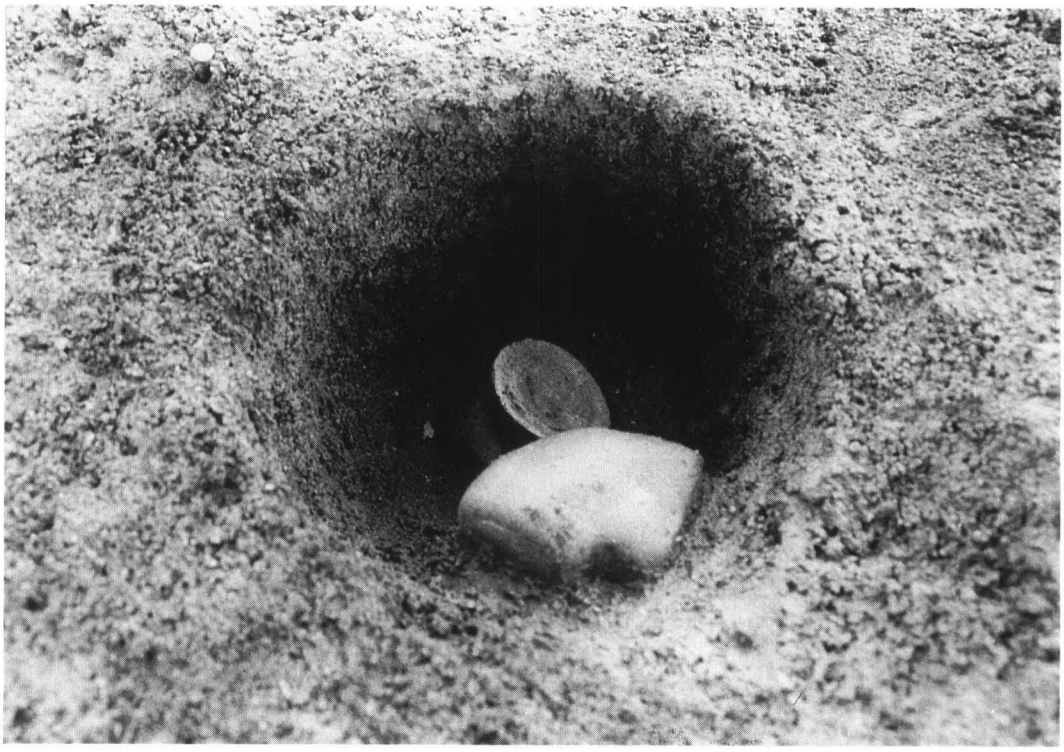
(2) ＳＤ10遺構検出状況（南より）

(1)ＳＤ09土層断面（Ｈ－Ｈ′）



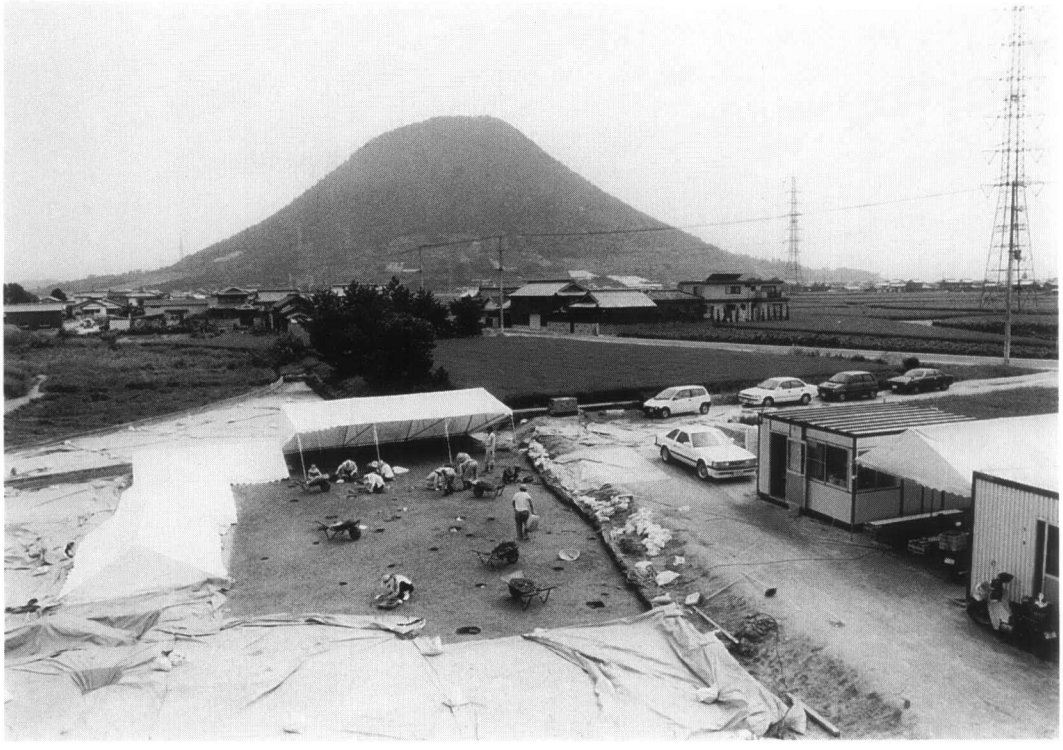
(2)柱穴遺物出土状況

(1)柱穴断面

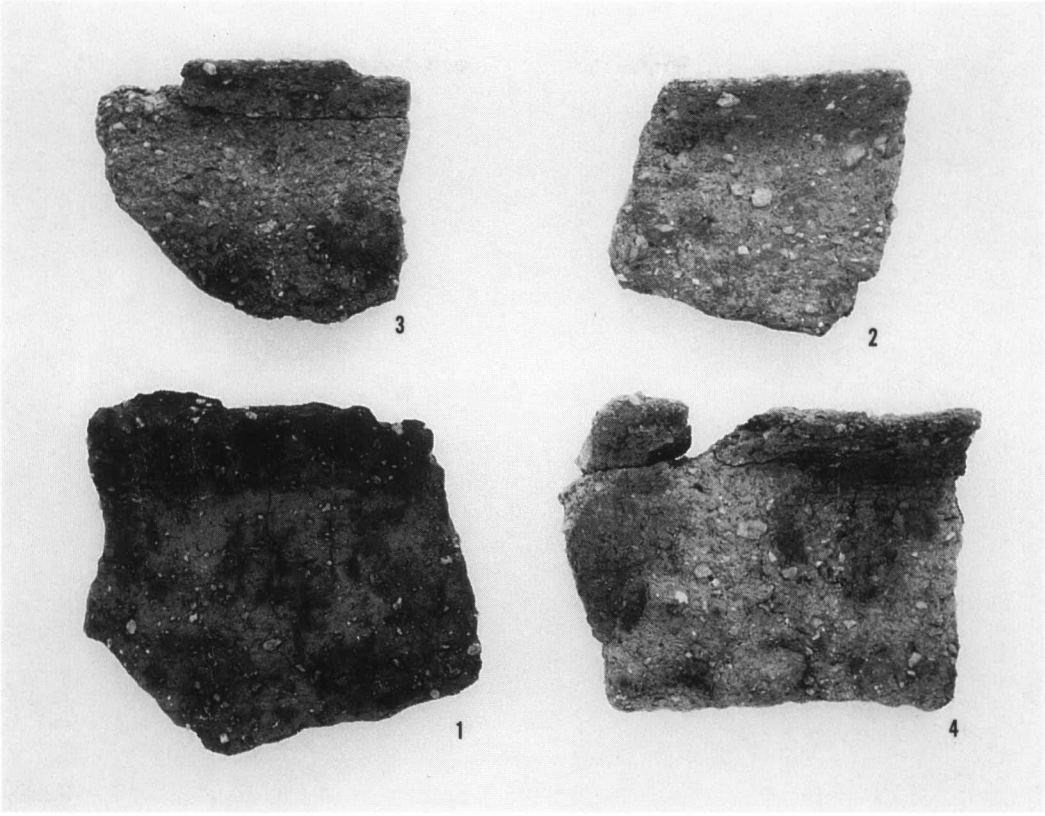


(2)柱穴遺物出土状況

(1)発掘調査風景

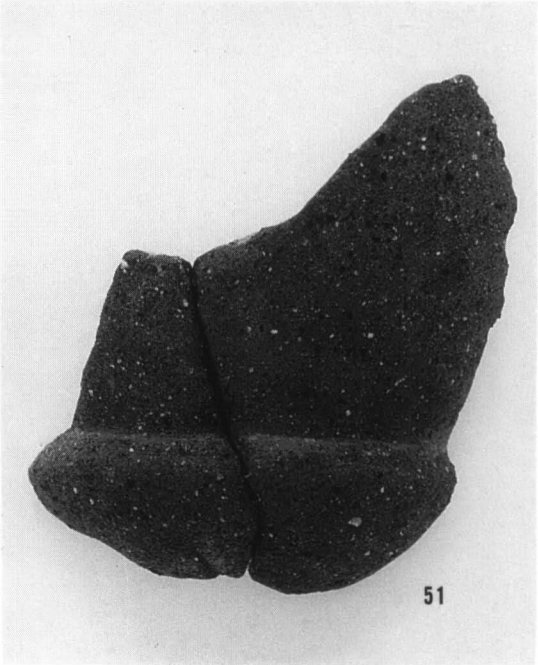


(2)発掘調査風景

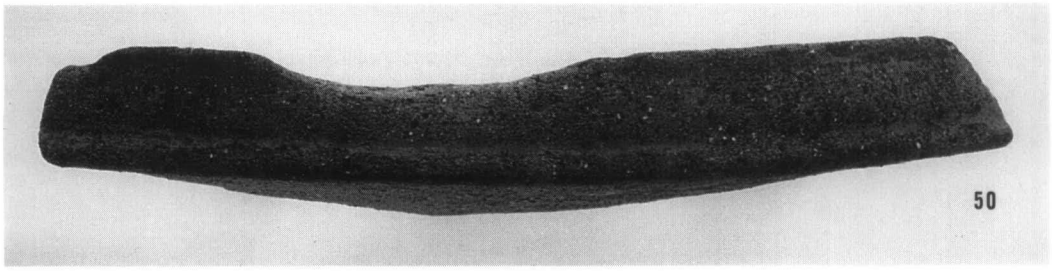


(1)ＳＤ12出土遺物

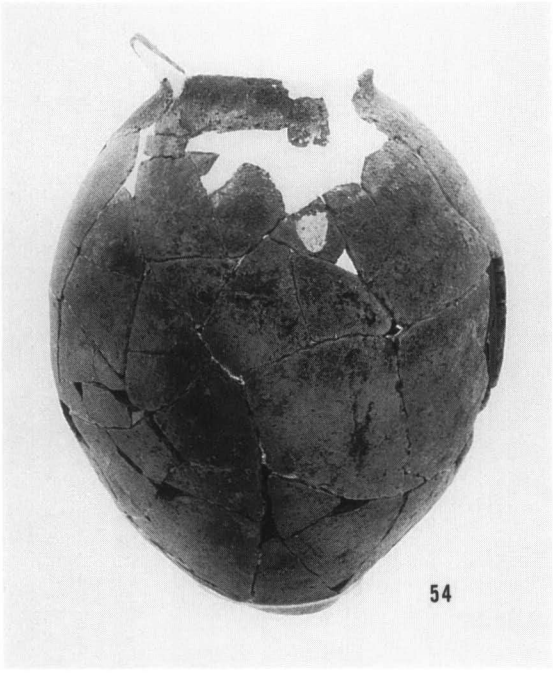
(2)ＳＨ05出土遺物

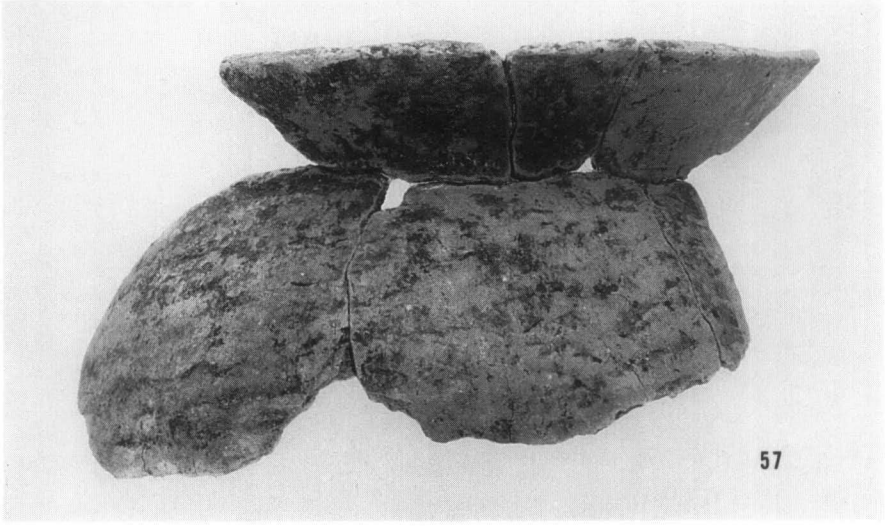


(3)ＳＨ06出土遺物①



(1)ＳＨ06出土遺物②





(2)ＳＤ04（第１調査区）出土遺物①